

山形大学人文学部

研究年報

第 14 号

目 次

論 文

- 『オリヴァー・トウィスト』におけるホガース的瞬間
.....中 村 隆..... 1
- イノベーション創出のための共同研究拠点の形成と機能
——英国シェフィールド大学 AMRC のケース・スタディを通じて——
.....山 口 昌 樹・柊 紫 乃・山 本 匡 毅・小 森 尚 子..... 19
- ワイドディスプレイにおける情報表示に関する基礎的検討
——提示文字の記憶再生と表示位置との関係——
.....本 多 薫..... 39
- メルロ＝ポンティにおける「諸感官の関連性」と絵画
——『眼と精神』の理解のために
.....小 熊 正 久..... 51
- Spurious Resultatives Revisited:
Predication Mismatch and Adverbial Modification
.....鈴 木 亨..... 69
- 生産的労働概念とその活用
.....安 田 均..... 105
- 研究ノート
- リードタイムが変動する在庫管理モデルの安定性解析
——スイッチドシステムとしての考察
.....西 平 直 史..... 125
- 平成27年度研究・教育活動報告 131
- 投稿規程 200

平成 29 年 2 月

山形大学人文学部

論 文

『オリヴァー・トウィスト』におけるホガース的瞬間

山形大学人文学部人間文化学科

中 村 隆

1. ホガースと絞首刑

たとえば、古代ローマの暴君の名前を借りた少年 (Tom Nero) の動物虐待に始まり、恋人の殺害を経て、絞首刑に至る連作版画《残酷の四段階》(Four Stages of Cruelty, 1751) を目にする時、私たちは、ホガースは「赤ん坊のためのミルクではなく、男のための硬い肉だ」(he was not milk for babes but strong meat for men') というラム (Charles Lamb) の評言に首肯する¹。



【図1】《残酷の第一段階》部分図



【図2】《怠惰な徒弟の島流し》部分図

【図1】は、この連作版画の第1図《残酷の第一段階》(*The First Stage of Cruelty*, 1751) の部分図であるが、壁の落書きは、犬を虐待する少年ネロの絞首刑の図案であり、ホガースの苛烈な「硬い肉」の典型例である。同じ主題が、ホガースの《勤勉と怠惰》(*Industry and Idleness*, 1747) の第5図《怠惰な徒弟の島流し》(*The Idle 'Prentice Turned Away and Sent to Sea*, 1747) にも描き込まれている (【図2】)。嘆き悲しむ母²に向かって嘲りのポーズを取るアイドル (Tom Idle) の右隣の舟乗りが左手を伸ばした指の先に絞首刑図が見えるが、《怠惰な徒弟の島流し》は念が入っており、舷側に垂れる二つの縄の輪と、アイドルの左側の舟乗りの垂らす縄を繋ぐと絞首刑の縄が完成する仕組みである。

1 Quoted in Frederic Antal's *Hogarth* (186). ホガースの没年は1764年で、ラムがこのホガースの論考を雑誌に発表したのはそれから約半世紀後の1811年である。

2 この母はピエタ像 (キリストの遺体を膝にのせ、嘆く聖母) の変型であると指摘されている (Davis 134-35)。

ホガースが偏愛したといっても過言ではない「絞首刑」の主題について考える時、不可避免的に想起されるのはディケンズ (Charles Dickens) とクルックシャンク (George Cruikshank) である。二人の版画家と一人の作家が織りなす三つ巴の影響関係については、すでに、立錫の余地もないほどの分厚い先行研究がある。しかし、絞首刑の主題を内包する図像が、これらの三者を緊密に結びつける紐帯(交点)であることを中心的に論じた研究は知る限りではそれほどない³。本稿では、ホガースにおける絞首刑の図像的テーマが、どのように姿を変えて(あるいはほぼ同じ形で)蘇るのかについて、絵師クルックシャンクと小説家ディケンズの双方を通して考察しようと思う。主な対象作品は、新進気鋭の小説家と大御所の挿絵画家が相まみえた『オリヴァー・トウィスト』である。

存命中にすでに「当代のホガース」(Patten 1: 270, Harvey 31)と称されたクルックシャンクは自他ともに認めるホガースの後継者だった。一方、のちに48枚ものホガースの版画を所有することになるディケンズは (Schlicke 274-75), 『オリヴァー・トウィスト』において、盗賊集団や売春婦などの社会の裏面をあまりにも赤裸々に描いたことを非難された時、「偉大なホガースに倣っただけだ」という趣旨の弁明をし、ごく初期の段階で、ホガースへの満腔の敬意を表明している⁴。

本論との関係で特に注目したいことは、ディケンズの多くの物語の原型として、ホガース的な「徒弟の物語」のあることが指摘されてきたことである⁵。そして、「怠惰な徒弟」との連関で、絞首刑の主題が浮上する。というのも、あとで詳述することになる、良い徒弟と悪い徒弟の物語を交互に織り込むホガースの《勤勉と怠惰》の12枚の版画の中でも夙に有名なその第11図《タイバーンでの処刑》(The Idle 'Prentice Executed at Tyburn, 1747) は、悪い徒弟の結末として、タイバーンでの公開絞首刑を描いているからである⁶。イギリスの暗黒の処刑史の一コマを鮮やかに切

3 アンタルは、ホガースの版画とディケンズの文学の間にある等質性を述べている (Antal 189-92)。リーヴィス夫妻 (F. R. & Q. D. Leavis) は、ディケンズに与えたホガースの影響は、スモーレット (Tobias Smollett) やフィールドング (Henry Fielding) などを遙かに凌ぐと述べている (F. R. & Q. D. Leavis 26)。スレイター (Michael Slater) やアグロウ (Jenny Uglow) は、『ボズのスケッチ帳』(Sketches by Boz, 1833-36) の中の「ジン酒場」('Gin Shops') というエッセイは、ホガースの《ジン横丁》(Gin Lane) を意識していると指摘している (Slater 180-85, Uglow 499-500)。ポールソン (Ronald Paulson) は『オリヴァー・トウィスト』(Oliver Twist, 1837-39) に《娼婦一代記》(Harlot's Progress, 1732) の影響が色濃くあると述べている (Paulson, Hogarth's Harlot 129, 198)。コーエン (Jane Cohen) は、『オリヴァー・トウィスト』に付されたクルックシャンクの挿絵が濃厚にホガース的なイメージを持っていると指摘している (Cohen 24)。ヴォグラー (Richard Vogler) は、『オリヴァー・トウィスト』の創作段階でのクルックシャンクの関与について主張した (Vogler 61-92)。中村はそのヴォグラーの見解の妥当性を検証した (中村67-68)。ハーヴェイ (John Harvey), デイヴィス (Paul Davis), 原 (Eiichi Hara) の研究については注の5を参照。パトン (Robert Patten) の浩瀚なクルックシャンク論はホガースとディケンズとクルックシャンクの相互関係をしばしば論じている (Patten 1 & 2)。これらの研究は何らかの形で絞首刑に言及している場合もあるが、ホガースとクルックシャンクとディケンズを結びつける交点としての絞首刑の主題の意義を掘り下げた先行研究はみあたらない。

4 1841年に出された『オリヴァー・トウィスト』の第3版への序文中にある。OT Ixiv 参照。

5 ディケンズにおける徒弟の主題に特に注目した研究として、Harvey 52-54, Bindman 169, Davis 131-43, Hara 593-614, 原1-275が挙げられる。

6 ポールソンは、ホガースがこの版画の着想をブリュエゲル (Pieter Bruegel the Elder) の《死刑台への陽気な道のり》(The Merry Way to the Gallows, 1578) や《十字架を運ぶキリスト》(Christ Carrying the Cross, 1564) から得ていると推論している (Paulson, Hogarth's Graphic Works 136)。確かに、死刑台を取り囲む群衆や陽気な祭りの要素は、「タイバーンでの処刑」と構図上の類似点が認められる。また、18世紀のイギリスには、相当数のブリュエ

り取ったこの一枚が、しかし、処刑という決定的な瞬間ではなく、その直前の時間が選択されていることはとりわけ目を惹く。仮にホガースを漫画の原型と見なし、漫画的なコマの視点から見ると、アイドルの物語は最期の時間が描かれておらず、完結していないようにも見えるからである⁷。この終わり方については、あとで扱うことにするので、ここでは、絞首刑の瞬間というクライマックスではなく、絞首刑の直前という「ずらされた」時間がわざわざ選ばれているということをも銘記しておきたい。

2. クルックシャンクと絞首刑

興味深いのは、『オリヴァー・トウィスト』に付されたクルックシャンクの挿絵《フェイギンに紹介されるオリヴァー》(*Oliver Introduced to the Respectable Old Gentleman, 1837*【図3-a】)が【図1】と【図2】で反復されるホガースの「絞首刑」の主題を取り込んでいることである。この挿絵は、オリヴァーとスリの子供たちの元締めフェイギン (Fagin) の初対面の場面を描いたものであるが、この挿絵において、ディケンズの本文には「書かれていないこと」がこっそりと差し挟まれている。それは、ホガースが得意とした絞首刑の主題である。次に見るのは、挿絵と対応するテキストである。

In a frying-pan, which was on the fire, and which was secured to the mantelshelf by a string, some sausages were cooking; and standing over them, with a toasting-fork in his hand, was a very old shrivelled Jew, whose villainous-looking and repulsive face was obscured by a quantity of matted red hair. He was dressed in a greasy flannel gown, with his throat bare; and seemed to be dividing his attention between the frying-pan and the clothes-horse, over which a great number of silk handkerchiefs were hanging. Several rough beds made of old sacks, were huddled side by side on the floor. Seated round the table were four or five boys, none older than the Dodger; smoking long clay pipes, and drinking spirits with the air of middle-aged men. These all crowded about their associate as he whispered a few words to the Jew; and then turned round and grinned at Oliver; as did the Jew himself; toasting-fork in hand.

'This is him, Fagin,' said Jack Dawkins; 'my friend Oliver Twist.' (*OT*, ch. 8, 50)

クルックシャンクの挿絵【図3-a】は、本文をほぼ忠実に再現している。しかし、異なる点、正確にいうと、絵師が勝手に追加したものが二つある。一つは、赤髪で隠れているはずの

ゲルの版画が流入していたことが指摘されている (森 17-18)。

7 ホガースが、漫画の重要な起源と位置づけられているにもかかわらず、近代漫画の鼻祖とされるテプフェール (Rodolphe Töpffer) と決定的に異なるのは、佐々木果氏も指摘する通り、ホガースにおいては、一枚一枚の「重量級」の図像に「象徴的な表現が多く描き込」まれているからである。その結果、ホガースの連作版画においては、ある図版から次の図版に移る時、各プレート間の関係性が弱められる (佐々木97)。



【図3-a】《フェイギンに紹介されるオリヴァー》



【図3-b】【図3-a】の部分図

フェイギンの顔がさらけ出されていることである。フェイギンの顔は、ヴォグラーらが指摘している通り、クルックシャンクの自画像でもある (Vogler, *Graphic Works of George Cruikshank* 196, Cohen 23)。もう一つの相違点が、クルックシャンクによる、ある意図を帯びた追加で、それは【図1】と【図2】で見たホガースの「絞首刑」の主題の再現である。挿絵の中のフェイギンの右手の焼き串の先にある壁に貼られたピラには、三人の人間の絞首刑が描かれている (【図3-b】)。これは、フェイギンという悪党の未来の構図でもあるが、彼はここで、オリヴァーをジッと見つめて、意味ありげにこの絞首刑の図を指し示している。「お前さんもいずれこうなるのだ」という意地悪なフェイギンの声が聞こえてくるようである。だが、本文には絞首刑のピラもないし、絞首刑に言及する台詞もない。

クルックシャンクのこの挿絵はホガースの【図1】と【図2】に酷似している。まず第一に、これらの図版の絞首刑の図は、見逃してしまいそうなほどに、微小な画面で描かれており、かつ、稚拙な漫画のような、てるてる坊主型の線描画である。第二に、これらの三つの図版においては、指差しの行為という点も同一である。「この絵を見よ」という具合にわざわざ指で指し示している。第三に、ホガースの落書き少年も、アイドルを乗せた舟乗りも、フェイギンも、皆、同じようにニヤリとほくそ笑むような顔つきをしている。これらの構図上の一致は、クルックシャンクが意識的にホガースの構図を切り取り、そのまま取り込んでいる可能性を強く示唆する。聖書や神話に言及する英文学の詩歌がそうであるように、引用 (allusion, quotation) という行為は、引用される対象を熟知していることを前提としているが、ホガースを自在に引用するクルックシャンクは、18世紀のこの大版画家を自家薬籠中としていることを誇示しているのである。

では、クルックシャンクはディケンズに対してはどのような立ち位置にあったのだろうか。ポールソンは、ディケンズとクルックシャンクにおいて、文章と挿絵が「共存している = co-

present」と指摘している (Paulson, 'The Tradition of Comic Illustration from Hogarth to Cruikshank' 56)。その一方で、ポールソンは、不思議なことに、ディケンズとクルックシャンクの共存関係の実態が何だったかについて、具体的な答えを提出していない。本論は、両者の共存関係の中心にあるのが「絞首刑」という共通主題である、とまず想定する。



【図4】《徒弟契約を免れたオリヴァー》



【図5】《怠惰な徒弟の裁判》

【図4】の《徒弟契約を免れたオリヴァー》(Oliver Escapes Being Bound Apprentice to the Sweep, 1837)は、クルックシャンクによるホガースからのもう一つの引用例である。これは、オリヴァーが煙突掃除屋のギャンフィールド (Gamfield) に丁稚に出されることになり、治安判事のもとで、年季奉公の契約が取り交わされようとしている場面を挿絵にしたものである。煙突掃除の徒弟になっていたら、当時の多くの子供たちがそうだったように、オリヴァーは煙突の中で窒息死していた可能性もあり、オリヴァーにとっては人生の岐路に立たされた瞬間だった。しかし、判事がたまたま、青ざめ、膝まずくオリヴァーを目に留めたために、オリヴァーは煙突掃除の徒弟を免れることになる。一方、ホガースの《勤勉と怠惰》第10図の《怠惰な徒弟の裁判》(The Industrious Prentice Alderman of London, the Idle One Brought before him and Impeached by his Accomplice, 1747)では(【図5】)、怠惰な徒弟のアイドルが殺人を犯し、裁判にかけられた時の様子が描かれている。膝をつき、刑の軽減を哀願しているアイドルに相對するのは、織物職人の徒弟として、かつて、同じ職場で働いていた勤勉な徒弟のグッドチャイルド (Francis Goodchild) である。グッドチャイルドは、今や立身出世を遂げ、怠惰な徒弟トムを裁く治安判事になっている。

【図4】の《徒弟契約を免れたオリヴァー》と【図5】の《怠惰な徒弟の裁判》との間には、以下に示すように二つの共通点がある。(1)どちらの図版も、人間の運命が左右される決定的な場面であり、「裁かれる側」と「裁く側」の間には大きな溝があり、その溝が両者を隔てる柵 (bar)

で表現されている。(2)オリヴァーとアイドルが両手を握りしめ、膝を屈している仕草は、あたかも転写されたかのようにほぼ同一である。

次の引用部は【図4】と対応するディケンズの本文であるが、クルックシャンクの挿絵は忠実に本文を再現している。

It was the critical moment of Oliver's fate. . . and happening in the course of his [the magistrate's] search to look straight before him, his gaze encountered the pale and terrified face of Oliver Twist. . .

'My boy' said the old gentleman, 'you look pale and alarmed. What is the matter?' . . .

Oliver fell on his knees, and clasping his hands together, prayed that they would order him back to the dark room – that they would starve him – beat him – kill him if they pleased – rather than send him away with that dreadful man. (OT, ch. 3, 18)

ディケンズのこの本文を読んだ時、ホガースを熟知するクルックシャンクには【図5】の《怠惰な徒弟の裁判》の図版が瞬時に閃いたにちがいない。「裁く側」と「裁かれる側」の緊迫の瞬間を捉えたディケンズの本文自体が、そもそも、何の細工を施す必要もないほど、ホガースの《怠惰な徒弟の裁判》に酷似している。ただし、本文を書く際に、ディケンズの脳裏にホガースのこの図版があったとは思にくい。ディケンズの「偉大なホガースに倣っただけだ」という言葉は、人間のぶざまな現実を描くという作法をホガースに学んだという基本姿勢を示したにすぎず、ディケンズがここで、ホガースの個別の図版の構図まで取り込んだといえるほどの確たる証拠はない⁸。ディケンズの本文をホガース側にたぐり寄せ、ディケンズをいわば「ホガース色」に染めたのは、ホガースを知り尽くしていたクルックシャンクの深謀遠慮である⁹。ポールソンが唱える絵師と作家の「共存」関係とは、たとえばこのような事情を指しているのではないだろうか。ディケンズは物語を書くが、その内部のプロットはしばしばホガース的の主題を内包していた。次に、挿絵画家のクルックシャンクは、本文のある場面を忠実に図像化するが、その刹那、クルックシャンクにホガースが憑依する。つまり、ホガースを仲立ち（媒介項）として、テキストと挿絵が結びつき、相乗効果を発揮する仕組みである。

8 どの場面を挿絵とするかについて、ディケンズはしばしばクルックシャンクに指示を出していた。オリヴァーが煙突掃除の丁稚を免れるこの場面は、ディケンズの指示によって図案化されたものだった (Tillotson, 'Appendix E' 392)。しかし、このこととディケンズがこの場面について、ホガースを念頭において書いたことは必ずしも直結しない。

9 クルックシャンクはホガースを知悉し、換骨奪胎して取り込んでいた。これを、パトンは、クルックシャンクはホガースの版画を「最新化」(update) したと指摘している (Patten 1: 345)。また、ディケンズの挿絵画家としてのクルックシャンクは「ホガースを模倣する」ことによって、鮮烈な人物像を描くことに成功したとアンタルは述べている (Antal 191)。

3. 「絞首刑」の前

ホガースが偏愛した「絞首刑」の主題は、その後継者のクルックシャンクによって引き継がれたのみならず、ディケンズにおいても偏愛され、反復された主題だった。この主題は、『オリヴァー・トウィスト』の通奏低音といてよほどに何度もテキストの中に立ち現れてくる。そもそも *Twist* という主人公の名前が、絞首刑の主題を内蔵していた。というのも、*twist* という言葉には「絞首刑にかける」という意味があったからである (Tracy 2)。また、ハレット (Mark Hallett) は、タイバーンでは観覧席が作られ、何千という人々は「処刑された人間が身をよじり、苦しむのを見た ('watch the twisting bodies of the executed')」と述べている (Hallett 201)。いずれにしても、*Oliver Twist* というこの小説の表題は「絞首刑になってもがき苦しむオリヴァー」という意味を暗示していたことになる。ディケンズもまたホガースの呪縛を受けるかのように、絞首刑の主題を小説の結末部近くで用意することになる。小説の結末部の一つのクライマックスが、サイクス (Sikes) の最期の場面である。恋人のナンシー (Nancy) を殴り殺したあと、田舎へ逃亡したサイクスはロンドンに舞い戻るものの、追いつめられ、屋根の上へ逃げていく。そして、手に縄を持ち、屋根から一気に飛び降りて脱走を図る。その瞬間、サイクスはナンシーの亡霊の眼を見て、恐怖のあまり足を滑らせ、屋根から転げ落ちる。

'The eyes again!' he [Sikes] cried in an unearthly screech.

Staggering as if struck by lightning, he lost his balance and tumbled over the parapet. The noose was at his neck. It ran up with his weight, tight as a bow-string, and swift as the arrow it speeds. He fell for five-and-thirty feet. There was a sudden jerk, a terrific convulsion of the limbs; and there he hung, with the open knife clenched in his stiffening hand. (*OT*, ch. 50, 347)

ロンドンの全市民が集まったかのような興奮の坩堝の中で、地上からひときわ高い場所でなされるサイクスの絞首という構図は、ホガースの《タイバーンでの処刑》(【図6】)と相似形を結ぶ。

公開絞首刑は「タイバーンの祭り (Tyburn Fair)」と呼ばれた、ロンドン市民の一大娯楽だった。処刑は月曜の朝8時と定められ、その日は、店は閉まり、仕事はすべて休みとなり、多い時には10万人もの観客が押し寄せた (Paulson, *Hogarth's Graphic Works* 136-37)。サイクスの絞首の場面を書き進めたディケンズの念頭にホガースのこの版画があったことはほぼ疑いない。殺人を犯したサイクスに、死という罰を与えるのが作者の意図だったとするならば、無数の可能性があったはずである。それにもかかわらず、ディケンズはここで、敢えて、サイクスを屋根の天辺へ登らせ、彼にスポットライトと罵声を浴びせた上で、首吊りにしている。ただし、サイクスに与えられた実質的な公開絞首刑の描写と《タイバーンでの処刑》との決定的な違いについても確認しておく必要がある。既述の通り、《タイバーンでの処刑》は、処刑の一步手前の時間で停止してい



【図6】《タイバーンでの処刑》

ののに対し、ディケンズのテキストは首吊りになって苦しみもがくサイクスをあぶり出し、処刑の「瞬間」を前面に出している。

それにしても、ホガースはなぜ、一歩前の時間を取えて選び出したのだろうか。

ホガースが、記念碑的な版画の中に描出した公開絞首刑という主題は、版画という複製芸術の強力な拡散性を通じて、イギリス文化に広く行き渡り、深く根を下ろすことになる¹⁰。しかし、イギリスの絞首刑図の一つの源流を形成した《タイバーンでの処刑》において、絞首刑自体は描かれておらず、私たちはその代わりに、牧師の前で棺桶を背にして、恐怖に歪む顔をしたアイドルと彼を圍繞して膨れ上がる群衆を見るのみである。このようにして、ホガースは、絞首刑のクライマックスとなるはずの「瞬間」を接写することを回避し、版画の時間を「この前」にずらしている。これに対し、ディケンズのテキストは、絞首刑にかかったサイクスを高精度な望遠レンズで見たように、近接画面で捉え、サイクスの窒息死を迫真のリアリズムで描いている。先の引用部で、「突然、ぎゅっと締まると、手足が凄まじい勢いでばたばたと痙攣した」という表現は、ディケンズの文体における眼に訴えるリアリズムの典型例である。ディケンズの多くの作品が好んで映画化されてきたのは、つまり、ディケンズのテキストが映像に翻案されやすいのは、サイクスの死の場面からも窺われるように、ディケンズが本質的に、視覚効果を多用する作家だからである¹¹。

では、クルックシャンクはサイクスの宙ぶりの場面をどのように図像化しただろうか。

10 コーヒー・ハウス、居酒屋、一般家庭などを通して、ホガースの版画は倍々ゲームのような拡散を遂げた。ホガースの版画の正規版は比較的高価なものだったが、質の悪い廉価版や海賊版の横行が拡散に拍車をかけた（Bindman, *Hogarth and his Time* 29-32, Uglow 269）。版画の強力な拡散性は、それが「複製芸術」であることに由来するが、ベンヤミン（Walter Benjamin）は「複製」とは「礼拝価値」（cult value）あるいは「オーラ」（aura）を失った芸術であると述べている（Benjamin 251-83）。

11 佐々木徹氏は、ディケンズほど映画化された回数が多い小説家はいないと述べ、「ディケンズの叙述方法は映画的表現のさまざまな特徴に驚くべきほど類似している」と指摘している（佐々木 580-83）。



【図7】《土壇場》

【図7】《土壇場》(*The Last Chance*, 1838) は、クルックシャンクがこの場面に付した挿絵である。クルックシャンクはディケンズのテキストの図像化に際し、「突然、ぎゅっと締まると、手足が凄まじい勢いでばたばたと痙攣した」という生々しいリアリズムの場面は敢えて回避している。ディケンズの小説は家庭の団欒の中で読まれる慣習があったので、リアリズムを追求した残酷な挿絵は家庭には適切ではないとクルックシャンクが自己規制したと考えることは可能である¹²。しかし、ただ単に中流家庭の decorum (礼儀) を考慮したことだけが理由ではなく、クルックシャンクがホガースの強い影響下で仕事をしたという事情が回避のもう一つの理由であろう。というのも、すでに見た通り、ホガースの《タイバーンでの処刑》もまた肝心の場面、すなわち、絞首刑の瞬間を回避しているからである。つまり、クルックシャンクは、死の瞬間を描かず、その「前」の時間を敢えて図像にしたホガースの掣みに倣ったのだ。挿絵画家は、ここで、読者の図像的な教養を試していたのかもしれない。「私はここでホガースを引用した。それがおわかりかな？」と¹³。

4. 《ことの前》と《ことの後》

ホガースの作品に《ことの前》(*Before*, 1736 【図8】) と《ことの後》(*After*, 1736 【図9】) という対の版画がある。

12 ディケンズはサイクスの絞首の場面を挿し絵にすることに反対していたが、クルックシャンクは異常な情熱を持ってこの作画化に取り組んだ (Patten 2: 87)。ヴィクトリア朝を通じて、中流家庭の団欒の中で小説が音読される慣習があったことについては、Altick 115, Wheeler 3-4, Lane 153-54参照。

13 処刑前夜の死の恐怖を描いた《死刑囚独房のフェイギン》(*Fagin in the Condemned Cell*, 1839) もまた「ことの前」の表現であり、処刑の描写はここでも空白である。もっとも、フェイギンの死刑執行の描写のないテキスト自体がホガース以降の「空白」の伝統を踏襲しているともいえる。



【図8】《この前》



【図9】《この後》

これは性交の「前」と「後」の男女の相反する心理を描いた版画である。明確なポルノグラフィは別として、18世紀のデコーラムにおいて、性行為の瞬間を描くことが強力な禁止事項だったということは、この一対の版画から容易に推測できる¹⁴。だが、事情はそれほど単純ではなく、クライマックスの「前」の時間と「後」の時間を描き、「中間」の重要な瞬間を省略するという Hogarth の作法は、彼が「空白」を効果的に利用する手練れの画家であることに由来すると見るべきである。

逆の見方をすれば、Hogarth が、時系列に沿って、本来はあるべき「瞬間」を描かず、その「前」と「後」に振り分けている場合、その省略された「空白」の時間は、彼にとって、異様な緊迫を孕む時間だったことを意味する。その一つが性交の瞬間であり、もう一つが死の瞬間である。

このような「空白」が効果的に利用されているもう一つの事例がある。《残酷の四段階》の第3図（【図10】）は、《残酷の完成》（*Cruelty in Perfection*, 1751）というタイトルを持つ。画面左手の坊主頭の男が、少年時に動物虐待をしていたネロの成長した姿であり（【図1】参照）、彼は今、恋人を殺害したところである。ネロは騒ぎを聞きつけて駆けつけた村人に捕まり、処刑台に至る確実な一歩を踏み出した。これに続く版画が、《残酷の四段階》の第4図（《残酷の報い》（*The Reward of Cruelty*, 1751 【図11】）である。

14 この一対の版画は、依頼されて描かれた Hogarth の油彩画に基づいて制作されている。ポールソンはこの版画を売り出すという新聞広告（*the Daily Gazetteer*, December 18, 1736）を根拠にして、この広告の直後に売られたはずだと述べている（Paulson, *Hogarth's Graphic Works* 99）。ライディング（Christine Riding）も同様の見解をとる（Riding 76）。性交を明瞭に連想させるこの二枚の版画の公刊が許容されていたならば、《この前》と《この後》は、ひとまず、ポルノグラフィの域外の作品として同時代人に見なされたと考えられる。



【図10】《残酷の完成》



【図11】《残酷の報い》

ネロは、当時、絞首刑になった人間に待ち受けていた死体解剖の被験者になっている¹⁵。画面全体が、*memento mori*の伝統を踏まえていることは一目瞭然であるが、注目したいのは、ネロの首に残る絞首刑の縄である。口を開けたネロは、まるで、生きて声を発しているかのように描かれており、眼をくり抜かれた彼からは苦悶のうめき声が漏れ聞こえてくるかのようなようである。いずれにしても、ホガースは【図10】と【図11】の間にあった出来事、すなわち、タイバーンでの公開絞首刑の場面を省略し、それを空白の時間として措定する。その描かれなかった空白は、この版画の時間より約90年後にディケンズがテキスト化したように、「突然、ぎゅっと締まると、手足が凄まじい勢いでぱたぱたと痙攣した」ものだったかもしれない。

ここで想起したいのは、時に10万人の見物客を集めたロンドンでの公開絞首刑は、異様なお祭り騒ぎだったことであり、ロンドン市民にとって、公開絞首刑は多数の人間の共有体験だったという事実である。つまり、多くの人間が、空白の時間に何が起きているかを熟知していたのみならず、個別の具体的体験があり、固有の記憶があった。ホガースは、自身の版画の時間に敢えて空白を設けることによって、見る者の固有の想像力（構想力）を刺激する間接的な話法を用いたと考えることができる。

さらに、描かれなかった「空白」の時間に関して、別の議論の可能性が視野に入ってくる。ベルクソン（Henri Bergson）が、「任意の瞬間」（*un moment quelconque*）という用語を用いて、当時新興のメディアであった映画の手法の批判を行なったことはよく知られている。ベルクソンは「任意の瞬間」を端的に表すものとして、マイブリッジ（Eadweard Muybridge）の連続写真で顕在化した馬のギャロップに言及し、次のように述べている。

15 ホガースの時代、解剖は、処刑後の死体のみ許されており、死体をめぐって争奪戦が繰り広げられた（Porter 154）。また、死体は病氣の特効薬と考えられたために、その一部（手など）が切り売りされ、高値で取引された（Ackroyd 293-94）。

馬のギャロップをみて私たちの目はとくにある特徴的な姿勢を知覚する。それは本質的な、あるいは図式的な姿勢であり、形態としてある全期間を照らし、したがってギャロップの時間を満たすようにみえる。彫刻がバルテノンのフリーズに固定したのはこの姿勢にほかならなかった。ところがスナップはどんな瞬間をも孤立させる。それはあらゆる瞬間を同列におく。したがってまたスナップに取ったギャロップは馬のつぎつぎの姿勢をばらばらなままいくらでも並べたものとなり、ある取っておきの瞬間にきらめく一箇の姿勢に集中してこれが全期間を照らすようなことはない¹⁶。

時間が機械的に分節化された「任意の瞬間」の対極に位置する時間概念が、いわゆる「特権的な瞬間」(*un instant privilégié*)である。では、《タイバーンでの処刑》の図版は、ベルクソンのいう「ある取っておきの瞬間にきらめく一箇の姿勢」であり、「怠惰な徒弟」の「全期間を照らす」ものといえるだろうか。言い換えると、この図版は、「特権的瞬間」を切り取りえているだろうか。

《タイバーンでの処刑》の構図を吟味すると気づくことは、主人公であるはずのアイドルが左方の遠景に退いていることの不可思議さである。おそらく何も知らずにこの版画を見る人は、この絵の主人公を探せないだろう。タイバーンでの公開絞首刑が「タイバーンの祭り」と称され、奉公人には休みが出されたことは前述したが、ホガースは怠惰な徒弟の転落の人生を点描しながら、ロンドンの壮大な「民衆の祭り (folk festival)」に逢着することになった。いうまでもなく、この祭りの主役は一人一人の民衆である。絵の中の彼らは、パンやリングを食らい、酒を呑み、祭りを肉体の快樂として味わう。そこでは、怒号が飛び交い、喧嘩があり（中央で取っ組み合う男女）、スリ（右手前の子供）が出没し、雑多な民衆のエネルギーが溢れた混沌が表出されている。ところが、もし、《タイバーンでの処刑》がアイドルの処刑の瞬間にのみクローズアップしたら、民衆たちは背景に退かざるをえない。すなわち、アイドルの処刑死をホガースが描いていたとするなら、それは、物語の最後のコマに執着したことになり、均等な間隔で連写された「任意の瞬間」に限りなく近づいていたに違いない。むしろ、凄惨すぎる一コマを回避したのがそのコマが空白になった理由であることは否定しないが、ホガースは首吊りで苦しむアイドルではなく、タイバーンの祭りに興ずる民衆の中に「取っておきの瞬間」を捉えたと考えると道理が通る。そのあとの核心ともいべきコマ割りは、実は、無用だったのであり、ホガースという絵師の視点は何よりも猥雑な民衆に注がれていた。

ホガースの場合、《娼婦一代記》(*Harlot's Progress*, 1732)、《放蕩息子一代記》(*The Rake's*

16 ベルクソンは瞬間写真を機械的な精密さで均等に並べる映画の手法を引き合いにして、運動を際限のない「任意の瞬間」に分割して満足する近代科学の記述法を批判している。なお、翻訳は真方敬道氏の岩波文庫版に拠るが、フランス語の原文テキスト (*L'Évolution créatrice*, 1907) とベルクソン自身が公認した Arthur Michell の英訳版も参照した。「取っておきの瞬間」に相当するフランス語は、'un instant privilégié' (Bergson 332) であり、「特権的瞬間」とも訳される。引用箇所は、漫画と映画の時間の問題と関連づけられ、ドゥルーズを初めとして、四方田氏や三輪氏も着目している (ドゥルーズ 3-22, 四方田 20-27, 三輪 325-52)。

Progress, 1735), 《当世風結婚》(*Marriage A-la-Mode*, 1745) に顕著なように、悪徳を描いてこそ本領を発揮する。《タイバーンでの処刑》が「特権的な瞬間」たりえているもう一つの理由は、彼がここで、他人の死を見て楽しむというロンドン市民の悪趣味な悪徳を暴露しているからである。

バフチン (Mikhail Bakhtin) は、民衆の祭りを構成する普遍的な三要素について述べ、それは、(1)儀式張ったスペクタクル (見せ物) と(2)パロディのような戯れ言葉と(3)逆る悪口雑言 (billingsgate) だとしている (Bakhtin 4-5)。《タイバーンでの処刑》が、(1)と(3)の要件を満たしているのは論を俟たないが、(2)のパロディのような戯れ言葉の要素も内包していることを指摘しておきたい。

ポールソンは、「タイバーンの祭り」は一種のサブカルチャーであり、ある公式の行事のパロディだったと述べている。その行事は、ロンドン市長就任式のパレードである (Paulson, *Hogarth's Graphic Works* 136)。ロンドン市長就任のパレードは《勤勉と怠惰》の最終の第12図の主題であり、そこではロンドン市長に登りつめたグッドチャイルドが描かれている。ただし、そこに描かれた群衆は《タイバーンでの処刑》の狂乱の群衆と大差はなく、ロンドンにおいては公式の行事ですらも阿鼻叫喚の混沌に支配されていたことがわかる。

5. 結 び

ディケンズとクルックシャンクが共通して偏愛した絞首刑の主題をめぐって両者がまさに火花を散らすように対峙したのが、サイクスの実質的な公開絞首刑の描写である。作家は明瞭にホガースの《勤勉と怠惰》の第10図《タイバーンでの処刑》を念頭におき、描かれなかった「空白」である絞首刑の死の瞬間を、高精度な望遠レンズを用いて、鬼気迫るリアリズムの手法で描写した。一方、挿絵画家もまた《勤勉と怠惰》の第10図を念頭におき、絞首刑の主題を圖像化した。だが、クルックシャンクはホガースに倣い、死の瞬間を「空白」とし、ホガース流に「ことの前」を描いた。空白を描くにせよ、描かないにせよ、双方には理由があった。「私はホガースを知っている。だから、敢えて、遅延され、じらされた「空白」を埋めた。」これがリアリズム作家の言い分である。挿絵画家は、こう答えるだろう。「私こそホガースを知っている。だから、ホガースに敬意を払い、「空白」を描かなかったのだ。」

では、どちらがホガースをよりよく知っていたといえるだろうか？

引用文献

- Ackroyd, Peter. *London: The Biography*. London: Vintage, 2001.
- Altick, Richard. *Writers, Readers, and Occasions*. Columbus: Ohio UP, 1989.
- Antal, Frederick. *Hogarth and his Place in European Art*. London: Routledge, 1962.
- Bakhtin, Mikhail. *Rabelais and his World*. Tr. Hélène Iswolsky. Bloomington: Indiana UP, 1984.
- Benjamin, Walter. 'The Work of Art in the Age of its Technological Reproducibility'. Third Version. *Walter Benjamin Selected Writings*. Vol. 4: 1938–1940. Tr. Edmund Jephcott et al. Ed. Howard Eiland & Michael Jennings. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard UP, 2006.
- Bergson, Henri. *L'Évolution créatrice*. Paris: Presses Universitaires, 1941.
- . *Creative Revolution*. Tr. Arthur Mitchell. New York: Dover Publications, 1988.
- Bindman, David. *Hogarth*. London: Thames and Hudson, 1981.
- . *Hogarth and his Times*. Berkeley and Los Angeles: U of California P, 1997.
- Cohen, Jane. *Charles Dickens and his Original Illustrators*. Columbus: Ohio State UP, 1980.
- Davis, Paul D. 'Dickens, Hogarth, and the Illustrated *Great Expectations*', *The Dickensian* 80 (1984) : 131–43.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist*. Ed. Kathleen Tillotson. Oxford: Clarendon P, 1966.
- Hallett, Mark and Christine Riding. *Hogarth*. London: Tate Publishing, 2007.
- Hallett, Mark. *Hogarth*. London: Phaidon Press Limited, 2000.
- Hara, Eiich. 'Stories of Present and Absent in *Great Expectations*'. *ELH* 53 (1986) : 593–614.
- Harvey, John. *Victorian Novelists and their Illustrators*. London: Sidgwick & Jackson, 1970.
- Lane, Margaret. 'Dickens on the Hearth'. *Dickens 1970*. Ed. Michael Slater. London: Chapman & Hall, 1970. 153–71.
- Leavis, F. R. & Q. D. *Dickens the Novelist*. London: Chatto & Windus, 1973.
- Patten, Robert. *George Cruikshank's Life, Times, and Art*. Volumes 1 & 2. New Brunswick: Rutgers UP, 1992 & 1996.
- Paulson, Ronald. 'The Tradition of Comic Illustration from Hogarth to Cruikshank'. *George Cruikshank A Revaluation*. Ed. Robert Patten. Princeton: Princeton UP, 1974. 35–60.
- . *Hogarth's Graphic Works*. London: The Print Room, 1989.
- . *Hogarth's Harlot: Sacred Parody in Enlightenment England*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2003.
- Porter, Roy. *London A Social History*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1995.
- Schlicke, Paul. 'William, Hogarth'. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford: Oxford UP, 1999. 274–75.
- Slater, Michael. ed. *Dickens's Journalism : Sketches by Boz and other Early Papers 1833–39*. London:

Dent, 1994.

Tillotson, Kathleen. Appendix E 'The Illustrations'. *Oliver Twist*. Ed. Kathleen Tillotson, Oxford: Clarendon P, 1966. 392-97.

Tracy, Robert. 'The Old Story and Inside Stories: Modish Fiction and Fictional Modes in *Oliver Twist*'. *Dickens Studies Annual* 17 (1988) : 1 -33.

Uglow, Jenny. *Hogarth*. London: Faber & Faber, 1997.

Vogler, Richard. 'Cruikshank and Dickens: A Reassessment of the Role of the Artist and the Author'. *George Cruikshank A Revaluation*. Ed. Robert Patten. Princeton: Princeton UP, 1974. 61-92.

———. *Graphic Works of George Cruikshank*. London: Dover Publications, 1979.

Wheeler, Michael. *English Fiction of the Victorian Period 1830-1890*. Second Edition, Harlow: Longman, 1994.

佐々木徹「ディケンズと映画」『ディケンズ鑑賞大事典』西條隆雄 他編, 南雲堂, 2007。580-95。

佐々木果「コマ割りまんが」はどこから来たか — ホガース, テプフェールの出現と, その背景としての近代ヨーロッパ文化史』『ナラティブ・メディア研究』。No. 2, 2010。89-107。

ドゥールーズ, ジル『シネマ1 運動イメージ』法政大学出版局, 2008。

中村隆「クルックシャンクのたくらみ」『山形大学人文学部研究年報』。No.7, 2011。61-83。

原英一『〈徒弟〉たちのイギリス文学』岩波書店, 2012。

ベルクソン, アンリ『創造的進化』真方敬道 訳, 岩波書店, 1979。

三輪健太郎『マンガと映画』NTT 出版, 2014。

森洋子『ホガースの銅版画 — 英国の世相と諷刺 —』岩崎美術社, 1981。

四方田犬彦『漫画原論』筑摩書房, 1999。

A Hogarthian Moment in *Oliver Twist*

Takashi NAKAMURA

While many critics have noted the fact that Dickens as well as Cruikshank owed much to Hogarth, few have identified a crucial component that strongly connects these two pre-eminent creators with Hogarth. This essay is an attempt to clarify a Hogarthian moment in which Cruikshank and Dickens modified Hogarth's engravings when both were working on *Oliver Twist*.

It is my contention that public execution, namely 'hanging', stands for a central motif that binds together the three – the engraver, the illustrator and the novelist. Hanging is evidently Hogarth's favorite theme, well illustrated, for instance in his famed *Industry and Idleness* (1747) series. Employing a double plot, this cycle delineates alternately the idle apprentice's declining life and the industrious apprentice's ascending career. In particular, the former (Tom Idle) who is destined for the gallows in *The Idle Prentice Executed at Tyburn* (figure 6) provides a focal point. In this relation, what is remarkable is that *Oliver Twist* is also haunted by this Hogarthian theme of hanging, all the more because the novel abounds with villains whose fate it is to be hung in public. In the novel, one of the most prominent examples of a hanging motif being brought into focus occurs when the evil Sikes is hung. Dickens highlights Sike's agony of death by minute close-ups: 'It [the noose] ran up with his weight, tight as a bow-string, and swift as the arrow it speeds. . . . There was a sudden jerk, a terrific convulsion of the limbs'. The author, hence, turns Sikes's accidental hanging into a *de facto* public execution in line with Hogarth.

Probably stimulated by Dickens's text, Cruikshank produced the Sikes plate (figure 7) in which, curiously, he did not depict Sikes being hung but opted instead for the moment just before hanging. Focusing upon Sikes, who was greeted with roars and cheers, Cruikshank recapitulated Hogarth's celebrated Tyburn print (figure 6). Hogarth, like Cruikshank, had portrayed not the execution itself but a convict faced with his imminent execution. But why had Hogarth endorsed the moment prior to the ultimate climax culminating in the moment of execution? A key might be found in the frenzied Tyburn crowd. Obviously, a public execution meant an execution for public entertainment so that not the executed but the mob could play a central role. Hogarth found the so-called Bergsonian '*un instant privilégié*' ('a privileged moment') when mobs became heroes of the fair. Hogarth's intention was to represent a cruel 'fair' at Tyburn, and also to visualise as many lowly folks as possible. As Bakhtin observes, 'folk festivities' satisfy at least three conditions: firstly, 'ritual spectacle'; secondly, comic verbal expressions exemplified by 'parody'; and finally 'billingsgate'. It is explicit that Tyburn Fair, which was a

grand arena for the public, was nothing other than a 'ritual spectacle'. At Tyburn, all kinds of 'billingsgates' might have exploded. Even an element of 'parody' is touched on in the Tyburn print, because, as Paulson testifies, this festival was carried out as 'a mock- or parody-version' of a high culture ritual like the 'Lord Mayor's Procession'.

Hogarth, *in fine*, managed to accomplish the fair's three requirements, not by presenting the hanging scene but by exposing Londoners participating in a notorious fair. Cruikshank's illustration, as it were, paid homage to Hogarth's version of Tyburn Fair, showing Sikes bathed in Londoners' overwhelming roars just before the hanging.

論 文

イノベーション創出のための共同研究拠点の形成と機能¹

—英国シェフィールド大学 AMRC のケース・スタディを通じて—

**The Formation of Research Institutions and the Role of University-
Industry Collaboration for Innovation:
A Case Study of Sheffield University Advanced Manufacturing Research
Centre (AMRC), UK**

山 口 昌 樹 (Masaki YAMAGUCHI)^{*1}
柸 紫 乃 (Shino HIIRAGI)^{*2}
山 本 匡 毅 (Masaki YAMAMOTO)^{*1}
小 森 尚 子 (Naoko KOMORI)^{*3}

Abstract

The aim of this research is to explore ways in which national innovation policy can shape research institutions and joint research between industry and academia. The research draws on a case study of the Advanced Manufacturing Research Centre (AMRC) at the University of Sheffield, UK. The significance of innovation is highlighted in Japan's strategic revitalization plan of 2016 which seeks a threefold increase in industry investment in academic institutions by 2025. Drawing on fieldwork jointly organized by Yamagata University and the University of Sheffield, this international comparative study considers the implications for innovation policy in Japan. Three aspects of AMRC were highlighted as providing interesting contrasts with the case in Japan. These include: a strong connectivity and multilayered networks between research organizations; strong commitment and a leading role of the private corporate sector within university-industry collaboration; and focused and committed education of engineers in advanced research institutions.

1. はじめに

イノベーションは日本経済の未来を占う最重要キーワードの1つである。2016年6月に閣議決定された日本再興戦略2016において、名目GDP600兆円にむけた成長戦略の一手段としてイノ

*1山形大学人文学部法経政策学科 (Yamagata University, Faculty of Literature and Social Sciences), *2 山形大学大学院理工学研究科 (Yamagata University, Graduate School of Science and Engineering), *3 英国シェフィールド大学 Management School (Sheffield University Management School, UK)

1 本稿は YU-COE (C) 「山形大学先端的研究拠点」による研究成果の一部である。

バージョン創出力の強化が掲げられている。具体策としては企業から大学・国立研究開発法人への投資を2025年までに3倍にすること、国内外のトップ人材を集めた世界的研究拠点の5カ所創出がある。本研究と関係があるのは拠点形成や共同研究の推進というトピックである。これについては、大学・国立研究開発法人・企業のトップが関与する、本格的でパイプの太い持続的な産学官連携（大規模共同研究の実現）へと発展させることや、本格的な産学官連携・グローバル連携を実践し内外の企業等からの投資を呼び込む中核的なモデル機関を創出するという意欲的な挑戦が見られる。こうしたイノベーションの創出や、その手段としての拠点形成、共同研究の社会的意義が本研究の動機である。

イノベーション研究は多くのトピックを含むものであるが、中でもイノベーション政策は主要な研究領域に位置づけられる。先行研究を俯瞰すると、科学技術振興機構・研究開発戦略センター（2015, 2016）、藤田（2014）、徳田（2011）、山口（2015）といった研究は欧米や韓国といった日本の競合国におけるイノベーション政策を紹介、分析するという大きな研究潮流をなしている²。

本研究はこうした先行研究とは異なるアプローチを採用する。個別研究機関における拠点形成や共同研究への取り組みのケースを紹介することによってイノベーション政策を逆照射する。これまでの研究では政策の詳細、変遷、形成過程が主要な研究対象となっており、個別研究機関において如何にして研究拠点が形成されたのか、共同研究にどうやって取り組んでいるのか、つまり、イノベーション政策がどのように具現化されているかが詳細に紹介されることは少なかったように見受けられる。

本研究はイノベーション促進を目的とした産学連携の先進的事例である英国のシェフィールド大学 AMRC（Advanced Manufacturing Research Center）を紹介する。Advanced Manufacturing は Creative & Digital, Healthcare と並び Sheffield City Region の地域経済活性化の戦略的重点セクターの一つとして位置づけられており、その中でも特に、イギリス経済の国際的競争力を支えてきた部門である（Vorley and Williams, 2014）。地域経済に貢献する役割を担う中で、シェフィールド大学もパートナーとして、長年にわたって、このセクターをその活動の中に取り込んできた。AMRC の設立もその一つである。

2015年のシェフィールド大学研究者訪問に続き³、山形大学から山口と柊が2016年3月にこの研究施設を視察した。この事例について詳細に報告することを通じて日本の成長戦略や科学技術・イノベーション政策にとって示唆に富む教訓を引き出すことを試みたい。なお、AMRC の活動を紹介する際には学術的な枠組みとして産業組織論において研究開発に関する研究から得られた知見を利用する。

2 星・岡崎（2016）のように米国との比較から日本のイノベーション政策を評価するアプローチもある。

3 2015年11月18日付け山形新聞ウェブサイト「山形大、英国と台湾の2国立大と共同研究」http://www.yamagatanp.jp/news/201511/18/kj_2015111800374.php

2. AMRC の概要

2.1 立地と沿革

・立地

AMRC の母体であるシェフィールド大学はイギリス中部のシェフィールドに位置し、同市は人口約50万人を擁するイギリス第5の都市である。AMRC はシェフィールドの北東にあるロザラム市の先端製造業パーク (Advanced Manufacturing Park) に本拠を構える。シェフィールドは伝統的な工業都市という位置づけを有する。同市は、川に囲まれ水車動力が得られたことや鉄鉱石と石炭が近郊で産出したという立地条件に恵まれたこともあり、14世紀以来の鉄鋼・刃物の産地として有名である。現在も主要産業は金属加工業でナイフやフォークなど刃物産業が盛んであり、ドイツのゾーリングンや岐阜県の関市とともに世界三大刃物工業都市の一角を占める。1850年代には発明家ヘンリー・ベッセマーが廉価な製鋼法ベッセマー法を開発したという鉄鋼の町として由緒ある歴史を有するが、1950年代以降主力産業が衰退し長く低迷状態にあった。現在は英国有数の学術都市・科学技術集積地として息を吹き返している。

・沿革

AMRC は2001年にシェフィールド大学とボーイング社が1500万ポンドを拠出して設立した研究センターである。なお、Yorkshire Forward⁴とEUの欧州地域開発基金からも支援を得ている。2004年には現在の本拠である先端製造業パークへ場所を移転した。その後、AMRC は急速に成長を遂げた。2008年に1,000万ポンドの資金を得てAMRC- ロールス・ロイス未来工場 (AMRC Rolls-Royce Factory of the Future in 2008) が建設され、現在では未来工場は施設の拡張が行われてデザイン・プロトタイプ・テスト・センター (Design Prototype and Test Centre) も入居している。2012年に未来工場の増床部分に複合材料センター (AMRC Composite Centre) が開設した。同年、知識移転センター (Knowledge Transfer Center) も開設され、2013年にトレーニング・センター (AMRC Training Centre) が先端的な実習と訓練の機会の提供を目的として開設された。元来、シェフィールド大学は冶金や工学の研究で世界的リーダーであり、新たな製造技術の開発のため現地企業と緊密に協働してきた背景があったがゆえ大規模な共同研究施設の設置に至っている。

2.2 参画企業、施設、組織

・参画企業

AMRC における研究への参画企業としてまず挙げられるのは航空宇宙産業における世界的企業であるボーイング社である。同社はシェフィールド大学と共同でAMRC を立ち上げ、現在も

4 同社は英国に9つあった地域開発公社 (Regional Development Agency) の1つで、1999年に設立された。地域開発公社の廃止という政府決定により2012年に廃止された。

参画企業として AMRC の発展のために主要な役割を果たしている。この他に、80社余が AMRC の資源や知見にアクセスするため年会費を支払う会員企業としてセンターの研究活動に参画している。

会員資格は2つの階層から構成される。どちらの会員資格がふさわしいかは、企業規模とサプライチェーンにおける位置づけによって決まる。ティア1会員の会費は年間20万ポンド（約2,800万円⁵）である。ティア1会員は AMRC の役員会に議席を1つ持ち、将来の研究の方向性に対して影響力を持つことができる。また、AMRC における全ての一般研究に参加し、成果を獲得できる。さらに、特定研究を提案して役員会の承認を求めることができる権利も有する。一方、ティア2会員の会費は年間3万ポンド（約420万円）である。ティア2会員の権利として全ての一般研究に参加し、成果を獲得することができる。ティア2の全会員の意見は一人の役員によって代表され、役員会での意思決定に反映される仕組みになっている。

会員資格は全ての企業に対して開かれている。ただし、AMRC の知見や機能を利用するために会員になる必要は必ずしもない。参画の仕方には大きく2つあり、1回限りのプロジェクトにおいて協働する企業もあれば、会員として長期的に協働する企業も存在する。これまで AMRC はヨークシャー・アンド・ザ・ハンバー地方⁶の中小企業と300を超えるプロジェクトで協働し、1200人余の雇用を創出、あるいは守ってきた実績がある。なお、AMRC は500名の研究者と技術者を世界中から雇用している。

AMRC でこれらの参画企業とのプロジェクトを統括的にマネジメントする Ms. Shirely Harrison⁷によれば、当初、シェフィールド大学の強力なコラボレーション相手としてのボーイング社とともに AMRC を立ち上げた初期段階から、中小規模の企業を巻き込んでのネットワーク形成を意図した次段階へと、AMRC の推進方法自体も進化してきた。ボーイング社が、AMRC の最大の技術パートナーであると同時にトップスポンサーであることは変わらないが、それらに加えて1社の規模は小さいとしても集合体としてのファンドという新たな方法が創発的に形成された。前述の会員資格の階層性も、それらの方針を反映したものといえる⁸。また、技術者の数と多様性が AMRC におけるあらゆる開発プロジェクトの推進に大きく貢献している。

• 研究施設

AMRC の3つの主要施設において研究活動等を展開している。1つ目はロールス・ロイス未来工場である。同施設は2008年に設立、2012年に拡張されており、6,400㎡の施設内に作業場、実験室、事務室、会議場がある。ここでの研究は機械加工がメインであり、間仕切りの無い作

5 本稿では日本円の対英ポンド相場を140円として換算する。

6 イングランドを構成する9つの地方の1つ。

7 2016年3月14日 AMRC 見学時インタビュー。

8 これらは、シェフィールド大学が試験的に取り組みはじめた別プロジェクト、小規模企業との連携（SME Programme）とも将来的に連携可能性を持つ（2016年3月14日シェフィールド大学 Research & Innovation Services, Partnerships Manager, Mr. Chris Baker インタビュー）。

業場は自社の工場に導入する前に新技術や製造プロセスを開発・試作するよう設計されている。1,800㎡の拡張部分に複合素材センターが入居しており、そこには作業場のほかにハイスペックのクリーンルームを含む制御された環境が整っている。



写真1 ロールス・ロイス未来工場の全景 (出所) AMRCウェブサイト

第二の施設はデザイン・プロトタイプ・テスト・センターである。この施設は2004年に建設された元々のAMRCビルを拡張したもので、構造試験センター (Advanced Structural Testing Centre) とデザイン・プロトタイピング・グループが本拠地としている。この施設に所在するプロトタイピングと構造試験の設備によって英国でこれまで成しえなかった製造デザイン能力が生まれ出されている。建設に当たっては欧州地域開発基金と高価値製造業カタパルト (High Value Manufacturing Catapult) が資金援助した。



写真2 デザイン・プロトタイプ・テスト・センターの全景 (出所) AMRCウェブサイト



写真3 ファクトリー 2050の全景（出所）AMRCウェブサイト

3つ目の施設はファクトリー2050（AMRC Factory 2050）である。7,000㎡の巨大研究施設は2015年11月に施設が引き渡され2016年夏から完全操業を開始した。英国で初の完全な再構成可能組み立てと部品製造ができる施設であり、高価値部品と単発部品とのスイッチング製造を共同研究する。なお、施設整備に当たっては英国高等教育資金会議（Higher Education Funding Council for England）が運営する研究パートナーシップ投資基金（Research Partnership Investment Fund）⁹からの資金支援を得ている。

・組織

AMRCの組織運営は役員会によって担われている。重役ポストは4つあり、最高責任者（chief executive officer）、研究担当役員（research director）、商務担当役員（commercial director）、プロジェクト担当役員（project director）がそれぞれの担当部門の責任を負っている。これらの重役ポストの人選を見ると各部門を統括するに適切な経歴を有する人物だと分かる。最高責任者はエアバス社（英国）において研究部門のトップを務めた人物であり、研究機関の管理運営のノウハウをAMRCにおいて発揮することができる。研究担当役員は企業出身の大学教授であり、その専門はデザインと製造業の研究である。共同研究施設であるAMRCにおいては大学と企業との調整機能が必要とされることから適切な人選である。商務担当役員は航空産業で働いた経験があり地元企業で販売担当役員の職責にあった人物である。研究の商業化に求められるノウハウと経験を有する人物と目される。プロジェクト担当役員は貿易産業省での行政経験を持つ人物であり、行政からの様々な補助金の獲得や管理運営がAMRCの活動において重要であることを鑑みれば官庁との調整を実施する人物が必要である。こうした重役を含む役員会はボーイング社やロールス・

⁹ 世界を牽引する研究ができるよう高等教育研究施設への投資を支援するために2012年に基金が設定された。2014年から2017年にわたり5億ポンド（700億円）が34のプロジェクトへ配分される。なお、産業界と慈善基金からも14億ポンド（1,960億円）の拠出がある。

ロイス社から地元企業までの民間企業から選出された20名の役員から構成される。なお、役員会の議長はボーイング社から選出されている。このように多くの役員が産業界から選出されておりイノベーション創出に強くコミットする企業統治のメカニズムになっている。

さらに、ガバナンス面等のマネジメント人材にとどまらず、個別のプロジェクトマネジメントにおいても、前述の Ms. Baker をはじめとする AMRC 所属の民間出身人材が活躍している。同氏によれば、AMRC 所属の技術者（前述）の専門は工学のあらゆる分野にわたっており、「どのような企業が相談・協働を希望しても、AMRC 内の自前で、直ちに対応できる」という。このような体制に裏付けされた即効性が、産業（民）と大学（アカデミズム）のコラボレーションにおいて重要なファクターであることが示されている。

2.3 関連するイノベーション政策

AMRC の施設整備や研究プロジェクトには英国からだけではなく EU から資金援助が投入されている。そもそも研究開発が生み出す技術知識はその特性ゆえに政府介入を合理的なものとする。通常の財・サービスは競合性と排他性という2つの性質を有する。前者はある人が財を利用するときには別の人はその財を利用できないという性質であり、後者は財の利用者が他者の利用を容易に排除できるという性質である。しかし、技術知識は2つの性質を満たさない公共財的な性質を有する。なぜなら、技術知識を特定の目的に利用していても他者が別の目的に利用することが可能であるため競合性が満たされない。また、技術知識は公開されれば他者による利用につながるため排他性も満たされない¹⁰。

こうした特性は技術知識の過小供給という問題を引き起こす。技術知識に競合性が無いために新たな知識が創出されると知識利用の限界費用はゼロとなってしまう、技術知識の開発者は利益を享受できない。こうした状況は社会的にみれば効率性や厚生を増大につながるものの、社会的便益と私的便益が乖離するために研究開発のインセンティブが低下してしまう。つまり、技術知識の市場は機能せず研究開発投資を抑制することによって、社会的に見て望ましくない状態となるため政府介入が合理化される

技術知識の過小供給を解決するための方策は3つ挙げられる（ペルクマンス2004, p.321）。第一に、技術知識の供給に対する政府からの補助があり、この方策は公共財的性格が強い基礎研究において実施される傾向がある。第二の解決策は市場の内部化であり、研究開発とそれに続く商業化を支配することによって社会的便益を内部化することで研究開発の動機づけを高めることができる。第三に、知的財産権を保護することにより、一時的に技術知識を独占させることで独占的レントを獲得し研究開発費用が回収できるようにする。ここでは第一の解決策である政府補助について紹介する¹¹。

10 技術知識の特性については土井（2008）を参照した。

11 市場の内部化、知的財産権の保護に関する情報は AMRC のウェブサイトから見つけることができなかった。

AMRCに関連する主要な研究補助は2つあり、1つ目はInnovative UKからの資金援助である。同機関の正式名称は技術戦略審議会（Technology Strategy Board）であり、Innovative UKは2014年夏以降の通称である。重要な研究資金配分機関の1つであり産業界に対して研究開発助成を実施する機能を担っている。Innovate UKは英国におけるイノベーション政策の管轄省庁であるビジネス・イノベーション・技能省（Department for Business, Innovation & Skills）の下部に位置づけられる。Innovation UKはカタパルト・センターという産学連携による研究開発拠点の形成プログラムの管理・運営を担当している。AMRCは高価値カタパルト（High Value Manufacturing Catapult）における中核を占めていることから2011年からの6年間に2億ポンド（280億円）の資金援助をInnovate UKから得ることになっている。これだけ巨額の資金であるがカタパルト・センターとしての調達資金の三分之一を占めるに過ぎず、三分之一は研究開発契約によって企業から、もう三分之一は共同研究開発プロジェクトの獲得によって調達する。

2つ目の研究補助はEUの欧州地域開発基金である。この基金はもともとEU内の開発途上地域や衰退産業をかかえる地域での開発計画に対し無償援助を行うことを目的に1975年に設立された基金である。現在は欧州構造・投資基金（European Structural and Investment Funds）の1つとして研究・イノベーションの領域に資金を配分している。

EUはその潜在成長力を高めるべく「欧州2020」という2000に策定された「リスボン戦略」の後継に当たる成長戦略を策定した¹²。欧州2020は3つの優先領域を設定し、知識とイノベーションによって経済を発展させる「知的な成長」、低炭素社会の建設、資源の効率的利用による「持続可能な成長」、社会的な結束を強化と雇用力に富む経済を建設する「包括的な成長」を目指す。このビジョンの達成のため欧州2020の実行プログラムとなるイノベーション政策が「ホライズン2020」であり、2014年から2020年までの7年間で770億ユーロが研究資金として配分される。ホライズン2020は3つの柱によって支えられている。

第一の柱である「卓越した科学」はヨーロッパの研究力を高めるべく基礎研究支援、研究者のキャリア開発を支援する方向性を打ち出している。第二の柱の「産業リーダーシップ」は技術研究の支援、リスクファイナンスの提供、中小企業の支援を通じてイノベーションを推進する。三つ目は「社会的な課題への取り組み」を掲げ、7つの社会的課題を定義し、基礎研究からイノベーション、社会科学的な研究までさまざまな取り組みを支援する。

AMRCではEUにおけるこうしたイノベーション政策の方向性に沿った研究が展開されている。

3. AMRCにおける研究開発

3.1 研究内容

企業がイノベーションを生み出すための活動は土井（2008）によると3つの領域に分類できる。第一は研究開発活動であり知識ストックに基づいて新しい製品や新しい生産工程を企業は創造す

12 EUの産業政策については久保（2014）を参照した。

る。第二に、技術知識をどう保護し、企業間でどう取引するかといったライセンス活動も近年では重要な活動だと認識されるようになってきた。第三は共同研究開発や技術提携であり、事前に組織間で調整してから研究開発に共同で着手するタイプの研究である。これらの活動は相互依存関係として進展していくものでありいずれも重要な活動であるが、本稿は研究開発活動と共同研究開発を紹介する。

AMRCは先端的な製造業の課題を特定、調査、解決することを目的に掲げており、次の5つの中核的な研究グループが形成されている。

機械加工

高機能材料の加工に関して革新的技術や最適な生産プロセスを開発し、品質とコストに大きな改善をもたらすべく研究に取り組んでいる。航空宇宙産業で使用されるような高機能素材は安価な費用で品質基準を達成するために高度な機械加工を必要にしている。実際のビジネス課題を解決するために動態解析、シミュレーション、先端的な接合技術や工具設計を行い、生産プロセスの最適化を目指す。さらに、複数の作業を含む機械加工、極低温加工、超音波加工といった新たな機械加工のモデル開発を手掛ける。

組立て

再構成可能な生産技術のためロボット工学、拡張現実、大規模計測技術を産学連携で研究している。その目的は複雑な構造を完璧に組み立てる革新的な統合システムを開発することである。この研究グループの本拠地はファクトリー 2050であり、「再構成可能な工場」を研究する施設である。こうした実証施設における研究によってマス・カスタマイゼーション生産への高まるニーズに応える。

複合材料センター

新世代の炭素繊維複合素材を開発している。軽さと強度が求められる航空宇宙、船舶、自動車といった高価値製造業で使用される素材である。研究の重点は高機能金属の複合部品や単一構造の複合材料といった複合材料部品の生産と加工であり、自動生産、加工、硬化、新材料という研究テーマに取り組んでいる。

構造試験

研究プロジェクトと商業化プロジェクトの両方における研究、分析、材料特性、部品、部品組立品の実証ができる。試験は素材特性を証明するための試験片から完成部品や組立品の仕上げまでカバーする。英国認証機関認定審議会から公認されている構造試験の施設であり、顧客との協働によって実際の条件下で部品を検査する新たな試験手続きを開発することもできる

デザインとプロトタイピング

英国製造業が次世代の革新的かつ高価値な製品を生み出すようリスクの高い研究に取り組む。コンセプト・デザインや施工図から完全に機能するプロトタイプや研究機器まですべてを顧客

に提供する。

5つの中核的な研究グループでのプロジェクトは3つに分類される。一般研究（generic research）は会員企業のために実行し、研究結果はすべての会員で共有される。特定研究（specific research）は個別企業のためのものであり、企業は直接的に研究へ投資し、成果である知的財産へのアクセスは排他的な扱いをする。革新的プロジェクト（innovative projects）は開発の初期段階の技術や生産プロセスを対象とし、外部の研究機関や企業と協働で実施される。

このように AMRC において先端的な製造業が直面する課題に対して系統的に課題を分類して研究を推進する体制が構築されている。

3.2 共同研究開発

外部の開発力の活用や知的財産権を他社に使用させることで革新的なビジネスモデルなどを生み出し利益を得る考え方であるオープン・イノベーションが注目されるようになり久しい。AMRC における研究活動の形態として注目すべきは研究拠点間の連携である。産学連携の1つ上の次元である研究拠点間での連携が英国のイノベーション政策の一貫して形成されている。

その取り組みがカタパルト・センターの形成である。これは世界をリードする科学技術・イノベーションの拠点構築を目指したプログラムであり、センターは世界的な研究拠点のネットワークとして構築される。産業界と大学との架け橋となり、アイデアの実現を助長することを目的として、センターは世界レベルの研究開発施設と専門的知見へのアクセスを英国企業に提供する。また、個々の企業や大学だけでは投資できないような最新の研究設備を整備する。現在までに10のカタパルトが立ち上がっており、各カタパルトは戦略的な重要性を持つ世界市場において成長を生み出す潜在力がある分野に焦点を絞る。AMRC が含まれる高価値製造業カタパルト以外のカタパルトは細胞療法、化合物半導体、ICT、エネルギー、未来都市、再生可能エネルギー、個別化医療、創薬、交通システム、衛星技術といった研究分野のものである。2030年までに30のカタパルトを創出することが目標とされており、カタパルト・センターは Innovative UK によるイノベーション支援の中心的手段に位置づけられる。

高価値製造業カタパルトは2011年に開始された最初のカタパルトである。製造と生産プロセスに係る7つの研究センターから構成される研究共同体であり、AMRC 以外に次のような研究センターが構成メンバーになっている。

Advanced Forming Research Centre（レンフルー¹³）

ストラクスクライド大学を本拠地とするセンター。重点分野は金属成形・鍛造、物質特性解析とプロセス・モデリングと関連付け。

13 カッコ内は所在地。

Centre for Process Innovation (レッドカー)

ティーズサイド大学が本拠地。工業バイオテクノロジー、プリンタブル・エレクトロニクス、熱技術、スマート科学が研究領域。

Manufacturing Technology Centre (コヴェントリー)

バーミンガム大学、ノッティンガム大学、ラフバラ大学、TWI 社が運営。接合、自動化、固定化、ニアネット・シェイプを研究。

National Composites Centre (ブリストル)

ブリストル大学が運営。複合材設計、高速ファイバー・プレースメント、樹脂開発、繊維織り技術が重点分野。

Nuclear Advanced Manufacturing Research Centre (ロザラム)

シェフィールド大学が運営。大規模な機械加工と接合を研究テーマとする。

Warwick Manufacturing Group (コヴェントリー)

ウォリック大学。30年余の歴史を有する工業研究グループ。低炭素移動手段、軽量化技術、エネルギー貯蔵が研究領域。

このように幅広い分野の製造業を支援できる研究拠点がカタパルト・センターである。具体的には、技術相談の内容が AMRC での研究内容から外れていてもカタパルトで連携する他のセンターに支援を要請できる。企業は AMRC が高価値製造業カタパルトでもあるので全国的な研究ネットワークにもアクセスできる¹⁴。

共同研究のもう 1 つの特徴は地域的な広がりである。AMRC は汎欧州の共同研究プロジェクトに数多く参画しており、欧州プロジェクト (European project) チームがホライズン2020や以前の「枠組みプログラム」で資金を獲得した研究プロジェクトを管理する。欧州委員会から資金を得て進めている複数の共同研究プロジェクトは AMRC、協力企業、他の研究機関、ヨーロッパ中の企業によって実施され、その研究期間は 3 - 4 年が典型的である。この研究枠組みで AMRC が主導しているプロジェクトには次のようなものがある。

Reform

複合部品を製造する資源効率的な工場の研究。ウォータージェット加工、複合素材生産のための拡張現実システムといった研究テーマに取り組む。

MMTECH

先端のかつ費用効率的な航空宇宙部品と迅速な製造技術の開発。AMRC がプロジェクトコーディネーターとなりガンマ基チタンアルミナイド向けの製造システムを開発、最適化する。

14 AMRC はボーイング社が構築する研究ネットワークである Boeing GlobalNet にも参加している。

また、AMRC が参加している欧州共同プロジェクトとして次のような例がある。

Eneplan

効率的なエネルギー・プロセスの計画システム。機械加工プロセスがエネルギー効率的で環境にやさしくなる知的システムを開発。

Evolution

電気自動車革命。先端材料による軽量部品のデザイン、分析、製造により電気自動車の環境性能を改善する。

このように AMRC においては拠点と国を超えた複数の共同研究プロジェクトが同時進行中である。イノベーションは多様な技術知識を融合させながら進行する活動であり、その実現のための手段の1つが共同研究である。実は、技術知識を融合させる手段は大きく分けて2つある。1つにはイノベーションを生み出すことを目的として事前的にコーディネーションを講じるやり方で、M&A は強いコーディネーション手段、共同研究は弱いコーディネーション手段に該当する。AMRC で観察された共同研究は技術知識の融合という範疇においてはこうした位置づけになる。なお、事後的なコーディネーション手段はイノベーションの実現後におけるライセンス活動が挙げられる。

共同研究から生じるのはメリットばかりではない。メリットとして挙げられるのは研究活動の効率性を上昇させるスピルオーバー効果である。異なるバックグラウンドを有する研究者が複数の企業から参画して共同で研究することによって新たな技術知識が創出される効果が期待される。一方、デメリットとしては研究開発のインセンティブを低下させるただ乗り効果がある。これは共同研究による技術知識の漏出が企業の競争優位を低下させることに対する懸念である。

メリットとデメリットとのトレードオフを考慮して共同利潤が最大となるよう研究開発の投資水準を決定することになるが、産業組織論の研究から一般的な成功要因が抽出されており参考になる。1つ目の成功要因として技術や製品における補完性が大きいことが挙げられている。この場合、スピルオーバー効果が大きく、ただ乗り効果が小さくなると期待される。補完性が大きくなるためにはプロジェクトの選定が重要になる。AMRC における研究プロジェクトを俯瞰すると、複合素材の開発、機械加工、組み立て、デザインとプロトタイプング、構造試験といった相互的にメリットのあるプロジェクトがアンダー・ワン・ルーフ型の研究拠점에集結している。2つ目の成功要因は参加企業に対するモニタリングの強さであり、これが2つの効果に影響する。この要因は研究施設における企業統治の設計に関わるトピックである。AMRC には研究担当とプロジェクト担当の重役がおり、また、研究テーマについては20名から構成される役員会から監視されることになっており、企業統治上の工夫が観察できる¹⁵。

15 本節におけるスピルオーバー効果、ただ乗り効果、技術・製品の補完性、参加企業へのモニタリングの強さに関

4 知識伝播と人材育成の機能

4.1 技術知識の伝播

AMRC が担う機能は研究開発だけではない。技術知識の伝播という機能も活動内容に組み込まれている。この目的のための仕掛けがAMRCには2つある。1つは知識移転センターである。このセンターは未来工場の並びに位置し、企業と専門知識の共有ができるよう会議や打ち合わせの専用スペースを提供する。会議スペースは270名が収容できるとともに必要に応じて小さな打ち合わせスペースに柔軟に変更できる。センターにおける具体的な取り組みがAMRC フォーラムの定期開催である。このフォーラムは製造業に関する幅広いトピックをカバーし、先端技術やサプライチェーン等についての洞察を企業へ提供する。イベントへの参加には25ポンド(3500円)の費用が必要であるが、フォーラムに参加できるだけでなく季刊誌も送られてくる。フォーラムの事例としては、航空機産業における機械加工技術の最近の進展についてボーイング社やロールス・ロイス社からのプレゼンテーションを聞けるといった内容である。AMRCにおいて航空産業や他の高価値製造業セクターとの協働により生み出された知識を共有することで英国製造業の競争力を向上させることが期待される。研究開発における共同・交流関係は、公式のライセンス供与や共同研究から、コンサルティング、個別の助言、ネットワーキング、人材交流、その他の仕組みまで多岐にわたり、このフォーラムも共同・交流関係に資するものである。

もう1つの仕掛けはMANTRA (The Manufacturing Technology Transporter) である。これは最新の機械、シミュレーション機器を搭載した14メートルのトレーラー・トラックである。3D 仮想溶接機、完全自動化ロボット、学生が仮想のジェットエンジンを分解できる3D 仮想現実システムといった最新技術を体感できる機器が搭載されている。また、トレーラーの中に7つのスクリーンが設置されており、ここで2つの重点分野について映像が上映される。1つ目の重点分野は工具の最適化、制振、加工後検査といった最新の機械加工であり、もう1つはGPS、レーザー・アライメント、スマート・ツーリング、仮想組み立て等の組立技術である。

MANTRA は学校、大学、展示会を巡回し、若い技術者に最新技術を実地体験してもらうとともに、最新の製造・組立技術を学生に伝える。この取り組みによって工学での仕事を若者が引き受けるよう動機づけを与える。さらに企業に対しても最新の製造技術、新製品を生み出し生産性を向上させる技術を紹介することにより科学技術の普及に努めている。なお、この取り組みは工学・物理科学研究会議 (EPSRC : Engineering and Physical Sciences Research Council) から資金を得ている。ビジネス・イノベーション・技能省の傘下にある研究会議は7つ存在し、英国を代表する研究資金助成機関である。EPSRC は工学・数学・物理学・化学・材料科学・情報通信技術分野の公的研究助成機関である。

する議論は土井 (2008) に依拠した。



写真4 MANTRAの全景（出所）AMRCウェブサイト

4.2 人材育成

研究開発以外のもう1つの機能が人材育成である。AMRC トレーニング・センターは実践的かつアカデミックな最上級の訓練を提供する。その内容は実習から博士、MBA レベルのものまで多岐にわたり、製造業企業がグローバル競争のために必要とする技能が修得できる。AMRC は3つの人材育成プログラムを提供している。

• 実習生制度

制度創設の背景には、製造業分野での労働力が高齢化しているため今後10年から15年のうちに引退してしまい、経験や技能といった現在の資産が無くなってしまいう懸念がある。実習生制度によって選択したキャリアにおける進歩を可能にするスキルを開発し製造業で働く機会が増えることを目指している。しかも、世界で最も革新的な航空宇宙産業、自動車産業、低炭素エネルギー産業で働くことが期待されている。

実習においては産業における幅広い技能と知識を持つ熟練のチームメンバーと一緒に働くことになる。実習生の給与は雇用者によって異なるものの国家が定める最低賃金を受け取れる。ほとんどの企業は最低賃金以上の支払いをしており、企業規模にもよるが11,000ポンドが上限である。技能が向上すれば賃金も次第に上昇する。実習生からスタートした若者は全キャリアを通じて見ると実習を受けていない人と比べて平均して10万ポンドだけ所得が多いという調査結果が出ている。

• Industrial Doctorate Center in Machining Science

工学分野における次世代形成のため工学の最先端を修得する機会を大学院生に与えることを目的している。AMRC とシェフィールド大学工学部が共同で運営する4年間の工学博士プログラ

ムである。プログラムでは現実のビジネス課題に答える独創的な研究と授業内容を結合させ、世界を牽引する製造業企業のための独創的な応用研究をしつつ AMRC の最新鋭の設備で学生は実践経験を積む。プログラムは高価値製造技術のための高度なコスト工学、加工効率の向上を目的とした可変配置フライス盤の開発といった内容を含み、ロールス・ロイス社では先端的な複合素材加工の原理を学べる。授業料を支払う必要は無く、さらに年間15,000-20,000ポンドの無税の奨学金を支給される。なお、このプログラムは EPSRC と企業から支援を得ている。

- MSc (Research) Advanced Manufacturing Technologies

AMRC とシェフィールド大学工学部との共同プログラムである。プログラムを履修する学生は製造技術における最先端に講義で取り組み、この知識を AMRC 内の研究プロジェクトへ応用する機会を得る。世界をリードする学者から教えてもらうこともできる。研究プロジェクトは実際の産業用途に基づいて与えられ、全ての製造プロセスに渡っている。AMRC の知識移転センターにある最新式の機械を用いて潜在的な解決策を探る機会もある。

修了生は航空宇宙産業、自動車産業等における雇用適性を向上させる専門知識を修得することになる。過去の学生は世界的な製造業企業で働く者、他の者は工学博士の取得に向けた足掛かりとしてコースを利用した。全てのコースは機械技術者協会 (Institution of Mechanical Engineering) によって認定される。認定された額は機会技術者協会の会員に必要な学術的要件を満たし、会員は公認技術者 (Chartered Engineer) の地位が与えられる。

AMRC のような研究施設を製造業の技能を承継するために機能させることは特徴である。英国には製造業への就業を軽視する伝統的な風潮があるため、若い世代を製造業に引き入れ多くのエンジニアを育成することが焦眉の課題になっている。こうした問題意識は2002年に発表されたロバーツ・レビュー (Roberts Review¹⁶) を契機として、英国のイノベーション政策の中に受け継がれている。AMRC においては3つのプログラムとして研究開発人材の育成策が体现している。

5. む す び

本研究はイノベーション政策が個別研究機関においてどのように具現化しているかを観察した。この作業によって研究拠点の形成や共同研究の体制構築について日本にとっての教訓を引き出すことが狙いであった。そのために、英国における産学連携の研究拠点の先進事例であるシェフィールド大学 AMRC を取り上げた。本稿では、まず AMRC の研究体制について参画企業、研究施設、組織の点から詳細を報告した。また、AMRC の運営を観察する上で外すことができない研究助成や EU と英国のイノベーション政策についても紹介した。続いて、AMRC の中心的活動である研究について研究内容と共同研究の体制とについてその中身を確認した。さらに、AMRC が技術知識の伝播と人材育成の機能も持ち合わせていることも合わせて紹介した。

16 Gareth Roberts によって発表されたインディペンデント・レビューの通称。

科学技術知は流動性が高い性質を持っており、地理的近接性や集積の存在が技術伝播における地域の優位的なイノベーションにつながらないという特徴がある（野澤（2012））。その中で地域イノベーションを生じさせるためには、アクター間の関係という意味での地理的近接性、企業組織や企業文化などを通じた知識の移転・学習と共有を促進する組織的近接性、国家制度に代表される制度的近接性を適切に組み合わせた認知的近接性の存在が求められる¹⁷（水野（2011））。地域のイノベーション政策は、認知的近接性に左右されるところが大きい。例えば、航空宇宙産業の場合、軽量化のために既存産業であまり使われない材料が用いられる。その代表例はCFRP（Carbon Fiber Reinforced Plastic：炭素繊維強化プラスチック）である。現在、航空宇宙産業で使用するPAN系炭素繊維の基本原理は、通産省工業技術院大阪工業試験所の進藤昭男氏の研究成果として確立された。それを量産化したのが東レである。2010年代に東レは世界の民間航空機産業におけるCFRPサプライヤーとしての地位を確立している。その背景には、東洋レーヨン（現東レ）と大阪工業試験所との産学官連携によって認知的近接性の大きさが生じ、イノベーションを生み出した。このような認知的近接性にもとづくイノベーションは、今日では政策的に取り込まれ、産学（官）連携やクラスター政策の形態で展開されている（田柳（2007））。かかるイノベーション政策における産学連携の一つがAMRCであると位置づけられる。

AMRCの活動や機能について印象深かった点が3つ挙げられる。第一に、共同研究体制が重層的に展開されている点である。AMRCにおいて補完性の高い研究がアンダー・ワン・ルーフで実施されていると同時に、高価値カタパルトによって研究拠点間のネットワーク形成も実施されている。産業クラスター政策が顕著な成果を生み出せていないこともあり、現在、日本における共同研究体制はアンダー・ワン・ルーフという枕詞が必要不可欠になっていることと対照的である。英国ではむしろカタパルトをより積極的に形成する動きがあり、研究拠点間ネットワークの形成について検証する必要性がありそうである。

これらの重層性、ネットワーク性については、2015年に最終報告書が出された、ビジネス・イノベーション・技能省のボードメンバーであるProf. Dame Ann Dowlingの調査結果においても、英国における企業（産業）、大学、その他組織の複雑なネットワーク構造として分析、提言されている（図1）。

ここでは、産業と大学という2つの大きなネットワークハブ（アクター）を中心に、英国政府をはじめとするパブリックセクター、その他組織などの複雑なネットワークキングが示されている。ここで、産と学の存在感に対して公的支援の割合が小さいとみることもできるが、一方で、公的支援はそのパリエーションの多さに特徴があり、トータルで考慮すれば、公的支援もまた、第3の存在として遜色はみられない。当該レポートがビジネス・イノベーション・技能省、すなわち英国政府の調査結果であることから、国家施策（方針）として、産と学の対等な関係を軸にし

17 認知的近接性とは、Nooteboomが提起した概念で、様々な条件で形成される認知的距離が小さければ相互の理解は進み、暗黙知のような知識移転は円滑となることから、イノベーションの源泉となる（水野，2011）。

た重層ネットワークの構築を重視していることが明らかである。

第二に、AMRCにおける企業統治のメカニズムは産学連携の共同研究において民間企業が強いコミットメントを発揮している事例であった。今回の訪問調査におけるインタビューにおいても、民間企業のコミットメント、コントリビューションについてごく自然に大学関係者が語ると

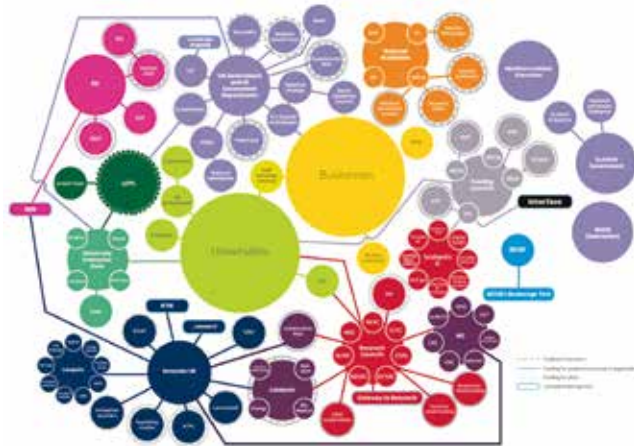


図1 The major organizations and funding sources, relevant to business-university collaboration, in the UK's research and innovation landscape (出所) Dowling D. A. et, al.2015

いうケースが非常に多かった。これは日本のイノベーション政策が目指す方向性とは異なっていて興味深い。第5期科学技術基本計画はオープン・イノベーションを促進する仕組みを強化することを目指している。その手段は大学の経営システム改革や国立研究開発法人の橋渡し機能強化であり、公的部門が主導的役割を果たすことが期待されている。AMRCではとりわけボーイング社が主導的役割を果たしており、こうした民間企業の関与の度合いは新たな研究課題となりうる。

第三の注目点は研究開発人材だけでなく技術者の育成に高等研究機関が関与していることである。これも日本のイノベーション政策には見られない特徴である。第5期科学技術基本計画に見られる人材育成策は若手向け任期なしポストの拡充や女性研究者の新規採用割合の増加であり、技術者養成までは視野に入れていない。これは若年層の雇用問題を抱えている英国と人手不足の日本との違いが反映されたものと解釈できよう。

今後の課題として、Brexitの影響力は無視できないと思われる。Innovate UKのスタッフである、シェフィールド大学 Management School の Tim Vorley 教授によると、AMRCをはじめとする、シェフィールド地域の経済成長は今後、Brexitがどのように「ホライズン (Horizon) 2020」などをはじめとした、EUからの資金の配分に影響するかという点に依存するであろう、と考えられている。

イギリス、シェフィールドを拠点とした、本研究の成果がイノベーション政策を立案する日本の政策当局者、共同研究体制の構築を進める研究企画担当者、共同研究施設のマネジメント責任

者等にとって有益な教訓を提示できていることを期待したい。今後の研究戦略としては事例研究の蓄積という方向性ととも研究拠点間の連携についての分析という方向性もありうる。

参考文献

- 科学技術振興機構・研究開発戦略センター（2016）『科学技術・イノベーション動向報告～ヨーロッパ編～（2015年度版）』CRDS-FY2015-OR-04, 2016年3月
- 科学技術振興機構・研究開発戦略センター（2015）『科学技術・イノベーション動向報告～英国編～（2014年度版）』CRDS-FY2014-OR-03, 2015年3月
- 久保広正（2014）「EU 経済と産業」田中素香・長部重康・久保広正・岩田健治『現代ヨーロッパ経済〔第4半〕』（第6章所収）有斐閣
- ジャック・ペルクマンズ著，田中素香全訳（2004）『EU 経済統合－深化と拡大の総合分析－』文眞堂
- 田柳恵美子（2007）「地域イノベーションと組織的知識創造のダイナミクス—自立展開期を迎えた日本のクラスター政策への提言として—」『日本地域政策研究』第5号，pp.97-104，日本地域政策学会
- 土井教之（2008）「イノベーションと企業行動・産業組織」土井教之『産業組織論入門』（第8章所収）ミネルヴァ書房
- 徳田昭雄（2011）「EU におけるオープン・イノベーション政策の新しい展開－共同技術イニシアティブ ARTEMIS の事例－」『多国籍企業研究』第4号，pp.99-118
- 野澤一博（2012）『イノベーションの地域経済論』ナカニシヤ出版
- 藤田哲雄（2014）「韓国のイノベーション政策と戦略の方向性」『JRI レビュー』Vol. 6, No.16, pp.80-97，日本総合研究所
- 星岳雄・岡崎哲二（2016）「日本型イノベーション政策の検証」NIRA オピニオンペーパー no.19, 総合研究開発機構
- 水野真彦（2011）『イノベーションの経済空間』京都大学学術出版会
- 水野真彦・立見淳哉（2007）「認知的近接性，イノベーション，産業集積の多様性」『季刊経済研究』Vol.30, No. 3, pp. 1-14，大阪市立大学
- 山口栄一編（2015）『イノベーション政策の科学：SBIR の評価と未来産業の創造』東京大学出版会
- Dowling, D. A. et, al. (2015). “The Dowling Review of Business–University Research Collaboration July 2015”. Open Government Licence v 3. 0. Retrieved from <https://www.gov.uk/government/publications/business-university-research-collaborations-dowling-review-final-report>.
- Vorley, T. and Williams, N. (2014). “Sheffield City Region: Sector Specialisms for Sheffield City Region

LEP". TBR's Economic Research Team and the University of Sheffield.

謝辞

本研究の遂行にあたり、シェフィールド大学 Management School の Robert Wapshott 准教授および Research & Innovation Services, Head of Economic Development である Tania Hide 氏のご協力を頂きました。心より御礼申し上げます。

論 文

ワイドディスプレイにおける情報表示に関する基礎的検討

－提示文字の記憶再生と表示位置との関係－

山形大学人文学部人間文化学科

本 多 薫

1. はじめに

コンピュータを用いたVDT作業では、ディスプレイからの情報入出力の確認が容易であることが重要となる。従来のコンピュータ用のディスプレイと比較すると、画面がワイド化・大型化したワイドディスプレイの利用が増加している。特にデスクトップ・コンピュータ用では、画面アスペクト比が、5：4から16：9など左右に広がるとともに、画面サイズが17インチ程度であったものが、24インチ以上となっている¹⁾。16：9の画面アスペクト比は、映画鑑賞などを考慮したハイビジョンテレビ等に採用された画面の比率であり、VDT作業を想定したものではない。また、画面のサイズが大きくなると情報が表示される範囲が広がり、一度に表示する情報量が増えるなどの現象が生じると思われる。しかし、人間は一度に処理できる範囲や情報量には限界があり、表示された情報に気づくのが遅れたり、見逃しなどのエラーが増加することが懸念される。人間の視覚情報処理能力は、中心はよく見えるが、周辺にいくほど見えにくくなるという性質がある²⁾。そのため、ワイド化・大型化することにより、画面の中心に意識を集中した場合において、画面の周辺に表示された情報にどのような影響があるのかが問題となる。17インチの標準ディスプレイを用いて、提示した文字を記憶再生した実験では、最も正再生数が多い表示位置は「左上」であり、正再生数が少ない表示位置は「右下」であると報告している³⁾。ワイドディスプレイでは、どの位置に表示した情報を記憶しており、逆に記憶していないのかを調べ、ワイドディスプレイでの情報入手の特性を知る必要がある。

そこで本稿では、ワイドディスプレイの画面を12分割して文字を提示して記憶させた。そして、提示した12文字の記憶再生と表示位置との関係を調べ、ワイドディスプレイの情報表示における表示位置について検討した。

2. 実験内容

2.1. 実験参加者

実験参加者は20~22歳の男女大学生8名である。実験前に視力が0.7以上（矯正視力を含む）および、視野が正常であることを確認した。実験開始前に書面および口頭で、「研究の意義、目的」、「研究の内容」、「研究参加および参加撤回の自由・制限」、「個人情報・研究データの取り扱い」などの説明を行い、書面による同意を得たうえで実験を実施した。

2.2. 実験環境

実験参加者にディスプレイの正面を向かせ、ディスプレイの画面の中心と目の位置との高さが同じとなるようにディスプレイの高さを調整した（図1）。そして、机と画面が垂直（90度）に設定した。また、座位でのオフィス作業での最適視距離（ディスプレイとユーザーの目との最適距離）は600mmである⁴⁾ことから、ディスプレイの画面と実験参加者の目の位置までの距離を600mmに設定した。また、ディスプレイの画面に照明器具からの光線が直接当たらないように調整するとともに、窓のカーテンを閉めた。画面の背景は白色とし、文字は黒色とした。なお、ディスプレイ上の輝度は白色部分で256 cd/m²、室温24度、湿度69-70%の環境であった。

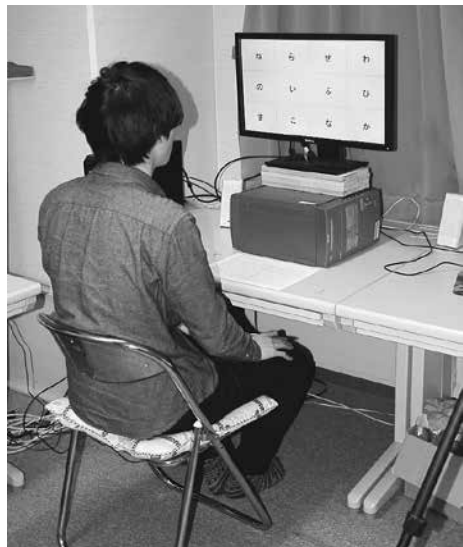


図1 実験配置

2.3. 実験方法

ディスプレイ（DELL G2410）の24インチワイド液晶フラットパネルを使用した。画面サイズは、531mm×299mm（画面アスペクト比16：9）である。

はじめに実験参加者に実験内容などを説明し、次いで口頭で『実験では、画面に表示される12個の文字を記憶してもらいます。まず、ブザー音と共にプラスマークが表示されるので、プラスマークに注目してください。5秒後12個の文字が表示されるので、できるだけ多く記憶してください。10秒後に表示が消えるので、手元の解答用紙に記憶している文字を順不同で書いてください。30秒後にまたブザー音が鳴り、プラスマークが表示されるので、解答を終了してプラスマークに注目してください。（一部省略）』と教示した。

実験では最初に、アルファベットと平仮名の各1回ずつ練習を行った。そして、5分間の座位安静による休息を取った。実験参加者が落ち着いていることを確認してから実験データの測定を

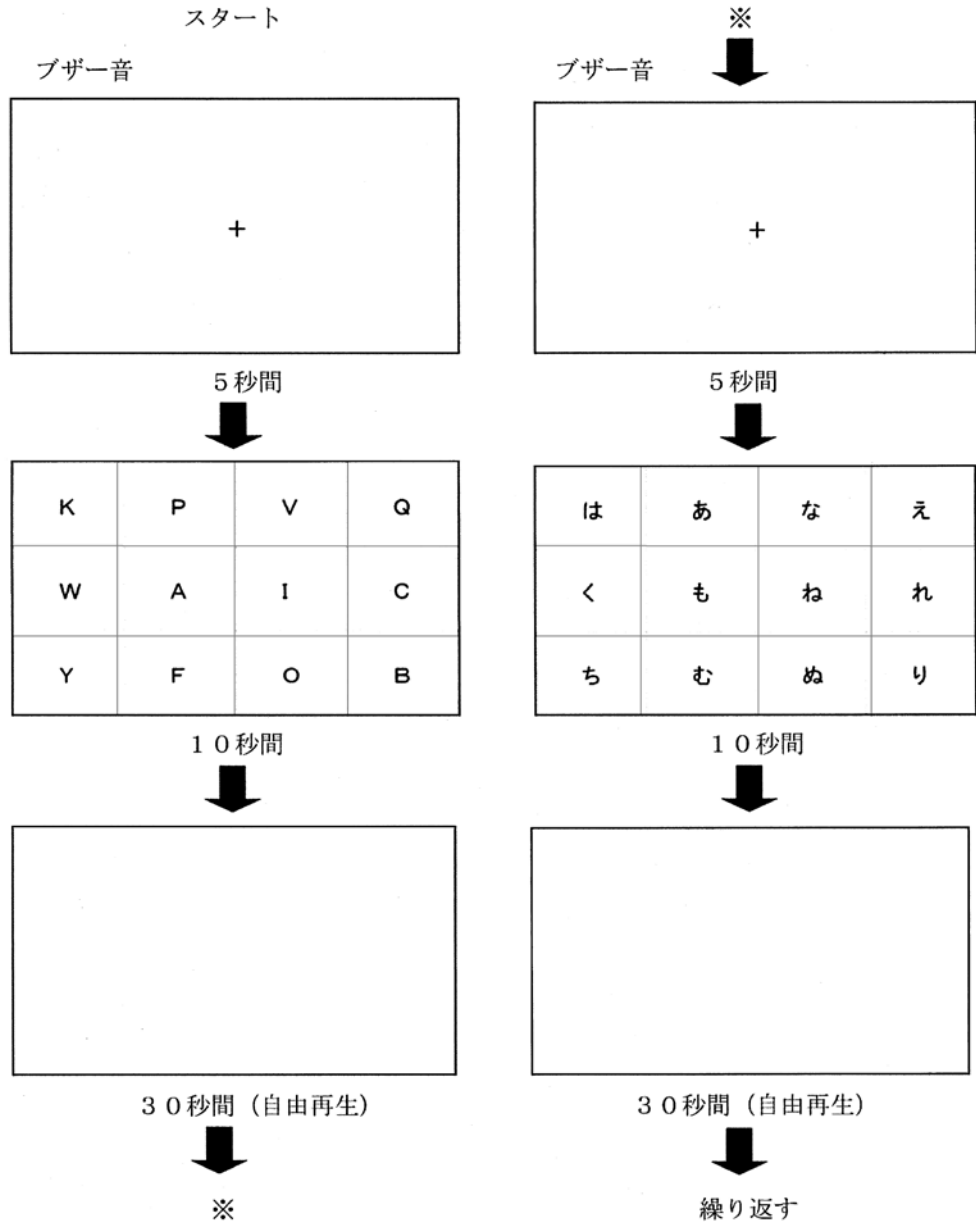


図2 実験画面と実験順序

開始した。図2に実験画面と実験順序を示す。ブザー音と共に画面の中央に「+」（プラスマーク）が5秒間表示される。次いで12分割された画面に12文字が10秒間提示される。この10秒間に実験参加者は自由に文字を記憶する。そして、白色の無地の画面に切り替わったら、ただちに解答用紙に記憶している文字をペンで記入させた（30秒間、自由再生）。アルファベットと平仮名を交互に表示し、繰り返し40回（各20回）行った（20回の試行での各表示位置の正再生率を算出した）。実験の終了後、質問用紙に回答させた。質問内容は、Q1：「最初にどの位置にある文字を見ましたか？該当する場所に○印をつけてください。」、Q2：「表示された12個の文字を、どのような順番で記憶しましたか？矢印線（→）で記入してください。」、Q3：「見なかった文字の表示位置はありましたか？ある方は、該当する位置に○印をつけてください（複数回答可）。」であった。

2.4. 文字表示実験システム

文字表示実験システムは、文字（アルファベット又は、平仮名）をランダムに発生させ、12種類の文字を自動的に生成して、12分割した画面の中央に表示する（図2）。文字の大きさは、20mm前後（縦の幅）である。また、画面の中央に「+」（プラスマーク）表示されると同時にWAVファイル（ブザー音）が再生される仕組みとなっている。表示した文字と表示位置情報は自動的にハードディスク内にテキストファイルとして記録・保存される。なお、本システムは、Microsoft Visual Basic 6で作成した。

3. 実験結果

3.1 記憶再生と表示位置との関係

提示文字の記憶再生と表示位置の結果（アルファベット）を図3に示す。ここでの正再生率とは、全実験参加者の平均値である。最も正再生率が高い表示位置は「上段中央右（75.6%）」である。正再生率が75.0%以上の位置は、「上段左端」、「上段中央左」、「上段中央右」の3位置である。また、最も正再生率が低い表示位置は、「下段右端（56.9%）」である。正再生率が69.0%以下の位置は、「中段右端」、「下段左端」、「下段右端」である。最も正再生率が高い表示位置と最も正再生率が低い表示位置（アンダーラインで表示）の正再生率についてt検定（対応のある）を行った結果、有意差が認められた（ $t=3.9104$, $df=7$, $p<0.01$ ）。

次に提示文字の記憶再生と表示位置の結果（平仮名）を図4に示す。ここでの正再生率とは、全実験参加者の平均値である。最も正再生率が高い表示位置は「上段中央左（88.8%）」である。正再生率が80.0%以上の位置は、「上段左端」、「上段中央左」、「上段中央右」、「中段中央右」の4位置である。また、最も正再生率が低い表示位置は、「下段左端（67.5%）」である。正再生率が74.0%以下の位置は、「上段右端」、「下段右端」、「下段中央左」、「下段中央右」、「下段右端」である。最も正再生率が高い表示位置と最も正再生率が低い表示位置（アンダーラインで表示）

75.0	75.0	<u>75.6</u>	63.8
68.8	66.3	60.6	58.8
58.1	61.3	60.6	<u>56.9</u>

(数字は、正再生率 (%) の実験参加者 8 名の平均である)

図3 記憶再生と表示位置の関係 (アルファベット)

80.6	<u>88.8</u>	83.8	71.9
75.0	84.4	78.1	78.8
<u>67.5</u>	70.6	73.1	73.8

(数字は、正再生率 (%) の実験参加者 8 名の平均である)

図4 記憶再生と表示位置の関係 (平仮名)

の正再生率について t 検定 (対応のある) を行った結果、有意差が認められた ($t=3.3248$, $df=7$, $p<0.05$)。

以上より、アルファベットでは「上段中央右」、平仮名では「上段中央左」が最も正再生率が高かった。全体の傾向をまとめると、上段左端から上段中央の正再生率が高く、下段および右端の正再生率が低い傾向にある。また、アルファベットと平仮名ともに、最も正再生率が高い表示位置と最も正再生率が低い表示位置の正再生率に有意差が認められた。

3.2 質問用紙の結果

質問用紙 Q 1 (最初にどの位置にある文字を見ましたか?) の結果を図5に示す。回答結果を見ると、最初に見た表示位置は実験参加者 8 名中の 4 名が「上段左端」を、実験参加者 2 名が

4			2
	1	1	

(数字は、回答した人数 (人) である)

図5 Q1回答結果 (最初にどの位置にある文字を見ましたか?)

	1		2
			1
1	1		2

回答した4名の結果 (無回答者4名)

(数字は、複数回答した延べ人数 (人) である)

図6 Q3回答結果 (見なかった文字の表示位置はありましたか?)

「上段右端」と回答している。残りの2名は、「中段中央左」, 「中段中央右」の画面の中央部分の文字を最初に見たと回答している。

質問用紙Q3 (見なかった文字の表示位置はありましたか? (複数回答可。))の結果を図6に示す。回答結果を見ると、回答した者は4名のみであり、見なかった文字の表示位置は実験参加者2名が「上段右端」, 「下段右端」と回答している。そのほかの見なかった表示位置は、「上段中央左」, 「下段左端」, 「下段中央左」が各々1名である。無回答であった実験参加者4名は、すべての表示位置を見たと認識している。

質問用紙Q2 (表示された12個の文字を、どのような順番で記憶しましたか?)の結果を図7に示す。回答結果を見ると、上段左端から見始めた実験参加者 (A, B, C, D) が4名であり、そのうち、左右方向に見た実験参加者 (A, B, C) が3名で、上下方向に見た実験参加者Dの



(括弧内の文字は、始点を記載している (数字は整理番号))

図7 Q2回答結果 (表示された12個の文字を、どのような順番で記憶しましたか?)

1名である。また、上段右端から見始めた実験参加者 (G, H) が2名であり、両者とも上下方向に見ていた。実験参加者Eは、画面の中央付近から見始め、円を描くように見たと回答している。最後に「右下」を見たと思われる実験参加者 (A, B, C, D, E) が5名である。回答した実験参加者7名の中で2名 (B, C) は同じ順序で見えていたが、その他の実験参加者は異なっている。そして、実験参加者A, B, C, D, Hの5名は、すべての表示位置を見たと認識している。

以上より、最初に見た表示位置は「上段左端」と回答した実験参加者が最も多く、次いで「上段右端」と回答している。また、見なかった文字の表示位置は「上段右端」、「下段右端」と回答した実験参加者が複数いた。文字を見た順番では、同じ順序で見えていた実験参加者は7名中2名のみであり、5名がすべての表示位置を見たと回答している。

4. 考 察

人間の有効視野は、水平方向で4～20度⁵⁾、30度(左右15度)⁶⁾などと言われている。人間の有効視野を水平方向30度、画面と実験参加者の目との距離を600mmとした場合には、有効視野に入る画面の範囲(水平方向)は、322mm程度となる。しかし、今回、実験で使用したディスプレイは、画面の横幅が531mmのワイド・大型であり、有効視野よりも幅が広く画面全体は有効視野内に収まらない。有効視野とは、ある作業をする際に有効に活用することのできる視覚情報収集範囲であると言われている⁷⁾。今回の実験では、ブザー音と共に画面の中央に「+」(プラスマーク)を5秒間表示し、実験参加者の視線が画面の中央に向けさせてから、文字の記憶作業を行わせている。そのため、実験参加者は画面全体を見るためには、眼球や首を動かす必要がある。

今回の実験結果では、最初に見た表示位置は「上段左端」と回答した実験参加者が最も多く、次いで「上段右端」と回答している。また、最も正再生率が高かった表示位置は、アルファベットで「上段中央右」、平仮名で「上段中央左」となった。自由再生実験(短期記憶)においては、系列位置効果があり最初に記憶した文字の再生がよいという「初頭効果」が知られている⁸⁾。この初頭効果に従うのであれば、「上段左端」の正再生率が最も高くなると考えられる。しかし、最も正再生率が高かった表示位置である「上段中央右」、「上段中央左」であり、この2つの表示位置を最初に見たと回答した実験参加者はいなかった。このことは、画面全体は有効視野内に収まらないことから、実験参加者は眼球や首を動かして画面の端に視線を向けたと思っているが、実際には十分に視線が向けられず、文字を知覚していないのではないかと推察される。そのため、有効視野内に入る上段中央が最も正再生率が高くなったと思われる。先行研究³⁾の17インチの標準ディスプレイの実験では、最も正再生数が多い表示位置は「左上(上段左端)」であったが、今回の実験で用いた24インチワイド画面では「上段左端」とはならず「上段中央左」と異なった結果になったことも画面がワイド化した影響と考えられる。

次に正再生率が低かった表示位置であるが、下段および右端の正再生率が低い傾向であった。特に「下段右端」、「下段左端」の正再生率に有意差が認められた。文字を見た順番では、同じ順序で見ていた実験参加者は7名中2名のみであり、5名がすべての表示位置を見たと回答していた。Webサイトを閲覧した際の視線の累積ヒートマップの解析から、「左上が良く見られ、右下が見られない傾向にある」と報告されている⁹⁾。また、人間の視覚の特性として、ディスプレイや計器盤などを監視する場合の目の動きは、一番先に見るのが左上であり、次に視線を右に移動し、次いで左下、最後に右下を見る¹⁰⁾。短期記憶実験では、最後に記憶した文字の再生がよいという「新近性効果」がある⁸⁾。本実験の結果では、最後に「右下」を見たとされる実験参加者が5名いるが、実験参加者によってディスプレイに表示された文字を見る順番は異なっている。それにも関わらず、「下段右端」、「下段左端」の正再生率が有意に低いことは、表示位置(文字)を見る順番の影響ではなく、下段には視線が向きづらく十分に文字を見ていないためではないかと

推察される。

ディスプレイの画面サイズによらず「左上」の正再生率（正再生数）が高く、「右下」が低くなる傾向があるが、画面がワイド化すると有効視野の影響が大きくなり、下方左右の情報に気が付くのが遅れたり、見逃す可能性が高まると思われる。

5. ま と め

本稿では、ワイドディスプレイの画面を12分割して文字を提示して記憶させた。そして、提示した12文字の記憶再生と表示位置との関係を調べ、ワイドディスプレイの情報表示における表示位置について検討した。その結果、①「上段中央右」, 「上段中央左」の表示位置が最も正再生率が高い、②「下段右端」, 「下段左端」および画面の右端の正再生率が低い傾向にある、ことを示した。人間の視覚の特性である有効視野には限界があり、またコンピュータを用いた作業は、ユーザと画面との距離が近い（450mmから750mmの設定を好む⁴⁾という特徴がある。そのため、ワイド化・大型化したディスプレイを使用した場合には、画面の中心に意識を集中させる度合いが大きい作業ほど、画面端の情報を入手することが難しくなることが予想される。特に画面の右端や下段の両端に表示された情報に気が付くのが遅れたり、見逃す可能性が高まると考えられる。ディスプレイのワイド化・大型化では、ヒューマン・エラーを防止する観点からも視覚特性を考慮した情報配置や画面中央と端の使い分けの検討や、全画面表示を使うのではなく左右に複数のウィンドウを開いて操作するなどの対策が必要と思われる。

謝辞

本稿は、日本生理人類学会第74回大会（石川県七尾市）でポスター発表した内容を一部含んでいる。発表で頂いたコメントを本稿に反映させた。貴重なコメントをいただきました先生方に感謝します。また、門間政亮 博士（宇部フロンティア大学短期大学部）に多大な協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 情報端末事業委員会：情報端末装置に関する市場調査報告書，一般社団法人電子情報技術産業協会，IS-14- 情端 - 1，p.1-7, 2014.
- 2) 村田厚生：ヒューマン・インタフェースの基礎と応用，日本出版サービス，東京，p.118-136, 1998.
- 3) 本多薫：コンピュータ画面の表示位置に関する基礎的研究－文字の検索時間および記憶を通して－，人間工学，第36巻2号，p.95-98, 2000.
- 4) JIS Z 8515:2002 (ISO 9241-5:1998)：人間工学－視覚表示装置を用いるオフィス作業－ワークステーションのレイアウト及び姿勢の要求事項，JIS ハンドブック37-3 人間工学，日本規

- 格協会, 東京, p.392-418, 2007.
- 5) 三浦利章: 行動と視覚的注意, 風間書房, 東京, p.15-17, 1996.
 - 6) 産業技術総合研究所人間福祉医工学研究部門 (編集): 人間計測ハンドブック, 朝倉書店, 東京, p.585-596, 2003.
 - 7) 伊藤謙治, 小松原明哲, 桑野園子 (編集): 人間工学ハンドブック, 朝倉書店, 東京, p.68-69, 2003.
 - 8) R. ラックマン・J.L. ラックマン・E.C. バターフィールド: 認知心理学と人間の情報処理Ⅱ—意識と記憶—, サイエンス社, 東京, p.331-336, 1988.
 - 9) 宮本勝, 大野健彦: 視線を用いた Web デザインの評価, 情報処理学会研究報告, 2006-HI-119 (2), p.9-16, 2006.
 - 10) 福田忠彦, 渡辺利夫: ヒューマンスケープ 視覚の世界を探る, p.199-207, 日科技連, 東京, 1996.

A Fundamental Consideration on the Information Display on a Wide Display: The Relationship Between the Memory Reconstruction and the Display Positions of the Letters Presented

HONDA Kaoru

In this study, the relationship between memory reconstruction and the display positions of the twelve letters represented are considered by splitting the screen of a wide display into twelve parts. Results indicated that (1) the correct reproduction rate of the display was high in the “center-right of the upper portion” and the “center-left of the upper portion” and (2) the correct reproduction rate was low in the “right edge of the lower portion”, the “left edge of the lower portion”, and the “right edge”. Results also indicated that the effective visual field, which is a visual property, has a limit that makes it difficult to receive information on the edge and the lower portions of the screen when a wider or larger display is used.

論 文

メルロ＝ポンティにおける「諸感官の関連性」と絵画

——『眼と精神』の理解のために

山形大学人文学部人間文化学科

小 熊 正 久

序

メルロ＝ポンティは、『眼と精神』の本論のはじまる部分第Ⅱ章冒頭で、ポール・ヴァレリーの言葉を借りながら、「画家はその身体を世界に貸すことによって、世界を絵に変える」と、描画にとって「身体」の存在が不可欠であることを述べている。それに続いて彼は、「絵を描くこと」を理解するためには「視覚と運動との縊糸」であるような身体を取り戻す必要があるとも述べている。

画家は、風景画や肖像画を描くためには、まず対象を「知覚する」必要があり、そのためにはたしかに「身体」を必要とするであろう。次に画家は手で絵筆を動かしながら見られた風景や人物に「似た」絵を描く。このようにわれわれは考える。だが、そのように考える際、「像」と呼ばれる「絵のように」確固とした持続的なものが画家の心の中に存在し、それを参照することができるかと想定するのであれば、話は簡単であるように思われる。「像」を心の中に持っているということが「知覚した」ということであり、今度はその「像」を参照しながらそれに「似た」絵を描けばよいと考えられるからである。

だがもちろん、このような想定は成り立たない。われわれは持続して変わらない「像」といったものを心の中に保持し、それをそのまま思い浮かべるなどということはできないからである。しかも、上の想定は、身体を通して「知覚する」という活動を、そして、身体を通して「描く」という活動を何も説明していないのである。それにも関わらずこのような想定に陥りがちであるのは、われわれがいつも簡単に物を「知覚」することができ、巧拙は別にしてある程度は、「絵を描く」こともなしうるからであろう。

だが、物の「知覚」はどのように成立するのであろうか。たとえば物の形を捉える場合、その形が直接眼や意識に入り込むわけではないとすれば、「絵を描く」ということはどのようにして行われるのであろうか。また、われわれが完成した絵を心中に持っていないのだとすれば、しかも、絵は一挙にはなく次第に描かれていくことを考慮するなら、「身体を世界に貸すことによって絵に変える」ということ、つまり「絵を描く」ということはどのようなことだろうか。

本論文は、メルロ＝ポンティ最後の公刊著『眼と精神』がこれらのことの解明をめざした書であると考え、彼の解答を見出そうとするものである。だが、そこには、フッサールの身体論やメルロ＝ポンティ自身の『知覚の現象学』などで述べられた考えが暗黙のうちに凝縮され前提とされているため、その説明には難解な部分も多い。本論文はこれらを考慮し、「身体の反省性」と「諸感官の連絡」——本論文ではそれらを「諸感官の関連性」と総称する——という観点から、メルロ＝ポンティの絵画についての思想の基本部分を明確化しようとするものである¹。

第1節 諸感官の関連性

1 視覚と触覚のシステム

知覚と身体運動はどのように関係しているのであろうか。メルロ＝ポンティは『眼と精神』第Ⅱ章の第1パラグラフから第6パラグラフにかけて、知覚と身体運動の関連を説明しているが、これは、フッサールの知覚と身体運動についての分析に由来するものである²。

そこで、この関係を理解するために、フッサールが「物の知覚」の分析によって明らかにした知覚の成立の枠組みを参照することができるであろう³。

触感覚による対象の知覚は、手などの身体が対象に直接接触れることによって行われる。身体を動かさなければほとんど触覚的知覚は遂行されえないが、身体運動を顧慮すると、手などを動かさしめる範囲を「触覚野」⁴と考えることができる。その「触覚野」の範囲内で身体を動かしながら対象に触れることによって、身体に「感触」が感じられるとともに、対象の触覚的性質（熱さ、ざらつき、形など）が知覚される。また、身体の動きとともに「運動感覚」も与えられる。こうして、身体の「運動感覚」と「運動」、それによって可能になる「触覚野」内での、対象との接触による「感触」と「対象の性質」という触覚的知覚のシステムが考えられる。

視覚の場合には、直接対象に触れる触覚とはちがって、身体に与えられる「感触」に相当するものはないが、眼の動きに対応して「視覚野」が成立し、そのなかで視覚的「射映」（ある方向から見たときの対象の現れ）が与えられる。このことによって対象とその性質の知覚が成立する。

こうした「視覚」と「運動」との関連について、メルロ＝ポンティは、次のような修辭的疑問を提示している。

「……もし眼の運動そのものが反射的なものだったり、盲目なものだとしたら、また、[遠くから察知する] 触角や先見の明をもたないとすれば、あるいは、もしその眼の運動になかで視覚の働きがさきどりされていないとすれば、眼の運動はさまざまな物をごちゃごちゃに

1 いくつかの点で英米哲学における絵画論と対比しながら『眼と精神』について論じたものとして、國領（2015）がある。

2 フッサールの分析は『物と空間 1908年講義』（1974）、『イデーオン 第二巻』（1952）に見られる。メルロ＝ポンティは『シーニュ』所収の「哲学者とその影」の中でフッサールの『イデーオン第二巻』における分析に依拠しつつ身体論を展開している。

3 Husserl（1973）ないし小熊（2008）を参照。時間意識に関連する部分は、小熊（2015b）を参照。

4 左右の手、足の個々の触覚野、総合された触覚野などさまざまなものがありうるがここでは立ち入らない。

縫れ合わせるだけではないだろうか」(OE. 17/257)。

つまり、上のような視覚システムによって、身体運動と物の「射映」(現れ)は対応し合っているが、そこにはフッサールのいう「未来予持」や「過去把持」も働いており、それによってはじめて適切な身体運動も可能になるのである。このゆえに、「私の見るすべては、原理的に私の射程範囲に、少なくとも私の眼差しの射程範囲にあり、《私はできる》という地図の上に記入される」という事態も可能となっている。

このようにして、知覚は、赤さや硬さなどという「物」の性質を呈示するとともに、視野内の広がりとしての赤の「射映」、机に触れたり押したりする際に身体に感じられる固さ、抵抗感などを残すのであり、これらは、運動感覚やそれを導く未来予持や過去把持と一体になっている。さらに、「触覚」と「視覚」およびそれらのシステムは密接に関連し合っている。われわれは「見えるもの」にはまた「触れうる」のである。

2 諸感官の反省性と自己の身体

ではこうした知覚システムの中で「自己の身体」はどのように位置づけられるであろうか。一方には、上で見たように「感じる」、「動かさう」という身体の特徴があり、そのような特徴をもつものとしての身体を「現象的身体 *corps phénoménal*」と呼ぶことができる。だが他方、私は「身体」に触れたり見たりすることができ、その際、触れられたり見られたりするものとしての身体が見出される⁵が、その「知覚の客体」としての身体を「客体的身体 *corps objectif*」⁶と呼ぶことができる。そして、「現象的身体」と「客体的身体」は関連している。たとえば、右手で左手に触れていたがそれをやめて、今度は左手で右手に触れるといった場合のように、役割ないし立場が交代することによって、「現象的身体」であったものが「客体的身体」となりうる。その際先にみたように、触覚には「知覚された対象」と身体における「感触」という二重性が存するがこの役割も交代する。こうした一種の「反省性 *réflexivité*」によって「自己の身体」は成立するのである。「反省性」とはこの意味でフッサールが使っていた言葉であるが、メルロ＝ポンティもここで、「自らを反省しない身体、自らを感じない身体……は、もはや人間の身体ではないであろう…」(OE. 20/259)と言っているように、この「反省性」を「自己の身体」を生成させる根本的現象とみなしている。さらにこれに関連して次の言葉も見られる。

「鏡が現れるのは、私が見る者-見られる者であり、感じうるものの一[・]種[・]の[・]反[・]省[・]性[・]があるからであり、鏡はその反省性を描き出し二重化するのである。鏡によって私の外面は補足され、私がかつとも内密に有するものはこの顔の中に、水面の私の反射が私に推測させるような平たく閉じられたこの存在の中に移るのである」(OE. 33/267)。

5 「……私の身体は、見ながら自らを見、触れながら自らに触れる。それは自分自身にとって見えるものであり、感じうるものである」(OE. 18/258)。

6 「現象的身体」と「客体的身体」という表現は『知覚の現象学』にみられるものである (PhP. 123/189)。

私の身体がそもそも外面をもっているゆえにそれを鏡に映してみることもできるのだが、それは先の根源的な「反省性」によるのである⁷。

また、「人間の身体は、見るものと見えるもの、触れるものと触れられるもの、眼とほかのもの、手と手の間に異種の交叉がある…」⁸とされているように、視覚と触覚などほかの感官との間にもこの「反省性」は存在しうる。

こうして、「私の身体」は、見られるもの、感じられるものであることによって、一種の物という資格をもち、「私の身体は世界の織目のなかにとりこまれている」と言われる。だが他方で、「物」は私の身体が触れ、見るゆえに存在し、また、見られる身体、触れられる身体と同じ資格で存在するものである。それゆえ、「物」は「身体の肉の内に象嵌され、言葉のまったき意味での身体の一部をなし」、「世界はほかならぬ身体という生地で作られて立立てられている」とも言われうる。こうして、「自己の身体」は「感じる・動かさしめる」という側面と「物」という側面をそなえた「感じる物」として存在するのである。

3 諸感官の連絡、および、諸性質の組合わせとしての物

上では身体の諸感官の「感じる」と「感じられる」とつまずき反省性についてみてきたが、感じられる内容の面でも、諸感官ないし諸感覚の関連が存在する。メルロ＝ポンティは次のように言っている。

「実は各々の色彩は、その最も内奥の要素においては、外に向かって表明された事物の内的構造にほかならないのだ。金の輝きは、金の等質的な構成を感覚的に呈示し、木の鈍い色は、その異質的な構成を示している」(Ph. P. 376/265)。

そこで、これらの物体の構成は視覚的な与えられ方にも触覚的な与えられ方にも対応しており、物の構造を通して「もろもろの感官は互いに連絡している *les sens communiquent entre eux*」のである。さらに彼は、視覚、触覚、聴覚に関連する例をあげている。

「われわれはガラスの堅さと危うさを見るのであり、それが清澄な音をたててこわれるときには、その音は眼に見えるガラスによって担われるのである」(ibid)。

こうして、「見られた与件」と「触れられる与件」などの間に切り離せない関連が成り立つのである⁹。

こうした「諸感官の連絡 communication」は、感官と感覚の面だけでなく、「事物の与えられ方」にも関係している。たとえば蜂蜜の与えられ方は次のような具合である。

7 なお、事物の知覚の際の（両）眼の調整や、物に触れる際の手の動かし方の調整なども、自分の身体に関わるという意味で、身体の「反省性」によるものとみなすことができるであろう。

8 OE. 21/260. なお、鏡の現象と絵画については、西岡けいこ(2015)を参照。

9 これに関連して、アンリ・フォションは次のように述べている。「表面、量感、緻密さ、重さは、視覚的な現象ではない。人間がそれらをまず知ったのは、指の間で、たなごころの凹みにおいてのことなのである。…もし触れることがなければ、自然は暗箱に投影された美しい風景のように、薄っぺらで奥行きがなく、幻影のごときものであったろう」(Focillon, p. 108/99)。

「蜂蜜はまず最初は液体のように見えるが、それに触るならば粘りのあるものであることが明らかになる。それを味わうことによって人はそれが甘いことに気づく。ところで、これらの性質のそれぞれはほかのものと不可分である。粘り気と甘みは蜂蜜の類比的な二つの存在の仕方である」(CS. 219)。

このように、蜂蜜は、視覚的、触覚的、味覚的に現れるが、それらの現れ方は関連しており、「諸性質の組み合わせ complex」として与えられるのであり、しかも、この組み合わせを任意に切り離すことはできず、まさしくこの組み合わせにおいて「蜂蜜」の在り方が現れているのである (Ca. 29/141)。

さらに事物の「感性的な与えられ方」はまた、「感情的な与えられ方」をも意味するのであり、この点について、次のように言われている。

「一般に感性的性質は純粋な状態において表現され得ない。『態度を喚起しない色は存在しない』とゲーテが言ったように、それは感情的 (affectif) 用語においてしか表現されない。しかも、この態度は、色の構造そのものの特徴である。……これはすべての感性的性質に拡張される：それぞれは、同時に存在の仕方の喚起でありシンボルである」(SC. 219)。

よく知られているように、色の場合、「一般的にいって、赤と黄はわれわれは『心を奪われ、中心から遠ざかるという運動の経験』をもち、他方、青と緑においてはわれわれは『安らぎと集中』の経験をもつ」のである¹⁰。

以上でわれわれは、自己の身体と物の経験を成り立たせる「身体の反省性」と「諸感官の連絡」について見てきた。前者は身体が諸感官において「感じるものでもあり、感じられるものでもある」ということを表しており、後者は、諸感官が連絡しているということであった。だがこれらはいずれも、「諸感官が関連している」ということを意味するので、これらの関連を総括的に「諸感官の関連性 relatedness of senses」と名づけておきたい。たとえば、自分の手は、触覚的に触れられる柔らかなものであり、視覚的に見られ肌色をしている、そして、それは動かすことができるという具合に諸感官の「反省性」と「連絡」はつながっている。こうした理由から両者を総称することは有意義であると思われる。

4 こだま 反響

知覚はこのようにして、時間意識を伴う身体運動を介して、「諸感官の連結」や「身体における反省性」によって成り立っている。そこで、仮に視覚的で瞬間的な与件を取り出してみると、つまり、ある時点で見られた与件だけを取り出して見ると、以上のような諸関連によって、さまざまなもの呼び覚まされるであろう。それらは、触覚的与件、運動感覚、直前のあるいは直後にあたえられるであろう与件などであり、しかもそれは、「反省性」によって成り立っている自

10 Ph.P. 244/345.

己の身体とともに生じるのである。そうした呼び起こしをメルロ＝ポンティは、物の知覚が身体に引き起こす「反響^{こだま} écho」と名づけ、「諸事物が私のうちに引き起こすそれらの現前の肉体的方式」(OE. 22/260)とも表現している。

第2節 絵画

1 知覚における対話的状況と反響^{こだま}

メルロ＝ポンティはこうした事態を出発点として「絵を描くとはどういうことか」を考察する。先にみたように、触感覚の場合であれば、物との接触において触られた物の硬さや冷たさといった感触が手の中に残るであろうが、それは、物の有り様に応じて手に与えられ、また逆に、物の現れ方は手の動かし方に依存するであろう。そこで、接触する手と物との間には「呼応」ないし「対話」の関係が成り立っていると言えるであろう。同じことは視覚の場合にも起こる。たとえば、遠くにある物を見る場合と近くのものを見る場合とでは、眼球内の水晶体や両眼の収斂の状態は異なるし、関心に応じて、風景全体を概観したり一つの物だけに注目したりするといった具合に、見方は変わりうる。

こうして、物の有り様に応じて感覚器官や知覚は変化し、また逆に見方に応じて現れ方(見え方)も変わるという対話的関係があるので、「身体の視覚機能は物の中で起こるに違いないし、物の明瞭な可視性は身体の中での秘かな可視性によって裏打ちされているに違いない」¹¹と言われるのである。また、さきにも「反響^{こだま}」についても次のように言われることになる。

「だからこそ、セザンヌも「自然は内にある」と言うのだ。質、光・色彩・奥行といったものは、われわれの前にそこにはあるが、しかしわれわれの身体のうちに反響^{こだま}を喚び起こし、われわれの身体がそれを迎え入れるからこそ、そこにある」(OE. 22/260)。

こうして、「反響^{こだま}」という語には、それが知覚における身体と風景のやりとりのなかではじめて与えられるという意味が込められているであろう。たとえば、「奥行」であれば、手前から遠方へ眼なぞしを導く動き、「赤い色」であれば目を惹き背景から際立つこと、「光」であれば、闇と対照的に、それによって物が見え部屋に満ちて風景も私をも包むもの、「質」であれば、手探りに応じる滑らかさやざらざらした感触と重なるような硬質感、このように、それぞれが、私の身体の動きに対する動的な「現れ方」なのである。

2 見取り図としての絵画とその現れ方

先にみたようにこうした身体への「反響^{こだま}」を(知覚された物に対応して身体において引き起こされる)「内的等価物」や「諸事物が私のうちに引き起こすそれらの現前の肉体的定式」と言い換えたあと、彼は次のように言う。

11 OE. 21-22/260.

「なぜ、今度はそれらが、また見えるものでもある見取り図を、そして、ほかの眼なごしが世界の視察を支える主題を発見するところの見取り図を呼び起こさないであろうか」(ibid.)。このようにメルロ＝ポンティは絵画やデッサンのことを「見取り図 tracé」と呼んでいるのであるが、その含意はどういうことであろうか。

フッサールは、文字などの「記号」による事象の表象（ないし呈示）と「像」による事象の表象を区別し、前者においては指し示すもの（記号）と事象との間に「類似性」はないが、後者においては像と事象との間に「類似性」があると述べていた。この点は一般に画像を通しての表象の特質と言ってよいであろうが、メルロ＝ポンティによれば、画家の描く絵画における「類似性」とは、肖像画の場合であれば〈誰を描いた絵であるかがわかる〉という意味での「類似性」であるだけでなく、〈対象の有り様がどのようなものであるかということ〉に関わる「類似性」、すなわち、「物に身を捧げるべき眼なごしに対して〈内なる視覚の痕跡〉を再考すべく、また視覚に対して、それを内から織りなしているもの…を再考すべく、機会を提供しているもの」を意味するというのである。さらに、先にみた身体への「反響」という事柄をもとにして、このような「類似性」を具えた「見取り図」について、メルロ＝ポンティは次のように言っている。

「自乗された見えるもの (un visible à la deuxième puissance), つまり、初めに見られたものの〈肉体をそなえた本質〉、その聖画像イコンが現れてくるのは、この時である。それは薄められた写しとか見せかけではない、つまりもう一つの〈物〉ではない」(ibid.)。

ここでは、その「見取り図」は、風景や顔といった「見えるもの」をもとに描かれた「もう一つの見えるもの」であるということによって、「自乗された見えるもの」と表現されている。

ヴィーゾリンクはこの表現の意味を次のように解説している。

「像は、見え方にそくして、或るものを見るようにする。像は自乗された可視性をもつ。像においてわれわれは、示されるものをただ見るだけではなく、つねに、示されるものがどのように示されるのかを見るのである wie es zeigt, was es zeigt」¹²。

また、フッサールも1912年の草稿のなかで、「美学的意識は、対象一般の意識と対象の現出の仕方との間の差異と本質的に連関している」¹³と言っている。その「対象の現出の仕方」を言語記号といったやり方でなく感性的に表す唯一の有り方が「像」であることを思えば、こうした「像」現象の理解は、人間存在と間主観性にとってのその重要性を的確に表現しているといえよう。

だが、それはまた「写し」やもう一つの「物」ではないと言われていた。では、その「見取り図」そのものの「現れ方」, 「見え方」はどのようになるであろうか。これについては次の言葉がある。

「ラスコーの洞窟に描かれている動物は、石灰岩の亀裂や隆起がそこにあるのと同じようなふうにそこにあるわけではない。とって、それらの動物がどこか〈ほかのところ〉にいるというわけでもない」(OE. 22/261)。

¹² Wiesing, S. 72.

¹³ Husserl (1980), S. 386.

すなわち、その動物の「像」はいわば「像」にすぎず、石灰岩の壁の上に動物そのものがあるというのではないが、しかし、純然たる記号の場合のように、指し示された現実の動物そのもの——たとえば昼の間に見た動物——のほうだけに注意が向けられているわけでもないのである。やはり、その石灰岩上に描かれたものから切り離されないような形で、動物たちは現れている¹⁴。この様子はまた、適切に、「私は絵を見るというよりはむしろ、絵にしたがって、絵とともに見ている」とも表現されている。

この「像」としての「見取り図」の「現れ方」は、フッサールの用語で言えば、「像物体」でも「像主題」でもなく「像客体」として現れているということになるであろう。肖像画を例にとれば、「像物体」とは額縁の木材や布、絵の具など通常の仕方では知覚されるものであり、「像主題」は、現実の描かれた人そのものである。これに対して「像客体」とは、「像物体」に支えられながらもそれとは違ってそこに現れている人の顔の形などである。このような特殊な現れ方をしていて、それなしでは「像」という現象が成り立たないような仕方では現れるものを「像客体」とフッサールは呼んだが、現実存在として措定されているかどうかという点に関しては、それは、「あたかも存在しているかのような」という「中立的な」在り方をしている（そのような仕方では措定されている）のである¹⁵。

さて、メルロ＝ポンティに従えば、「諸事物が私のうちに引き起こすそれらの現前の肉体的定式」としての「反響」^{こだま}¹⁶は、こうした「現れ方」をする「見取り図」、「自乗された見えるもの」を描かせるというのであるが、そうした「絵を描くとはどのようなことであろうか」、また、「描くことと知覚との関係」はどうかであろうか。この問いが本論文での主要な問いであった。だが、われわれはこの問いを念頭に置きつつも、描かれた「見取り図」としての絵画の特徴をみておこう。それは、知覚され物からの「反響」^{こだま}を受けながら画家が「描く」ということにもつながるであろう。

第3節 絵画の技法と「諸感官の関連性」

前節で、絵を描くとは、知覚における「見え方」を描くことであると定式されたが、その「見え方」は一様なもの、決まりきったものではなく、そこには、動きや多義性が存在する。フッサールの用語を使えば、それは「十全的に」すなわち「余すところなく完全な仕方」で与えられてはいないのである。そこで、『眼と精神』の叙述に即して、「奥行」、「線」、「色彩」、「運動」という観点から、その「見え方」と「描き方」を考察しよう。

14 「目に見えないその繫索を引きちぎることはない」(OE, 23/261)。

15 「中立性変様」についての論述は、簡潔ながらフッサールの『イデー第一巻』(1913年刊行)に見られる。その概念については、拙論小熊(2015)を参照。なお、この箇所とフッサールの「中立性変様」の関連は、滝浦静雄(1972)が指摘していたところである。

16 彼はそうした「反響(こだま)」をまた「想像的なもの l'imaginaire」とも言い換えている(OE, 23/261)。彼に従えば、この「想像的なもの」は、「複写」や「写し」といったものではなく、「現実的なものが私の身体内部で生きる図表であり、初めて視線にさらされたその果肉、その肉体を備えた裏面」なのである。

1 奥行

風景内の遠近や物の「奥行」は、「幅」や「高さ」のように眼前に長さとして広がる大きさではない。むしろわれわれは、物と物が部分的に重なり合い、覆い隠し合いながら見えていることを通して、遠近や奥行を捉える¹⁷。換言すれば、物と物が重なり合っていると捉えることが「奥行」をとらえていることにほかならない。つまり、たしかに私はそれらの物を自分の視点である一点から見ているのであるが、そのように見ることはまた、そのほかにも視点がありうることを示している。というのは、重なり合いを見て取ることは、重なり合わないような見え方や違った重なり方などが有ることを含意しているからである。また同様に、そこでは、見えている物には見えていない裏面があること、さらに、私の現在の展望が物の空間的有り様を汲み尽くしてはいないことをも示している。というのも、現に見えているのは一つの方向からの眺めにすぎないが、例えば逆方向からという具合に別な方向から眺めることも可能だからである。ところが、このことは、この眺めが汲み尽くしえず、有限の現れに還元できない「厚み」を持っていることであり、これこそ、「奥行」を捉えていることを意味するのである。

その「厚み」や「奥行」は、諸物の重なり合いのほか、諸物の大きさの違い、光のあたり方の違いなどによっても示されるであろう。そこで、絵画は「見取り図」としてわれわれの眼なごしを導きながら、さまざまな仕方で「奥行」を表現することができる。一つの無限遠点に向かって諸事物の大きさが規則的に小さくなるように描くいわゆる「線的遠近法」も一つの手法であろうが、関心のあるものを大きく描いたり、秘かに別の視点からの眺めを入れ込むことによって視覚を活性化させるという方法もあるであろう。また、蛇行する川や道によって視線を導き入れるということもあるであろう。

こうして、「視覚は奥行そのものを見ない」という言い方は、それが幅や高さのように見えるわけではないという意味で正しいが、われわれは、物を探索する視覚プロセスの中で、物や風景が「奥行」を持っていることを知っているのである。距離に応じた眼の調整、両眼の収斂、首や身体全体の動き、対象物に向かって歩いていくこと、こうした身体運動の全体は、風景や世界が奥行、厚みを持つことを前提としているのであり、どれか一つの方法だけで距離を感知するわけではない。たとえば、風景を単眼だけで見て、その眼や視線を固定したまま見えるように描くという人為的なやり方も、身体の使い方の一つにすぎないのである¹⁸。

われわれの身体はそうした、世界の「奥行」に対処して探索する方法を熟知しているが、身体の動きはそうした方法に従うのであり、このことは、われわれが先にみた身体ないし諸感官の「反省性」に依存しているのである。

2 線

では、物や風景を描く際に使われる「線」についてはどうであろうか。「物そのものの肯定的

17 Cf.OE, 45-46/274.

18 画像と奥行きや展望については、田口茂 (2015) において詳しく考察されている。

属性であり性質としての」輪郭を描くために線を使うということも考えられるが、そうではなくて「対象の広がり全体を通して走り」、「物の発生の軸のように曲がりくねった線」という具合に描くこともありうるであろう¹⁹。また、風景のなかに「可視的な線そのものは存在しない」のであり、「林檎の輪郭や草原の境界」は物を見る際に「暗示され、含意され、強要され」はするが、それ自体は見えるものではないという理解もありうるであろう。さらに、線を描く場合であっても、一本の黒い線を輪郭として描く場合もあるが、数本の細かい線を描くこと、また、林檎の色を次第に変化させていって輪郭を表すということもありうるであろう。最後の例として、メルロ＝ポンティの次の叙述を引いておこう。

「……セザンヌは、色で抑揚をつけるに際して対象のふくらみにしたが、青い線でいくつかの輪郭線を引くことになる。それらの一方から他方へと移される眼なごしは、ちょうど知覚においてそうであるように、それらすべての間に生まれ出る一つの輪郭をとらえるのだ。これらの有名なデフォルマシほど気まぐれでないものはない……」²⁰。

だが、セザンヌはいつもこのように描いているわけではないようであり、或る静物画について、次のような解説もみられる。

「彼が輪郭線を強調しているのは興味深い。彼はさまざまな対象の関係を線によって周到に描写した。その結果、壺の丸味のあるボディが背景の壁から浮きあがり、リンゴが対になって置かれ、布のひだが明瞭な特徴をもつようになっている」²¹。

こうしてみると、「線は物の模倣ではないし物でもない」²²という言い方はもっともであり、「線」についても、クレーの「芸術は見えるものを再び与えるのではなく、見えるようにするのである」²³という言葉が当てはまるであろう。たとえば、多くの細かい線を描くことによって、「動き」を表すことさえもできるであろう²⁴。そして、これは身体や眼差しの動きに対応した見えの動きであり、結局は身体の動きと連動しているかぎりにおいて、やはり「身体の反省性」によることなのである。

3 色とそのほかの感覚

絵画における色彩について、まず、上のこととも関係する、形や輪郭と「色彩」の関連を考えよう。

『ラジオ講演1948年』のなかで、メルロ＝ポンティは次のように言っている。

「絵画の古典的教育では、デッサンと色彩を区別します。つまり、まず対象がとる空間性の

19 OE, 72/290.

20 SN, 25. 「セザンヌの懐疑」邦訳18頁.

21 キャサリン・ディーン (1994), 94頁 (図版32「静物」の解説)。

22 OE, 76/297.

23 ドナルド・ウィガル (2007), 40頁.

24 上掲書の、例えば、図版41「彼女は吠える、私たちは遊ぶ」、図版24「守護霊」を見ると、後者では、複数の曖昧な輪郭線のような線や色の変化が人の動きを表していると解することができるであろう。

図式つまり輪郭をデッサンし、それから色彩で輪郭の内部を塗るわけです」(Ca. 19/67)。

こうした形と色を分ける描き方に対して彼は、セザンヌの次の言葉を対置している。

「デッサンと色彩とは、もはや別々のものではない。彩色するにしたがってデッサンも進む。色彩が調和すればするほど、デッサンは明確になる。……色彩が豊かになれば、形態も充実する」²⁵。

そして、その意味を次のように解説している。

「セザンヌは自然が私たちの目の前で対象の輪郭や形を生み出すように、さまざまな色彩を配置することによって、輪郭や形を生み出します。こうして、…彼の描くリングは、結局、賢明なデッサンがそれに押しつけていた境界を越えて膨らむことになるのです」(Ca. 19/68)。

つまり、色の配置によって輪郭が生み出されることになるが、さらに、あらかじめ輪郭を描かないことによって、林檎そのものが輪郭にとらわれない膨らみをもつようになる、ということである。

さらに、色はほかのさまざまな知覚の様態と関連しており、絵画においてもそのことが重要性をもつ。

「根源的な知覚においては、触覚と視覚との区別は知られていない。……体験された物は、さまざまな感覚的所与をもととして、再発見されたり構成されたりするのではなく、それらの感覚的所与が輝き出る中心として一挙に示されるのだ。われわれは対象の奥行や、ピロードのような感触や、やわらかさや、固さなどを見るのである——それどころか、セザンヌに言わせれば、対象の匂いまでも見るのである。もし画家が、世界を表現しようと思うならば、色彩の配置が、そのなかに、この分かちえぬ全体を含んでいなければならぬ」(SN. 26/18-19)。

これはわれわれがすでに「諸感官の連絡」に関連してみたことであるが、さらに例を加えれば、木などが燃える火の色と熱さ、雪のふわりとしているが崩れそうな形状と冷たさ、布地などの材質のざらざらあるいは滑らかな手触りと目に見える表面の細かな形状、水の青さと底までの深さ、また、機関車と汽笛の音、楽譜やバイオリンとその音色、滝と響きと感じられる細かな振動、といった関連も知覚風景に厚みを付与している。このように、知覚にみられる、通常感覚様相やその器官の区分を乗り越えるような「諸感官の連絡」は枚挙にいとまがない。

メルロ＝ポンティは『ラジオ講演1948年』において、こうした観点から「物の統一」について述べている。そこでは、サルトルの「レモンの『黄色』」は、そのあらゆる性質を通じて、そっくり全体にひろがっており、その性質のおのおのは他の性質のおのおのによって全体にひろがっている」という『存在と無』²⁶の中の記述が引かれている (Ca. 28/139)。フッサールは、視覚的射映に関して、「物」が有限の射映には汲み尽くせないようにして与えられているということが「物

²⁵ SN. 26/18. なお、『ラジオ講演1948年』のなかでは、その一部のみが引かれている。

²⁶ Sartre (1976), p. 227.

の統一性」, 「意識からの物の超越」を意味していると考えていたが, メルロ＝ポンティはさらに, 一つの物に関して, 諸感覚の所与も互いに関連し合いながら統一を保っており, 「物」はわれわれの通常の感覚的区分を乗り越えるような形で統一的にわれわれに働きかけると述べているのである。そして, このことこそ身体と物との「対話」の重要部分だと言えるであろう。ミクロな構造を考えれば, 物の表面の細かく不統一な形状が, 触覚的なざらついた感じと視覚的な光沢のなさを生むわけであるが, そうした構造に支えられながら, また, われわれが身体全体で「物」を知覚することによって, 「物」は不可分の統一性, 個性性を保っているのである。

こうして, 色の知覚やそれを裏打ちする触覚などの所与は, 諸感覚の「連絡」および「反省性」と結びついているのであり, 画家もそれを生かそうとするのである。

4 運動について

最後に, 「物の運動」についてみてみよう。絵画の画面は静止しているのであるから, 文字通りにはそこに運動がそのままの形で描かれていることはありえないであろう。けれども, なんらかの形で運動を表現していると言いうる絵画は数多く存在する。メルロ＝ポンティは, そうした絵画について次のように述べている。

「ジェリコの描いた馬たちが画布の上を, それも全速力で走る馬にはおよそありえないような姿勢で走っているのは, なぜだろうか。それは, 彼の『エプサム競馬場』の馬たちが, 地面に対する身の構えを私に見せてくれ [る] …からである。……時間の衝迫がただちに閉じてしまうはずの瞬間を, 写真は開きっぱなしにしておく。写真は時間の超出・侵蝕・『変身』を打ちこわしてしまうが, 絵画は逆にそれを見えるようにしてくれる。というのは, 馬はそうしたもののなかでこそ『ここを去ってあちらへ行く』ことになるからであり, 馬はそれぞれの瞬間のなかに脚を踏み入れているからである。絵画は運動の外側ではなく, 運動の秘密の暗号を求めるのである」(OE, 80/294)。

このように, それぞれの時点の現れを跨ぎ越すような具合に動きを表現することもできる。

こうした見えは, われわれが見え方をカメラのように瞬間ごとに分断するのではなく, 肉眼によって時間的幅のなかで動きを見る際に捉えられる事柄に対応しているであろう。

また, 別の事例をみれば, クレーのある絵画のように川の流れのような線により視線を動かすようにして, あるいは, 濃い色から薄い色で描かれた複数の同形の図によって動きを表現することも可能である²⁷。そして, これらはやはり見る者の身体的な出来事に関連しているのである。

以上で, さまざまな見え方に応じて「描く」いくつかの手法を見てきた。

これから言えることは, 第一に, 興行にせよ, 線にせよ, また, 色にせよ, 運動にせよ, そ

27 たとえば, 「オルフェウスの庭」(1926), 「赤のフーガ」(1921)と題された絵など。

れらを描く決まった方式は存在しないということである。たいていの場合に絵が風景や物をそのまま写していると考えられ、またそう言われるのは、慣習としてのそのような見方に慣れているからであろうが、風景をそのまま写していると考えられがちな写真画像であろうとも、照明やカメラの向け方、撮影の時間などさまざまなファクターが存在することは言うまでもない。時間意識や運動感覚を伴い、また、種々の関心に導かれて物や風景とコミュニケーションを行いながら為される連続的知覚の場合、それを描く仕方はきわめて多様なのである。

次に重要なことは、こうした手法によって描かれる「見え方」は、見る者の身体の有り様や活動と連動しているということである。また、遠近を見る際にはたらく、両眼の収縮、動きなどを捉える際の眼球の動き、視覚と触覚などの共働、物の縁の有り様を捉える際の視線の細かな動きなどを考えるならば、身体の活動は同時に身体の「反省性」や「諸感官の連絡」をも表しているのである。

では、「絵を描くとはどういうことか」、そして、「画家はどのようにして絵を描くのであろうか」。後者の問いに関しては、メルロ＝ポンティは次のように書いている。

「眼は世界を見る、そして世界が絵となるためには世界に何が欠けているかを見、また絵が真の絵となるためにはそこに何が欠けているかを見、そして、パレットの上に絵が待ち受けている色を見る。そしてそれが仕上がった時、眼はこれらすべての欠如を満たしている絵を見、さらには他人の絵、つまり自分のとは違った欠如に応ずる別な応答を見るのである」(OE, 25-26/262-3)。

こうして、画家は、風景とキャンバス上の絵とを比較しながら次第に描いていく。描く前に何をどのように描くかがあらかじめ決まっているわけではなく、「風景」と「描かれたもの」を見くらべながら補足や修正を加えつつ描くのである。この過程こそ、身体による視覚を通して、「風景を絵に変える」作業ということになるであろう。

おそらく、「どのようにして絵を描くのか」ということについては、手の動かし方を含む手法、素材や道具、間主観的含意、スタイルや伝統、描くことや身体についての存在論的含意など、多くの重要なことが語られうるであろう。その一部は『眼と精神』の続く部分で語られることになる。

だが、「絵を描くことはどういうことか」という問いについてはどうであろうか。われわれは最後に、「表現」と「意味」という観点から、そのことを再考察しよう。

第4節 描くことと表現

ソルボンヌでの講義録のなかの、幼児のデッサンを扱っている部分²⁸に次の言葉がある。

「われわれは、幼児にとってデッサンは世界の表現であり、決して単純な模倣ではないということを認めなければならない。その際、表現という用語をその十全の意味で、すなわち、

28 この事柄については、大森史博 (2013), (2014) において詳細に扱われている。

知覚する者と知覚される事物のあいだの結びつきとして受け取るべきである」(CS. 217)。こうして、「模倣」と「表現」が対比されているが、それはどのようなことを意味するであろうか。また、「デッサンの役割の研究はわれわれをその基礎にあるもの、すなわち知覚へと連れ戻す」(CS. 219)と言われているが、その「知覚」とはどのような有り様であろうか。

まず、「知覚」については次のように述べられている。

「幼児の知覚は、認識の対象としての事物だけでなく、われわれの感情性に対する刺激としての事物に出会うことから成り立つ……。そして、成人が便宜的な〔客観的な時空間を前提するような〕態度を放棄する場合には、成人の知覚も同様である」(ibid.)。

簡単にいえば、幼児の知覚、そして根本的には成人の知覚においても、事物は感情的なものに働きかけるのであり、デッサンはそのように出会われる事物を描き、表現する、ということである。すなわち、幼児は好き・嫌い、興味・関心、愛情・憎悪・恐怖などのなかで事物に出会うということになるであろう。そこで、そうした出会い方についての説明を要約してみると次のようになる。

幼児は、触ることのできるものや感情的経験を呈示（表現）するように思われる。たとえば、ジャガイモ畑のデッサンでは、ジャガイモをかたどる小さな卵形が点々とした畑を表す四角形が描かれる。「諸対象は幼児にとって特に感情的アスペクトのもとで呈示される」（手の中のジャガイモの重さと持続と暖かさなどのように）」(ibid.)。

このような感性的性質の知覚と感情の結びつきについては、先にみたところであるが、こうした感情のおける物との出会いとデッサンについて彼は次のように述べている。

「これらの考察はわれわれのデッサンの観念を拡張する。幼児のデッサンは幼児の知覚を延長する。幼児のデッサンはつねに事物の現実に対応するのではなく、性格や態度の表現に対応するのである」。

つぎに「表現」の「意味」という観点から、知覚および絵画と「意味」の関連について考えてみよう。『ラジオ講演1948』のなかに次の言葉が見出される。

「テーブルを知覚するとき、私はテーブルがテーブルとして機能を遂行する様態に無関心ではいられません。おのおののテーブルによって異なる天板を支える方式、重量に抗う、脚から天板に及ぶテーブル全体の独特な動きは、おのおののテーブルを独自のものにしていきます。木目、脚の形、木の色や年代、年代を示す落書きやかすり傷——こうした些細な特徴が重要でないとはかぎらないし、私にとってのテーブルの『意味』は現前するテーブルの様相に具現するあらゆる「些細な特徴」から創発するのです」(Ca. 54/342)。

こうした言葉を考慮すると、デッサンとは、知覚における(潜在している)意味や解釈の表現である、と言うことができるのではないだろうか。すなわち、知覚の意味を固定的に捉えることはできないが、「描くこと」は、空間内での知覚とは異なる媒体に描くことである以上、「知覚を超えては

いる」²⁹。だが、それは知覚から離れるわけではなく、「知覚を延長」しつつ、その「意味」を表現するのである。先にみたように、メルロ＝ポンティは絵画を「自乗された見えるもの」と捉えていたが、それは以上のように理解することができるであろう。そのような知覚の潜在的な「意味」には、身体諸感官の反省性や連絡、そこで引き起こされる感情的なものによる「反響」が結びついているのである。

上の例に関連させて言えば、ある人は重量に抗う脚の形を、真ん中を太く描くかもしれないし、よくわかる自分の落書きを強調するかもしれない。その表現の「意味」はこうして「知覚の延長」であり、潜在的に知覚にみられたものが顕在的に描かれたのだとも言えよう。いずれにせよ、このようにして、「自乗された見えるもの」としての絵画は、知覚世界の単なる写しや模倣とは言えないのである。

むすびに代えて

メルロ＝ポンティは『眼と精神』の本論冒頭部で、身体諸感官の反省性および連絡、すなわち「諸感官の関連性」についての考察を呈示した。触れ・触れられること、見て・見られること、このことによって私の身体は成立する。それは《感じる物》であり、「反省性」をもつ。だが、私の身体が触れられるもの、見られるものであるということは、私の身体だけが触れられ、見られるものなのではなく、机の上の手が見え、大地の上にある足が見えるのであり、服に被われた身体に触るのであり、鉛筆を持つ手に触ることでもある。また、私は、壁の上の手に触れ見たりする。このようなことにより、私の身体はまわりの世界に巻き込まれ、根を下ろしている。これがなければ私の身体は宙に浮いてしまう。

物が、遠近をもって出現すること、奥行きの中で互いに覆い隠すこと。これは、私の視界のなかでの出来事である。しかし、私がまわりの世界に巻き込まれていなければそういうことは起きない。私の手の中にあるもの、私のすぐ手近にあるもの、手を伸ばせば届くもの、こうした物相互の隔たりや重なり合いが起こるのは私の身体がまわりの世界に巻き込まれているからである。こうした絡み合いの中ではじめて物の距離、重みと大きさを持つ大地上の物は出現するのである。

こうした身体と世界との対話的交流のなかで「反響」が与えられ、それにより画家は物の「見取図」を描く。その絵画での「質、光、色彩、奥行」などには反省性ととも「諸感官の連絡」や「性質の組合わせ」としての物の与えられ方という事象が関わっている。メルロ＝ポンティに従うと、そのようななかでの「知覚の意味を表現すること」が「絵画を描く」ことであると言えるであろう。だが結局、これは、絵画がそれ以外の表現手段によらないのであるかぎり、「諸感官の関連性」のゆえの物からの反響の下で知覚に与えられる物の「見え方」を、「自乗された見えるもの」として表現することにほかならないであろう。

29 「表現」のこの側面について、Cf. Singer, pp.235-7.

われわれは「絵を描くとはどのようなことか」という問いについてのメルロ＝ポンティの考えの一応の定式化には到達したが、知覚から絵画表現への道については、なお考察すべき事柄は多い。先にも述べたように、画家が描く際の素材、道具、筆づかいなどは絵画と表現の成立にとって不可欠であり、まさしくそれによってこそ「知覚の意味」や「見え方」は表現されるのである。また、画家のスタイル、絵画をめぐる間主観性、伝統³⁰なども絵画の意味の考察には重要であり、それはまた存在論にもつながっている。だがこれらについては、なんらかの機会に考察することとしたい。

参考文献

*引用にあたっては、略号および頁数を示す。斜線のあとの数字は、邦訳がある場合その頁数を示す。なお、邦訳は、本論文での文脈に合わせて変更した箇所がある。傍点は本論文筆者によるものである。

- Focillon, E. *Vie des Formes*, PUF, 1943.
[かたちの生命, 阿部成樹訳, ちくま書房, 2004]
- Husserl, E., *Ding und Raum Vorlesungen 1907*, Husserliana BdXVI, Nijhoff, 1973.
- Husserl, E., *Ideen Zu Einer Reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie zweites Buch*, Husserliana Bd.IV, Nijhoff, 1952.
- Husserl, E.: *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung 1998-1925*, Husserliana Bd.XXIII, Nijhoff, 1980.
- Merleau-Ponty, M.: *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945. [Ph.P.]
[知覚の現象学, 中島盛夫訳, 法政大学出版局, 1982]
- Merleau-Ponty, M.: *Causeries*, Seuil, 1948. [Ca.]
[ラジオ講演1948年, 菅野盾樹訳, ちくま書房, 2011]
- Merleau-Ponty, M.: *L'Œil et l'Esprit*, Gallimard, 1964.[OE.]
[眼と精神, 滝浦静雄・木田元訳, みすず書房, 1966]
- Merleau-Ponty, M.: *Sens et Non-sens*, Nagel, 1948. [SN.]
[意味と無意味, みすず書房, 1982]
- Merleau-Ponty, M.: *Signe*, Gallimard, 1960.
[シーニュ下, みすず書房, 木田元訳, 1970]
- Merleau-Ponty, M.: *Psychologie et pédagogie de l'enfant, Cours de Sorbonne 1949-1952*, Verdier,

30 こうした点についての『眼と精神』の含意については、西岡けいこ (2015) を参照されたい。

2001. [CS.]

- Sartre, J.P. : *L'être et le néant*, Gallimard, 1934, rééd. coll. <Tel>, 1976.
- Singer, Linda. : *Merleau-Ponty on the Concept of Style*, in : *The Merleau-Ponty Aesthetics Reader*, Northwestern University Press, 1993.
- Wiesing, L. : *Phänomene im Bild*, Wilhelm Fink, 2000.
- ウィガル, ドナルド (2007) : 『美の20世紀 クレー』, 二玄社。
- 大森史博 (2013) : 「表現における物との接触—メルロ＝ポンティと子供の絵画—」, フィロンフィア・イワテ, 第45号。
- 大森史博 (2014) : 「野生の表現と最初のパロール」, 東北哲学会年報, No.30。
- 小熊正久・清塚邦彦編 (2015) : 『画像と知覚の哲学—現象学と分析哲学からの接近』, 東信堂。
- 小熊正久 (2015a) : 「画像表象と中立性変様—フッサールにそくして」, 小熊・清塚編上掲書所収。
- 小熊正久 (2015b) : 「時間意識を介しての感覚と意味」, 小熊・清塚編上掲書所収。
- 小熊正久 (2008) : 「知覚における同一性と差異—フッサール『物と空間 講義 1907』を手がかりとして—」, 山形大学人文学部研究年報 第5号。
- 國領佳樹 (2015) : 「絵画の知覚経験—メルロ＝ポンティ『眼と精神』を手がかりにして」, 小熊・清塚編上掲書所収。
- 滝浦静雄 (1972) : 『想像の現象学』, 紀伊國屋書店。
- 田口 茂 (2015) : 「受動的経験としての像経験—フッサールから出発して」, 小熊・清塚編上掲書所収。
- ディーン, キャサリン (1994) : 『セザンヌ』, 浅野春男訳, 西村書店。
- 西岡けいこ (2015) : 「人間は『自画像』としての絵画に溢れた世界を生きる身体である—後期メルロ＝ポンティ絵画論の位相」, 小熊・清塚 (2015) 所収。

“Relatedness of Senses” and Painting in Merleau-Ponty’s Thought : for a reading of “Eye and Mind”

Masahisa OGUMA

My purpose in this essay is to illuminate clearly Merleau-Ponty’s thought about paintings; namely about what painting pictures is and how painters paint pictures, through the concept of “relatedness of senses”. The explanations for this approach are the following.

First, I shall explain the concept of “reflexivity of the human body and senses” and then the concept of “communications of the senses”. The former concept means the undividedness of the sensing and the sensed, the latter means that the senses intercommunicate (e.g. we see the hardness and brittleness of glass). These concepts are collectively called “the relatedness of senses”. In addition, the role of these facts on our perceptions of things and the world are described.

Secondly, I will show the relationships between “the relatedness of senses” and the features and techniques of painting pictures; namely, expressions of perspectives, lines, colors and motions.

Finally, I explain Merleau-Ponty’s thoughts about pictures from the viewpoint of “expression” and “meaning”. According to Merleau-Ponty, painting pictures is an expression of the meanings of the perception about things. In other words, it is an expression of the ways of looking at things.

Article

Spurious Resultatives Revisited: Predication Mismatch and Adverbial Modification*

Toru SUZUKI

Faculty of Literature and Social Sciences, Yamagata University

1. Introduction

In his typological analysis of resultatives, Washio (1997) points out that several peculiarities found in the type of resultative in (1) cannot be reduced to his dichotomy of “strong” resultatives such as *The horses dragged the logs smooth/The joggers ran the pavement thin* and “weak” resultatives such as *Mary dyed her dress pink/I froze the ice cream hard*.¹

- (1) a. He tied his shoelaces {tight/loose}.
- b. He spread the butter {thick/thin}.
- c. He cut the meat {thick/thin}.

The major characteristics of this type of resultative termed “spurious resultatives” are summarized as in (2), and the relevant points are illustrated by examples in (3–6) :

- (2) Characteristic properties of spurious resultatives (Washio 1997: 17)
 - (A) they involve an activity such that a particular manner of action directly leads to a particular state,
 - (B) it makes no significant difference if the adjective is taken as specifying the result state or specifying the manner of action so that, typically, the adjective can be replaced with the corresponding adverb with virtually no difference in meaning,
 - (C) they permit either one of the adjectives that form the antonym pair,
 - (D) the standard paraphrase (“x causes y to become z”) often fails, especially with one of the antonymous adjectives.
- (3) a. He spread the butter thick/thickly.
 b. ≠He caused the butter to become thick by spreading it.
- (4) a. He spread the butter thin/thinly.
 b. ≠He caused the butter to become thin by spreading it.
- (5) a. He cut the meat thick/thickly.

- b. ≠He caused the meat to become thick by cutting it.
- (6) a. He cut the meat thin/?thinly.
- b. ≠He caused the meat to become thin by cutting it.

Unfortunately, though, Washio (1997) merely suggests that the use of adjectives in spurious resultatives is somewhat “adverbial” in nature, leaving open the question of why their properties, as described in (2), are not found in normal resultatives (either “strong” or “weak” resultatives in his classification). The leading question to be discussed in this article is whether spurious resultatives are qualified for a third independent category within the classification of resultatives. This paper will claim that spurious resultatives and weak resultatives in Washio’s (1997) sense can be unified under the same category, namely, under spurious resultatives, rather than under weak resultatives. In other words, I argue that the category of spurious resultatives is the larger, that it subsumes weak resultatives, and that they stand in stark contrast to true resultatives (to be characterized below), which roughly correspond to Washio’s (1997) strong resultatives.

The present article is organized as follows. In section 2, I examine Washio’s characterization of spurious resultatives and reformulate their properties in terms of adverbial modification and predication mismatch. In section 3, verbs that typically appear in spurious resultatives are discussed and characterized as verbs of transformation consisting of two subclasses, verbs of change in configuration and verbs of change in shape/appearance, each focusing on a different aspect of change in transformation. Section 4 argues that, in terms of the function and interpretation of result phrases, spurious resultatives and weak resultatives can be unified, with certain differences between the two categories reduced to different dispositions on a continuum of varied types of transformation. Section 5 looks into a type shifting analysis of Japanese spurious resultatives (Imoto 2009 among others), which I essentially adopt in analyzing their counterparts in English. In section 6, based on the extended characterization of spurious resultatives developed in this article, I reformulate the major resultative dichotomy of true resultatives vs. spurious resultatives. Section 7 discusses some consequences of the present study and section 8 concludes the discussion.

2. Revisiting spurious resultatives

2.1. Adverbial adjectives

In this section, I focus on two main features of spurious resultatives which serve to derive their adverbial characteristics as originally discussed in Washio (1997).

If spurious resultative phrases function as adverbials as in Washio (1997), they should be expected to behave like true adverbials in some syntactically and semantically relevant respects. One of the suggestive facts is that spurious resultative phrases are naturally put into the interrogative by using how-questions in contrast to true resultative phrases (the examples in (7) are from Horrocks and Stavrou (2003: 317)):

- (7) a. How did s/he cut the onion? / thin
 What color did s/he paint the house? / red
 b. How did s/he wipe the table? / *clean, vigorously
 How did s/he beat the metal? /*flat, with a hammer

These observations seem to suggest that the apparent adjectives *thin* in *He cut the onion thin* and *red* in *She painted the house red* are functionally comparable to the manner adverbs like *quickly*, *slowly*, and *sloppily* as opposed to “true” adjectives in *She wiped the table clean* and *He beat the metal flat*.

Another significant fact about their adverbial character is that adjectives in spurious resultatives typically seem to largely overlap the lexical class of “adverbial adjectives” or “flat adverbs.” They assume a single common morphological form, whether they function as adjectives or adverbs. Thus, as shown in (8), adjectives of this class are often used as adverbs that modify verbal events or manner. The following examples are taken from Quirk et al. (1985: 407):²

- (8) a. *clean* clothes; play the game *clean*
 b. a *deep* breath; live *deep* in the woods
 c. a *flat* country; I’m *flat* broke.
 d. *light* weapons; She travels *light*.

Huddleston and Pullum (2002: 568) give a sample of adjective–adverb pairs of the same kind as shown in (9):³

- (9) clean, clear, dear, deep, direct, fine, first, flat, free, full, high, last, light, loud, low, mighty, plain, right, scarce, sharp, slow, sure, tight, wrong

This type of adjective typically possesses a lexical opposite, together forming a non-complementary opposition where each member and its lexical opposite generally exist on a scale with a mid-interval left open to contextual interpretation (cf. Cruse 1980, 1986). Examples of such pairs include *deep/shallow*, *long/short*, *fast/slow*, *wide/narrow*, *heavy/light*, *large/small*, and *thick/thin*.⁴ From a psycholinguistic viewpoint they might be characterized as “most perceptually salient” core words which mark prototypical sensory perception such as size (*long/short*), weight (*heavy/light*), and color (Carter 2004: 115).

The existence of adverbial adjectives as a lexical class might suggest that at least some of the (spurious) resultative adjectives can be analyzed potentially as adverbs, instead of true adjectives. In this connection, note also that some of such lexical items can be found, often in colloquial use, as intensifying modifiers

to adjectives, PP locatives or verbs, something typical of adverbials. In the following examples, adverbial adjectives are shown in italics:

- (10) a. She just stood there with her eyes *wide* open.
 b. She was *wide* awake.
 c. Volcanic eruptions spread dust *high* into the stratosphere.
 d. He fell *flat* on the floor.
 e. The car stopped *sharp*.

Interestingly, these adverbial adjectives generally have derivationally related *-ly* adverbial forms and the two variants are often used interchangeably with certain semantic connotations, although subtle judgment on the differences between the two variants seems to suggest that there is a certain indeterminacy in the speaker's choice (see Geuder 2000, Broccias 2004, 2008, 2011, Iwata 2006, and Levinson 2010; see also Quirk et al. 1985 and Huddleston and Pullum 2002). For example, Broccias (2008: 6, fn.4) argues that *-ly* adverbs seem to correlate with subjective/abstract properties and adjectives with objective/concrete properties (*She fixed the car perfectly/#perfect*), while Iwata (2006: 467) claims that the *-ly* adverbs can be used only when they elaborate the outcome of verbal actions (**The lake froze solidly/*He painted the wall redly*). Both analyses are able to account for part of the relevant data in their own way, although there seem to be multiple factors involved in a complex fashion.

While admitting that there are certain semantic grounds for choice between the two, it seems to me for the present purposes rather pointless to pursue a reliable criterion for distinguishing between adjective and adverb status, since most of these lexical items are already listed in dictionaries as both adjectives and adverbs and speakers are not always consciously aware of which is which categorially. Furthermore, in English, unlike French for example, an explicit grammatical agreement system for adjectives has been lost and thus we do not have a principled way to distinguish the two categories in question when they appear in the same syntactic position in the same form, that is, without *-ly*. For these reasons, it seems to be too simplistic to regard bare adjective variants as adjectives and *-ly* variants as adverbs. Thus, in the present article, I take the middle ground where the categorial status of apparent adjectives without *-ly* can be either adjective or adverb as far as the context allows, leaving open the question of categorial distinction between the two and adopt the term “adverbial adjectives” to refer to the result phrases in spurious resultatives without implying that they are necessarily true adjectives in category.⁵

2.2. Predication mismatch

One of the most intriguing observations about spurious resultatives is that establishing a proper

predicative relationship between the theme object and the resultative phrase in spurious resultatives is often not straightforward (see Iwata 2006 and Levinson 2010). Although Washio (1997) does not go into detail about the reason why the standard causative paraphrase often fails in spurious resultatives, I suggest that this is because predication (= subject + predicate) does not always hold in spurious resultatives between an NP in object position and the resultative phrase. In the following examples (11–15), the (b)–examples are intended to describe the situations literally reflecting the predicative relationships embedded in the resultatives of the (a)–examples, while the (c)–examples are more appropriate descriptions of the events in the (a)–examples. Notice that in (11–15) the (b)–examples generally sound more deviant in comparison to the (c)–examples:

- (11) a. He tied his shoelaces {tight/loose}.
 b. His shoelaces are/became {tight/loose}.
 c. The knots of his shoelaces are/became {tight/loose}.
- (12) a. He spread the butter {thick/thin}.
 b. *The butter is/became {thick/thin}.
 c. The spread of butter is/became {thick/thin}.
- (13) a. He cut the meat {thick/thin}.
 b. *The meat is/became {thick/thin}.
 c. The slices of the meat are/became {thick/thin}.
- (14) a. He opened the window {wide/narrow}.
 b. *The window is/became {wide/narrow}.
 c. The opening of the window is/?became {wide/narrow}.

To illustrate the point further, consider (13a). When *he cut the meat thick*, it is not the meat itself, but rather each slice of it produced by the act of cutting that became *thick*. Thus, predicating directly the result phrase *thick* of the object *the meat* fails to capture the situation correctly. The same exposition applies to the other examples. What they share is a peculiar interpretation in which the host to be predicated by the result phrase should be construed as an entity “created” or “derived” from the original material through a process of change. In rhetorical terms, the process of change here shifts the reference of the theme argument from the original entity to its resultant product through synecdoche (based on part–whole relationship) or metonymy (based on adjacency). Thus, spurious resultatives can be characterized by a predication mismatch between the syntactically implicit, created entity and the result phrase that is only apparently predicated of the explicitly realized object. We might say, alternatively, that spurious result phrases are “non–predicative” in that they do not function as a true predicate in the strict sense of the term.

The following illustrates associated pairings of an expressed theme argument (= x) and a created entity (= y) that remains implicit:

- (15) a. tie the shoelaces {tight/loose}
 [x = the shoelaces; y = knots (ties) of the shoelaces]
 b. spread the butter {thin/thick}
 [x = the butter; y = the spread (layer) of the butter]
 c. cut the meat {thick/thin}
 [x = the meat; y = a slice (cut) of the meat]
 d. open the window {wide/narrow}
 [x = the window; y = the opening of the window]

Nominalization of verbal events into an *-ing* form also shows a sharp contrast between true resultatives and spurious resultatives. The nominalized expressions in (16) that are derived from true resultatives are generally unacceptable, unlike those in (17) that are derived from spurious resultatives.

- (16) a. *The hammering of the metal was flat.
 b. *the flat hammering of the metal
 c. *The wiping of the table was {clean/dry}.
 d. *the {clean/dry} wiping of the table
 (17) a. The cutting of the meat was {thick/thin}.
 b. the {thick/thin} cut (ting) of the meat
 c. The opening of the window was {wide/narrow}.
 d. the {wide/narrow} opening of the window

The contrast also points to another related difference in the aspectual properties of the verbs involved: verbs in the true resultatives in (16) are activity verbs, while those in the spurious resultatives are normally regarded as result verbs. The latter verbs are known to regularly yield two different readings in their nominalization, namely a “process” reading and a “result/product” reading (Grimshaw 1990). With the resultative predicate in (17a, c) and the resultative modifier in (17b, d), the preferred reading is clearly that of the “result/product” reading, where an entity created through a verbal activity is predicated of or modified by the spurious resultative adjective. Note that the nominalized expressions in (16), on the other hand, are generally unacceptable with a “result/product” reading in which the *V-ing* expression is supposed to be understood as a created entity.

The mismatch between the result phrase and its apparent host in spurious resultatives explains straightforwardly the unnaturalness of the paraphrase “cause X to become Y by V-*ing*,” since Y is not properly predicated of X in the semantics of spurious resultatives. The true host of Y is a created entity which is not explicitly realized in syntax but hidden in semantics.

Can we relate this mismatch in predication to the adverbial behavior of spurious result phrases? My tentative suggestion (to be elaborated shortly) is that spurious result phrases are forced to function adverbially because they fail to be structurally linked to a proper host. Although an adjective is generally predicated of a subject or modifies a nominal head, the result adjective in spurious resultatives apparently fails to meet either of those functional requirements in their structural realization. Thus the only way these predicates can function is via adverbial modification.

Interestingly, Washio (1997) observes that in French, which is considered to lack in general the English type strong resultatives, spurious resultatives are possible when the adjectival result phrase does not show agreement with its semantic subject.

- (18) a. J’ai noué les lacets de mes chaussures bien serré.
 “I tied the laces of my shoes very tight.”
 b. Hachez-les menu. (les = e.g., the onions)
 “Cut them fine (i.e., into fine pieces).” (Washio 1997: 29)

In view of the fact that French is a language where explicit agreement on adjectives is normally required with the semantic subject, it is clear that the result phrases in (18) do not serve as true (grammatical) predicates to their hosts. This also suggests that spurious resultatives are not just a minor category of resultatives showing certain irregularities, rather a legitimate construction in its own right within the typological study of language. We will return to this point in 5.1, where Japanese resultatives are discussed.

2.3. Spurious resultatives reformulated

In 2.1, we have seen that in modern English certain adjectives and adverbs have come to behave ambiguously with respect to their category status, in particular, in VP final position immediately following a direct object or a verb (cf. Killie 2007). Although native speakers generally show certain preferences in choosing between the bare adjective form and the *-ly* adverbial form, due to their subtleties it still seems rather difficult to state explicitly the relevant criteria. I have also argued that predication mismatch in spurious resultatives further motivates the adverbial modification reading of the adjectives in question. I have also suggested that predication mismatch explains why the standard causative paraphrase does not seem to work in spurious resultatives: in the “X became Y” part of the paraphrase of spurious resultatives,

proper predication between X and Y often fails due to predication mismatch. As for the existence of antonym pairs in the result phrase, the manner orientation of the result phrase seems to be responsible, as Washio (1997) himself suggests. In other words, depending on *how* the verbal action is carried out, its effects on the theme argument can vary on the same scale of change. Thus we can reduce the tendency of having antonymous adjectives in spurious resultatives to their adverbial use and interpretation, which is in turn attributable to predication mismatch.

Viewed this way, the major characteristics of spurious resultatives noted in Washio's original analysis can be traced back to predication mismatch in the interpretation of spurious resultatives along with ambiguity in the use and form of adverbial adjectives in modern English. Accordingly, I reformulate in (19) the characteristics of spurious resultatives in terms of these two major features:

(19) (A) Adverbial modification:

The result phrase in spurious resultatives has adverbial properties as shown typically by its alternation with *-ly* adverbs and the *how*-question test. One contributing factor is the historically accidental prevalence of “adverbial adjectives” in modern English. Adverbial modification correlates with the existence of antonymous pairs of resultative adjectives, since the result of a verbal action is crucially affected by *how* (in what manner) the action is done.

(B) Predication mismatch:

The result phrase in spurious resultatives functions “non-predicatively,” in that it often fails to be semantically predicated of its apparent host. Instead, it is more appropriately construed as describing the resultant property of a created or derived entity not realized explicitly in the syntactic structure. Causative paraphrase fails when, due to predication mismatch, proper predication does not hold between the created theme argument and the result phrase.

In the following discussion, I will further argue that the adverbial behavior of spurious result phrases in (A) derives from predication mismatch in (B). Specifically I claim that when predication mismatch occurs, type shifting by coercion (Jackendoff 2002, Pustejovsky 1995) is invoked in order to dissolve the semantic tension between the predicate and its apparent host. However, before I discuss more specifically what kind of interpretive strategy is at work, let us take a closer look from an event-semantic point of view at what kind of verbs are involved in spurious resultatives.

3. Verbs of transformation: changes in configuration and shape/appearance

Consider what kind of verbs typically appear in spurious resultatives. The following examples (stripped to the bone for expository purposes) are intended to offer an overview of what types of resultatives are

generally regarded as spurious resultatives. They are compiled from various sources including the linguistic literature, the internet and dictionaries.

- (20) Change in configuration
- a. chop the parsley fine
 - b. clench my fists white tight
 - c. cut the meat thick
 - d. hold her arms rigid
 - e. grind the coffee beans coarse
 - f. pile the books high
 - g. rake the gravel flat
 - h. slice the bread thin
 - i. scrunch her eyes shut
 - j. spread the butter thin
 - k. stack the records high
 - l. tie the shoelaces tight
- (21) Change in shape/appearance
- a. bend the metal closed
 - b. collapse the box flat
 - c. crush it shapeless
 - d. dye her hair pink
 - e. fold the blanket thick
 - f. roll the notes thick
 - g. shrink the original story short
 - h. squint her eyes narrow
 - i. stretch her arms wide

Semantically speaking, changes described in these examples may be broadly categorized into two types: change in configuration in (20) and change in shape/appearance in (21). The former type can be further divided, in terms of two opposed directions of change, into “assembling” and “disassembling.” Although admittedly, the categorization of verbs involved is not always clearcut between the two types, the intuitive idea behind this classification is that the verbal events involved here all denote some kind of event which transforms an entity, focusing to varying extents on the configuration or the shape/appearance of the theme argument. Change in configuration is more specific about rearranging component parts of an entity,

separating something into parts (= disassembling) or bringing parts together to produce a larger entity (= assembling). Change in shape/appearance, on the other hand, focuses on holistic change in the shape/appearance of an entity.

The verbs that describe these types of event are largely characterized as verbs of transformation, changing an entity into a different shape, appearance, or configuration typically through exerting various types of physical force. Thus, they can also be accompanied by a prepositional result phrase instead of an adjectival phrase, describing similar types of events of transformation more explicitly, as shown in (22):

- (22) a. He tied his shoelaces into a knot.
 b. He chopped parsley into pieces.
 c. She rolled the notes into a roll.
 d. She stacked the records into a tower.
 e. She ground the coffee beans into powder.

Interestingly, the nominal complements to the PPs in (22) can naturally undergo adjectival modification by what appear to be spurious adjective phrases, which are italicized in the examples below:⁶

- (23) a. He tied his shoelaces into a *tight* knot.
 b. He chopped parsley into *fine* pieces.
 c. She rolled the notes into a *thick* roll.
 d. She stacked the records into a *high* tower.
 e. She ground the coffee beans into *coarse* powder.

These examples suggest that these result adjectives used in spurious resultatives in (20–21) are not true predicates of the object of the verbs but are more appropriately understood as semantically modifying the resultant object which can have an alternative realization in PP as in (23). Compare the spurious resultative variants in (24):

- (24) a. He tied his shoelaces tight.
 b. He chopped parsley fine.
 c. She rolled the notes thick.
 d. She stacked the records high.
 e. She ground the coffee beans coarse.

Given the present characterization of the verbs under discussion as verbs of transformation specifying various types of change in configuration and shape/appearance, a straightforward account can be invoked for predication mismatch between the theme argument and the result phrase as discussed in 2.2: the theme argument in this type of change event can often fail to retain its unity or integrity during the process of change. With verbs of assembling/disassembling, in particular, it is often the case that the original theme argument undergoes a process of change that transforms its material integrity in two ways: either putting different parts together into one whole through an assembling process (e.g. *clenching, piling, stacking, tying*), or taking a whole apart through a disassembling process (e.g. *chopping, cutting, grinding, slicing*). In either case, the referentiality of an entity involved can be affected after transformation process through multiplying or decreasing the number of its constituent parts. If the result phrase as a predicate is supposed to refer to the state of an resultant entity, it is not unnatural to assume that the affected referentiality might hinder a proper predicative interpretation between the original theme entity and the result phrase which describes a resultant product. However, the same does not necessarily hold of the case of changes in shape/appearance where the theme argument undergoes a significant change in its shape or appearance while retaining its basic constitutive property as far as its referential identity is concerned. For example, in the resultative expression *collapsing the box flat*, the referentiality of *the box* can remain the same after the process of collapsing, although its function as a box is normally lost. In this respect, predication mismatch can be seen to have more relevance to the events of change in configuration than those of change in shape/appearance.

Note also that it is not uncommon that the same verb can be seen as describing either a change in configuration or a change in shape/appearance depending on context. For example, the verb *spread* in *she spread the cards flat on the table* describes an act of disassembling while the same verb can be construed as an act of transformation in *she spread the umbrella open*. In other words, an event is seen as an instance of change in configuration when the material unity of an entity is lost in the process of change, while it is seen as an instance of change in shape/appearance when the unity is somehow held intact, even when it has gone through a noticeable change in its shape/appearance.⁷ In the next section, I will put forth a view that the category of verbs of transformation can be further extended to include a broader variety of verbs in the so-called weak resultatives.

4. Spurious resultatives and weak resultatives

4.1. How much are they really different?

Given the present characterization of spurious resultatives as formed around verbs of transformation that typically describe a change in configuration or shape/appearance, the reader might ask the obvious question whether spurious resultatives should be treated separately from the so-called weak resultatives

whose main verbs can also be more or less classified as verbs of transformation. In other words, one may ask if it is really necessary to maintain the distinction between spurious resultatives and weak resultatives as originally suggested by Washio (1997). In fact, my answer to this question is that most of the change of state verbs attested in weak resultatives can be subsumed under the larger category of “verbs of transformation,” along with verbs of change in configuration and in shape/appearance. I will argue that there are certain differences in degree, but not in kind, between them and consequently spurious resultatives and weak resultatives are to be grouped together in the general classification of resultatives.

Consider some of the oft-cited cases of weak resultative in the literature.

- (25) a. He broke the box open.
 b. She froze the ice cream hard.
 c. He melted the chocolate soft.
 d. He burned the books to cinders.
 e. She boiled the lobster pink.
 f. He fried the potatoes crisp.

It seems clear that the examples in (25) share certain similarities with the spurious resultatives we have examined so far. They entail certain results that can be further specified by result phrases, which are in turn licensed as long as they are construed as describing some kind of additional specification to the entailed result of the verbal events. In this respect, the verbs in question can be largely classified into verbs of transformation in (21). If we are to define the semantics of verbs of transformation more precisely, it should involve such conceptual categories as property, configuration, shape, color, and size as its subcategories. Among them, property is the superordinate concept which unifies other subcategories including “intrinsic property” which I assume to refer to some inherent property of an entity defined in terms of its unity or function at an abstract level. For example, an event of *breaking* not only physically damages an entity but also spoils its function as a result of the process of transformation. An event of melting or *freezing* normally changes the constitutive state of an entity, which can in turn lead to a change in its classification category (e.g. from ice to water and vice versa). Thus, I claim that verbs of change in intrinsic property, which typically serve as the semantic core of events denoted by weak resultatives, can be generally subsumed under verbs of transformation. The conceptual subcategories that are involved in the semantics of verbs of transformation are summarized in the following figure:

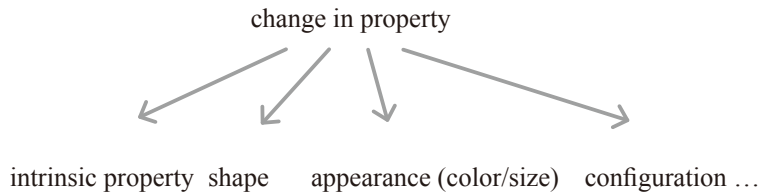


Figure 1 : Conceptual categorization with verbs of transformation

In fact, some scholars who acknowledge the existence of spurious-type resultatives regard the resultative instances of these verbs as a subtype of the resultatives which consists of the verb implying a result and the result phrase further specifying it (Iwata 2006, Rapoport 1999 among others). According to Iwata (2006), for example, his Type B resultatives, which roughly correspond to weak resultatives in Washio (1997), cover the spurious type as well. In the following, despite the strong similarities to the preceding approaches (Iwata 2006, Rapoport 1999), I will argue that “spurious resultatives,” instead of “weak resultatives” or “Type B resultatives,” can be considered a better characterization of our object of study to be contrasted with “true resultatives” in section 6, where the notion of further specification in resultatives is further examined.

4.2. Manually controlled processes

Before jumping to the conclusion that spurious resultatives and weak resultatives can be unified into the same class, however, let us explore some ideas hinted at by the fact that the verbs in the typical spurious resultatives in (20–21) and those in the weak resultatives in (25) are not perfectly homogeneous in their semantic properties. The former type of verbs do not normally yield intransitive variants with their agentive subjects suppressed: intransitivization is possible only when the theme argument is understood as a kind of natural object in motion, as in (26) and (27). On the other hand, the latter verbs, irrespective of the semantic type of the theme argument, participate in transitive/intransitive alternation fairly freely, as in (28).

- (26) a. He spread the butter thin.
 b. ??The butter spread thin.
 c. The soil spread thin over ancient rocks.
- (27) a. She piled the books high.
 b. ??The books piled high.
 c. The snow piled thick.
- (28) a. The glass broke in pieces.

- b. The ice cream froze hard.
- c. The chocolate melted soft.

The change process expressed by the former class of verbs typically requires a responsible agent who has control over the process of change, while with the latter the relevant change is understood as being somehow internally caused once initiated. That is, this latter type of change is likely to progress on its own without aid of an agentive controller (cf. Levin and Rappaport Hovav 1995 for “internal causation” vs. “external causation”). Thus, we may say that change of configuration verbs are relatively less specific about their outcome, while an agent’s involvement in their activities, such as manually controlled procedures, is more strongly specified. This relatively higher specificity of agentive control contributes to their limited occurrence in intransitive forms such as (26c) and (27c).

4.3. Elasticity of types of change and underspecification of results

Viewed from a slightly different perspective, the two types of verb that appear in spurious resultatives and weak resultatives also differ in the degree of specificity of the result entailment. In spurious resultatives, verbs are not always specific enough about their entailed results, or at least, it is sometimes difficult to determine what kind of results are entailed because of the elasticity of the verbal semantics. Put differently, it is often the case that the resultant situation is rather dynamically constructed from a combination of the verb, the theme argument and the result phrase. Consider the following cases:

- (29)
- a. She piled the books high.
 - b. She piled the broken pieces (of the dish) into her hand.
 - c. They piled into a taxi.
 - d. The snow piled thick.

An act of *piling* usually means putting things up higher and higher in a vertical direction, but in some cases it can also mean moving things to the same place one by one with no implication of vertical growth. In other words, in (29b–c), the cumulative effect of the successive procedures or minievents of *piling* is highlighted instead of a cumulative effect in an upward direction (29a).

The behavior of the verb *spread* is similar. In (30a), ‘the word’ goes through a disassembling process while, in (30b, c), the change simply concerns the holistic shape or appearance of an entity with no implication of disassembling.

- (30) a. She spread the word in two halves.⁸

- b. She spread the umbrella open.
- c. She spread the butter thick.

Thus, we may say that the core meaning specification of the verb *spread*, definable as a widening motion of the parts of an entity, can be expressed either as a change in configuration in (30a), or as a change in shape/appearance in (30b) and (30c).

As to how specifically results are implicated, verbs like *pile* and *spread* seem to behave slightly differently from other bona fide result verbs, some of which we have termed verbs of change in intrinsic property in 4.1. To clarify the difference, let us employ the *something is different about X* test (Beavers 2011: 342) as an informative means to detect property change in the result entailment of verbs.

- (31) a. John just cleaned/painted the bedroom, #but nothing is different about it.
- b. John just destroyed/ate the cake, #but nothing is different about it.

When this test is applied to *pile* and *spread* cases, the results are somewhat difficult to evaluate.

- (32) a. She just piled the books, (#) but nothing is different about them.
- b. She just spread the cards, (#) but nothing is different about them.

As long as it deals with the inherent properties of the books or the cards, the statement *nothing is different* does not seem to contradict the former half of the sentence. In fact, Beavers also provides another related test for change of location, *x is somewhere else*, but again the results with the verbs *pile* and *spread* are not so bad, if not definitely acceptable. Judgment varies, depending on how narrowly one construes the relevant location where entities move.

- (33) a. John just walked out of the room, # but he is not somewhere else.
- b. She just piled the books, (#) but they are not somewhere else.
- c. She just spread the cards, (#) but they are not somewhere else.

Consider another test for scalar change, *X is more V-ed than Y* (Levin 2008), by which the verbs in question generally fail to show a scalar change property:

- (34) a. *The parsley is more chopped than the onions.
(cf. The parsley is more finely chopped than the onions.)

b. *These books are more piled than those ones.

(cf. These books are piled higher than those ones.)

c. *These cards are more spread than those on the other table.

(cf. These cards are spread wider than those on the other table.)

Taken together, the results of those tests suggest that the typical verbs in spurious resultatives, verbs of change in configuration and change in shape/appearance, may not fully qualify as result verbs in that they do not seem to entail any change that can be characterized by a distinct scalar notion. Intuitively, however, it still feels too strong to deny that some kind of directed change is involved in the events with these verbs.

In this connection, there is a plausible line of argument suggested by Rappaport Hovav and Levin's (2010) treatment of verbs such as *brush*, *chop*, *comb*, *grind*, and *mow*, which apparently constitute a potential counterexample to their analysis of manner/result complementarity in lexicalization. As they observe, these verbs normally require that the agent use a particular instrument (involving a specific manner) while also entailing a change in the theme as a result of the use of this instrument (involving a specific result). They suggest the following:

- (35) These verbs [*brush*, *chop*, *comb*, *grind*, and *mow*], then, specify changes in the entities denoted by both the subject and the object, but we argue that these changes are not scalar so that these verbs do not counterexemplify manner/result complementarity. They describe complex interactions between the entities denoted by their two arguments, so that the change in the object can be characterized only by concomitant reference to the subject's activity.

(Rappaport Hovav and Levin 2010: 38)

Based on the insightful characterization by Rappaport Hovav and Levin, I assume that the “ambiguous” verbs of this type share the duality of manner/result meaning in their lexical specification: their result entailment is underspecified to the extent that directed change cannot be meaningfully defined in terms of the notion of scale without reference to their respective manners, that is, how the subject acts during the process of change. This characterization of the semantics of verbs in question corresponds perfectly with our characterization of verbs in spurious resultatives as involving manually controlled process, which in turn explains their inclination to syntactically transitive realization.

To summarize our observations so far, the potential tendency of verbs of change in configuration and shape/appearance to support a variety of result phrases can be seen as reflection of their semantic elasticity. The source of this, I suggest, lies in the underspecification of result entailment in the lexical semantics of the verbs in question. Seen from a different perspective, they are likely not to fully specify their result

states only to be further substantiated with additional result expressions. In other words, they sometimes fail to behave like genuine result verbs, showing characteristics of “ambiguous” verbs in terms of manner/result complementarity in the sense of Rappaport Hovav and Levin (2010). The manner component in verb semantics in this case directly conforms to one of their features already discussed, namely manually controlled process. All this suggests that verbs of change in configuration and verbs of change in shape/appearance are weaker in result specification than other members of verbs of transformation.

However, I would rather not take this point too far about distinguishing between the two types of verbs, verbs in spurious resultatives and those in weak resultatives. I would rather argue that they cover a large part of events of transformation together sharing the same type of resultative interpretation in which the result phrase essentially functions as further specification of the verb meanings.

There is additional evidence that a similar kind of elasticity in result specification with verbs of change in configuration and verbs of change in shape/appearance is also observed occasionally with weak resultatives with verbs of change in intrinsic property.

- (36) a. Mr. Gray [...] smashed the headlight dark. (Stephen King, *Dream Catcher*: 460)
 b. The wax is all gone from it. The dish has burnt dry. (Ben Watt, *Patient*: 29)
 c. [...] hotel rooms that freeze your eyebrows to the pillows [...]
 (David Lodge, *Small World*: 32)

Notice that in these examples, the result component of the verb meaning is somewhat “bleached” (cf. Rappaport Hovav & Levin 2010) in that the verbs in (36) do not retain the literal sense of converting some entity into pieces, cinders or solid, but rather they only convey their manner-oriented senses of concomitant effects such as causing the loss of lighting function or giving a high degree of heat or extreme coldness.

As argued above, the elasticity observed with spurious resultative verbs (in particular, with verbs of change in configuration and verbs of change in shape) comes from two sources: (A) agentive (manual) control of the process of change, and (B) underspecification of the result types. In fact, these two features can be seen as two sides of the same coin: the existence of manual control during change events somehow seems to offset explicit specifications of the result state. Put differently, for some result verbs, the result specification can be left abstract and incomplete if the involvement of agentive control throughout the process is entailed to a certain degree.⁹

In terms of scalar change, partially ordered scales are very similar to two-point scales in that they are both very limited in the number of potential degrees ordered on a scale. In fact, this type of underspecification is widely shared among change of state verbs, with the exception of so-called degree

achievement verbs (e.g. *cool*, *warm*) which are associated with more fine-grained multiple-point scales. Note that, among verbs of transformation, predication mismatch is typically observed with verbs of change in configuration, while it is not often the case with verbs of change in intrinsic property. This is probably because, unlike the former, the latter verbs do not always involve the loss of physical unity. In this respect, some change of state verbs found in weak resultatives, namely verbs of change in intrinsic property (e.g. *break*, *burn*, *freeze*, *melt*), are virtually indistinguishable from other verbs of transformation with respect to their choice of the result phrase. Therefore, I propose that verbs in spurious resultatives and weak resultatives can be placed on the continuum of various events of transformation: verbs of change in configuration generally on the side of physically affected unity and verbs of change in intrinsic property on the other with other types of verb of change (in shape, appearance, etc.) in-between. Based on the conceptual categorization of transformation in Figure 1, the division of labor between the two types of resultatives in describing events of transformation can be schematically represented as follows:

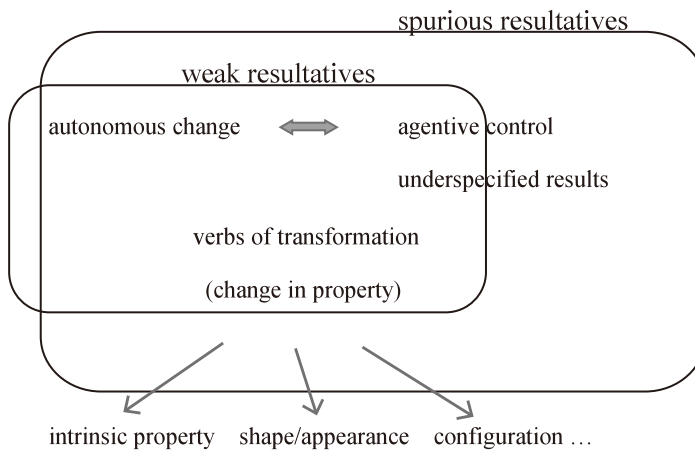


Figure 2: Division of labor between weak and spurious resultatives

Verbs of transformation generally covers various aspects of change in property, which can be divided into several conceptual subcategories such as intrinsic property, shape/appearance, and configuration. The various types of change in transformation often, if not always, involve the loss of unity in the part of the theme argument, which can have a significant reflex in its function or referential identity. When events of transformation are realized in resultative constructions, their semantic area is largely shared with two types of resultatives, namely weak resultatives and spurious resultatives, which are related with each other in a cline-like fashion partly overlapping in their coverage of the conceptual field of transformation: while the former tends to cover autonomous changes, the latter is more likely to deal with changes characterized by agentive control.

Although the two types of resultatives have different orientations as to what type of change they most appropriately describe, this difference is also a matter of disposition where quite a few cases fall ambiguously between the two spheres. Thus, in my opinion, spurious resultatives and weak resultatives share the general semantics of the result phrase further specifying the result implied in the verb meaning. In order to substantiate this idea we still need to clarify how the result phrase actually functions in further specifying the resultant state of transformation. With that in mind, let me digress a while in the next section to see what can be learned from Japanese (spurious) resultatives.

5. The view from Japanese (spurious) resultatives

5.1. A Type shifting analysis of Japanese (spurious) resultatives

In his seminal work on the typology of resultatives, Washio (1997) argues that Japanese has only weak resultatives (and spurious resultatives), but not strong resultatives, while in English both types of resultative are possible. His account of this typological difference is based on a hierarchy of patienthood, formulated in terms of the strength of result implications in verb semantics. I will not go into the specifics of Washio's analysis of patienthood, but see Beavers (2011) who offers a concise recapitulation of the hierarchy and a possible reinterpretation of it within the affectedness hierarchy proposed by Beavers himself. Since Washio (1997), it has been widely assumed that Japanese is a language which is fairly restricted in its variety of resultative constructions compared to English-type languages with strong resultatives.

However, recent studies in Japanese linguistics (Imoto 2009, Miyakoshi 2009 among others) have cast some doubt on this limited view of resultatives in Japanese, suggesting that there is in fact a broader variety of resultative expressions than assumed in the traditional literature, some of which are exemplified below (adapted from the previous studies including Imoto (2009) and Miyakoshi (2009) with English glosses by the present author.):^{10,11}

- (37) a. Kanojo-ga kami-wo kirei-ni kitta.
 She.NOM hair.ACC nicely cut.PAST
 ‘She cut her hair nice/lovely’
- b. Kare-wa negi-wo naname-ni kitta.
 He.NOM leek.ACC diagonally cut.PAST
 ‘He cut the leeks diagonally’
- c. Kare-wa negi-wo taira-ni narabeta
 He.NOM leek.ACC flat place in order.PAST
 ‘He arranged the leeks flat’

- | | | | |
|----------------------------------|--------------|------------|---------------|
| d. Kanojo-wa | huusen-wo | ookiku | hukuramaseta. |
| She.NOM | baloon.ACC | big | blow.PAST |
| ‘She blew the balloon big/large’ | | | |
| e. Kare-wa | sashimi-wo | ookiku | kitta. |
| He.NOM | raw fish.ACC | big | cut.PAST |
| ‘He cut the raw fish big/large’ | | | |
| f. Ude-ga | | akaku | hareta. |
| Arm.NOM | red | swell.PAST | |
| ‘My arm swelled red’ | | | |

Imoto argues that although events in so-called spurious resultatives are typically understood as expressing transformations in which an entity undergoes a significant change to produce a created entity, this interpretation is not inherently specified in the verbal semantics (since the verbs in question are mostly change of state verbs) but rather an emergent property derived by coercion (Jackendoff 2002, Pustejovsky 1995), more specifically, type shifting in the interpretation of the object noun phrase, as a consequence of adding the result phrase to the original verbal event, typically an event of transformation.

Abstracting away theoretical details for present purposes, Imoto’s (2009) analysis of Japanese resultative expressions can be recapitulated as follows:

- (38) (A) The function of the Japanese result phrase is adverbial modification to some (potential) facet of the verb semantics. Importantly, the categorial distinction between adjectives and adverbs essentially does not matter in the interpretation through type shifting. The result phrase is understood as a modifier to the verb phrase without being predicated of a host noun phrase directly.¹²
- (B) Coercion is at work to accommodate semantic incompatibility, when it arises, yielding a meaningful semantic interpretation between the verbal predicate (with its theme argument) and the result phrase.¹³ By way of type shifting the result phrase can be semantically linked to a resultant object in a transformation event instead of the syntactically realized object. More generally, “further specification” in cases like this can be regarded as a dynamic interpretive process of eliciting a relevant facet of events potentially compatible with the verb semantics.

In some cases, semantic interpretation utilizes static information lexically specified in the verb meaning; in other cases, when the relevant facet of change is not fully predictable from the verb meaning coercion

is invoked to deal with the apparent semantic incompatibility. To illustrate how coercion works in such cases, consider the following examples with *ooki-ku*, *-ku* form of the adjective *ookii* (“big” or “large” in English):¹⁴

- (39) a. Kare-ga sashimi-wo ooki-ku kitta
 He.NOM raw fish.ACC large cut.PAST
 ‘He cut the raw fish into large slices.’
- b. Kanojo-ga kabin-wo ooki-ku watta
 She.NOM vase.ACC large break.PAST
 ‘She broke the vase into larger pieces.’
- c. Kare-ga te-wo ooki-ku hutta
 He.NOM hand.ACC big wave.PAST
 ‘He waved his hand in a big motion.’
- d. Kanojo-ga ooki-ku waratta
 She.NOM big smile/laugh.PAST
 ‘She smiled a big smile/laughed in a loud voice.’

The expression *ooki-ku* normally refers to the size or volume of an entity in change especially when the effect of change is regarded as being of some significance. However, when combined with certain verbs, the verbal activity and the semantics of *ooki-ku* may fail to fit together in a straightforward way. For example, (39a) cannot be understood as an act of making something larger by cutting; in (39b), the act of waving his hand does not make it bigger; and in (39c), the act of laughing is not normally understood as involving an entity that becomes bigger as a result. Still, all these examples obtain natural readings: in (39a), the event of cutting is reanalyzed as a transformation (disassembling) event where each piece of the resultant product can be described as “large” according to some contextual criterion; in (39b), the target of *ooki-ku* is shifted from the hand itself to its motion/trail; in (39c), without any apparent target of modification by *ooki-ku*, the effect of smiling is construed as an abstract product to be modified in a coerced reading.

According to Imoto’s type shifting analysis, “further specification” in Japanese resultative expressions is regarded as not just augmenting the result specification of the verb semantics with additional information but rather prompting constructive process of adjustment in interpreting possible events. In order to achieve semantic coherence, type shifting requires a dynamic reinterpretation of the theme argument, generating different combinations of verbs, objects, and result phrases.

can now recast the situation as follows: in spurious resultatives, true predication in a structurally motivated sense does not hold, and thus for the result phrase to receive a proper interpretation, it must be linked to a semantically appropriate host by virtue of its modifying the VP in question adverbially. In this sense, adjectives in spurious resultatives are coerced into behaving like adverbs, and further specification in spurious resultatives is not just modification of an inherently specified component of the verb semantics, but rather a constructive process of exploring a possible reinterpretation of an entity undergoing a change.

A related question to consider is how and when such type shifting is permitted. For the present, I have a limited answer to this: targets of semantic coercion are constrained lexically and conventionally: lexically, in that the choice of adjectives available are limited to lexical items of Germanic origin with a monosyllabic structure and to those that normally denote objectively discernible, simple properties; conventionally, in that combination of the verb and the result phrase must be construed as more or less conventionally motivated to give a natural interpretation in events of transformation. This latter aspect is often pointed out to hold more generally about resultatives (Boas 2003 among others).

6. The resultative dichotomy reformulated: true resultatives and spurious resultatives

6.1. True resultatives and temporal dependence

The last question which has been left unaddressed so far in this paper is what true resultatives are. What can our new understanding of spurious resultatives offer to the major dichotomy of resultatives? In answering this question, I would like to propose a complementary characterization of the two major types of resultatives. Following the general trend in mutually-related, though not fully agreed upon, boundedness constraint approaches to resultative constructions,¹⁶ I adopt the view that in true resultatives, two different scales, the verbal scale of the main predicate and the secondary scale provided by the result phrase, are merged to form a complex scale, with the latter typically setting a boundary on the process of change in the first scale. In other words, true resultatives are characterized by a scale composition, in which an unbounded process of change inherently specified in the verbal scale is delimited by a bound read off of the result phrase.¹⁷ A major point of consensus in the relevant literature is that the result phrase must be “virtually closed” in terms of scalar interpretation (cf. Wechsler 2005), while there are various implementations of this idea of boundedness constraint on resultatives (see Goldberg 1995, Rothstein 2004, Suzuki 2006, Vanden Wyngaerd 2001, Wechsler 2005)

- (41) a. ?He talked himself a little hoarse.
 b. ?She ate herself a little sick. (Goldberg 1995: 196)
- (42) a. Tim danced himself {completely/almost/half/*very} tired.

- b. Max shouted himself {completely/almost/half/*very} hoarse.
- c. The joggers ran the pavement {completely/almost/half/*very} thin.
- d. Charley laughed himself {completely/almost/half/*very} silly. (Vanden Wyngaerd 2001: 64)

The data in (41) and (42) plainly suggest that even gradable adjectives are forced to behave as non-gradables when they are put in the resultative frame. That is, the constructional frame requires the bounded (closed-scale) interpretation of result phrases whether they are lexically specified as closed-scale (= non-gradable) or not.

Taking boundedness as the defining property of true resultatives, I adopt a particular view that the scale composition between the verbal scale and the result scale in true resultatives is intuitively captured by the *until*-paraphrase of the resultative sentence, which is to account for the temporal dependency between the two subevents.

- (43) John hammered the metal flat \Rightarrow John hammered the metal *until* it became flat.

In (43), the paraphrase with ‘*until*’ given on the right side of the arrow means the event of John’s hammering the metal and the event of its becoming flat proceed in a temporally parallel way.¹⁸

It is sometimes argued that temporal dependence does not hold in unselected object resultatives (ECM resultatives in Wechsler’s (2005) terminology), in particular in those with an intensifying reading of dysfunction. Rappaport Hovav and Levin (2001: 775), for example, argue that there can be a temporal gap between the verbal event and the result event in (44) since “the hoarseness is achieved some time after the singing is over”:

- (44) Sam sang enthusiastically during the class play. He woke up hoarse the next day and said, ‘Well, I guess I’ve sung myself hoarse.’
(Rappaport Hovav and Levin 2001: 775)

However, other scholars claim that, even in such instances, “temporal adjacency,” if not temporal overlap, still holds between the two subevents. (see Croft 2012: 290–291, Goldberg & Jackendoff 2004 and Rothstein 2004). In line with the latter position, I would add two further points to argue that a boundedness analysis can be applied to unselected and reflexive object resultatives like those in (44). First, linguistic expressions do not always reflect real world events as they are. In (44), while it would be possible to have a temporal lag between his singing performance and the appearance of hoarseness in his throat in a real event, the literal interpretation of the expression can require a coincidental reading, in which the culmination of his becoming hoarse is understood exactly as being at the end of his performance. In

other words, the apparently temporally independent interpretation can be seen as a result of a contextually inferred reading.

Secondly, unselected object resultatives (ECM resultatives), in particular those with reflexive objects or body part objects, are more or less idiomaticized with negative connotations of various types of dysfunctional state. It is not uncommon for a speaker to use an idiomatic phrase to overstate his experience, distancing himself from objective descriptions of real-world events. That is, an idiomatic expression by nature deviates from its literal interpretation. This can be another reason why some resultatives with unselected objects can have apparently temporally independent readings.

Returning to the general interpretation of true resultatives, I specifically propose that a temporally dependent interpretation derived from scale composition has two potentially different realizations: one is “total overlapping” where two subevents unfold in parallel from start to finish, and the other is the “terminal coincidence” of two subevents where the result phrase determines the culminating point as a bound on the scale of the verbal event. In both cases, I assume that the *until*-paraphrase applies, i.e., even in the case of “terminal coincidence,” it is possible to interpret two subevents as having developed contemporaneously. For example, *he sang himself hoarse* has the paraphrase “he sang (songs) until he became hoarse,” where his singing act continues while the situation in which his throat is being damaged little by little develops in a parallel way. Put differently, we may say that a kind of retrospective reading (going backwards from the result) is employed to reconstruct a parallel unfolding interpretation.

Given this characterization of true resultatives, we can see the oft-mentioned obligatory reading of incremental change in (true) resultatives (cf. Croft 2012, Rothstein 2004; see also Rappaport Hovav and Levin 2001, and Beavers 2011 among others) as induced by the scale composition between the verbal predicate and the result phrase. Thus, in the present analysis, the scale composition between two subevents is the distinguishing factor of the major typology in the cross-linguistic distribution of resultative expressions, namely strong/true resultatives and spurious resultatives.

7. Some consequences of the reformulated dichotomy of resultatives

7.1. Counterexamples to the boundedness constraint reexamined

It has been often pointed out in the literature that the boundedness constraint on resultatives has to deal with apparent counterexamples (Boas 2003, Ono 2007; see also Goldberg and Jackendoff 2004, Wechsler 2005). Consider the following set of examples in (45) that apparently violate the boundedness constraint, as presented by Boas (2003: 136–137), who argues against Wechsler’s (2001/2005) maximal endpoint constraint:

- (45) a. Cool to room temperature. Dip a soft cloth in the solution, wring it *damp* and wipe furniture

- with it. (1998/12/31, Newsgroups: rec.antiques)
- b. The simplest approach is to require the application to mark it dirty after making any changes and before dropping its strong references. (2000/1/18, Newsgroups: comp.lang.java.programmar)
- c. Actually, if you're trying for a Vietnam-look, the best way to do it would just color it dirty (2001/3/4, Newsgroups; rec.models.scale)
- d. Everyday I wipe it wet with WD-40 before I ride and then wipe it *dry* after my ride. (2000/4/19, Newsgroups: rec.bicycles.misc)
- e. He found his lips *dry* and licked them *wet* again before taking a sip from the already sweating beer can. (2002/6/20, Newsgroups: alt.sex.stories.moderated)

In view of the examples in (45), Boas argues that certain (de facto) open-scale adjectives (closed-scale adjectives with a minimum standard) can appear in resultatives, in violation of the boundedness constraint.

Note, however, that the adjectives in (45) constitute antonymous pairs of “complementary opposition,” their respective antonyms being closed-scale adjectives:¹⁹

- | | | | |
|------|-----------------------|---|----------------------|
| (46) | a. damp (open scale) | ↔ | dry (closed scale) |
| | b. dirty (open scale) | ↔ | clean (closed scale) |
| | c. wet (open scale) | ↔ | dry (closed scale) |

These open-scale adjectives have in fact been traditionally cited in the literature as unacceptable in resultatives:

- (47) He wiped it clean/dry/smooth/*damp/*dirty/*stained/*wet. (Green 1972)

Given the present framework, however, it is not difficult to reanalyze these apparently problematic cases in (45) as spurious resultatives. First, in (45a), the act of *wringing a wet cloth* can yield something *dry* or *damp* depending on the manner in which the wringing activity is performed. Thus, a natural interpretation of *wring it damp* should be something like “wring it in such a way that it remains damp.” Conversely, the *until* paraphrase does not make sense with this case (*wring it damp* ≠ *wring it until it becomes damp*). The verbs *mark* and *color* in (45b, c) are verbs of change in appearance and thus the events described here can be analyzed as transformation events in our terms: they are understood as something like “x marks/colors y in such a way that z which looks dirty is created,” where z could be viewed as distinct in identity transformed from y. Although a similar analysis is available for (45d, e), it can be alternatively argued

that these examples are truly exceptional in that they are set in a contrastive context, namely, in (45d), *wipe it wet and wipe it dry* are placed in tandem, and in (45e), *wet* comes immediately after its antonym *dry*. It is not unreasonable to consider that this context effectively encourages the appearance of these unexpected adjectives. In my opinion, (45d, e) may be justifiably disregarded as idiosyncratic tokens whose acceptability is heavily contingent on peculiarly contrastive contexts. Thus, they do not constitute genuine counterexamples to our characterization of true resultatives as far as we maintain the dichotomy of true resultatives and spurious resultatives. I conclude that the apparent counterexamples in (45) can be analyzed either as spurious resultatives in the present framework or as highly irregular tokens consciously created in the context.

7.2. Ambiguity in resultatives: true or spurious

I have presented an expanded view of spurious resultatives that allows a more flexible interpretation of result phrases with respect to their predicational properties. In addition to true resultative interpretation, namely, temporally dependent incremental change under strict scale composition, the present analysis leaves room for some seemingly true resultatives, in particular when the object is selected by a transitive verb, to have a spurious reading where temporal dependence is not required. In other words, the result phrase is associated with its host only through adverbial modification instead of structural predication. In such cases, the resultative sentence can be paraphrased as “x V on y and y is now z,” instead of the *until* paraphrase “x V (on y) until y becomes z.” Consider a typical case of true resultatives:

(48) He hammered the metal flat.

I claim that (48) can be ambiguous in its event-aspectual interpretation: (i) a true resultative reading where his hammering and the metal becoming flat totally overlap in their temporal development from start to finish, and (ii) a spurious reading where the event of the metal becoming flat does not proceed incrementally but the flatness can be achieved, for example, instantly in the final moment of a clumsy five minute hammering.²⁰ Despite this rather unexpected consequence, it is in fact natural enough when we consider the fact that incremental change is not always a strict requirement of “resultative” sentences. In other words, I suggest that the temporally dependent incremental change reading is not an obligatory interpretation in apparently true resultatives: on the contrary, it is an optional reading when scale composition is employed. In this respect, the incremental change reading of true resultatives in which two subevents unfold contemporaneously is constructed “retrospectively” from potentially ambiguous resultative sentences by means of scale composition. Note that this type of ambiguity is available only if the verb lexically selects the object, in other words, only in Control resultatives in Wechsler’s (2005)

sense.

8. Conclusion

In this article, I have reexamined the characteristics of spurious resultatives whose independent existence was first pointed out by Washio (1997). After identifying predication mismatch in transformation events as well as a greater prevalence of adverbial adjectives in English as the major sources of the peculiarities found in this type of resultative, I have presented a type shifting analysis based on recent studies of Japanese resultative expressions. Although rather commonly found in Japanese, those spurious resultatives have somehow been largely overlooked in general typological approaches to resultatives. Furthermore, I have proposed to extend the notion of “spurious resultatives” to subsume “weak resultatives” since, as I have shown, the two types of resultatives mainly involve the same class of verbs, namely verbs of transformation, semantically sharing a larger space of various aspects of change in property. The extended spurious resultatives in turn sharply contrast with true resultatives that are characterized by the scale composition which leads to incremental change readings of two subevents.

The present analysis emphasizes the role of the creative aspect of adverbial modification, in which “further specification” is reconceived as a flexible elicitation strategy by which the result phrase is properly linked to its host in semantic interpretation without resort to structural predication. This gives a flavor of “adverbial modification.” This strategy, constrained lexically and conventionally, is invoked by coercion in cases when semantic incompatibility is detected in predicative interpretation during transformation events. Viewed this way, spurious resultatives, which stand in sharp contrast to true resultatives under the strict interpretation of scale composition, are also creative in their own way.

* I am grateful to Seiji Iwata for extensive comments on an earlier version of this paper. My thanks also go to Mark Irwin for suggesting stylistic improvements. This study was supported in part by Grant-in-Aid for Scientific Research (C), No. 2450528 and No. 15K02590 from the Japan Society for the Promotion of Science. Needless to say, all remaining inadequacies are my own.

Notes

1. Washio (1997) defines strong resultatives as having a verb that does not specify a change of state and weak resultatives as having a verb that specifies a change of state or at least a potential change in a certain direction. This amounts to saying that in the former the result phrase functions as further specification of an implicit result of the verb, whereas in the latter it adds a new result to the verbal event. Theoretical details aside, the essence of this classification is by and large shared by many scholars including Rapoport (1999) (true resultatives vs. false resultatives) and Iwata (2006)

(Argument structure resultatives vs. Adjunct resultatives): in one type the result phrase is more responsible for characterizing the event semantics independently of the verbal semantics while in the other it is more dependent on the verbal semantics.

2. In Quirk et al. (1985), the order of italicized words in (8) shows adjective uses of the same form first and adverb uses second. They note that “many such uses in adverb function occur chiefly in fixed expressions (Quirk et al. 1985: 405).”
3. Huddleston and Pullum (2002: 567) note that “the overlap is greater in non-standard speech, and within the standard variety there are some adverbs of this kind that are restricted to informal style,” while also pointing out that “the distinction between adjective and adverb is not always entirely obvious.”
4. It is not actually the case that all the adjectives taken up in (9) appear in spurious resultatives. My point, however, is that a certain amount of prevalence of such adverbial adjectives in modern English can be a motivating factor of adverbial interpretation of adjectives in spurious resultatives. It should be also pointed out that some of the items such as *high*, *low*, *deep*, *wide* are lexically genuine adverbs as they are listed in dictionaries as such. With these items, *-ly* counterparts normally assume more abstract senses concerning recognition and evaluation.
5. See Himmelmann and Schultze-Berndt (2005) on the general distinction between (apparent) adjectives and adverbials in adjunct positions; see also Killie (2007) for the adverbialization process in the history of English and the recent development of “appearance/attribute” *-ly* adverbs which largely overlap with the *-ly* counterparts of the adjectival adverbs under discussion.
6. See Levinson (2010) for an intriguing analysis of spurious resultatives (“pseudo-resultatives” in her terminology) based on the lexical-syntactic approach of Hale and Keyser (2002) where “root creation verbs” (e.g. *braid*, *tie*, *pile*, *chop*, *slice*, and *grind*) are derived from the complement of a PP which denotes a producing event.
7. “Internal motion” events studied extensively in Iwata (2008) (e.g. *The door swung open/The trap door fell shut*) can also be analyzed as a subtype of change of configuration events, where the integrity of an entity is lost or split as a result of a part of a larger architecture changing its location. This contrasts with the cases of “translational motion” (Talmy 2000) in which an entity itself moves somewhere as it is. Iwata argues that open/shut expressions involve both motion and change of state and that, in particular, the adjectives open and shut are not predicated of the theme argument directly but instead express concurrent change of state with internal motion where only part of an entity undergoes a motion. In other words, two predicates both of which denote different kinds of result have different semantic subjects respectively, although their referents partly overlap with each other in terms of their inherent part-whole structure.

8. (30a) is adapted from the following text referring to an act of speaking in which the word “gentleman” is pronounced with a pause as if “gentle” and “man” were separate words.
- (i) ‘You’re a gentleman,’ she said, spreading the word into two halves so that for the first time he saw it for what it meant: a gentle man. (Rachel Joyce, *The Unlikely Pilgrimage of Harold Fry*: 138)
9. The manually controlled process can be associated with an abstract path or scale of “partial ordering” (see Beavers 2011 for verbs of “cutting”). In this sense, change of configuration verbs (as well as transformation verbs) are characterized as having specification of result orientation without implying a final state: their lexical specification is not about result state, as in the case of typical change of state verbs, but rather about abstract direction of change.
10. Imoto (2009, 2012) mainly deals with Japanese resultatives, while Miyakoshi (2009) delves more into the contrastive issues of resultatives between Japanese and English.
11. One plausible reason why such resultative-like expressions in Japanese have been given little attention is likely to be that the majority of Japanese resultative examples examined so far (most of them are judged unacceptable) typically consist of literal translations from English resultative examples. Correspondingly, Japanese resultative expressions such as those in (37) are not always directly translatable into English.
12. Imoto (2009) mainly examines the resultative expressions with *-ku* form of adjectives in Japanese.
13. The general coercion rule is informally defined as follows:
- (i) A constituent identifying an individual X may be used/understood to identify an individual contextually associated with X (Jackendoff 2002: 141).
14. Examples are adapted from Imoto (2009) and glossed for exposition by the present author.
15. (40b) is adapted from the original text:
- (i) She sighs, her breath exploding white into her face.
(Maggie O’Farrell, *The Hand That First Held Mine*: 273)
- See also the following excerpt for a similar example with the adjective *white*:
- (ii) I am holding on for dear life, one hand on the ladder, the other on the lip of a shelf, fingers pressed white.
(Robin Sloan, *Mr. Penumbra’s 24-Hour Bookstore*: 1)
16. Goldberg (1995), Rothstein (2004), Van den Wyngaerd (2001), Wechsler (2005) among many others; see also Tenny (1994) for her pioneering work on boundedness in a much larger context; Krifka (1992, 1998), Kennedy (2007), and Kennedy and McNally (2005) for the theoretical foundations of dealing with boundedness.
17. I am aware of the fact that some (true) resultatives cannot always be aspectually bounded and in such cases they have a contemporaneous reading where two subevents totally overlap during the process of change. See McIntyre (2004), Rothstein (2004); see also Goldberg and Jackendoff (2004).

18. The essence of temporal dependence between the two subevents in resultatives is theoretically implemented in various studies in different ways. For example, Rothstein (2004) puts forth an elaborate analysis in formal semantic terms while Rappaport Hovav & Levin (2001) and Croft (2012) respectively offer semantic analyses in a more intuitive way. Informally speaking, I assume that the added culmination (the final minimal event in an incremental process) on the scale yields an incremental change reading with respect to the theme argument. See also Wechsler (2005) for an event–argument homomorphism analysis and Beavers (2011) for a similar approach formulated in a broader perspective.
19. See Cruse (1980) for the notion of “complementary opposition,” where two lexical items which form an antonymous pair are located on the same scale with one occupying one pole indicating the zero point (where the scale is closed) and the other covering all the rest of the scale with no upper boundary (meaning the scale is open). With the pair *clean* and *dirty*, for example, the former occupies the zero point where all the dirt is removed, while the latter covers the rest of the scale extending out with no limit of dirtiness in principle; see also Suzuki (2006) for the relevance of boundedness in resultatives.
20. Why *flat* does not alternate with *flatly* in this case is a matter of interest but presently I am unable to offer any definite answer.

References

- Beavers, John. 2011. On affectedness. *Natural Language & Linguistic Theory* 29. 335–370.
- Beavers, John & Andrew Koontz–Garboden. 2012. Manner and result in the roots of verbal meaning. *Linguistic Inquiry* 43. 331–369.
- Boas, Hans Christian. 2003. *A constructional approach to resultatives*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Broccias, Cristiano. 2004. The cognitive basis of adjectival and adverbial resultative constructions. *Annual Review of Cognitive Linguistics* 2. 103–126.
- Broccias, Cristiano. 2008. Towards a history of English resultative constructions: the case of adjectival resultative constructions. *English Language and Linguistics* 12 (1). 1–28.
- Broccias, Cristiano. 2011. Motivating the flexibility of oriented *–ly* adverbs. In Panther, Klaus–Uwe and Günter Radden (eds.). *Motivation in grammar and the lexicon*. 71–88. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Carter, Ronald. 2004. *Language and creativity: The art of common talk*. Routledge.
- Croft, William. 2012. *Verbs: Aspect and argument structure*. Oxford: Oxford University Press.
- Cruse, Alan D. 1986. *Lexical semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Geuder, Wilhelm. 2000. *Oriented adverbs: issues in the lexical semantics of event adverbs*. Doctoral

- dissertation, Universität Tübingen.
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele & Ray Jackendoff. 2004. The English resultative as a family of constructions. *Language* 80 (3), 532–568.
- Green, Georgia M. 1972. Some observations on the syntax and semantics of instrumental verbs. *Papers from the Eighth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*. 83–97.
- Grimshaw, Jane. 1990. *Argument structure*. Cambridge: MIT Press.
- Hale, Ken & Samuel. J. Keyser. 2002. *Prolegomenon to a theory of argument structure*. Cambridge: MIT Press.
- Himmelman, Nikolaus P. & Eva F. Schultze-Berndt. 2005. Issues in syntax and semantics of participant-oriented adjuncts: an introduction. In Nikolaus. P. Himmelman & Eva. F. Schultze-Berndt (eds.), *Secondary predication and adverbial modification: The typology of depictives*, 1–67. Oxford University Press: Oxford.
- Horrocks, Geoffrey & Melita Stavrou. 2003. Actions and their results in Greek and English: the complementarity of morphologically encoded (viewpoint) aspect and syntactic resultative predication. *Journal of Semantics* 20. 297–327.
- Huddleston, Rodney & Geoffrey Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Imoto, Ryo. 2009. Nihongo kekka koubun niokeru gentei to kyousei (Delimitation and coercion in Japanese resultatives). In Ono Naoyuki (ed.) *Kekka koubun no typology* (The typology of resultative constructions), 267–313. Tokyo: Hituzi publishing.
- Imoto, Ryo. 2012. Nihongo no kekka kobun no ichizuke to renyo-shushoku-bun (The characterization of resultatives in Japanese and continuous modification clauses). Paper presented at the 84th Conference of Japan English Literary Society, Senshu University, 26–27 May.
- Iwata, Seizi. 2006. Argument resultatives and adjunct resultatives in a lexical constructional account: The case of resultatives with adjectival result phrases. *Language Sciences* 28 (5). 449–496.
- Iwata, Seizi. 2008. A door that swings noiselessly open may creak shut: Internal motion and concurrent changes of state. *Linguistics* 46. 1049–1108.
- Jackendoff, Ray. 2002. *Foundations of language: Brain, meaning, grammar, and evolution*. Cambridge: Oxford University Press.
- Kageyama, Taro. 1996. *Doushi Imiron* (Verb semantics). Tokyo: Kurosio Publishers.
- Kennedy, Chris. 2007. Vagueness and grammar: the semantics of relative and absolute gradable adjectives. *Linguistics and Philosophy* 30. 1–45.

- Kennedy, Christopher & Louise McNally. 2005. Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates. *Language* 81. 345–381.
- Killie, Kristin. 2007. On the development and use of appearance/attribute adverbs in English. *Diachronica* 24 (2). 327–371.
- Krifka, Manfred. 1992. Thematic relations as links between nominal reference and temporal constitution. In Ivan A. Sag & Anna Szabolcsi (eds.), *Lexical matters*, 29–53. Stanford: CSLI Publications.
- Krifka, Manfred. 1998. The origins of telicity. In Susan Rothstein (ed.), *Events and grammar*, 197–235. Dordrecht: Kluwer Academic.
- Levin, Beth. 2008. A constraint on verb meanings: Manner/result complementarity. Paper presented at Cognitive Science Department Colloquium Series, Brown University, Providence, RI, 17 March.
- Levin, Beth & Malka Rappaport Hovav. 2013. Lexicalized meaning and manner/result complementarity. In B. Arsenijević, B. Gehrke, and R. Marin (eds.), *Studies in composition and decomposition of event predicates*, 49–70. Dordrecht: Springer.
- Levinson, Lisa. 2010. Arguments for pseudo-resultative predicates. *Natural Language & Linguistic Theory* 28. 135–182.
- McIntyre, Andrew. 2004. Event paths, conflation, argument structure, and VP shells. *Linguistics* 42 (3). 523–571.
- Miyakoshi, Koichi. 2009. *Nichieigo no shuuhenteki kekka-koubun* (Peripheral resultatives in Japanese and English). In Ono, Naoyuki (ed.), *Kekka-koubun no typology* (The typology of resultative constructions), 217–265. Tokyo: Hituzi-publishing.
- Ono, Naoyuki. 2007. Kekka-jutugo no scale-kouzou to jisho-type (The scalar structure of resultative predicates and the types of event). In Ono, Naoyuki (ed.), *Kekka-koubun kenkyu no sintenkai* (New developments in the study of resultative constructions). 67–101. Tokyo: Hituzi Publishing.
- Pustejovsky, James. 1995. *The generative lexicon*. Cambridge: MIT Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*, New York: Longman.
- Rapport, Tova. 1999. Structure, aspect, and the predicate. *Language* 75 (4). 653–677.
- Rappaport Hovav, Malka & Beth Levin. 2001. An event structure account of English resultatives. *Language* 77. 766–797.
- Rappaport Hovav, Malka & Beth Levin. 2010. Reflections on manner/result complementarity. In Rappaport Hovav, Malka, Edit Doron & Ivy Sichel (eds.), *Lexical semantics, syntax, and event structure*, 21–38. Oxford: Oxford University Press.
- Rothstein, Susan. 2004. *Structuring events*. Oxford: Blackwell.
- Rotstein, Carmen & Yoad Winter. 2004. Total adjectives vs. partial adjectives: scale structure and higher-

- order modifiers. *Natural Language Semantics* 12. 259–288.
- Suzuki, Toru. 2006. Between conventionality and compositionality: Resultative constructions deconstructed? *English Linguistics* 23. 213–244.
- Talmy, Leonard. 2000. *Towards a cognitive semantics II: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT press.
- Tenny, Carol. 1994. *Aspectual roles and the syntax-semantic interface*. Dordrecht: Kluwer Academic.
- Tortora, Christina M. 1998. Verbs of inherently directed motion are compatible with resultative phrases. *Linguistic Inquiry* 29 (2). 338–345.
- Vanden Wyngaerd, Guido. 2001. Measuring events, *Language* 77 (1). 61–90.
- Washio, Ryuichi. 1997. Resultatives, compositionality, and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6 (1). 1–49.
- Wechsler, Stephen. 2005. Resultatives under the ‘event–argument homomorphism’ model of telicity. In Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport (eds.), *The syntax of aspect: Deriving thematic and aspectual interpretation*, 255–273. Oxford, UK: Oxford University Press.

Sources of Data

- Joyce, Rachel. 2013. *The unlikely pilgrimage of Harold Fry*. London: Black Swan.
- King, Stephen. 2001. *Dream catcher*. New York: Pocket Books.
- Lodge, David. 1995. *Small world*. London: Penguin Books.
- O’Farrell, Maggie. 2011. *The hand that first held mine*. London: Headline Review.
- Sloan, Robin. 2013. *Mr. Penumbra’s 24-hour bookstore*. London: Atlantic Books.
- Watt, Ben. 1997. Patient: *The true story of a rare illness*. New York: Grove Press.

Spurious Resultatives Revisited: Predication Mismatch and Adverbial Modification

Toru SUZUKI

The purpose of this article is to reassess a somewhat ambiguous category of resultatives in the literature, namely “spurious resultatives” (e.g. *she chopped the parsley fine / we stacked the records high*), whose independent existence was first pointed out by Washio (1997) in relation to the dichotomy of “weak” and “strong” resultatives. By reformulating the properties of spurious resultatives in terms of adverbial modification and predication mismatch, it is argued that the category of spurious resultatives should be extended to subsume weak resultatives, which contrast starkly with strong resultatives or “true” resultatives in their semantic properties. The former typically involve verbs of transformation with further specification by the result phrase while the latter require scale composition with incremental change reading. The framework presented in this article thus offers a unified analysis of spurious and weak resultatives with certain differences between the two reduced to different dispositions on a continuum of varied types of transformation.

The predication mismatch characteristic to spurious resultatives is largely attributed to the semantics of transformation events typically expressed by verbs of change. Such verbs describe a type of change where the theme entity often undergoes loss of its constitutive property, thus leading to referential ambiguity. The change can be in configuration or in shape/appearance.

In order to account for the interpretive peculiarities of spurious resultatives in English, a type shifting analysis based on recent studies of Japanese resultative expressions is adopted. It is argued that an adverbial flavor in the result phrase interpretation of the relevant expressions is the reflex of semantic coercion. This is an elicitation strategy by which the result phrase is forced to find a semantically appropriate host without recourse to structural predication.

論 文

生産的労働概念とその活用

山形大学人文学部法経政策学科

安 田 均

I 生産的労働概念再検討の必要性

1. 生産的労働概念の誕生

経済学史上、特定の労働ないし産業を「生産的」と捉える考え方は、重商主義批判の流れのなかで出現した。

イギリスにもフランスにも、重商主義の時期にこれに批判的な経済論説が多数あった。これらは、富の理解、この増加の方法についての理解、さらに国家と経済の関係の理解において共通点があった。消費可能な財を富とし、労働をその増加の原因とみなし、商人を不生産的な階層とみており、経済活動への国家の干渉に批判的であり、したがって理論的には生産に根拠をもつ均衡論を展開し、政策的には自由主義を主張するといった点に特徴があった。／このような系譜としてイギリスではベティをはじめ、ロック、ノース、マッシー、ヒュームらを、フランスではボワギューユベール、カンティロン、ケネー、およびテュルゴーらをおよびあげることができる（馬渡 [1997] : 30-31）。

2. 当初から混乱

生産的労働は価値論が労働価値説として成立する以前に発生した概念であり、価値をしばしば具象的に論じたために、混乱が生じた。

有名なところではアダム・スミスが『国富論』で与えた二重規定である。すなわち、「労働には、それが加えられる対象の価値を増加させる部類のものと、このような結果を全然生まない別の部類のものがある。前者は、価値を生産するのであるから、これを生産的労働 (productive labour) と呼び、後者はこれを不生産的労働 (unproductive labour) と呼んでさしつかえない」(Smith [1776] : 313/ 訳(2)337) と付加価値形成を基準に生産的労働規定を与えながら、その直後に「製造工の労働は、ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現しするのであって、こういう商品はこの労働がすんでしまったあとでも、すくなくともしばらくのあいだは存続するものなのである。…これに反して、召使の労働は、ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりはしない。かれの労務 (services) は、一般的にはそれがおこなわれるまさにその瞬間に消滅してしまうのであって、あとになってからそれと引きかえに等量の労務を獲得しうるところの、ある痕跡、つまり価値をその背後にのこすというこ

とがめったにないのである」(ibid., 313-314/訳338)と、後に物を残すか否か、有体物の生産に携わるか否かという基準も示している。

そのため「自営手工業者の労働は、1) (付加価値基準——引用者)からは(「自分の親方の利潤の価値」を付け加えることのないため——同)『不生産的労働』であり、2) (物質性基準——同)からは『生産的労働』であるが、資本家に雇われて行うサービス労働は、1)からは『生産的労働』であり、2)からは『不生産的労働』である」(馬渡 [1997]:79,1) 2)は原文丸数字)という問題が生じた。

3. 『資本論』における2つの規定

マルクスは、古典派経済学を批判的に摂取する過程では、付加価値基準を一貫して支持し、物質性基準を「生産の資本主義的諸形態を生産の絶対的形態——したがってまた生産の永久的な自然形態——と考えるブルジョア的偏狭さ」の反映と批判していた (Marx [1861-63]: 37)。

ところが、彼自身、『資本論』第1部刊行の直前に執筆した1863-65年ノートの第6章、いわゆる『直接的生産過程の諸結果』において本源的規定(馬渡のいう物質性基準)を採用すると、『資本論』第1部では、まず第5章「労働過程と価値増殖過程」において本源的規定を提示した。

この(労働過程の——引用者)全過程をその結果である生産物の立場から見れば、2つのもの、労働手段と労働対象とは生産手段として現われ、労働そのものは生産的労働として現われる

(K. I, S. 196, 以下『資本論』第1部からの引用はディーツ版全集の頁数をS. 196等と記す)。

この本源的規定には「このような生産的労働の規定は、単純な労働過程の立場から出てくるものであって、資本主義的生産過程についてはけっして十分なものではない」と註で留保が付されているものの、生産的労働の資本主義的「形態規定」(先の付加価値基準)が示されたのは第14章「絶対的および相対的剰余価値」冒頭であった。

資本主義的生産は単に商品の生産であるだけではなく、それは本質的に剰余価値の生産である。労働者が生産をするのは、自分のためではなく、資本のためである。だから、彼がなにかを生産するというだけでは、もはや十分ではない。彼は剰余価値を生産しなければならない。生産的であるのは、ただ、資本家のために剰余価値を生産する労働者、すなわち資本の自己増殖に役だつ労働者だけである (S. 532)。

4. 国民所得論争

わが国で戦後進展したサービス労働を国民所得に加えるべきか議論になった国民所得論争において、各論者の根拠とされたのはやはり生産的労働規定であった。

例えば、森下二次也は、経済学史上の、生産的労働、不生産的労働に関する様々な見解を取り上げた後、それぞれの区別は一見合理的に見えるが「資本制社会の社会関係、その生産の社会的機構に関連して規定せられていないが故に」経済学的には無内容と裁定したうえで、「資本制的

生産の本来目的とするところは剰余価値の、したがって資本の生産である。それ故かかる社会においては剰余価値をつくり出す様な労働のみが真に生産的な労働の名に値するものと言わねばならぬ。…生産的労働は直接に資本としての貨幣と交換される労働としていい表される」(森下 [1949]: 16-17) と、形態規定説に軍配を上げ、サービス労働も賃金労働として資本家に利潤を齎す限り「生産的労働」と認定している。

他方、都留重人・野々村一雄らは本源的規定に依拠して、不生産的労働であるサービス労働の所得を国民所得計算に含めるべきではない、と主張した。すなわち、「生産的労働とは、物質的富の生産の領域における労働であり、他人に対するサービスを生産する労働を含まない。後者は不生産的労働である」。実際、資本主義社会において増大したサービスの大部分は商品の消費費用に属する。したがって「その労働は、所得によって購買された労働であって、資本によって購買された労働ではなく、不生産的労働であり、何らの価値をも生産しない。サービス部門の労働が資本主義社会において所得を生むのは、それによって生産された価値に対応するものとしての所得を生むのではなく、生産された価値よりくみとられた所得の一部分をその受取人が所得として支出することによって、すなわち所得の再分配によって、与えられたからである。したがって、サービス部門の所得を純収益すなわち国民所得として計上することは、二重計算」(都留・野々村 [1954]: 139) である、と。

しかし、価値形成そのものが主題となると、価値形成労働の表象であった生産的労働概念は忘れ去られた¹。

もちろん、その後も、サービス労働の価値形成性は論じられてきたが(赤堀邦雄 [1971], 田田和夫 [1977], 青才高志 [1977], 石倉一郎 [1977]), 焦点は生産的労働の理解から、生産物を有体物に限定するか否かに移っている²。

5. 家庭内の消費に伴う活動の位置づけ

しかし、『資本論』の両規定ともそれ自体では人間のさまざまな労働を補足するには問題があった。例えば、家庭内の家人によるサービスは、本源的規定説では、不生産的労働として他のサービス、私学の教師の労働、家庭教師の労働と区別されないし、形態規定説では、資本と交換される剰余価値を齎すのでもなく、かと言って家庭教師の労働のように収入と交換されるから剰余価値

1 「価値を形成するかいなかに関係なく、資本と直接に交換されて剰余価値または利潤をもたらすかいなかという純粋な形態規定を本来的に問題とするマルクスの生産的労働論に基づいては、価値生産物である国民所得 (V + M) を生産するのはいかなる労働かを本来的に問題とする、国民所得論の基礎論としての『生産的労働論』は正しく構築されえないのではなからうか。それゆえに、マルクスの生産的労働論を国民所得論の構築のために用いることは方法論的に誤りなのではなからうか」(阿部 [1967]: 99-100) との考えが広まった。

2 例えば、青才 [1977] は、サービス概念、生産的労働概念がともに多義的に用いられていることを確認したうえで、「本来のサービス」= 不生産的労働を女中等の労働に限定することによって、有用効果の生産と位置づける「いわゆるサービス」(生産過程、流通過程に対し消費過程にたずさわる労働) の価値形成性に論点を絞っている。

表1 サービス労働、特に家庭内の活動の位置づけ

生産的労働規定		本源的定説	形態規定説
基準		物質的財貨生産	資本か収入との交換
サービス労働	私学の教師	一様に不生産的労働	生産的労働
	家庭教師		不生産的労働
	家庭内教育		単なる活動

を齎さないわけでもないため、労働ならざる活動³としか位置づけられない。

他方、国際的にみると、価値論には拘らない捉え方が定着しつつある。

背景には、新古典学派、新・旧制度学派、ケインズ学派、ポスト・ケインズ学派、ラディカルズ、マルクス学派等、多様な出自をもつ国際フェミニスト経済学会の成立（1992年）がある。

例えば、ヒメルワイト [1995] によれば、家事の商業化だけでは召使いの利用は限られていたため賃金労働と比較されるには至らなかったものの、女性の就労が一般化すると家事労働も賃金労働と比較されるようになり、経済学上の労働概念の基準（機会費用の発生、社会的分業の一環、第三者代替可能性）に照らして、労働として認定されるようになった。「アンペイド・ワークの発見」(the discovery of unpaid work) である。

家事労働を、価値論と無関係にアンペイド・ワークと規定するヒメルワイト自身はマルクス経済学を出自とすることに着目する必要がある。

家事労働を始めとする家庭内の家人による労働の価値論上の位置づけや、価値形成労働の表象とされてきた生産的労働概念の再検討が望まれる所以である。

II 生産過程と生産的労働

1. 生産的労働概念の埋没

生産的労働概念は『資本論』以来、生産過程論で規定されている。

労働過程において、人間は自己の労働力をもって労働手段を通して労働対象物に、一定の目的に従った変化を与えて、自然物を特定の使用価値として獲得するのであるが、労働のかかる生産物とはもはや労働過程とは離れた1つの物としてあらわれる。自然物と同様の外界の対象物をなすわけである。ただそれは生産せられたる対象物である。そしてこの生産物の見地からすると、労働対象も労働手段も共に生産手段とせられ、労働もまた生産的労働としてあらわれ、労働過程は同時に生産過程となる（宇野 [1950, 52] : 88）。

資本の生産過程を念頭に置いてこそ価値実体の抽出も可能になると主張した宇野弘蔵⁴は、上

3 「女中のサービス提供は、労働であって父の犬小屋製作のような単なる活動ではない。なぜなら、女中の個人的生活と女中の労働がなされる主人の生活とは、労働力の売買という商品流通の介在によって明確な区分を与えられているからである」（青才 [1977] : 137, 傍点は原文）。

4 『資本論』のように商品論で価値実体を抽出したのでは「労働の二重性というのが何か商品経済に特有なもののように解されやすい」（宇野 [1973] : 825）。そもそも「商品論で生産過程を説くことはできないからだ。商

に引用した旧『原論』では「一 労働=生産過程」において労働の二重性を抽出している。

その理論的構造は基本的に以下の3点よりなる。

- [A] 生産過程とは、人間の自然との間の物質代謝過程である労働過程を、結果である生産物の視点から捉え返したものである。
- [B] 結果としての生産物視点からすると、労働対象と労働手段は共に生産手段に一括できると同時に、人間の主体性を表現していた労働そのものも生産的労働として位置づけられる。
- [C] ある生産物の生産に要する生産的労働と生産手段の有機的連関において、人間労働の、異質な具体的有用労働の側面と同質の抽象的人間労働の側面、すなわち「労働の二重性」を認めることができる。

生産過程論における抽象的人間労働の抽出にとって、[B] 生産的労働の規定が不可欠の媒介項になっていることは明らかであろう。

ところが、宇野の継承者たちの生産過程規定を追うと、この三段に亘る展開が必ずしも踏襲されてはいない(安田 [2016a], 安田 [2016b] 第1章参照)。すなわち、

- [A] 生産過程は労働過程における「主体の客体化」とのみ規定され、労働過程との違いが判然としない。
- [B] 生産手段は労働対象、労働手段の総称、生産的労働は「労働そのもの」の言い換えに留まっている。なかには生産的労働を規定せずに、より抽象的な「労働力」で済まされている場合もある。
- [C] 「労働の二重性」があたかも労働自体の特性かのように、特段の説明もなく導かれている。

[B] 生産的労働が形式的な規定に留まるか、明確には規定されず、[A] 生産過程規定から直接「労働の二重性」が抽出されている。一言で言えば、[B] の埋没である。

しかし、[B] の埋没は、「労働の同質性」抽出の場を生産過程論に求めた宇野の創意、[B] 生産的労働規定を踏まえ、[C] ある特定の生産物の生産に要する生産的労働と生産手段の有機的連関において「労働の二重性」を抽出することを活かすものではない。

生産過程と生産的労働の再規定が必要な所以である。

2. 生産過程論の再構成

a) 生産過程の連関

従来の研究では労働過程を生産過程として捉え返す意味がハッキリせず、生産過程論の課題が明確になっていないことを指摘したのは大内力である。

すなわち、従来の研究にいう「生産過程というのは、同じ労働過程を、ただ『生産物の見地』

品として生産手段と労働力とを買うということになってはじめて商品形態の下に生産過程を入れることができる。商品は生産物ではあっても、その生産過程とは形態的に直接には結びつけるということとはできない。…資本で、しかも産業資本ではじめて生産過程が流通形態といわば内的に結びつく」(同: 823)。

から客観的にみたものだという（宇野旧原論の——引用者）説明自体は、はなはだわかりにくいし、ミスリーディングでもある。／（宇野継承者たちも含め——同）生産物の立場からみると、社会的関連が問題にならざるをえない、という点が不明確のままにのこされている点が一番問題であろう」（大内力 [1981]：230-231）と指摘している。

ある程度でも社会的分業があることを前提とすれば、労働対象や労働手段は上述のように大部分が労働生産物なのだから、他の労働過程の結果としての生産物が、当該労働過程に移されたものと考えなければならない。同様に、この労働過程の生産物も、自己の消費のためとは限らず、他の労働過程に原料を供給するとか、他人の労働力の再生産のために使われるとかといった役割を果すこともあるであろう。…個々の労働過程はそういう社会的な編成の一環として位置づけられることになる。このように個々の労働過程を、社会的に編成された生産活動の総体の一環として捉えれば、それは生産過程 Produktionsprozeß : process of production となるわけである（同：229, 傍点は原著）。

山口も同様の視点を打ち出している。

最終消費までの間に人間労働は中間的に様々な生産物として外化し、それらをまた労働手段なり労働対象にして、労働の媒介や対象化を繰り返すのである。…こうして、人間集団の内部の労働と労働の連関は、この労働の中間的な生産物化の関係を通して、生産物と生産物の連関を作りあげることになる。労働過程を生産過程として捉え直すのは、人間の自然との物質代謝がこのように無数の特殊な生産物の生産過程の有機的な分業編成体と生産物連関を作りあげることを通して遂行されることを示すためなのである（山口 [1985]：85）。

このように労働過程を生産物の観点から捉え直す生産過程論の意義の1つは、生産物の生産に要する生産過程相互の連関に焦点を当てることにある。

b) 合目的的編成

他方で、[A]「生産物の視点」から労働過程を捉え直すことは、「人間労働の主体性」という観点から押さえられていた労働対象・手段及び労働そのものが、生産物生産という目的に沿うように合理的に、言い換えると手段的に編成されることを意味する。

要するに、ある使用価値が原料か労働手段か生産物かのうちのどれとして現われるかは、まったくただ、それが労働過程で行なう特定の機能、それがそこで占める位置によるのであって、この位置が変わればかの諸規定も変わるのである。／それだから、生産物は、生産手段として新たな労働過程にはいることによって、生産物という性格を失うのである。それは、ただ生きている労働の対象的要因として機能するだけである。紡織工は、紡錘を、ただ自分が紡ぐための手段としてのみ取り扱い、亜麻を、ただ自分が紡ぐ対象としての取り扱う（S. 197）。

労働対象と労働手段が生産手段とされ、労働そのものが生産的労働となる、とはこのような過程

の手段視の結果であり、生産手段を労働対象・手段の単なる総称、生産手段を労働そのものの単なる言い換えとして済まされないことは明らかであろう。

さらに、生産物生産のための生産手段と生産的労働の分業編成からは、生産と消費の別も浮かび上がってくる。

山口は、先の引用に続けて「この分業によってはじめて個々の人間について、生産する財と最終的に消費する財の分離が生じ、したがってまた生産主体と消費主体の分離が生じ、生産と消費の区別を措定することができることになる。こうしてまた個々人の労働は生産物を生産する生産的労働という規定を受けとり、その規定性において消費と区別されることになる」(同)と述べている。

最終消費財を念頭に置くことによって、手段化された過程である生産に対する、自己目的的な消費という区別も可能になる。

3. 目的視点——不生産的労働の分離

ある物の生産に要する生産的労働と生産手段が目的合理的に編成されるということは、目的を達成する限りで効率的な編成が志向されるということであり、生産的労働は、生産手段の生産に要する労働も含め、生産物との間に量的安定的関係が生じる。

大内は、先に引用した箇所で「社会全体の生産=再生産はこのように諸労働過程の相互依存関係のもとにおこなわれるのだが、そうなればそこには、さきにも示唆したように、かならず一定の原則的秩序が必要となる」(大内力 [1981]: 229)と述べている。

大内が上の引用に関わる註の中で参照を求めている菅原陽心は、最終消費財の生産に必要な生産系列を具体的使用価値名は用いずに記号化して示し、「労働の二重性」を抽出したうえで、「このような各生産過程内、並びに各生産過程間には一定の生産技術に規制された技術確定的な関係があると想定してよいだろう」(菅原 [1980]: 26)、と指摘している。

同様に、山口も生産過程間の連携を記号を用いて示した後、「分業編成における各生産過程ないし生産物の量関係」を問い、「ある時代なり時期なりをとると、自然との物質代謝を一般的な基盤として様々の生活を営んでいるある人間集団の文化の型、生産技術の水準、需要の構造などはある期間はほぼ安定していると考えられる。そして、そのような諸条件が安定している場合には、社会的生産の一環をなすある生産物の生産に必要な諸生産手段の量と生産的労働の量の間にはほぼ安定的な関係があると想定することが可能であると考えられる」(山口 [1985]: 85)と、基準編成⁵の存在とそこにおける量的安定的関係⁶を明らかにしている。

5 「この(数値例を指し——引用者)場合6.4.20,あるいは3対2対10,という比率は,こういうふう編成するのが安定的で,標準的であるという比率のことです。これを基準編成と呼ぶことにします」(山口 [1995]: 113-114)。

6 もちろん,このような人間社会に普遍的な基準編成は,定量性をもつといっても,「かなり大きな変動幅の間での緩い安定的関係である」ことに留意する必要がある。すなわち,「たとえば…社会的生産編成の例解 Km-

このように定量性をメルクマールに生産的労働を規定することは、他面で、定量性を有さない労働、自己目的的な面が多く残り、手段性が弱い労働が「不生産的労働」としてあぶり出されることを意味する。

生産と消費 ちなみに、小幡道昭も生産的労働の定量性を認めている。但し、その定量性は、生産が自然法則に規定された〈モノとモノとの反応過程〉であることに起因する、という認識に立っている。

小幡は、従来の労働概念が生産に偏重していたために、商業・金融などの市場活動やそれに随伴する運輸・通信といったサービス、あるいはこれまで市場とは異なる原理に依存してきた教育・医療や育児を把握しきれていないとの反省から、まず生産概念を労働に関わりなく規定することにした。

そもそも社会的再生産という把握のためには、〈過程〉という概念がその基礎として与えられる必要がある。…この場合、最低限必要となるのは、そこに人間主体による逐次的な統御の介在を要するにせよ、投入と産出との間に計量可能な安定的な関係が存在するという事である。出発点となる状況とそれに続く状況との間に、たとえ原因と結果として定性的に捉えうる関係がみられても、それだけでは生産という概念を構成するための基礎としては充分ではない。そこには明瞭な量的規定関係が存在しなくてはならないのである。そして、基本的には客観的な自然法則によって支配される〈モノとモノとの反応過程〉のうちには、その複雑さのために人間主体によって完全には認識できないにせよ、ともかくある幅で統御可能な安定的な関係が潜んでいるといえる。生産という概念の定立にとって、投入と産出との間に定量性を具えたいいくつかの過程の抽出が基礎的条件となるのである（小幡 [1995]：7）。

生産をモノの反応過程に関する量的概念として捉えているため、過程の量的結果がプラスなら生産、マイナスなら消費と規定される（同：6）。

そのうえで、労働そのものは、人間の主体性の証である目的意識性を果たすうえで相互のコミュニケーションを不可避免的に伴うが故に、定量的な生産的労働に収まらないことを指摘する。すなわち「問題は『労働そのもの』が目的実現の手段の体系化や他の目的との整合性をはかるコミュニケーション活動を内包するとすれば、それ全体がその活動の量と成果とを定量的に関連づけることがむずかしという点にある」（同：10）。そのうえで、生産力の発展する前線において非定量的な「労働そのもの」のなかから定量的部分が生産的労働として発生する、という独自の労働観を披瀝しているのである。

以上、小幡の立論の特徴は、客観的な自然法則によって支配される〈モノとモノとの反応過程〉である生産における労働と相互のコミュニケーションなど主体性が発揮される「労働そのもの」

Pml-PmlII の Pml をとってみよう。…そこで考えられていた労働は、一定の文化的条件を前提にしたいわば人間生活の一部としての労働であった。すなわち、そこでの1日9時間という労働時間は、それぞれの社会の文化状況、生活様式、労働慣習に応じて、その中にたとえば共同体的団らんや儀式の時間、神への祈祷、礼拝の時間、昼寝の時間、大衆討議の時間などが含まれることを排除しない労働時間なのである」（同：104、他にも同：86-87）。

とを截然と分けている点にある。

しかし、客観的で定量的な生産的労働とコミュニケーションを含み非定量的な労働そのものという区分には疑問が残る。というのも、たとえ単純労働であろうとも、人間労働である以上、相互のコミュニケーションの可能性を否定できないからである。むしろ生産の定量性は、自然法則から直截に与えられるのではなく、〈モノとモノとの反応過程〉に人間労働による合目的制御⁷が加わることによって、つまり目的合理的な生産編成が追求されることによって初めて確保される、と理解すべきであろう⁸。

また、生産と消費をモノの過程と捉えることは、消費に伴う労働を批判対象である生産に偏重した労働概念と質的に区別することを困難にしている。小幡にとって、モノの過程である生産と消費とは、状況によって入れ替わりうる過程の量的ポジション（正負）によってのみ区別されており、質的差異を設定できないからである。

4. 連関の視点——価値非形成労働の表出

生産過程相互の連関を意識することによって浮かび上がるのが、諸生産過程の連結を司る諸労働の存在である。

この点を指摘したのは菅原 [1980] である。すなわち、生産物の生産に必要な生産的労働は直接に使用価値の変容に係わる労働に限らない。例えば綿糸を生産するための労働には「生産物素材に直接使用価値的变化を与える形でのつながりを有することなく、しかも綿糸を生産していく生産系列には不可欠に組み込まれている労働」（同：24）が含まれるとして、具体的には調整労働を挙げている⁹。

しかし、これらもある生産物の生産に要する労働という意味では生産的労働であり、つまり山口のいう基準編成に含まれ、ある程度の量的安定性を有するであろうが、その一部、特に調整労働は、価格変動の重心を規定する、という意味での価値形成労働とは言えない。

すなわち、これらの労働は、まず第1に、調整のタイミング、程度の判断が重要であり、それ

7 労働における人間の主体性について、目的設定ばかりでなく、行動の合目的制御を加えたのが山口 [1985] である。

8 実は小幡自身も、生産の定量性の根拠を自然法則に求める一方で、最終的には目的意識的な労働によってその定量性が担保されていることを認めている。すなわち、「人間の合目的活動が、外的であれ内的であれ、自然的過程と結びついている以上、そこには人間が意識的に制御・管理することによってはじめて安定した結果が生じるような半自動の過程が内包されている」（小幡 [1995]：11）。あるいは「生産という概念は本来〈モノとモノとの反応過程〉に関するものであり、社会的再生産の基本、生産過程は労働なくしても規定可能だが、社会的再生産に労働が関与しないことを意味するわけではない、投入と産出の間にはさまざまな攪乱要因があり、安定した対応が再現されるとはいえない。耕地を耕し水量を管理するなどの労働に支えられて、潜在的な投入と産出の安定的な関係ははじめて再現される。自動化された機械で紡いでも、綿糸は切れる可能性があり、その処理に労働主体の関与は欠かせない」（小幡 [2009]：148）、と。

9 山口 [1985] は、基準編成の中に無体の生産物の生産を組み込んだ。すなわち、「無体のPm（生産手段）」として具体的には、生産過程間の連結を司る調整効果の他に、従来流通費用論で論じられていた運輸、保管、通信等の効果を挙げ、さらに「連結と必ずしも関係なく、特殊な生産過程そのものの内部で労働の遂行を助けるのに消費される種々の有用効果」「労働補助効果」として、生産過程内の照明、冷暖房、音楽、神事、医療、技能教育も挙げている（同：90）。遡れば、既に山口 [1972] は『資本論』を援用しつつ、工場内の照明を司る労働を「生産的労働の一部をなす」と指摘していた（同：120）。

には経験と生産過程に関する知識を要するので、追加供給は容易ではない。

第2に、調整のタイミング、程度は企業によってバラツグが大きい（不確定的）である。

他方、山口によれば、価値形成労働の要件は、その質が単純労働化しているうえに、資本の効率性原則によってムダのないように締め上げられ、生産物との間に量的技術的確定性を帯びていることにある。

というのも、「従来の、価値ないし価値量という概念は、時と所によってバラつき、変化する多様な価格のいわば平均、あるいは変動の重心を規定する一種の基準概念という意味」であるから、「価値形成労働というのも、このような基準概念としての価値を形成する労働、つまり『社会的に標準的な生産条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度をもって』商品を生産し、その商品の価格変動の重心を規定することになるような社会的必要労働」に限定される（山口 [1978]: 174-175）からである。

以上、同じく定量性を有する生産的労働でも、価格変動の重心を規定する価値を形成する労働とその意味では価値を形成しない労働の2種類あることがわかる¹⁰。

抽象的人間労働の二重化 以上のような、生産的労働と価値形成労働との区分を理解するには、山口のいう「抽象的人間労働の二重化」、すなわち「抽象的人間労働というのは広義と狭義の意味がある」（山口1995: 116）ということを念頭に置く必要がある。

諸商品の価格変動に法則性がある、つまり重心があるのは資本主義的商品に特有のことであるから、法則性の根拠も資本主義的なものと考えられなければならないであろう。すなわち、労働生産過程は資本によって担当されることによって特殊な変造を受けるのであり、変造された特殊歴史的な労働生産過程における効率的な社会的生産連関が価値法則の根拠をなすと考えられるのである。…すなわち、人間の労働も、あらゆる社会に共通に、互いに同質的な抽象的な人間労働と異質な具体的有用労働の二重性を持っているが、同時に資本主義的な労働生産過程においては、それは特殊歴史的に変造された労働としての二重性を持つことになるのであり、したがって、抽象的人間労働にもあらゆる社会に共通なものの特異資本主義的なものがあると理解されなければならない。そして、価値法則の実体的根拠をなすのは、後者の特殊歴史的な規定性を受けとっている抽象的人間労働であるといわなければならないであろう（山口 [1990]: 16）。

市場関係に媒介されていない世界でも規定できるような、…広義の抽象的人間労働、これが市場関係に媒介され、締め上げられ、変造される。それを狭義の抽象的人間労働として規定

10 このような狭義の価値形成労働の要件からすれば、例えば、レストランにおける給仕でも、「特殊な認識や経験や判断力を有し、他の給仕と代替不可能なもの」の「提供するサービスは、需要の増大に応じて弾力的な追加供給が可能というものではなく、「価格変動には基準がない。つまり、この労働は価値形成労働（もちろん狭義の）とはいえない」。他方、「誰がやってもほぼ同じ結果が得られるような単純労働によって提供される」給仕の大多数のサービスは「その価格変動にはその商品の生産に要する社会的必要労働が規定する重心があり、したがって、それを提供する給仕の労働は価値形成労働であるということになる」（山口 [1978]: 181）。

する (山口 [1995]: 116)。

ちなみに資本による労働過程の変造とは「直接に労働している時間以外の資本にとってのいわば無駄な時間をギリギリの限度まで排除して、労働の密度を高めると同時に、一定の賃金当たりの労働時間をできる限り延長する」(山口 [1985]: 104-105, 他にも同 [1984]: 35) ことを指す。

Ⅲ 生産的労働概念の可能性

以下、生産的労働概念再規定が従来の議論に対して有する意義を、複雑労働と家事労働の2点に亘って確認する。生産的労働概念をそれが表象していた価値形成労働概念と区別したことにより、価値形成労働とは異なる2種類の労働が浮かび上がったからである。すなわち、商品を生産しながら、狭義の価値を生産しない労働としての複雑労働、および単に商品を生産せず価値も生産しないという理由からではなく、定量性に乏しいという理由で生産的労働に該当しない家庭内の労働である。

1. 複雑労働の単純労働への還元論

特別の訓練を要する複雑労働については、久しくその生み出す価値の単純労働の生み出す価値への還元が問題にされてきた。

『資本論』は冒頭商品論において「それ(価値実体としての人間労働——引用者)は、平均的にだれでも普通の人間が、特別の発達なしに、自分の肉体のうちにもっている単純な労働力の支出である。…より複雑な労働は、ただ、単純な労働が数乗されたもの、またはむしろ数倍されたものとみなされるだけであり、したがって、より小さい量の複雑労働がより大きい量の単純労働に等しいということになる。このような換算が絶えず行なわれているということは、経験の示すところである。ある商品がどんなに複雑な労働の生産物であっても、その価値は、その商品を単純労働の生産物に等置するのであり、したがって、それ自身ただ単純労働の一定量を表わしているにすぎないのである。いろいろな労働種類がその度量単位としての単純労働に換算されるいろいろな割合は、1つの社会的過程によって生産者の背後で確定され、したがって生産者たちにとっては慣習によって与えられたもののように思われる」(S. 59, 傍点は原文)と述べている。

この換算については種々議論があった。複雑労働の生み出す価値の大きさの規定要因を、複雑労働力の価値の大きさに求めるか、複雑労働力に貯えられた養成労働の価値の大きさに求めるかで論争が繰り上げられた。

養成労働によって価値を高められた複雑労働力が、より高い価値を生み出すとする立場(遊部, 安倍, 花井, 和田, 櫛田)に対しては、第1に労働の生み出す価値は労働力の価値に制限されない(S. 207-8)というマルクス価値論の公理に反する、第2に還元問題は労働力商品化以前の単純な商品生産の問題である、との批判が寄せられた。他方、過去の修業労働や養成労働が、複雑労働力に貯えられ、あたかも生産手段のように支出されると考える立場(荒又, 金子)に対しては、第

1に（価値が移転するだけで新たに生み出される価値 $v+m$ は変わらないのに複雑労働力であるため可変資本 v は上昇するから）剰余価値率 m/v が平均以下に落ち込むことを甘受するお人好しの資本家を想定することになる、第2に高い価値形成力について経済学的説明を欠く（櫛田）との疑問が寄せられた。

両説の疎み合いは続いているものの、複雑労働は単純労働に比しより大きな価値を生み出すことを認め、その大きさの源を養成労働や修業労働の価値の大きさに求めている点は共通している。

しかしながら、この場合の「価値」とは回収すべきコストという意味¹¹での「広義の価値¹²」であろう。

他方、通常、労働価値説で想定される価値は、価格変動の重心を規定する「狭義の価値」である。重心価値を規定する労働の条件は、先に確認したように、その質が単純労働化しているうえに、資本の効率性原則によってムダのないように締め上げられ、生産物との間に量的技術的確定性を帯びていることであった。

この基準からすれば、複雑労働は価値形成労働とは言えない¹³。むしろ複雑労働を扱う理論的意義は、その生み出す価値の単純労働の生み出す価値への還元論とは別の所にある、というべきであろう。

1つには価値非形成労働としての具体的態様であり、もう1つは単純労働とは異なる市場の成立、労働市場の分立である。

前者については、例えば、複雑労働のうち、勤続経験につれて技能が伸張する労働は、出来高給や時間給によってその態様が外形的に把握できる単純労働と異なり、一方で労働の具体的態様を観察したり、特別な訓練を必要とする程度を測ったりするために査定が必要になり、他方で勤続を評価する必要が生じる。いわゆる能力主義的労働¹⁴である。

以下では、後者を取り上げる。

2. 小幡の労働市場「二層化」論

小幡は、自己労働の理論的扱いの困難を理由に複雑労働の還元問題に深入りすべきではないと

11 「このような区別（単純労働と複雑労働の区別——引用者）は、商品生産の社会ではどのように考慮されるのか。／商品生産の社会では、ある商品所有者が特別の修業費を必要とした労働力をもっている場合、その修業費は、彼が私的に支出したものである。しかも彼はこの修業費を、自分が提供する商品との交換によらないでは回収できない。だから、この社会で複雑労働が必要とされるかぎり、複雑労働力の所有者が、彼の商品の交換をつうじて修業費をも回収することができなければならないのである」（大谷 [2001] : 61, 傍点は原著）。

12 「抽象的人間労働の二重化」を唱えた山口 [1990] の主題はむしろ「価値概念の広義化」であった。すなわち、社会的均衡を前提としない流通主体の無規律な動きを叙述するために、価格変動の重心を規定する価値「狭義の価値」とは別に、すべての商品が保有し、同じ商品種でも時と場所によってばらつきうる価格に対応した形相としての価値「広義の価値」を設定したのである。

13 特別な訓練を要するため追加供給に難がある。またそのためしばしば売手市場化し、労働の裁量性が認められ、量的確定性を欠く。

14 能力主義と賃金の年功性との関係がしばしば話題になる。安田 [2016b] 第3章では能力主義的労働の要件を査定適用、勤続昇給の2点とした。能力主義、メリットクラシーとは成績で処遇に差を付けるという意味であるし、正社員が非正規雇用と対照的に勤続昇給しているように「年功制と能力主義は野合」（木下 [1999] : 125）関係にあるからである。

警告していた¹⁵。

他方で、小幡は労働力の販売に伴う型づけコスト等を理由に常雇の発生を説いている。すなわち、労働力商品はその販売のために一定の「型づけ」が必要であり、一度、型づけに成功した労働者はその労働市場に固執する。他方、資本は、集団力¹⁶を発揮するために、労働者相互のコミュニケーションを維持するなど一定の費用を投入することになり、いま雇っている者を日傭いには代えにくい。小幡は、両コストの存在を根拠に労働市場について常雇と産業予備軍との分離を導く。

労働市場で取引きされるのは、いうまでもなく労働力であり、それは…分析してゆけばだれがやってもそう大差がでるとは考え難い基本活動の束に帰着する。だがこの基本的な能力は、実際には一定の型をもった労働として発揮されなくてはならない。…労働市場における売り手たる労働者間の競争は、この種の型づけを含むかたちで展開されるようになる。この場合、型づけのためには、労働者の側の主体的な努力とともに、一定の物的消費をとまなうこともあろう。…しかも、この型づけにはある期間を要し、また同時にいくつもの型づけをおこなうことはできないという点がこれに加わる。こうして、労働市場はこの種の型づけを取込むことで…摩擦の大きな市場とならざるを得ないのであり、労働力商品はいわば重い媒体を介して売買されざるを得ないことになるのである（小幡 [1990] : 60-61）。

労働力は、個々の労働者が商品として別々に販売する。しかし、資本主義的な労働過程の基盤は協業にある。資本は多数の労働者を購買することで、集団力を手に入れる。これは個別分散的な労働者の寄せ集めでは乗り越えられない障壁をなす。労働力は資本のもとで組織化される必要がある。この労働組織は、外部からの支配・監督されるだけでなく、主体間のコミュニケーションを通じて維持される。日傭い型市場によって、労働主体を日々入れ替えることは、労働組織の形成・維持を困難にし負担が高（かさ）む。このため、同じ労働主体が持続的に雇用される傾向が生じるのである」（小幡 [2009] : 172）。

労働市場にはこれ（日傭い労働型の市場——引用者）に還元できない二層化現象が観察される。すなわち、一度売れた労働力は繰り返し売れ、逆に一度売り損なうと、そこから脱却するチャンスをつかむのは容易でない。失業は持続するのである。こうして、労働力商品の売

15 「マニュアル本を買っただけでは技能は身につかない。それを読んで習得する必要がある。ここに真の問題がある。マニュアル本と技能を区別し、技能を生産物だといえ、習得活動としての労働が顔をのぞかせる。生活手段のみで価値規定されていた労働力の再生産では、空白化されていた自己労働である。もし、自分で自分の技能を磨くために費やした時間も、技能の価値を形成するならば、自分の労働力の一部を技能の『生産』に振り向け、それだけ自分の労働力を高く売ることまでできることになる。さらにその場合、必要労働を越える剰余労働を自分の『技能』に対象化し、その分は搾取を免れることができることになるかもしれない。技能の『生産』といっても、そのために費やされた自身の活動を労働としてカウントしようとすると奇妙なことになる。『資本論』の枠内でこうした袋小路を抜けるには、労働力商品の価値規定の基本にもどり、労働力の生産といっても、その生産には生活手段の消費にかかわる自己労働は一切かかわらないとしたことに倣うほかない」（小幡 [2014] : 25-26、初出時・同 [1990] とは叙述が改編されている）。

16 小幡 [1997] は、『資本論』に至るマルクスの協業および分業に関する諸規定を再検討し、従来包含関係にあるものとされていた両概念を、個々の労働が集団労働のなかでしか力を発揮できないために全体を指揮・監督する資本に支配が移転することを強調する「集団力 (Massenkraft)」としての協業 (S.345) と「集合」労働において個々の労働が相互に前提され労働の連続性や規則性が可能となるように標準化してゆくこと、すなわち分業 (S. 365-366) とに意識的に区分した。

り手は、常備（じょうよう）労働者と持続的失業者に分離する傾向を示す」（同：171-172）。ちなみに市場における摩擦とは、商品が流通過程を通過するのに時間を要することを指す¹⁷。型づけを要する労働は、型づけに「一定の物的消費」と「ある期間」を要するという点で、単純労働に比し特別の訓練を要する複雑労働と同型である¹⁸。

また、既にコミュニケーションが形成されている労働者を日傭いに置き換えては、労働組織の形成・維持に新たに「負担が高（かさ）む」のであるから、労働組織の「コミュニケーションを通じて（の）維持」には費用が発生していることは確かである。型づけコストと対比して、組織化コストと言えよう。

小幡の意図は、賃金の下方硬直性を社会道徳からではなく、市場のもつ緩衝機構の作用として市場機構的に説くことにあった。そのため、両コストにより労働市場が常雇と産業予備軍とに「二層化」していること、特に型づけコストにより産業予備軍が存在しても直ちには労働市場には流入しないことを導く必要があった¹⁹。

しかし、両要因とも常雇を導くのは難しい。

まず、労働者負担の型づけコストは解雇を、資本家負担の組織化コストは離職を防げない。

型づけに伴って必要な「一定の物的消費」と「ある期間」が労働者本人の負担であることは、販売費用という見立てや「労働者の側の主体的な努力とともに」との表現により明らかであり、その負担を行わない資本家による解雇を防げない。

他方、組織化コストについても、「日傭い型市場によって、労働主体を日々入れ替えることは…負担が高（かさ）む」と資本家視線で記述されているように、資本家の負担と考えられている。そのため、組織化コストでは費用負担していない労働者の離職を防げない。

労働者の定着には、企業独自の技能・知識が経験とともに蓄積すること、言い換えると企業特長的で、費用を労使折半せざるを得ない技能や知識の発生が必要であろう。

第2に、産業予備軍は持続的失業者とは限らない。

まず産業予備軍は、オファーがあれば直ちに就労に向かう存在であり、就労する意思がなければ

17 「いま摩擦ということで念頭においているのは、さしあたりある売り手が他の売り手より価格を多少下げること、ただちに販売の優先権を全面的に獲得できる保証にはいっさいないといった事態である。もしこのような摩擦が存在しないものとすれば、売り手は次々に他より多少低い価格をつけることで即座に市場という箱を通過し得るのであり、その結果バッファは潰れることになる」（小幡 [1990]：45）。

18 小幡自身はその費用の性格は販売費用に近いとみている。「個々の労働者にとって重要になってくるのは、その選択の幅に収まる型のうちからどれを採るかという選択にある。すでに述べたように問題は、その選んだ型づけが完了した時点で、それが産業雇用の際間にうまく嵌るかどうかが、けっきょくわからないところにある。その意味で、いわゆる『修業費』は『技能』の生産のためのコストというよりも、販売のための経費とみるほうが妥当な面さえもっている。そしてこのかぎりにおいては、理論上も同類のリスクをとまなう流通費用に準じたものとして処理するほうが適切な側面を含んでいるように思われる」（小幡 [1990]：94）。しかし、回収できるか否かが不確かなのは費用一般に通じるし、その形成が「一定の物的消費」と「ある期間」を要することが供給制約となっている点では複雑労働と同型であろう。

19 「産業雇用に対する産業予備軍が労働力の再形成に拡張的に利用されている面をもち、その結果産業雇用からいわば無定型化されて排出されてくる労働力がただちに賃金を引下げ方向には作用しにくい、と同時に、労働力の型づけに一定の期間がかかるという摩擦因子が市場の無規律性を増幅し、ある傾向から外れた変動に対しては産業雇用のための共用バッファとしての機能も完全には作動しないことになる」（小幡 [1990]：92-93）。

ば予備軍，雇用へのバッファたり得ない。

実際，失業者は，生活の必要がある以上，日傭い型市場であれ，労働市場に参入せざるを得ない²⁰。

そして，産業予備軍が存在する以上，賃金への下方圧力は常にあるのであり，賃金の下方硬直性の説明には，市場機構だけではなく，労働能力が人間としての生活と切り離せないことに由来する社会的観点が不可欠であろう。

むしろ，複雑労働の理論的意義は，その要件である特別の訓練の必要性が追加供給を困難にし，単純労働とは別の市場を形成するという点，労働市場の分立にある。

単純労働以外の労働市場が存在するならば，その労働市場における賃金労働者の行動，例えば勤続昇給や，労働力としての供給制約の資本蓄積への影響，あるいは複雑労働の単純労働化等が理論的な課題となろう。

3. 中川スミの家事労働論

第二次主婦論争で提起された家事労働の経済理論上の諸問題（磯野富士子 [1960]，古賀良一 [1979]）について，中川スミは『資本論』に即して次のように答えた。

まず，家事労働は価値を生むかに対し，同じ私的労働である商品生産労働が「生産物の交換をつうじて社会的労働の一分枝であることを証明するような労働」であるのに比べ，「その私事性の度合においてより深」い。また「市場での交換をつうじて商品が受けとる抽象的人間労働の，この『社会的実体の結晶』としての価値の規定を受けとることはない」ので「家事労働は価値を生まない」（中川 [1987]：39-41）。

家事労働は労働力商品を生産しているかに対しても，労働力は「生きた個人の素質としてのみ実存」し「労働力の生産とは，この個人自身の再生産または維持のこと」（S. 184-185）だから，「家事労働であれ何であれ，労働が労働力を直接生産することはできない」（中川 [1999]：19-20）。

さらに，家事労働は労働力商品の価値を形成するかに対しては，賃金を規定する生活資料の内容は歴史的に決まり，（クリーニングや家事代行業等）「社会的分業の一環にな」っているから労働力商品の価値に算入されるものの，「同じ労働が個々の家庭のなかで家族員によって担われる場合は…入らないのはいうまでもない」（中川 [1987]：75註3）。

20 小幡は産業予備軍は，賃労働には従事していなくとも，労働力の社会的再生産を担うという拡張バッファとして機能しているという。「商品として生産されたものは商品として売れなければなんの役にも立たないが，本来そうでないものは売れなくてもまったく役に立たないというわけではない。たとえば，これまでの歴史のなかで，女性に強く押しつけられてきた家事労働や，さらに都市化に伴う雑役のようなものは事実上この種の産業予備軍によって支えられてきたのである。／その意味で，この予備軍は産業雇用に対する共用バッファとして機能を果たすとともに，雇用労働者の生活を背後から支えるといういわば無用の用の役割をも果たし，重複的に産業雇用と結びついているのである／そこ（労働市場——引用者）では，産業雇用に対する直接的バッファとしての産業予備軍が分化すると同時に，これがまた労働力の形成・維持を背後から支える拡張バッファとして結合している，複合構造ないしは共用体が検出されるのである」（小幡 [1990]：64-65，同 [2014] では表現が変更されている）。しかしながら，拡張バッファ機能が失業者の生活を支えるに足るかははなはだ疑問である。「二重のバッファ」論については稿を改めて論じたい。

しかし、最後の点、ある労働が労働力商品の価値を形成するかは、その労働の価値形成性とは別の問題であろう。というのも、例えばクリーニングや家事代行等、いわゆるサービス労働の価値形成性を認めない論者も、それに関わる費用が労働力商品の価値を形成しうることは認めるからである。そして、往々にして外部サービスが費用として計上されるのは、外部化が労働の質的な定式化、すなわち定量性を前提にしているからである。つまり、ここでは労働の価値形成性ではなく、定量的な生産的労働に該当するか否かを問題にすべきであった。

中川 [1999] はまた、『資本論』が家族賃金思想に染まっているというフェミニズムからの批判 (Barrett & McIntosh [1980], 高島道枝 [1993]) に対し、第1に賃金に家族扶養費が含まれるとの件 (S.417) は当時の状況を記述したにすぎず当為として示したものではない、第2にむしろマルクスは女性の社会進出が進めば、成人男性賃金に含まれていた家族扶養費が成人女性の賃金に分割され、賃金が個人単位となって、両性の平等も高まると考えていた (S. 514)、と2点に亘り反論している。

しかし、労働力の価値が完全に両性に分割できるという想定は、家庭における消費に伴う労働がすべて定量的で外部化可能な生産的労働と想定していることになる。果たしてそうか。

4. 家庭内の消費に伴う労働

同じ家庭内の消費に伴う労働といっても、定量性という観点からみると2つに分かれる。

例えば、家庭内の消費に伴う労働、炊事、洗濯、ケアがすべて贅沢に時間を掛けて愛情たっぷりに行われるわけではない。家族が多かったり、自身も賃労働に従事していたりするため、テキパキこなさなければ、自由時間がなくなったり、賃労働に差し障りが出たりするからある。むしろそれらの労働を外部に委ね、自身はフルタイムで就労した方が稼ぎも増え、生活が楽になる場合もある。

このように、効率的にこなすことが追求される部分は定量的な生産的労働である。量的に確定させることにより、料金次第では外部サービスに委ねることも可能となる。この場合、外部サービスに委ねていてもいなくても、費用として確定可能であり、「アンペイド・ワーク」という見立ても可能となる。

しかし、家庭内の消費に伴う労働のなかには、消費主体の充足を優先し、可能な限り時間が費やされる労働もある。これらは、消費主体や労働主体の状況次第で投入量が変わり、定量性が見込めない。不生産的労働と言える。

これらの労働は定量化できないため外部化しにくい。仮に外部サービスを利用する場合にも、不十分と思えば、追加的に指示、加工することになる。したがって、家庭内に、たいてい女性の負担として残る。非定量的で費用化できないのであるから、ペイド・アンペイドの問題ではなく、家庭内の分担、そのための時間確保、生産的労働の時間短縮が課題となろう。

(本稿は、経済理論学会第64回全国大会 (2016年9月15-16日, 福島大学) での分科会報告の原

表2 価値形成／非形成二元論から、価値形成／非形成、生産的労働／不生産的労働の二軸論へ

商品生産	定量性	技術的確定性	具体例
有) 広義の価値形成労働	有) 生産的労働	有) 狭義の価値形成労働	資本に投下された単純労働は、量的に切り詰められており、同じ商品にはどの資本でも一定量必要（価格変動の重心を規定）。
		無) 狭義の価値を形成しない労働	複雑労働（特別の訓練を要する労働）。そのうち勤務経験に応じて技能が累積するケースは、査定と勤続昇給を特徴とする能力主義的労働
無) 広義の価値も形成しない労働	無) 不生産的労働		効率的に追求される部分は定量性があり、外部化可能。外部化していなくても、費用化可能。「アンペイドワーク」。
		定量性はなく外部化不能。費用の問題ではなく、分担・時間の問題。	

稿に手を加えたものである。分科会のコーディネータと報告のコメンテーターを務められた鈴木和雄弘前大学教授ならびに質問者にこの場を借りて謝意を表したい。）

参考文献

（本文中の引用頁数は雑誌論文が書籍に収められた場合には後者の頁数を指している）

- 青才高志 [1977] 「価値形成労働について——生産的労働とサービス」『経済評論』第28巻第9号。
- 赤堀邦雄 [1971] 『価値論と生産的労働』三一書房。
- 阿部照男 [1967] 「マルクスの生産的労働論の生成について」『商学論纂』（中央大学）第9巻第6号（後に阿部 [1987] 第1章）
- [1987] 『生産的労働と不生産的労働』新評論。
- 安部隆一 [1951] 『「価値論」研究』岩波書店。
- 荒又重雄 [1962] 「複雑労働の単純労働への還元の問題に関する試論」『経済評論』第11巻第6号（後に荒又 [1972] 所収）。
- [1972] 『価値法則と賃労働——賃労働論研究序説』恒星社厚生閣。
- 磯野富士子 [1960] 「婦人解放論の混迷」『朝日ジャーナル』1960年4月10日号（後に上野 [1982] 所収）。
- 石倉一郎 [1977] 「労働過程論の位置と本源的規定」『経済理論学会年報』第14号。
- 上野千鶴子編 [1982] 『主婦論争を読む』勁草書房。
- 宇野弘蔵 [1950,52] 『経済原論』岩波書店。
- [1973] 『「資本論」五十年・下』法政大学出版局。
- 大内 力 [1981] 『経済学原論（上）』（大内力経済学大系第2巻），東京大学出版会。
- 大谷禎之介 [2001] 『図解 社会経済学』桜井書店。
- 小幡道昭 [1990] 「労働市場の変成と労働力の価値」『経済学論集』（東京大学）第56巻第3号／後に小幡 [2014] 第1部。

- [1995] 「生産と労働」 同上誌第61巻第3号。
- [1997] 「協業と分業」 同上誌第63巻第2号。
- [2009] 『経済原論』 東京大学出版会。
- [2014] 『労働市場と景気循環』 同上。
- 金子ハルオ [1959] 「生産的労働と国民所得」 『経済評論』 1959年10月号。
- [1963] 「単労働と複労働」 『経済と経済学』（東京都立大学）第10/11号。
- 木下武男 [1999] 『日本人の賃金』 平凡社。
- 榎田 豊 [2003] 『サービスと労働力の生産』 創風社。
- 古賀良一 [1979] 「労働力の価値と家事労働」 『商経論集』（北九州大学）第1巻第4号。
- 小椋廣勝編 [1954] 『国民生活と平和経済』（『日本資本主義講座：戦後日本の政治と経済 第8巻』）
岩波書店。
- 清水正徳ほか [1972] 『宇野弘蔵をどうとらえるか』 芳賀書店。
- 菅原陽心 [1980] 「労働生産過程と資本主義的生産」 (菅原ほか [1980] 所収)。
- 菅原陽心 [2012] 『経済原論』 御茶の水書房。
- 菅原陽心ほか [1980] 『価値と市場機構』 時潮社。
- 高島道枝 [1993] 「男女の賃金格差と『同一価値労働同一賃金』運動」 『社会政策学会年報』 第37集。
- 都留重人・野々村一雄 [1954] 「戦後の国民所得」 (小椋廣勝編 [1954] 所収)。
- 刀田和夫 [1977] 「労働の対象化、物質化、凝固とサービス労働」 『経済学研究』（九州大学）第
42合併号（後に刀田 [1993] 第7章）。
- [1993] 『サービス論争批判』 九州大学出版会。
- 中川スミ [1987] 「家事労働と資本主義的生産様式」 『高田短期大学紀要』 第5号（後に中川 [2014]
第1章）。
- [1999] 「(学界展望) 経済学とジェンダー——家事労働・労働力の価値・『家族賃金』」
『経済理論学会年報』 第36号（後に中川 [2014] 序章）。
- 中川スミ [2014] 『資本主義と女性労働』（青柳和身・森岡孝二編集） 桜井書店。
- 花井益一 [1961] 『価値と貨幣』 ミネルヴァ書房。
- 馬渡尚憲 [1997] 『経済学史』 有斐閣。
- 森下二次也 [1949] 「国民所得と生産的労働」 『経済評論』 1949年3月号。
- 安田 均 [2016a] 「生産的労働と生産過程論の再構成」 『経済学の座標軸——馬渡尚憲先生追悼
論文集』 第3章，社会評論社。
- [2016b] 『生産的労働概念の再検討』 社会評論社。
- 山口重克 [1972] 「労働生産過程と価値の実体規定」 (清水ほか [1972] 所収，後に山口 [1987]
第II部第2章)。
- [1978] 「流通と価値」 (山口ほか編 [1978] 所収，後に山口 [1987] 第II部第3章)。

- [1985] 『経済原論講義』 東京大学出版会。
- [1987] 『価値論の射程』 同上。
- [1990] 「価値概念の広義化をめぐって」『経済理論学会年報』 第27集, 青木書店 (後に山口 [1996] 第1部第1章)。
- [1995] 「抽象的人間労働と価値法則」『情況』 第55号 (後に山口 [1996] 第1部第6章)。
- [1996] 『価値論・方法論の諸問題』 御茶の水書房。
- 山口重克ほか編 [1978] 『マルクス経済学の現状と展望』 東洋経済新報社。
- 和田 豊 [2003] 『価値の理論』 桜井書店。
- Barrett M. & M. McIntosh [1980], “The ‘Family Wage’ : Some Problems for Socialists and Feminists,” *Capital & Class*, Vol. 11.
- Himmelweit, S. [1995], “The discovery of unpaid work : The social consequences of the expansion of work,” *Feminist Economics*, Vol. 1, No. 2 (久場嬉子訳「無償労働の発見」『日米女性ジャーナル』, 1996年).
- Marx, K. [1867], *Das Kapital*, I, in Marx-Engels Werke, Bd.23, 1962-64 (岡崎次郎訳『資本論』 大月書店, 1958-65年).
- Smith, A. [1776], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 7th ed., by E.Cannan, Modern Library (大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の論』 岩波文庫, 1959-66年).

The Concept of Productive Labor and its Application

YASUDA Hitoshi

As the concept of productive labor has developed as a representation of value formation labor, there have emerged two different views on its criteria, namely one view based on production of products and the other view based on the formation of the supervalve. In both views, however, domestic labor is not distinguished from other types of service labor that do not produce tangible objects, or it is treated as a mere activity.

By reformulating productive labor in the framework of the process of production suggested by UNO Kozo, we can obtain a viewpoint of purposeful organization of production means and productive labor and a viewpoint of cooperation among the processes of production. From the former point of view, it becomes clear that labor is efficiently pursued and it is divided into quantitative productive labor and non-quantitative nonproductive labor. From the latter point of view, the existence of labor that adjusts to the organization of the production process emerges. As a result, it becomes clear that value forming labor that has quantitative technical determinism with outcome and non-value forming labor with poor determinism are to be distinguished.

Due to the distinction between productive labor and value forming labor, two other types of labor, namely complicated labor without value formation and non-quantitative unproductive labor are introduced in addition to the traditional value forming work. The former has difficulty in additional supply, forming a different labor market from simple labor, which functions as disincentive to the accumulation of capital. The latter is non-productive labor which is hard to externalize because of its non-quantitativity and thus remains in the household. This is because consumer satisfaction is given priority over productive labor which is efficiently performed and quantitatively externalizable among labors involved in domestic consumption. What matters is not whether or not it is paid, but whether it is labor sharing.

研究ノート

リードタイムが変動する在庫管理モデルの安定性解析

—スイッチドシステムとしての考察

山形大学人文学部法経政策学科

西 平 直 史

1. はじめに

在庫管理問題において、リードタイムの存在がしばしば問題を難しくすることがある。リードタイムとは、供給が必要になった時点と実際に供給が行われる時点との差であり、生産活動や輸送活動などに要する時間のことである。企業は、リードタイムを短くするため様々な取り組みを行っているが、これを零にすることは不可能である。リードタイムが既知でかつ変動しない場合には、“予測”の精度が高くなり問題は比較的扱いやすい。しかし、リードタイムが未知の場合や、リードタイムが変動する場合には、扱いが困難になる。

リードタイムをもつ在庫管理モデルの解析に関する研究はこれまで数多くの結果が出されてきたが、参考文献1) - 5)では、制御理論を用いて在庫管理モデルを解析する手法が提案されてきた。このうち、参考文献1) - 4)では、リードタイムが既知のものに限られている。参考文献5)の結果は、リードタイムが変動し、かつその上界と下界のみが分かればよいものである。基本的な考え方は、リードタイムの大きさごとにシステムを記述し、リードタイムが変動することをシステムが切り替わるものと見なすことである。しかしながら、同時安定性を用いて解析しているため、切り替わるシステムすべてが内部安定であることを求めるものである。実際には、切り替わった一部のシステムが不安定であっても全体としては安定となることがあるが、そのような状況には適用できない保守的なものであった。本稿では、スイッチドシステムの滞留時間を用いた安定解析法^{6), 7)}を用いることにより、参考文献5)では安定性を保証できなかった不安定なシステムを含むようなシステムに対して、安定性を保証できることを数値例により示す。

2. 問題の定式化

本稿では、参考文献5)と同じ在庫管理モデルを考える。

$$x(k+1) = x(k) + w(k) - d(k) \quad (1)$$

ここで、 $x(k)$ は時刻 k における在庫量、 $w(k)$ は入庫量、 $d(k)$ は出庫量である。リードタイムを $L(k)$ で表すと、時刻 k での発注量 $u(k)$ と実際の入庫量 $w(k)$ との関係は、

$$w(k) = u(k-L(k)) \quad (2)$$

となる。このモデルに対して、メモリーレスフィードバック

$$u(k) = Kx(k) \quad (3)$$

を施すことを考える。また、本稿では内部安定性を考えるため、外生信号 $d(k) = 0$ とすると、システム (1) は

$$x(k+1) = x(k) - Kx(k-L(k)) \quad (4)$$

となる。

つぎに、リードタイム $L(k)$ については、その下界 L_m と上界 L_M が分かっているものとする。すなわち

$$0 \leq L_m \leq L(k) \leq L_M \quad (5)$$

が成り立つものとする。また、本稿ではスイッチドシステムに対する滞留時間^{6), 7)} の考え方をを用いるため、 $L(k)$ の各値をとる割合が既知であると仮定する。例えば、 $L_m = 1$ 、 $L_M = 3$ の場合、 $L(k) = 1$ 、 $L(k) = 2$ 、 $L(k) = 3$ をとる割合がそれぞれ分かっている状況を考える。

つぎに、システム (4) をスイッチドシステムとして表現することを考える。ここでは、 $L_m = 1$ 、 $L_M = 3$ のケースを考える¹⁾。 $L(k) = 1$ のとき、

$$v(k+1) = A_1 v(k) \quad (6)$$

ただし、

$$A_1 = \begin{bmatrix} 1 & K & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \end{bmatrix}$$

$$v(k) = \begin{bmatrix} x(k) \\ x(k-1) \\ x(k-2) \\ x(k-3) \end{bmatrix}$$

である。 $L(k) = 2$ のときは

$$v(k+1) = A_2 v(k) \quad (7)$$

ただし、

$$A_2 = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & K \\ 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \end{bmatrix}$$

となり、 $L(k) = 3$ のときは

$$v(k+1) = A_3 v(k) \quad (8)$$

ただし、

1 一般化はここでは省略するが、参考文献5)と同様に行うことができる。

$$A_3 = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & K \\ 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \end{bmatrix}$$

となる。したがって、システム (4) をスイッチドシステムとして表すと

$$v(k+1) = A_N v(k), \quad (N=1, 2, 3) \quad (9)$$

と求められる。以下ではシステム (9) が内部安定となる条件を考察することにする。

3. 平均滞留時間を用いた安定解析と数値例による検討

システム (9) のようなスイッチドシステムに対して、滞留時間を用いた安定条件が導出されている^{6), 7)}。ここでは、参考文献6)の結果を用いて、システム (9) の安定解析を行うことにする。この手法は、システムの各モード²⁾の平均滞留時間と安定なモードと不安定なモードの滞留時間比に基づいたものである。この定理と証明の詳細は参考文献6)を参照していただきたい。ここではこの結果に基づいた数値例を用いて、この手法を用いた安定解析の有効性を確認する。

参考文献5)では、システム (9) において $K=-0.5$ の場合には同時安定性に基づいた手法では安定性を保証できないにも関わらず、シミュレーションの結果は平衡点に収束していた。ここでは、同じ数値例を考えることにする。 A_1 の固有値³⁾は、 $0, 0, 0.5+i0.5, 0.5-i0.5$ であり、 $N=1$ は安定なモードである。 A_2 の固有値は、 $0, -0.5652, 0.7826+i0.5217, 0.7826-i0.5217$ であり⁴⁾、 $N=2$ も安定なモードである⁵⁾。 A_3 の固有値は、 $0.9163+i0.4577, 0.9163-i0.4577, -0.1463+i0.5507, -0.1463-i0.5507$ であり、 $N=3$ は不安定なモードである。このとき、安定なモードの各固有値の大きさを計算し、その最大値 0.9406 を l_1 とし⁶⁾、不安定なモードの固有値の大きさの最大値 1.0242 を l_2 とする。 $l=0.999999999$ とすると、参考文献6)の定理の条件を満足し、この時の安定なモードと不安定なモードの滞留時間比は 0.3904 と求まる。参考文献5)では、 $L(k)$ を一様分布と考えていたので、各モードの滞留時間は等しい状況を考えており、安定なモードが2つ、不安定なモードが1つであることから、滞留時間比は $2/1=2$ となる。これは求めた滞留時間比 0.3904 より大きいから、このスイッチドシステムは安定であることが言える。滞留時間比は安定なモードに滞留する時間を不安定なモードに滞留する時間で割ったもので、不安定な時間に滞留する時間の割合が大きいほど値は小さくなる。直感的には、不安定なモードの不安定度が小さく安定なモードの不安定度が大きければ滞留時間比はより小さいものを許容できるが、逆の場合には滞留時間比はより大きいものしか許容できないことになる。今回の例では不安定なモードの不安定度が

2 モードとは、システム (9) において $N=1, 2, 3$ の各値のことである。

3 以下での固有値と固有値の大きさの計算には *Matlab* を用いた。

4 ここでの i は $i^2=-1$ となる虚数単位を表すものとする。

5 システムが安定であるための必要十分条件は行列 A_1 のすべての固有値が、複素平面内の開単位円内にあることである。

6 参考文献6)では λ_1 であるが、ここでは l_1 とした。ここでは、他の λ も l として記す。

安定なモードの安定度と比べてそれほど大きくないため⁷滞留時間比が0.3904まで安定であることが保証できる。

最後に、参考文献5)の方法と、本稿での方法を比較しておこう。参考文献5)の方法は、同時安定性の概念を用いているため、システムの各モードがすべて安定でなければ全体システムの安定性を保証できない。一方で、本稿の方法では、不安定なモードが存在していても、システムが全体として安定になる場合にも適用することができ、参考文献5)とは違うクラスのシステムの安定性を保証することができる。一方で、参考文献5)の方法は数値計算によりLMIを解くだけでよく、パッケージソフトウェアを使って簡単に計算できる。本稿の方法は、計算が複雑であること、パラメータのチューニングが必要となることが欠点である。実際、数値例で $l=0.999999999$ と設定し、 l_1 と l_2 についても行列の固有値に基づいて決定したが、これらを系統立てて決定する方法はなく、試行錯誤的に決定した。そのため、本稿の方法で安定性を保証できるクラスが参考文献5)のものを含んでいるかについて示すことは困難である。

4. おわりに

本稿では、リードタイムが変動する在庫管理モデルを、スイッチドシステムとして表現し、滞留時間を用いた安定解析法により解析する手法を示した。先行研究では安定性を保証できないクラスにも適用できることを数値例により示した。

今後の課題としては、対象とするシステムを一般化すること、パラメータの系統だった設定法を考察すること、非負制約を加えた場合を検討することがあげられる。

参考文献

- 1) 伊藤, 橋本, 石原: 最適制御理論を用いたブルウィップ効果を防止する在庫補充方式の提案, 日本オペレーションズ・リサーチ学会2006年春季研究発表会, pp.66-67 (2006)
- 2) 西平: サプライチェーンにおける Bullwhip 効果を抑制するための一手法—むだ時間システムとメモリーレスフィードバックを用いた解析—, 山形大学人文学部研究年報, 5, pp.205-214 (2008)
- 3) 西平: むだ時間システムとしてとらえたサプライチェーンについての一考察—リードタイムが既知の場合—, 山形大学人文学部研究年報, 6, pp.157-162 (2009)
- 4) 西平: サプライチェーンに対して構成したサーボ系の解釈とその応用, 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, 7, pp.105-109 (2010)
- 5) 西平: 制御理論を用いた在庫管理モデルの一解析—リードタイムが変動する場合—, 山形大学人文学部研究年報, 12, pp. 43-51 (2015)

⁷ 不安定なモードの不安定度は固有値の大きさの最大値により求まる。安定なモードの安定度は固有値の最大値が0にどれだけ近いかににより求まる。

- 6) G. Zhai, B. Hu, 安田, A. N. Michel : 離散時間切替えシステムの安定性と L_2 ゲイン解析, システム制御情報学会論文誌, Vol. 15, No. 3, pp. 117-125 (2002)
- 7) 増淵, G. Zhai : ハイブリッドシステムの制御 - V - スイッチドシステムの解析と制御, システム/制御/情報, Vol. 52, No. 1, pp. 25-31 (2008)

A Stability Analysis of Inventory Management Models with Varying Lead Times: A Consideration of Switched Systems

Naofumi NISHIHIRA

This paper considers the problem of a stability analysis of inventory management models when the lead time is varied. The previous work was showed that the stability of the models can be reduced to simultaneously stability for switched dynamical systems. However this method is conservative. In this paper, the stability analysis for switched dynamical systems using the dwell time method is used, and showed that this method can be used when the entire system has some unstable subsystems illustrated by a numerical example.

平成27年度研究・教育活動報告

【人間文化学科】

アーウィン マーク

(1) 研究成果

Irwin, Mark. (2016). English Loanwords. In 'The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation', ed. Tarō Kageyama & Hideki Kishimoto, pp 161-197. Berlin: Mouton de Gruyter.

Irwin, Mark & Lyddon, Paul. (2016). Rendaku and Homophony. 音韻研究 19.

(2) 教育・地域連携等の活動

言語学演習, 英語コミュニケーション, コミュニケーションスキル I (英語)

相沢 直樹

(1) 研究成果

論文:

「芸術座の『生ける屍』と『さすらいの唄』——トルストイ受容のもうひとつのかたち」

『緑の杖』(日本トルストイ協会) 第13号

平成28年3月刊行予定

(2) 教育・地域連携等の活動

担当授業等:

(前期)

ロシア語 I (4), 欧米文化概論, ロシア語学演習, 現代外国語 (ロシア語), ロシア文化論特論 II, 欧米文化特別研究 I (3), 実践教育プログラム事前学習,

(後期)

ロシア語 II (4), ロシア語講読, 比較文学講義, ロシア文化論特別演習, 欧米文化特別研究 I (2), 欧米文化特別研究 II, 実践教育プログラム事前学習

講演:

「ゴンドラの唄 百年のこだま」

平成27年7月11日 (土) 牛込竈筒区民センター ※芸術座百年委員会主催

「『ゴンドラの唄』の魔力」

平成27年8月22日 (土) 高知県香美市猪野々集会所 ※香美市立吉井勇記念館主催

浅野 明

(1) 研究成果

論文：「わたくしたちと歴史の研究—田中陽兒『世界史学とロシア史研究』によせて—」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第17号（2016年）83-101頁。

学会活動：「ロシア史研究会大会」（2015年10月10日，於：早稲田大学）において，2本の自由論題報告に対するコメンテーターを務めた。

(2) 教育・地域連携等の活動

担当授業

専門教育：人間文化入門総合講義，ヨーロッパ史講義（一），ヨーロッパ史演習（一），ヨーロッパ史英書講読（一），ヨーロッパ史概論。基盤教育：西洋中世史入門（歴史学）

社会貢献

教員免許状更新講習 地歴（西洋史）2015年8月4日

(3) 研究・教育活動に関するコメント

ロシア史研究会大会におけるコメントは，中世ロシアの歴史における重要な問題（世俗権力と教会の関係及び12-14世紀の国際関係）に関連しており，今後の研究にとって有益であった。論文（研究ノート）は，堅実な研究と重要な提言をもって戦後のロシア史学と世界史教育のレベル向上に大きく貢献した，田中陽兒氏の歴史研究に対する姿勢について，総合的に論じた。

阿部 晃士

(1) 研究成果

（著書）

- ・片瀬一男・阿部晃士・高橋征仁，2015年9月，『社会統計学ベシック』ミネルヴァ書房。

（論文）

- ・阿部晃士，2015年7月，「震災後の住民意識における復興と格差：大船渡市民のパネル調査から」，『社会学年報』，44：5-16。
- ・山根純佳・阿部晃士，2015年9月，「子育て世帯における日常と災害時のネットワーク：山形大学周辺における小学生の保護者に対する調査より」，『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』，12：53-60。
- ・堀籠義裕・阿部晃士・茅野恒秀，2015年11月，「東日本大震災津波被災地における生活復興過程：2011年と2013年の大船渡市民横断調査をもとに」，『総合政策』，17（1）：21-39。
- ・阿部晃士，2016年3月，「震災が社会調査に突きつける課題とは」，『社会と調査』，18：5-9。

(2) 教育・地域連携等の活動

（担当授業）

- ・現代社会学演習，社会学演習，社会学概論，調査方法論，社会調査論，卒業論文（10名），基礎講義（地域・人間），社会の教材分析 A，意識調査から見る現代社会（基盤，社会学）（以上，山

形大学)

- 社会意識論 (放送大学宮城学習センター)
- 復興の社会学 (学都仙台コンソーシアム「復興大学」)
(地域連携)
- 山形南高校出張講義 (2015年9月)

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究活動では、(1) 社会統計学のテキスト出版、(2) 大船渡市における震災復興に関する調査の分析と追跡調査の実施 (科研費分担者)、(3) 仙台市における環境意識に関する調査の実施 (科研費分担者)、(4) 社会調査のエキスパートを対象とする調査手法についてのインタビュー調査 (科研費・基盤 C, 代表者) などを並行して行った。一方で、10名の卒論指導をおこなうなど、教育面でも多忙な1年となった。

新宮 学

(1) 研究成果

論文:「首都の地位を奪われた南京——『洪武京城圖志』研究序説——」『東洋史研究』74巻2号, 116~154頁 2015年9月

論文:「北京城と葬地—明王朝の場合—」『都市と環境の歴史学』〔増補版〕第3集, 183~214頁 2015年7月

論文:「洪武の都, 南京城の景勝 (一)」『東北大学東洋史論集』12輯, 281~313頁, 2016年2月
国際会議報告:「被剥奪了首都地位的南京——《洪武京城図志》研究序論」2015年8月23日 絲綢之道研究与歴史地理信息系统建設国際学術研討会 (中国西安市・陝西師範大学)

(2) 教育・地域連携等の活動

- 当該年度における授業等 (担当授業名)
〔学部〕 アジア史概論, アジア史講義 (一), アジア史演習 (一), アジア史史料講読 (一), 現代東アジア地域論 (一), 中国の歴史 (歴史学), マルコ・ポーロ『東方見聞録』を読む (教養セミナー), 卒業論文指導
〔大学院〕 東アジア近世史特別演習
- 模擬講義:「大学で学ぶ新しい世界史」2016年2月16日 福島県立双葉高校進路講演会(いわき市)
- 教職免許状講習 (高校地歴・中学社会):「東アジアからみた世界史」8月5日

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- 博士論文が任大熙教授・全東淳教授の尽力で韓国語に全訳され、瑞景文化社より出版された。学生の教育では、中村篤志先生とともに4名の学生の卒論指導を行った。
- 小白川キャンパス国際センター長として、留学支援室とセンター運営委員会との調整等に当たった。また Global cafe や外国人留学生・チューター合同研修旅行を企画実施した。

池田 光則

(1) 研究成果

[学術論文等]「山形方言の中の世界標準」『山形学研究』13 (山形の魅力再発見パート13報告書)

(2) 教育・地域連携等の活動

(a) 担当授業

- 学部専門教育科目：言語学概論, 言語学特殊講義, ラテン語 I, ラテン語 II, ラテン語上級
- 基盤教育科目：言語学概論 (言語学), 言語学とその周辺領域 (言語学), 英語
- 大学院：言語学特別演習

(b) 卒業論文指導テーマ

- 「動名詞+です」の使用について

(c) 模擬講義・公開講座

- 「ことばの意味の仕組み—現代言語学の視点から—」[秋田県立湯沢高等学校大学訪問 (模擬講義)] 2015年9月28日
- 「山形方言の中の世界標準」[2015年度山形大学都市・地域学研究所公開講座] 2015年10月3日

石澤 靖典

(1) 研究成果

[論文]

- 「ボッティチェッリ作《聖母子と四天使と六聖人 (サン・バルナバ祭壇画)》—ダンテ『神曲』銘文と聖母信仰」, 『山形大学人文学部研究年報』第13号, 2016年3月, 1-19頁

[学会・シンポジウム等口頭発表]

- 「菊池新学の功績と研究の現状—没後100年を記して」(趣旨説明)およびパネルディスカッション司会, 没後百年記念 菊池新学シンポジウム, 2015年12月20日, 山形大学人文学部

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当授業]

- 学部専門科目：美学・芸術学特殊講義, 芸術文化演習 (一), 表象文化演習, 基礎講義 (文化解釈学), 表象文化講義, 芸術文化演習 (二), 芸術文化実習
- 大学院科目：美学・芸術史特論 II, 美学・芸術史特別演習
- 基盤教育科目：美術の歴史, 西洋美術鑑賞入門

[卒論指導]

- 10名担当 (ブロンズイーノ《愛の寓意》論, ジェロームのピュグマリオン主題画研究, 球体関節人形論, 少女マンガにおける歴史の表象, エラリー・クイーンと「新本格」, 心霊写真論, 記号的身体構築, 『魔法少女まどか☆マギカ』考, ポスターにおける地方表象, 近代における女性の身体表象)

〔受賞〕

- 平成27年度山形大学優秀教育者賞受賞, 2015年12月24日

〔地域連携〕

- 人文学部アカデミックインターンシップ(山形大学アカデミックキャンプ)で講義「パブリックアートについて考える」を担当, 2015年8月7日
- 「花と庭園でたどる西洋美術史」, NHK文化センター福島および同郡山, 一日講座, 2015年5月9日
- 「永遠の都ローマとバロック美術の壮麗」, NHK文化センター郡山, 一日講座, 2015年11月7日

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- 研究活動としては, 科研費・基盤研究Cを獲得し(研究課題名:「ルネサンス期のフィレンツェにおける芸術家と都市の称揚に関する研究」), その研究成果の一部を論文として発表した。
- 映像文化研究所の主催で「菊池新学シンポジウム」を開催し, 学内外の研究者と情報交換の場をもつことができた。企画の実現にあたっては, 山形大学人文学部研究活動支援制度(プロジェクト研究支援(A))の助成および大学附属博物館の協力を仰ぎ, 学際的研究プログラムとしての性格を示すよう留意した。今後も内外の研究機関や地域の文化施設と連携しつつ, このテーマに関する調査研究を継続していきたい。
- 教育に関しては, 例年になく表象文化論専修の卒論指導を多く担当することとなったが, テーマ選択や扱う題材の点でこれまでにない多様性が見られ, 全体的に内容の充実度が高かった。芸術文化論専修では二名の卒論指導を担当したが, いずれの論文も, 欧語文献を批判的に参照しつつ独自の見解を主張する論旨となっており, 学術レベルの向上を窺わせた。

伊藤 晶文

(1) 研究成果

〔著書(分担執筆)〕

- 小岩直人・高橋未央・杉澤修平・伊藤晶文(2015): 微地形分布から考察する津波で消滅した砂嘴の再生過程—タイ南西部パカラン岬の事例—。藤本 潔・宮城豊彦・西城 潔・竹内裕希子編: 微地形学—人と自然をつなぐ鍵。古今書院, 239-250。

〔学術論文等〕

- 伊藤晶文(2014): 中田地区の位置と自然。鹿児島大学教育学部地域社会教育専修久保田治助研究室編: 中田地域白書2014年度版。kinko's 鹿児島鍛冶屋町店, 鹿児島, 9-10。

- 伊藤晶文・森 彩香・松本秀明(2015): 2011年東北地方太平洋沖地震津波により仙台平野に形成された泥質堆積物に含まれるイオウ。山形大学歴史・地理・人類学論集, 17, 75-82。

〔学会発表等〕

- 伊藤晶文・森 彩香・松本秀明(2014): 仙台平野北部地区に堆積した2011年東北地方太平洋沖地震津波の泥質堆積物のイオウ含有量。2015年度東北地理学会春季学術大会。

- 伊藤晶文・阿子島功(2014): ナスカ台地および周辺の環境地理学調査。文部省科学研究費補助

金新学術領域「古代アメリカの比較文明論」第2回領域会議（研究者全体集会）.

Koiwa, N., Kasai, M., Sugisawa, S., Ito, A. and Matsumoto, H. (2014) : Recovery and formation processes of barrier spit eroded by the 2004 Indian Ocean Tsunami at Pakarang Cape, southwestern Thailand. XIX . INQUA Congress (第19回国際第四紀連合大会).

伊藤晶文・小岩直人・武田 開 (2014) : 宮城県井土浦周辺における2011年東北地方太平洋沖地震津波後の地形変化—DEM および SfM 処理による DSM を用いた検討—. 2015年度東北地理学会秋季学術大会.

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当授業]

(前期) 環境地理学概論, 環境地理学演習, 環境地理学調査実習, 地図を読む (教養セミナー), 環境地理学特論Ⅱ

(後期) 地図情報論, 地圏環境論演習, 基礎講義 (地域・人間), 自然地理学 (地理学), 環境地理学特別演習

[地域連携等]

国土交通省国土地理院 治水地形判定委員会委員 (東北地区)

高校訪問 (2校)

模擬授業 (山形県立長井高等学校, 大学訪問時, 平成27年11月9日)

山形県金山町中田地区の地域白書の一部を執筆した (出典は学術論文等に記載)

(3) 研究・教育活動に関するコメント

国内では, 巨大津波による地形変化や堆積物に関する研究を実施した。海外 (ペルー) では, ナスカ台地にて地形変化量に関する定点観測を開始した。着任後, 初めて大学院の授業を担当した。

宇津 まり子

(1) 研究成果

映画評 : 『『ANIIE / アニー』評』『東北アメリカ文学研究』39号 (2015), 146-150

研究発表 : 『『ハッシュバピー〜バスタブ島の少女』が隠蔽してしまうもの』津田塾大学言語文化研究所アメリカ文学女性像研究会 (2015年10月17日, 津田塾大学)

(2) 教育・地域連携等の活動

担当授業 : 実践英語, アメリカ研究演習, アメリカ研究特殊講義, 英語 C, 英語 R, 異文化間コミュニケーション I (セブ市, 2016年2月28日~3月13日引率)

出前授業 : 「コロンブスはヒーローか?」 (2015年10月27日, 青森北高等学校)

地域連携 : 米沢市男女共同参画会議委員

大久保 清朗

(1) 研究成果

翻訳

- ・リチャード・シッケル『スティーヴン・スピルバーグ レトロスペクティブ』（南波克行と共訳）、西村書店、2015年12月。

論文

- ・「『ザ・マスター』をめぐる六つの断片的考察」、『ユリイカ』2015年5月号、189-199頁。
- ・「境界と奈落——細田守『バケモノの子』」、『ユリイカ』2015年9月臨時増刊号、57-64頁。
- ・「映画の逆説、逆説の愛——『浮雲』冒頭におけるドキュメンタリーからフィクションへの越境体験」、『中央評論』第293号、中央大学出版部、2015年11月、40-50頁。
- ・「戦後とその分身——『めし』における成瀬巳喜男と原節子」、『ユリイカ』2016年2月号、174-185頁。

(2) 教育・地域連携等の活動

評論

(1) 雑誌

- ・「人間の時間、惑星の時間——パトリシオ・グスマン『真珠のボタン』」、『スプートニク』山形国際ドキュメンタリー映画祭、2015年10月、10-12頁。
- ・「「見る」ということの意味」、『フリースタイル』第30号、2015年12月、33-35頁。
- ・「そこはかかない欧州の香り——『ブリッジ・オブ・スパイ』と10本の映画」、『キネマ旬報』2016年1月下旬号（1708号）、44-46頁。
- ・「アニメーションの無数の扉とは？——アレ・アブレウ監督『父をさがして』」、『キネマ旬報』2016年3月上旬号（1711号）、50-51頁。

(2) 新聞・ウェブ

- ・『サンドラの週末』2015年5月17日
(<http://globe.asahi.com/cinema/2015051500015.html>)
- ・『バードピープル』2015年9月20日
(<http://globe.asahi.com/cinema/2015091800014.html>)
- ・『アンジェリカの微笑み』2015年12月5日
(<http://globe.asahi.com/cinema/2015120400012.html>)
- ・『ヘイトフル・エイト』2016年3月6日
(<http://globe.asahi.com/cinema/2016030400011.html>)
- ・「現実こそ夢の世界のよう——『ドラえもん のび太と鉄人兵団』」2015年4月26日。
- ・「まさしく映画体験の寓意——『過去へ旅した女』」2015年6月7日。
- ・「輪郭の定まらない生刻む——『王立宇宙軍 オネアミスの翼』」2015年7月19日。
- ・「響く哄笑は神の嘲笑か——『アマデウス』」2015年8月30日。
- ・「官能と恐怖に溺れる——『銀河鉄道の夜』」2015年10月11日。
- ・「死へ暴走する世界の狂気——『とむらい師たち』」2015年11月22日。

- ・「現世があこの世という寓意——『ホワイトナイツ／白夜』』2016年1月10日。
- ・「生の本質根ざすはかなさ——『風が吹くとき』』2016年2月28日。

書評

- ・「慎ましさと強かさ——『映画はやめる パトリス・ルコント、自作を語る』』、『キネマ旬報』2015年11月下旬号（1703号）、176-177頁。

講演など

- ・講演「成瀬巳喜男と水木洋子」, 市川市文学ミュージアム, 2015年4月25日。
- ・講演「そして何も変わらなかったのか」, 山形大学国際学術講演会「この都市（まち）に『風をあつめて』——70年代日本とポピュラーカルチャー」, 2015年12月17日。
- ・対談「『スピルバーグ その世界と人生』（西村書店）刊行記念 スピルバーグが描いてきたもの——テーマ・映像・物語——」, ジュンク堂書店池袋本店, 2016年1月22日。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- ・最終的に8人の学生の卒業論文を指導した。論文の内容は確実に向上しているといえる（今年度の卒業生のうち一人が東京大学大学院に進学することができたのもその証左といえる）。
- ・2015年10月に開催された山形国際ドキュメンタリー映画祭において、特集上映シンポジウムの司会、台湾映画特集イベントの進行、香港浸会大学大学院生との交流などで微力ながら貢献することができた。また12月に開催された国際学術シンポジウム（マイケル・ボーダッシュ教授講演）にも参加することができた。
- ・研究・教育活動と直接関係はないかもしれないが、8月の花笠祭りに参加したのは、人文学部の教員ではわたしだけであった。これはもっと多くの教員が参加すべきだと思った。

小熊 正久

(1) 研究成果

- ・『画像と知覚の哲学—現象学と分析哲学からの接近』（東信堂、2015.11. 共編、共著）の編集および「画像表象と中立性変様」, 「時間意識を介しての感覚と意味」の章の執筆。
- ・『自然観の変遷と人間の運命』（東北大学出版会、2015.11. 座小田豊編、共著）「人間にとっての地球の意味—フッサールとブルーメンベルクの考察—」の章を執筆。

(2) 教育・地域連携等の活動

- ・担当授業科目:「スタートアップセミナー」, 「人間と世界の関わり」（基盤教育「人間とは何か」）, 「西洋哲学史」, 「哲学講義（二）: 言語的表象について」, 「西洋哲学講読」（前・後）, 「哲学演習（二）」（後）, 「ギリシア語Ⅰ, Ⅱ」
- ・指導した卒論のテーマ:「夢について—夢の物語性の問題—」, 「サルトルの実存主義における自由と本質について」, 「ハイデガー『存在と時間』における本来性と非本来性」, 「ミレトス学派の哲学者」

- 社会貢献：2016. 2. 29：山形新聞進路関係の広告に卒業生についてのコメントを載せる。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- 科研の共同研究「表象媒体の哲学的研究—画像の像性と媒体性の分析を中心に—」の研究成果を『画像と知覚の哲学—現象学と分析哲学からの接近』としてまとめることができた。
- 以前から気にかかっていたフッサールとブルーメンベルクの関連の一側面について、上記共著の一章としてまとめることができた。
- 「スタートアップセミナー」において「東日本大震災のその後」を主題とする発表とレポートを課したが、全体として充実したものとなった。

柿並 良佑

(1) 研究成果

なし

(2) 教育・地域連携等の活動

- 国際講演会「この都市（まち）に風をあつめて—70年代日本とポピュラーカルチャー」2015年12月17日，山形大学：トークセッション司会。
- 講演会「恋する人文学—哲学・文学・恋愛」2016年2月6日，山形大学：企画，トークセッション登壇。
- [レビュー]「名」の拒否—『エマク・バキアを探して』，『スプートニク』，山形国際ドキュメンタリー映画祭公式ガイドブック，43-44頁。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

科学研究費補助金（若手研究（B））による研究課題「現代哲学における特異性概念の探究—ナンシー哲学研究から出発して」に着手。

表象文化論・フランス語の教育体制の構築に積極的に参加。

許 時嘉

(1) 研究成果

（学会発表）許時嘉，「明治期日本漢詩人の海外活動と漢詩文創作——靑山衣洲を例にして」，日本台湾学会第17回学術大会（東北大学），平成27年5月

（雑誌記事）許時嘉，「現代台湾ドキュメンタリーへの招待」，『SPUTNIK：YIDFF READER』，2015年10月，59-60頁

(2) 教育・地域連携等の活動

- 担当授業：初修中国語Ⅰ，初修中国語Ⅱ，スタートアップセミナー，比較文化概論（共同担当），中国文学講義（共同担当），アジア文化演習，現代中国論，時事中国語，卒論指導（2名），実践教育プログラム事前指導（中国語），近現代東アジア特論Ⅰ（院），近現代東アジア特論Ⅱ（院）。

- 2015年度異文化間コミュニケーション I 台湾実習企画及び引率分担 (2015年 8月30日～9月13日)
- 台湾ドキュメンタリー映画祭「映像は語る：ドキュメンタリーに見る現代台湾の光と影」コーディネーター (2015年10月9日～11日。主催：山形大学人文学部附属映像文化研究所, 台湾文化部)
- 香港浸会大学学生(8名)の山形大学人文学部訪問及び学生映像研究会を企画(2015年10月9日)
- 2016台湾師範大学受入れプロジェクト in YAMAGATA・コーディネーター(2016年2月15～24日)

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- 科研費「若手研究 B」(2014年4月～2017年3月)を獲得し, 研究, 教育において大いに努力した。

清塚 邦彦

(1) 研究成果

(a) 研究業績

(著書・共著)

- 野家啓一・門脇俊介編『現代哲学キーワード』有斐閣, 2016年1月14日, 第4章「言語」67-87頁を担当
- 小熊正久・清塚邦彦編『画像と知覚の哲学：現象学と分析哲学からの接近』東信堂, 2015年11月30日, 第4章「絵の中に見えるもの：見えるものと描かれたもの」74-98頁

(書評)

- 「書評：菅野盾樹『示しの記号』(産業図書)』『図書新聞』3242号, 2016年02月13日, 3頁(学会発表)
- 清塚邦彦「画像の知覚と描写内容」(ワークショップ「心の哲学と美学の接続点」における提題), 日本科学哲学会第48回大会, 国内会議, 2015年11月21日, 首都大学東京

(その他の研究活動)

日本科学哲学会 評議員

日本哲学会, 応用哲学会, 科学基礎論学会 学会誌査読委員

日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員

(2) 教育・地域連携等の活動

(a) 担当授業

(基盤教育)

「哲学ってどんなこと? (哲学)」(後期)

(専門教育)

「論理学概論」(前期), 「哲学概論」(後期), 「応用倫理学演習」(前期), 「情報記号論」(後期), 「現代応用倫理」(後期), 「記号論演習」(後期)

(大学院)

「英米哲学特論」(前期), 「英米哲学特別演習」(後期)

卒論指導担当2名

(b)

- 山形大学基盤教育院評価改善会議『平成27年度山形大学基盤教育評価改善報告書』第1章, 第3章を執筆。

小泉 有紀子

(1) 研究成果

学会発表等

- 小泉有紀子。「『効く』ライティング指導を目指して～アメリカと日本の大学1年次授業例を中心に」山形県置賜地区高等学校教育研究会英語部会主催講演会(招聘)2015年5月。
- 小泉有紀子「より効果的なライティング指導とは何か～日米大学の授業例を中心に考える」山形県最北地区高等学校教育研究会英語部会主催講演会(招聘)2015年5月。
- Koizumi, Y. Teaching Effective Writing, Effectively: A Case Study from Japanese University EFL Classrooms. Invited presentation at the JALT Yamagata Chapter Meeting. May 2015.
- Koizumi, Y. Teaching English to English native speakers!? --a story of a Japanese graduate student in the US— International Association of Japanese Studies (IAJS, 国際日本文化研究会) 山形支部講演会(招待講演) July 2015.
- 小泉有紀子 エチェニケ ラザロ. 第2言語の英語文処理における韻律的情報の利用可能性について～否定と副詞節の曖昧構文の音響分析. 第41回全国英語教育学会熊本研究大会研究発表. 熊本学園大学. 2015年8月。
- Koizumi, Y. On the role of prosody and pragmatics in sentence comprehension: The processing of the 'not-because' scope ambiguity in English and beyond. Invited talk (招聘講演) at the School of Linguistics and Language Studies Speaker Series, Carleton University, Ottawa, Canada. (November 20, 2015)
- Koizumi, Y. The role of prosody and pragmatics in resolving scope ambiguity: The case of 'not-because' sentences in English, and beyond. Invited talk (招聘講演) at Psycholinguistics Supper Club, Graduate Center, City University of New York. (November 17, 2015)

(2) 教育・地域連携等の活動

担当授業:

基盤教育: スタートアップセミナー 英語C 英語R

専門教育: 実践英語(一) 英語学演習 言語学総合講義(心理言語学)

大学院: 現代外国語(英語)

出張講義: 岩手県立不來方高等学校 2015年6月

地域連携活動:

山形県英語教育研究会 東南置賜地区 中学校高等学校英語弁論大会審査員(審査委員長)

(3) 研究・教育活動に関するコメント

2015年10月より、YU 海外研究グローイングアッププログラム助成を受け、米国 NY 市立大学に客員研究員として滞在していました。来年度は引き続き、スペインに場所を移して研究活動を行う予定です。貴重な機会をいただいたことに感謝し、実り多い滞在としたい所存です。

合田 陽祐

(1) 研究成果

論文・書きもの：

1. ロジャー・シャタック著『祝宴の時代——ベル・エポックと「アヴァンギャルド」の誕生』書評、『週刊読書人』, 3113号, 6面, 2015年10月。
2. 「近代的恋愛からの「踏みはずし」」(くまざわ書店山形店でのブックフェアの選書とコメント), 『nyx』別冊小冊子, 2016年1月。
3. 「1890年代の「小雑誌」グループについて」, 『Nord-Est』, 日本フランス語フランス文学会東北支部会報, 9-10号, 2016年, 2-7頁。
4. 「編集者としてのジャリとゲールモン——前衛版画雑誌『イマジエ』について」, 『Nord-Est』, 日本フランス語フランス文学会東北支部会報, 9-10号, 2016年, 20-25頁。

口頭発表・トークイベント：

1. 「『イマジエ』とジャリの美術批評の方法について」, 関西シュルレアリスム研究会, 於近畿大学, 2015年12月27日。
2. 「1890年代の文芸誌とその機能——『メルキュール・ド・フランス』, 『白色評論』, 『ラ・プリューム』, 『レルミターージュ』を中心に——」, 日本フランス語フランス文学会東北支部会, 於石巻専修大学, 2015年11月7日。
3. 「十九世紀末前衛におけるアナクロニズムの問題——ゲールモンとジャリの版画雑誌『イマジエ』の場合——」, 日本フランス語フランス文学会東北支部会, 於石巻専修大学, 2015年11月7日。
4. トークセッション「恋愛を哲学する」, 座談会「恋する人文学」(柿並良佑氏と), 恋する人文学(『nyx』2号第2特集「恋愛論」より), 於山形大学, 2016年2月6日。

(2) 教育・地域連携等の活動

前期担当授業：フランス語3コマ(人間文化学科×2, 地域教育学部), フランス語講読, 実践教育プログラム, スタートアップセミナー, 欧米文化概論, フランス文化論特論II(大学院)。

後期担当授業：フランス語3コマ(人間文化学科×2, 地域教育学部), フランス文化論, 基礎講義(グローバル), 実践教育プログラム, 国際文化概論, フランス文化論特別演習(大学院)。

山形大学人文学部棟において、堀之内出版共催のイベント「恋する人文学」のトークセッションと座談会に参加し、発表者へのコメントと、18世紀フランス小説における姦通のテーマで、一般聴衆と学生を前に講演を行った。東北大学大学院文学研究科の今井勉教授、同国際文化研究科の坂巻幸司准教授と共同して、日本フランス語フランス文学会東北支部大会において、シンポジウム「世紀末の文芸誌と作家たち」を企画・開催した。研究発表を2つ(総論と個別発表)担当し、東北6県のほかに、東京や関西からの聴衆も参加した。

卒業論文の指導を一件担当した（「オスカー・ワイルドの『サロメ』について」）。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- 上記のイベント「恋する人文学」に際し、小白川図書館におけるブックフェアを企画し、図書館関係者の協力を得て、関連図書にコメントを付して展示を行った。同トークイベントには50名以上の学生の参加があり、ブックフェアの効果がうかがえた。
- 実践教育プログラムで、フランス語圏ケベックに留学を希望する学生3名の指導を行い、全員を審査合格に導いた。夏季講習や発音矯正の補講を行い、志望理由書（フランス語の書類を含む）の指導とチェックを綿密に行った。書類作成でも学生のサポートを行い、派遣先大学とのやり取りを無事終えた。
- 2年次の実践教育プログラムの履修者で留学が決定した学生（3年生）と、フランス語検定試験を受験予定の学生に依頼され、フランス語会話・作文の授業を週1回のペースで実施した。
- 本年度は、フランス語検定試験の受験をとくに推奨し、試験対策に取り組んだ。上級での合格報告があったのは、仏検2級が1名、仏検準2級が1名。3級・4級に関しては複数名の合格報告があった。

坂井 正人

(1) 研究成果

〔口頭発表〕

- Nasca Lines, Ceramic Sherds, and Social Changes: Recent Investigation at the Nasca Pampas, Southern Coast of Peru. (Masato Sakai, Jorge Olano, Yoichi Watanabe and Kaoru Honda) 80th Annual Meeting, Society for American Archaeology (Symposium: From Foragers to Empires: Recent Research on the South Coast of Peru), Hilton Conference Center, San Francisco. 2015年4月16日.
- 「ナスカ台地の地上絵と景観構造」(坂井正人) 日本ラテンアメリカ学会・第36回定期大会, 専修大学. 2015年5月30日.
- 「古代アメリカの比較文明論とアンデス文明の展開」(坂井正人) 『公開講演会：古代アメリカの比較文明論：メソアメリカとアンデス』 国立民族学博物館第4セミナー室, 2015年6月6日。
- Rito Regional y Panregional en las Pampas de Nasca : Actividad Humana y Organización Social Prehispánica en los valles del Río Grande de Nasca. (Masato Sakai, Jorge Olano y Tadasuke Monma) SIMPOSIO : Patrimonio cultural y del medio ambiente en la Cuenca del Río Grande de Nasca (Perú) y su área de influencia: los retos y recursos para la gestión del desarrollo humano en el Período Intermedio Temprano, Congreso Internacional de Americanistas 55, Universidad Francisco Gavidia, San Salvador. 2015年7月13日.
- Proyecto de Investigación Arqueológica Líneas y Geoglifos de las Pampas de Nasca. (Masato Sakai, Yoshimitsu Ccoyllo, Jorge Olano, Yuichi Matsumoto y Atsushi Yamamoto). II Congreso Nacional de Arqueología. Gran Teatro Nacional del Peru. 2015年8月6日.
- Proyecto de Investigación Arqueológica Líneas y Geoglifos de las Pampas de Nasca 2006-2015. (Masato Sakai, Yoshimitsu Ccoyllo, Jorge Olano, Yuichi Matsumoto y Atsushi Yamamoto) II

Simposio de Arqueología Avances de las Investigaciones Arqueológicas de las Misiones Italiana y Japonesa. Museo Arqueológico Antonini. 2015年9月5日.

- 「ペルー南海岸・インヘニオ谷における考古学調査」(山本睦, 松本雄一, 坂井正人, ホルヘ・オラーノ, ヨシミツ・ホイヨ) 第20回古代アメリカ学会, 東京大学理学部, 2015年12月5日.
- 「アンデスとメソアメリカの比較: 視線の物質化と語りの物質化をめぐる」(坂井正人) 『新学術研究「古代アメリカの比較文明論: A02と A03合同研究会」, キャンパスイノベーションセンター東京, 2016年1月23日。
- 「パコパンバ神殿における景観と建築活動: 人類学的物質文化研究の視点より」(坂井正人) 『公開シンポジウム「アンデス文明初期の神殿と権力生成」, キャンパスイノベーションセンター東京, 2016年1月30日。
- 「古代アンデスの人びとは, 天空に何を見たのか」(坂井正人) 南山大学人類学研究所・国立天文台共催 公開講演会, 南山大学名古屋キャンパス, 2016年2月28日。
- When the geoglyphs were made at the Nazca Pampa? (Masato Sakai) Round Table Conference on Nasca, 2016. Yamagata University, 2016年3月7日.

〔著書・論文等〕

Informe Final del Proyecto de Investigación Arqueológica de las Líneas y Geoglifos de la Pampa de Nasca (Séptima Temporada). (Masato Sakai, Yoshimitsu Ccoyllo, Jorge Olano, Yuichi Matsumoto, Atsushi Yamamoto), 933p., Ministerio de Cultura del Perú, Lima, 2015.

(2) 教育・地域連携等の活動

〔担当授業〕

文化人類学入門 (人間を考える), 世界遺産ナスカ地上絵とアンデス考古学 (基盤教育), スタートアップゼミ, 文化動態論 (人類), 文化動態論基礎講義, 文化人類学概論 (一), 文化人類学講義 (一), 文化人類学演習 (一), 文化人類学演習 (二), 文化人類学実習, 文化人類学特論Ⅱ (大学院), 文化人類学特別演習 (大学院), 歴史文化特別研究 (前期/後期) (大学院), 教材開発のための先進研究 (教職大学院)

〔卒業論文〕

「地上絵・制作・認識: 動植物表象をめぐる」 「ベットの主体性と駆け引き: 日常生活から問い直す」 「総代と祭礼」 「姉家督相続」 再考」

〔地域連携〕

- 「ナスカの地上絵の制作」(実習) 『寺小屋子ども大学』, 山形大学グランド, 2015年5月10日
- 「ナスカの地上絵とは?」(講演) 『寺小屋子ども大学』 2015年5月10日山形大学人文学部
- 「ナスカ地上絵のなぞに迫る」(講演), 朝日カルチャーセンター・千葉, 2015年5月23日
- 「世界遺産ナスカの地上絵」(山形大学人文学部附属ナスカ研究所パネル展), 山形県立中央病院「あおやぎギャラリー」, 2015年6月14日～7月25日
- 「考古学から見たナスカの地上絵」(講演), 山形県立病院・講堂, 2015年7月24日。
- 「世界遺産ナスカの地上絵の魅力: 謎の解明と保護をめぐる」(講演) 調停委員東北大会講演会, パレス・グランデール, 2015年9月25日

- ・「山形大学のナスカ地上絵研究」(講演) 大石田町町民大学, 大石田町福祉会館, 2015年10月15日
- ・「山形大学のナスカ地上絵研究」(講演) 山形市中学校長会議, 山形市立第五中学校, 2015年11月10日
- ・「ナスカ研究の魅力」(講演) 山形市小学校長会, 山形市総合学習センター, 2015年11月13日
- ・「ナスカの地上絵: 山形大学人文学部附属ナスカ研究所の成果から」(展覧会) 山形県郷土館・文翔館, 2016年2月14日~3月13日
- ・「山形大学人文学部学生によるナスカ地上絵展の展示解説」(指導), 山形県郷土館・文翔館, 2016年2月20日・21日・27日・28日, 3月5日・13日・14日
- ・「最近のナスカ研究の動向: 山形大学の調査活動を中心に」(講演), 文翔館議場ホール, 2016年3月6日

(3) 研究・教育活動に関するコメント

「アンデス比較文明論」(科学研究費補助金・新学術領域研究)による共同研究(2年目)を実施するとともに、現地調査で発見した新地上絵(動物の地上絵24頭)を公表した。また、イタリア調査団と共催して2つの国際シンポジウムを実施した。ひとつは第55回アメリカニスト国際会議(エルサルバドル共和国)で開催したシンポジウム *Patrimonio cultural y del medio ambiente en la Cuenca del Río Grande de Nasca (Perú) y su área de influencia*, もうひとつは Museo Arqueológico Antonini (ペルー共和国)で開催したシンポジウム *Avances de las Investigaciones Arqueológicas de las Misiones Italiana y Japonesa* である。さらに、カリフォルニア大学(UCLA)よりナスカ研究者を招聘して国際講演会を山形で実施するとともに、円卓会議「Round Table Conference on Nasca」を開催した。また、山形市内で2つのナスカ地上絵に関する展示会を開催した。ひとつは山形県立中央病院「あおやぎギャラリー」で、もうひとつは文翔館「ナスカの地上絵展」である。後者には6,919名の来場者があった。会期中の週末には、展示解説を山形大学人文学部の学生が行い、好評であった。講義と演習では、世界の諸民族に関する事例を検討することで、文化人類学の基本的な考え方、民族誌の読み方と議論の仕方について扱った。また実習では、山形市内の礼拝所をめぐる調査(第2次)を実施した。なお *Informe Final del Proyecto de Investigación Arqueológica de las Líneas y Geoglifos de la Pampa de Nasca (Séptima Temporada)* は、平成26年度研究・教育活動報告に研究成果として掲載されているが、誤記であり、正しくは本年度の研究成果である。

佐藤 清人

(1) 研究成果

なし

(2) 教育・地域連携等の活動

【担当授業科目】

前期: スタートアップ・セミナー英語 R, 英語 C, 英米文学講読, 欧米文化演習, 英米文化論

後期：英語 R, 実践英語 (二), 文学概論, 基礎講義 (グローバル文化学)

【出張講義】

福島県立安積高等学校「太平洋戦争と日系アメリカ人—ジョン・オカダの小説『ノー・ノー・ボーイ』をめぐって」(平成27年11月28日)

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究は日系アメリカ文学における「自伝」をテーマに行ったが、論文作成までにはいたらなかった。教育に関して、基盤教育の英語では、例年どおり英語の時制や助動詞の使い方について重点をおいて指導した。専門教育では、一部の授業で文学作品の理解のために映画を利用し、学生には好評だったが、文学作品を直接読まずに理解する危険性を感じている。

鈴木 亨

(1) 研究成果

研究発表

- ・「創造的逸脱表現における動詞補部の解釈—Think different の構文分析から」, 日本英語学会第33回大会公開特別シンポジウム「日本の英語学者と語彙意味論研究」における講師発表 (関西外国語大学, 2015年11月)。

研究論文

- ・鈴木亨 (2015) 「創造的逸脱表現の認可をめぐって」『日本英文学会第87回大会 Proceedings』118-119.
- ・Toru Suzuki (2016) Review: Interpreting Motion: Grounded Representations for Spatial Language, *English Linguistics* 32: 2, 432-441.

(2) 教育・地域連携等の活動

- ・担当授業: 英語(C), 英語(R), 英語学特殊講義, 日英対照言語学講義, 教職実践演習 (英語), e-learning, 英語語法論特論
- ・模擬講義「Think different の言語学—逸脱か, 創造か?」(宮城県立富谷高等学校, 2015年10月)

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究面では、逸脱表現の文法と言語変化の関係について研究を進めた。教育面では、複数の授業で時間外の課題として多読レポートを課し、多面的な英語力の養成に努めた。

摂津 隆信

(1) 研究成果

論文：郷愁という名のイリュージョン —カール・ファレンティンの喜劇『騎士ウンケンシュタイン』について—

(「東北ドイツ文学研究」, 東北ドイツ文学会, 第56号, 15-33頁)

研究発表：Sumo, Judo und Wrestling – Am Beispiel von Rikidōzan und Masahiko KIMURA sowie dem japanischen Showbusiness–

(Vielheit und Einheit der Germanistik weltweit [Internationale Vereinigung für Germanistik VIII. Kongress], 中国〈同済大学〉)

劇評：フェルディナント・フォン・シーラッハ『TABU』上演

(「Brunnen」, 郁文堂, Nr. 495, 6-8頁)

(2) 教育・地域連携等の活動

第8回山形大学高校生朗読コンクール審査員

(3) 研究・教育活動に関するコメント

教育に関しては不断のマイナーチェンジが求められるものの、おおむね問題はなかった。学務と授業準備に追われて研究論文の本数が少なかったことが反省材料。

十川 陽一

(1) 研究成果

(論文)

- 十川陽一「律令官人制の展開と地方支配」(『歴史学研究』937, 2015年10月)

(書籍)

- 山下紘嗣, 十川陽一, 長谷山彰, 藤森健太郎, 中野高行, 川崎晃, 湯浅吉美, 加藤順一, 松田浩, 三宅和朗, 藤本誠, 久米舞子『法制と社会の古代史』(慶應義塾大学出版会, 2015年5月), 「地方における律令官人制の展開と受容—勳位を中心に—」を担当。

(学会発表)

- 十川陽一「律令官人制の展開と地方支配」(歴史学研究会大会, 2015年5月)
- 十川陽一「律令官人制の展開と受容—陸奥・出羽に関する基礎的考察—」(山形大学歴史・地理・人類学研究会 2015年6月)
- 十川陽一「出羽国と律令国家—官人制と駒籠楯跡調査への期待—」(さあべい同人会 考古学研究発表会 2016年2月)

(2) 教育・地域連携等の活動

(専門教育)

日本史講義(3), 日本史演習(3), 日本史史料講読(3), 文化財調査実習(共同担当), 文化動態論(日本)(共同担当)

(大学院)

日本古代史特別演習

(地域連携等)

- 山形史学研究会講演「律令官人制と地方支配—散位を通じてみた展開と受容—」, 講師, 2015年9月

- 山形県立楯岡高等学校, 大学出前授業「古代国家と東国の人々」, 講師, 2015年10月
- 山形県立米沢女子短期大学史学実習「律令国家と官人支配—ある官人を手がかりに—」, 講師, 2015年12月

(3) 研究・教育活動に関するコメント

自身のこれまでの研究を整理しながら, 出羽を中心とした東北古代史研究に着手し, 基礎的な考察を進めた。

山形県内を中心とする日本史・考古学の研究会等に積極的に参加した。

古代史教育の基礎を確立するべく, 講義・演習のほか, 勉強会も行っている。

高橋 真彦

(1) 研究成果

Takahashi, Masahiko. 2015. On improper movement and locality of Case-assignment in Japanese. 南山大学言語学センター第51回コロキウム (招待有り).

高橋真彦. 2016. 格付与と名詞句移動の局所性について: 日本語からの考察. 慶應言語学コロキウム (招待有り).

Takahashi, Masahiko. 2016. A note on improper movement and locality of AGREE in Japanese. Formal Approaches to Japanese Linguistics 7 (FAJL 8). Mie University.

(2) 教育・地域連携等の活動

担当授業: 英語 (R), 英語 (C), 実践英語 (三), 言語学演習, 基礎講義 (言語), 生成文法論特別演習, 生成文法論特論, 教員免許状更新講習 (英語)

千葉 清史

(1) 研究成果

論文

「物自体は存在するか」という伝統的な問題の解決によせて, 『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第12号, 2015年。

「カント自由論における自我の二面性テーゼと二世界解釈との融和」, 『山形大学紀要(人文科学)』第18巻第3号, 2016。

「カントによる帰謬法的証明の拒否における哲学方法論上の洞察」, 『山形大学人文学部研究年報』第13号, 2006。

「超越論的論証の二種を区別する必然性」, 『東北哲学会年報』第32号, 2016。

学会発表

Ist der Raum aktual-unendlich?: Über den Raum als “eine unendliche gegebene Größe”, 12. Internationaler Kant-Kongress Wien, Universität Wien (Vienna), 2015年9月23日。

「超越論的論証: その本質と問題点」, 東北哲学会第65回大会, 福島大学 (福島), 2015年10月24日。Eine Verteidigung der traditionellen Unterscheidung zwischen der Zwei-Aspekte- und der Zwei-Welten-

Interpretation, 日本カント協会第40回大会, 共同討議 I: Zu einigen Problemen des Verhältnisses zwischen Ding an sich und Erscheinung bei Kant, 清泉女子大学 (東京), 2015年11月14日。

(2) 教育・地域連携等の活動

担当授業

ドイツ語 IA 1 /IIA 1 (人文・理学部向け)

ドイツ語 IA 2 /IIA 2 (工学部向け)

哲学演習 (一)

哲学講義 (二)

富澤 直人

(1) 研究成果

On syntactic structures of the head internal relative clause construction in Bengali, Bulletin of Yamagata University (Humanities) 18. 3, 101-121. (Coauthored with Forhad Jamila)

(2) 教育・地域連携等の活動

- 基盤教育：英語 R, 英語 C
- 学部：英語学概論, 英語学特殊講義, 英作文 (中級), 言語学総合講義, 卒業論文 (英語学)
- 大学院：英語学特論Ⅱ, 英語学特別演習, 言語科学特別研究Ⅰ (英語学)

富田 かおる

(1) 研究成果

“Visualization of vowel spaces in language learning”, International Conference on Phonetics and Phonology 2015, September, 2015, Keio University.

“Copious katakana usages”, The IAJS Journal 2015 Vol. 1, 33-40.

“Visualization for Learning Foreign Speech”, Bulletin of Yamagata University (Humanities) 18: 3, 1-14.

(2) 教育・地域連携等の活動

担当授業 言語学特殊講義, 英語学演習, 英語の教材分析 A, 英語 R, 英語 C

(3) 研究・教育活動に関するコメント

言語の生成を主なテーマとし、特に発話の音響分析を基に、英語母語話者と日本人英語学習者の母音特徴分析を行った。また、母音空間を用いた発音練習についてのアンケート調査を行い、学習者の興味と意欲が向上している事を確かめた。

中澤 信幸

(1) 研究成果

〔論文〕

- 日本語教育における台湾語音活用と「日台基本漢字」, 『台湾文學研究』 8 (台湾・國立成功大學台灣文學系), pp.11-41, 2015年 6月

〔口頭発表〕

- 台湾人日本語学習者と台湾語音 ―母語意識・居住地域等との相関から―, 天理台湾学会第25回記念研究大会, 2015年 6月28日

(2) 教育・地域連携等の活動

〔担当授業〕

- 学部専門科目:日本語(一), 日本語学概論, 日本語学特殊講義, 日本語学演習, 日本語学講読, 近現代東アジア地域論(二), 言語学総合講義, 基礎講義(グローバル文化学), 人間文化入門総合講義
- 大学院科目:日本語史特論Ⅱ, 日本語史特別演習
- 基盤教育科目:日本語と他言語共生社会(共生を考える), 日本語音韻史入門(言語学)

〔卒業論文〕

- 『吾輩は猫である』における女性語の使用
- 『古今和歌集』における縁語の構造を知る

〔地域連携〕

- 井上ひさし『吉里吉里人』と方言意識, 山形大学都市・地域学研究所公開講座「山形の魅力再発見パート13」, 2015年10月3日
- 映像は語る——ドキュメンタリーに見る現代台湾の光と影, 山形大学人文学部附属映像文化研究所および台湾文化部主催による映画上映会・シンポジウム(コーディネーターを務める), 2015年10月9～11日

(3) 研究・教育活動に関するコメント

台湾に滞在して行った研究の成果に基づいて, 論文執筆および学会発表を行った。また科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金, 基盤研究C(一般), 研究課題名:多言語併存状況下における台湾語の現状と変容, 課題番号:15K02501, 研究期間:平成27～29年度, 研究代表者:中澤信幸)に採択され, 新たな研究に着手した。加えて台湾ドキュメンタリー映画に関する上映会・シンポジウムを主催した。

中村 篤志

(1) 研究成果

「書評:小沼孝博著『清と中央アジア草原:遊牧民の世界から帝国の辺境へ』」『歴史』125輯, 2015年10月, pp.75-83

「遊牧と移住のあいだ:20世紀前半期フルンボイル社会の動態から」岡洋樹編著『越境の東北ア

ジア——統治の動揺・地域流動化・共生』(投稿済み)

(2) 教育・地域連携等の活動

〔担当授業〕

主担当：文化動態論（アジア）、アジア史講義（二）、アジア史演習（二）前後期、アジア史史料講読（二）、基盤「モンゴル語の歴史（教養セミナー）」

分担担当：基礎（文化動態論）、国際文化学演習（前期）、基盤「グローバル社会に生きる君達へ」〔教育活動〕

1. 国際交流：人文学部異文化間コミュニケーション I in 台北のWGメンバーとして、説明会、合同街頭調査に向けた事前学習会、帰国報告会の企画・運営に当たった。
2. 国際文化学演習（前期）では、特別招待講師として社会人講師2名、本学留学生を招き講演／講義を企画した。その一環で佐藤知彰（丸十大屋社長）氏の講演会「和食を世界に」を企画、実施した（2015/ 7/30）。
4. 卒論指導4名。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- ・山形大学優秀教育者賞を受賞した（学部の国際交流、学生の海外派遣を促進した一連の教育活動に対し。12/24）
- ・教育面では、前年に引き続き、台湾実習の企画・運営に関わったほか、国際文化学演習にて、アジアで働く駐在員や海外展開をする地元老舗企業、留学生などを招待し、海外キャリアや地域価値と世界展開、イスラーム文化理解をテーマに、実践的授業を行った。
- ・代表を務める基盤研究C「日記史料からみた清末のモンゴル王公と清朝支配」の調査・研究に従事した。

中村 隆

(1) 研究成果

近年の継続的な取り組みだったホガース（William Hogarth）の版画とディケンズ（Charles Dickens）とクルックシャンク（Gerge Cruikshank）の影響関係および相互関係を明らかにする論文を執筆した（学界の一流学術誌へ投稿済み）。

(2) 教育・地域連携等の活動

基盤教育の英語においては、ALCを主たる教材として用い、主として英語を使って授業をした。

専門教育の講義では、Shakespeare, Milton, Hogarth, Dickens, G. Eliotの主要な作品を論じた。演習では、平易で明晰な英文エッセイの朗読を取り上げ、それを音声で聞き、内容を説明できるような工夫をした。

地域連携では、人文学部の重点校であり、中村隆の担当である山形北高校の教頭先生と進路指導部長の先生と連絡を取り、当該校と人文学部における密接な連携を図った。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究面では長年の取り組みであった版画と文学に関する考察を一つの論文にまとめることができた。

基盤教育では、英語を用いて英語の授業をすることができたが、学生が英語で応答するという側面の実施は十分ではなかった。

専門教育では、英語のエッセイを読む前に、まず英語を聞いてその内容を理解するというこれまでにしてこなかったことに取り組み、英語の音声の重要性を学生に理解してもらうことができた。

英文学の専門教育としては、映画を通して英文学作品にアプローチすることにより、学生たちがより親しみをもって、英文学を受容できるように工夫した。

西上 勝

(1) 研究成果

[論文]

「黄賓虹と徐悲鴻の中国画論をめぐる」(『山形大学紀要(人文科学)』第18巻第3号,平成28年2月,31～53頁。

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当授業]

専門教育：中国文学概論など

基盤教育：共通科目コミュニケーション・スキル2「中国語」

[地域連携]

10月の山形国際ドキュメンタリー映画祭に合わせ、人文学部附属映像文化研究所の主催により10月9日(金)から三日間にわたって開催された、「ドキュメンタリーに見る現代台湾の光と影」における一部講演の司会を務めるとともに、講演及びシンポジウムに係る資料作成に従事した。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

平成27年度発行の『日本中国学会報』第67集の編集に際し、掲載に応募のあった論文「『莊子』の寓話における演出的な叙述について」と題する原稿の査読と評価を担当した。

福野 光輝

(1) 研究成果

○紀要論文

福野光輝(2015)。「特集」山形市における安心・安全に関する学際的研究 本研究プロジェクトの概要. 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, 12, 49-50。

福野光輝・渡邊洋一・山田浩久(2015)。山形大学小白川キャンパス周辺における小学生保護者の不安経験と葛藤懸念. 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, 12, 73-84。

○分担執筆

福野光輝(2015)。実験. 眞嶋俊造・奥田太郎・河野哲也(編著)人文・社会科学のための研究倫

理ハンドブック, 慶應義塾大学出版会, 82-88。

福野光輝 (2016)。交渉研究 大淵憲一 (監修) 紛争・正義・暴力の心理学, 北大路書房, 88-108。

○学会発表

福野光輝 (2015)。対人ストレス対処と2次コントロール。北海道心理学会第62回大会 (北海道医療大学, 北海道石狩郡当別町, 2015年11月29日)

渡邊洋一・福野光輝 (2015)。視点の錯綜と通行危険感知。東北心理学会第69回大会 (東北文化学園大学, 仙台市, 2015年6月6-7日)

○講演

福野光輝 (2016)。SPSSによるデータ分析: 処遇にまつわる分析を中心に。仙台少年鑑別所拡大研究会 (仙台矯正管区, 仙台市, 2016年2月5日)

(2) 教育・地域連携等の活動

○担当授業

「心理学特殊実験A」(前期・後期)

「心理学講義(二)」(前期)

「心理学実験」(前期)

「読んで読む心理学(教養セミナー)」(前期)

「社会心理学演習」(前期・後期)

○卒業論文指導

「道具使用における身体近傍空間の拡大をもたらす要因の検討: 視覚的連続性と触覚的連続性に着目して」

「アタッチメント・プライミングは対人葛藤において建設的な対応を促すのか」

「集団内競争・集団間競争が社会的比較に及ぼす影響」

「嘘の動機と結果の重大さが道徳性判断に及ぼす影響: 被害が大きければ利他的動機は考慮されなくなるか」

「パーソナリティは街中での話しかけに対する態度にどう影響するか」

「食品ブランドのコモディティ化脱却にストーリー・テリングは有用か: ストーリーの特性に着目して」

○大学院進学実績

東北大学大学院文学研究科 (2015年度卒業論文指導学生から1名)

○学会活動

日本社会心理学会学会誌「社会心理学研究」編集委員 (平成27年4月～現在)

日本社会心理学会学会誌「社会心理学研究」学会賞(論文賞)選考小委員会 (平成27年4月～平成27年10月)

○社会貢献活動

独立行政法人大学入試センター教科科目第一委員会 (平成26年10月～平成27年12月)

○出張講義

福野光輝 (2015)。はじめての心理学。(山形県立谷地高等学校, 山形県河北町, 2015年7月16日)

福野光輝 (2015)。新庄北高等学校研究室訪問プロジェクト受け入れ (2年生1名)

福野光輝 (2015)。はじめての社会心理学：心の社会性を探る。(山形大学オープンキャンパス模擬講義, 2015年8月1日)

本多 薫

(1) 研究成果

論文

- 1) 本多薫, 門間政亮: ナスカ台地におけるラインセンター間の移動について-最短経路と経路選択からの検証-, 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, 第12号, p. 1-14, 2015.
- 2) 渡邊洋一, 本多薫, 門間政亮: ナスカ台地の移動時における直線の地上絵とラインセンターの利用-ウェアラブルカメラを用いた分析-, 山形大学紀要 (人文科学), 第18巻3号, p.139-154, 2016.
- 3) 山田浩久, 本多薫: 山形大学周辺の小学校区における災害リスク認知の現状と課題, 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, 第12号, p.61-71, 2015.

学会発表

- 1) 門間政亮, 本多薫: 読書中に流れる BGM に含まれる言語情報の無意識処理に関する検討, 日本人間工学会第56回大会講演集, 芝浦工業大学 (東京), p.358-359, 2015年06月13日
- 2) Yoichi Watanabe, Kaoru Honda and Tadasuke Monma: Usefulness of the lines and the line centers on Nasca pampa, Congreso Internacional de Americanistas Conflicto, paz y construcción de identidades en las Américas San Salvador del 12 al 17 de julio de 2015.
- 3) Kaoru Honda: Display Locations of Information on Wide Screen Display Devices, Proceedings 19th Triennial Congress of the International Ergonomics Association, Melbourne 9-14 August 2015.
- 4) 門間政亮, 本多薫: 音楽のテンポの違いが言語作業に与える影響-言語情報を含む音楽について-, 第11回日本感性工学会春季大会, 神戸国際会議場 (神戸市), 2016年3月26日

その他

- 1) 本多薫: 第2節 (第1章) 統計的手法 (p. 9-53), ビジネス・キャリア標準テキスト「生産管理2級 (共通知識)」, 渡邊一衛監修, 社会保険研究所, 平成27年4月発刊, ISBN 978-4-7894-9990-3
- 2) 本多薫: 第2節 (第1章) データの活用 (p.10-34), ビジネス・キャリア標準テキスト「生産管理3級 (共通知識)」, 渡邊一衛監修, 社会保険研究所, 平成27年4月発刊, ISBN 978-4-7894-9980-4

(2) 教育・地域連携等の活動

教育:

授業: (教養) 情報処理; (学部) 公務員対策セミナー, 人間情報科学概論, 基礎講義 (地域・人間), 情報処理演習, 情報科学演習, 情報科学実習, プログラミング演習

卒業研究の指導 (人間情報科学専修担当として指導):

- (a) 小学校から高等学校における情報教育カリキュラムの提案

- (b) スマートフォンを用いた拡張現実に関する研究
- (c) テレビゲームのコントローラーにおける使いやすい形状に関する研究
- (d) 大学生のネット依存の自覚と実態に関する検討
- (e) 「まとめブログ」の変容—書き込みの著作権—

地域貢献活動等：

- (a) 山形大学公開講座（人文学部）：世界遺産ナスカの地上絵「情報科学からナスカの地上絵を考える」, 平成27年6月8日
- (b) 日本人間工学会 理事（総務担当）, 代議員
- (c) 日本人間工学会東北支部 支部長
- (d) 日本経営工学会 代議員
- (e) 日本経営工学会東北支部 副支部長, 運営委員
- (f) 土木学会 地下空間研究委員会 心理小委員会 委員

(3) 研究・教育活動に関するコメント

平成27年度は、コンピュータ用のワイドディスプレイの情報表示に関する研究、ナスカの地上絵の情報科学（グラフ理論、視覚情報処理）の視点からの研究を進めた。また、教育としては、情報科学関連の講義を担当するとともに、共同で卒業研究の指導を行った。

松尾 剛次

(1) 研究成果

著書

単著

- ・中国語版『仏教入門』（山形大学出版会, 2016年3月）

共著

- ・遊学館ブックス『生きる道しるべ 老いと死と生』（財）山形県生涯学習文化財団（共著）, 2016年3月

論文

- ・「親鸞伝再考」『新潟親鸞学会紀要』10集, 2015年6月

研究発表

- ・2015年12月12日, 日本仏教総合研究学会の国際シンポジウムにおいて「関東祈祷所再考」と題して研究報告を行った。

その他

- ・書評「藤田恒春著『豊臣秀次』」『山形新聞』2015年4月12日
- ・記事「由比ヶ浜に墓域確立の跡」『読売新聞』2015年5月6日
- ・記事「にじむ義光の人柄 家臣宛て書簡発見」『山形新聞』2015年5月22日
- ・記事「寺子屋子ども大学特別授業『ナスカの地上絵を体験しよう!』を終えて」『うえるかむ』第62号 2015年6月17日発行
- ・TBS「所さんの日本の出番」2015年6月9日 PM 7:00出演

- NHK イーテレ「知恵泉」2015年7月7日 PM10:00出演
- 書評「新谷尚紀著『葬式は誰がするのか—葬儀の変遷史』」『山形新聞』2015年8月9日
- 出前講義岩手県立大船渡高校 2015年10月20日
- 記事「最上義光の新資料確認」『山形新聞』2015年12月5日
- 記事「最上義光研究が前進」『朝日新聞』2015年12月5日
- 書評「関雄二編『古代文明アンデスと西アジア神殿と権力の生成』」『山形新聞』2015年12月6日

(2) 教育・地域連携等の活動

- 担当授業

専門教育では、日本史概論、日本史演習（二）、日本史講義（二）、日本史史料講読（二）。大学院では日本中世史特別演習、歴史文化特別研究Ⅰ、Ⅱを担当した。基盤教育では「宗教史入門」、「都市を通じて考える人間と歴史」、「古文書を楽しもう」を担当した。

- 卒論指導 以下の11本の卒論指導を行った。

「狐信仰始まりに関する一考察 —『日本霊異記』を中心に—

弘前藩の役割に関する一考察—蝦夷地警備を中心に—

『教行信証』の成立に関する一考察

奥州探題に関する一考察

都都古別神社についての一考察

慶長三陸地震津波に関する一考察—相馬地方を中心に—

稚児に関する一考察

奥州街道と宿駅に関する一考察—岩沼宿を中心に

律令国家の東北支配と柵戸

大聖寺（亀岡文殊）と寛文のさばき

最上氏改易までの経緯とその影響についての一考察

出前講義・模擬講義

- オープンキャンパス（2015年8月1日）において模擬講義「ジブリ作品と日本宗教史」を行った。
- 出前講義 岩手県立大船渡高校 2015年10月20日

〈地域連携〉

- NHK 文化センター仙台校講師、山交カルチャー講師を勤めた。
- 山形県生涯学習文化財団の「山形学」企画委員として山形学を企画・実施した。
- 大石田町まち・ひと・しごと創成有識者会議（2015年6月1日～2017年5月31日）委員長を勤めた。
- 都市地域学研究所の所長として、公開講座「山形の魅力再発見」（2015年9月5日、19日、10月3日）、講演「最上義光をめぐって」（2015年6月27日）、第5回安達峰一郎記念世界平和弁論大会（2015年11月14日）を主催した。
- 寺子屋子ども大学代表として以下の講座を主催した。

① 4月12日（日） 学習支援

- ② 4月26日 (日) 特別授業「最上義光を楽しもう！」
- ③ 5月10日 (日) 特別授業「ナスカの地上絵を体験しよう！」
- ④ 5月31日 (日) 企画相談会
- ⑤ 6月14日 (日) 特別授業「楽しい理科実験教室～光のワンダーランド」
- ⑥ 6月28日 (日) 企画相談会
- ⑦ 7月26日 (日) 特別授業「楽しい音楽教室」
- ⑧ 7月27日 (月) 活動報告会
- ⑨ 8月5 (水)～7日 (金) 置賜学舎夏休み寺子屋
- ⑩ 10月25日 (日) 特別授業「楽しい英語教室～英語の音に親しむ」
- ⑪ 12月26日 (土) 特別授業「楽しい書道教室」
- ⑫ 1月23日 (土) 山形県避難家庭心のケア事業 個別カウンセリング
- ⑬ 1月31日 (日) 福島帰還者訪問事業 (福島市)
- ⑭ 2月20日 (土) 山形県避難家庭心のケア事業 個別カウンセリング
- ⑮ 3月13日 (日) 特別授業「楽しい音楽教室」

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究面では著書が単著1冊、共著1冊、論文が1、学会での研究報告が1つで、大いに頑張ったといえる。とりわけ、中国語版『仏教入門』の刊行は、中国語圏の人々の日本仏教理解に役立つと期待される。教育面では11本もの卒論指導を行い、大変だった。地域貢献においても、初めて大石田町の有識者会議の委員長となり、「まち・ひと・しごと創成」プラン作成に莫大な時間をさいた。忙しかったが、大石田町の魅力が再認識できて楽しかった。また、都市地域学研究所の所長、寺子屋子ども大学代表としての仕事も忙しく、土・日がない状態であった。ことに、安達峰一郎世界平和弁論大会は第5回となり、ようやく全国大会として名実ともに充実してきたのは嬉しい限りである。

松本 雄一

(1) 研究成果

〔著書〕

1. 2015「第4章 神殿・儀礼・廃棄：聖なるモノとゴミとの間」 関雄二編『古代文明アンデスと西アジア：神殿と権力の生成』pp.167-208, 朝日新聞出版。

〔論文等〕

1. 2016 Estudio de artefactos oseos del centrocerebral Formativo de Campanayuc Rumi, Vilcashuaman, Ayacucho. En Actas de Ponencias del V Simposio Nacional de Arte Rupestre Sinar "Eloy Linares Malaga." Ministerio de Cultura, Perú, editado por A. Bueno Mendoza, P. Van Dalen, Y. Cavero Palomino, H. Grados Rodriguez y R. Lazo Perez, pp.107-132. Lima: UNMSM. ユリ・カベロ, イルダ・ベジードと共著。

2. 2015「南部山岳地域, カンパナユック・ルミ遺跡：Sitio arqueológico de Campanayuc Rumi, sierra sur del Perú」, 『ペルー古代アンデス文明研究における日本人の貢献：Aporte Japonés a la

investigación de las Antigua Civilizaciones de los Andes del Perú』 pp. 110-111, 120-121, 在日本ペルー大使館。

3. Informe Final del Proyecto de Investigación Arqueológica de las Líneas y Geoglifos de la Pampa de Nasca (Séptima Temporada). (Masato Sakai, Yoshimitsu Ccoyllo, Jorge Olano, Yuichi Matsumoto, Atsushi Yamamoto) , 933p. , Ministerio de Cultura del Perú, Lima, 2015. 坂井正人, ホルヘ・オラーノ, ヨシミツ・ホイヨ, 山本睦との共著。

[学会・シンポジウム等口頭発表]

1. 2015 Chavín en la Costa y Paracas en la Sierra: Interacción Interregional durante el Horizonte Temprano. El fenómeno Paracas en el sur del Perú. 55 ICA, 13 de julio , Universidad Francisco Gavidia. San Salvador.
2. 2015 ¿Maquetas Representando Arquitectura Pública? : Nuevos Hallazgos desde Campanayuc Rumi Tradiciones tempranas de arquitectura pública de los Andes Centrales. 55 ICA, 13 de julio , Universidad Francisco Gavidia. San Salvador. ユリ・カベロ, ジェイソン・ネスビット, エディソン, メンドーサと共同発表。
3. 2015 Emergencia de la Cultura Paracas: Una Perspectiva desde Sierra Centro-sur del Perú. II Simposio de Arqueología, Avances de las investigaciones arqueológicas de las misiones italiana y japonesa. 5 de septiembre, Museo Antonini. Nasca.
4. 2015 「ペルー南海岸・インヘニオ谷における考古学調査」, 第20回古代アメリカ学会研究大会, 12月5日, 東京大学。松本雄一／坂井正人／ホルヘ・オラーノ (山形大学), ヨシミツ・ホイヨと共同発表。
5. 2016 「ペルー南高地の神殿：「周縁」から見た形成期社会」 公開シンポジウム「アンデス文明初期の神殿と権力生成」2016年1月31日 キャンパス・イノベーションセンター東京 (東京都港区)。
6. 2016 The Emergence of Paracas Culture in the Highland and the Tajo Problem. Nasca Roundtable 2016, March 3, 2016, Yamagata University, Yamagata.

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当授業]

1. 基盤教育

神殿と権力

2. 専門教育

文化動態論講義, 文化人類学概論 (二), 文化人類学講義 (二), 文化人類学演習 (三), 文化人類学演習 (四)

3. 大学院

人類学特論 I, 人類学特別演習

[講演]

「地上絵を作ったのはどんな人々だったのか：遺跡の分布からみるナスカ社会」山形大学公開講座「世界遺産ナスカの地上絵：学際的アプローチの成果と展開」2015年6月15日。

[その他]

山形大学ナスカ研究所において、ペルー人学生の調査指導を行った。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

「アンデス比較文明論」(科学研究費補助金・新学術領域研究)によって、ペルー南部インヘニオ河谷において、踏査を実施した。また、「周縁からみたアンデス文明の形成過程」(科学研究費補助金・若手 A)によって、ペルー南部アヤクチョ県で踏査を行った。

宮腰 直人

(1) 研究成果

論文

- 1 「『大石兵六夢物語』小考—鳥津重豪の時代と物語草子・絵巻」『アジア遊学190 鳥津重豪と薩摩の学問・文化』勉誠出版 140-150, 2015年10月
- 2 「舞の本『敦盛』挿絵考—明暦版と本問屋版を中心にして」『文化現象としての源平盛衰記』笠間書院, 371-383, 2015年05月
- 3 編著『〈曾我物語〉の絵画化と文化環境』人間文化研究機構国文学研究資料館, 2016年03月刊行予定

(2) 教育・地域連携等の活動

[教育活動]

〈担当授業〉基盤教育:〈物語〉としての絵巻・絵本—日本の物語文化の基層を探る(文学)学部専門教育:日本文学概論(一), 日本文化演習, 日本文学講読, 国語の教材分析 A, 日本古典文学講義 大学院科目:日本古代中世文化論特別演習

- 卒論指導:日本古典文学専攻4名の卒業論文を指導した。
- 教員免許状更新講習「国語教材の研究」(2015年8月4日)の講師をつとめた。

[地域貢献活動]

- 1 出張講義:大学出張講義(國學院大學栃木高等学校), 2015年06月20日
- 2 出張講義:大学・短期大学模擬講義(新潟市立万代高等学校), 2015年06月24日
- 3 出張講義:出前講座「〈浦島太郎〉を研究する方法—龍宮城ってどんなところ?古典文学への招待」, 2015年10月9日
- 4 特別講義:「四季耕作図と稲作文化」, 山形の稲作文化に学ぶ日台交流超短期研修プログラム」, 2016年2月22日

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- 研究面では、科研の支援を受け、東北の語り物文芸(奥浄瑠璃)の研究に着手することができた。教育面では、出張講義や教材研究の授業によって、古典文学への導入・学習法に積極的に取り組む機会を得た。今後も試行錯誤を重ねたい。

元木 幸一

(1) 研究成果

(論文) 『《ヘント祭壇画》の不思議—フェン・エイクの新しい絵画世界』『ネーデルラント美術の魅力 ヤン・ファン・エイクからフェルメールへ (北方近世美術叢書 I)』ありな書房, 2015年12月, 9～47頁。

(2) 教育・地域連携等の活動

(教育)

授業: 美術に見る男女の共生/競生/狂生 (共生について考える), 笑顔の秘密, 芸術文化概論, 芸術文化特殊講義, 美術史演習, 美学・芸術学演習, 芸術文化実習, 基礎講義 (文化解釈学, オムニバス), 表象文化論 (美学・芸術学) 特論, 美学芸術学特論

(卒業論文指導)

「アルブレヒト・デューラー《1500年の自画像》に関する考察」「パウル・クレー作《11人のグループ (Gruppe zu elf)》(1939年) について」「室内からの鑑賞による庭園の切り取り」「勝川春章《婦女風俗十二ヶ月図》にみる雅と俗」

(地域貢献)

- ・「聖母・魔女・お姫様: 西洋美術に見る女性像」NHK 文化センター仙台教室, 2015年4月
- ・「笑うフェルメールと微笑むモナ・リザ」NHK 文化センター盛岡教室, 2015年4月
- ・「笑顔の秘密」山形北ロータリークラブ, 2015年5月
- ・「笑顔の秘密—笑いの美術史」放送大学山形学習センター, 2015年6月
- ・「我家の秘物 鏡と春画」小川とびきり会, 2016年3月

(3) 研究・教育活動に関するコメント

雑務に追われ卒論指導などが不十分だったので, 学生たちに申し訳なかった。授業は雑務の息抜きのようになり, 予習は十分ではなかったが, むしろ生き甲斐のようになり, 私はたいへん楽しかった。学生はどうだったんだろう。

論文を一つ書いたのは意地のようなもの。ただし, 暇を見つけての論文執筆も楽しい時間だった。くわえて科研一年目にあたり, ドイツに2週間程美術調査に出かけたのも有意義だった。忙しい時期に出張を許してくださった学部長に感謝したい。

森岡 卓司

(1) 研究成果

[口頭発表・単独]

1. 森岡卓司「〈純粹手紙〉と「笑ひ」—樋口一葉「軒もる月」試論—, 平成25年度日本近代文学会東北支部夏季大会 平成27年7月4日 米沢女子短期大学

[パネル代表者・基調報告・司会]

1. 森岡卓司, 仁平政人, 山崎義光, 高橋秀太郎「1940年代の東北表象と地域文学運動」, 2015年度日本近代文学会秋季大会 平成27年10月25日 金沢大学

[記事]

1. 森岡卓司「やまがた再発見」290. 武田正 上, 291. 武田正 下, 『山形新聞』 平成28年2月7日, 14日
2. 山新文学賞「選考経過」, 『山形新聞』 平成27年4月19日, 5月17日, 6月21日, 7月19日, 8月16日, 9月19日, 10月18日, 11月15日, 12月20日, 平成28年1月24日, 2月21日, 3月20日

(2) 教育・地域連携等の活動

[出張講義]

1. 福島県立橋高等学校 (平成27年10月29日)

[公開講座]

1. 森岡卓司・高橋由貴「村上春樹のふしぎ」, 河北 TBC カルチャーセンター講座, 平成27年4月11日, 5月9日, 7月18日, 9月12日 (森岡担当回) 河北 TBC カルチャーセンターエスパル教室
2. 森岡卓司「疎開文学者の見た「東北」と「もうひとつの日本」—太宰, 横光, 吉本—, 第25回山寺芭蕉記念館文化セミナー「東北再発見2」 平成27年8月23日 山寺芭蕉記念館
3. 森岡卓司「吉本隆明の初期世界」, 寒河江市立図書館「シリーズ山形の文学を探る」第2回 平成27年9月25日, 寒河江市立図書館

[講演]

1. 森岡卓司「ことばの「倍音」」, 第39回山形県高等学校総合文化祭芸芸専門部大会全体講演, 平成27年10月9日 山形市霞城公民館
2. 森岡卓司「文学で何にであえるか?」, 山形県立新庄北高等学校図書館読書講話, 平成27年11月26日, 新庄北高等学校

[論文指導]

修士論文1名, 卒業論文4名

[授業担当]

「初期村上春樹の世界 (文学)」ほか基盤教育科目2, 「日本文学演習」ほか専門教育科目7, 「日本近現代文化論特別演習」ほか大学院担当科目2 (と特別研究)。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

次年度に向けた原稿をいくつか提出し, 全国学会を含む口頭発表を行ったが, 前年度に引き続き研究活動が停滞した。科研費共同研究期間を無事終え, その成果に関して招待発表の招きを受ける (次年度) などそこそこの評価を得た。

学会活動としては日本近代文学会東北支部運営委員, 日本比較文学会東北支部事務局長, 日本文芸研究会常任委員, 日本文学協会委員。

管理運営上の業務として, 目標評委員会とそれに付随する部会のメンバーとなった他に, 広報委員会 (HP 部会), [学部に関わる業務] 1 を担当し, さらに改組に関わって複数の WG に加わった。映像文化研究所の所員として活動し, シカゴ大学ポーダッシュ教授を招いての国際学術講演会をコーディネートした。

上記以外の教育活動として、平成23年度より実施している日本近代文学東北インカレゼミ（平成22年は山形大学単独の自主ゼミとして実施）を、本年度は岩手県で開催、学生が企画運営を担当する補助を行った。福島大、東北大、弘前大、盛岡大、東京大からの参加があった。

地域連携等の活動に精力的に取り組んだ一年でもあったが、上記の他に、山形大学が行う朗読コンテストの審査員を、平成27年度も継続して務めた。台湾師範大学の研修訪問に際して、「日本近代文学の中の東北・農村」と題した講義を行った。

一年中会議と打ち合わせの印象ばかり残る年度であったが、大学院生は優れた修士論文を提出した。

山崎 彰

(1) 研究成果

「ブランデンブルク農村史研究の課題—近世農地制度と農業協会の設立をめぐる」『歴史と経済』230号（2016年1月）

「19世紀ブランデンブルク貴族家における世襲財産制の導入」『社会経済史学』81巻4号（2016年2月）

「19世紀ブランデンブルク近代村落の形成—フリーデルスドルフ村を事例に（1）」『山形大学歴史・地理・人類学論集』17号（2016年3月）

(2) 教育・地域連携等の活動

・基盤教育

「ヨーロッパ史における共生と環境」（基幹科目）、「近代ヨーロッパ国家の多様なかたち」（教養科目）

・専門教育

「文化動態論基礎」「文化動態論（ヨーロッパ）」「ヨーロッパ史講義（二）」「ヨーロッパ史演習（二）」「ヨーロッパ史英書講読（二）」「卒業論文」。

以上の他に山内勸東海大山形高元校長らによる「教職実践演習」、許時嘉准教授らによる「異文化間コミュニケーションⅠ」（台湾・中国語研修）、伊藤豊教授らによる「異文化間コミュニケーションⅠ」（フィリピン・英語研修）にも協力した。

2015年10月9日～11日には、許時嘉准教授を中心として企画した「ドキュメンタリーに見る現代台湾の光と影・映像は語る」の実施に協力した。山形国際ドキュメンタリー映画祭の協力企画として、11本の映画上映、映画研究者によるシンポジウム、監督トークなどを実施した。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

10数年来取り組んでいるブランデンブルク農村史に関する実証的研究の一部を発表することができた。

また、学生たちの台湾研修、フィリピン研修に同行するとともに、台湾師範大学、サン・カルロス大学の研究者と学術交流をした。

山田 浩久

(1) 研究成果

著作

インバウンド観光に向けた地域資源の発掘と検証。単著。山形大学人文学部叢書9。
まちづくりのための中心市街地活性化—イギリスと日本の実証研究。共著。古今書院。

学術論文

山形大学周辺の小学校区における災害リスク認知の現状と課題。共著。山形大学大学院社会文化システム研究科紀要。12。

山形大学小白川キャンパス周辺における小学生保護者の不安経験と葛藤懸念。共著。山形大学大学院社会文化システム研究科紀要。12。

学会発表及び講演

地域と文化が子供を育てる。招待講演。山形市 PTA 連合会

山形県上山市における学生の観光まちづくり提案。シンポジウム報告。日本地理学会

(2) 教育・地域連携等の活動

担当授業

- ・人文地理学概論, 地域構造論, 地誌学, 地域構造論演習, 都市地理学調査実習, 地域の共生, 他

学外の審議会, 委員会

- ・国土交通省, 東北ブロック地理空間情報産学官地域連携協議会委員
- ・山形県 CCRC 検討委員会委員長
- ・山形市都市計画マスタープラン研究会委員
- ・山形市都市計画道路外部検討委員会委員
- ・山形市まなび館事業者審査委員会委員長
- ・山形市にぎわい拠点整備事業審査委員会委員長
- ・長井市まちづくり基金審査委員会委員
- ・山辺町総合戦略有識者会議座長

(3) 研究・教育活動に関するコメント

山形県内のまちづくり関連の研究に携わり, 成果を残すことができた。研究成果は COC 事業の支援を受け, 学生教育にも反映させた。

吉井 文美

(1) 研究成果

[著書]

- ・胡春恵・劉祥光主編『2014兩岸三地歴史学研究生研討会論文集』(国立政治大学歴史系, 2015年), 担当箇所: 吉井文美「中日戦争期中日英対江海関問題之交渉(1937-1938)」(日本語訳: 日中戦

争期上海海関をめぐる日英中の交渉 1937-1938)」

[論文]

- 吉井文美「日中戦争初期における日本の対中国海関政策とその反応—日英関税取極めに至る交渉過程—」『山形大学歴史・地理・人類学研究会』第17号（2016年3月）

[学会報告]

- 吉井文美「1930年代華北支配势力的変遷与在華英人の反応（日本語訳：1930年代華北における支配者の変化と在華イギリス人の反応）」二十世紀三四十年代的華北国際学術研討会（中国・河北大学，2015年6月）

[その他]

- 吉井文美『1930年代華北におけるガバナンスの変更と在華イギリス人の反応』（富士ゼロックス株式会社 小林節太郎記念基金 小林フェロウシップ2013年度研究助成論文，2015年）
- 新刊紹介，外務省編『日本外交文書 昭和期Ⅲ』昭和十二～十六年 第一巻・第二巻『史学雑誌』124編4号（2015年4月）

[受賞]

- 第2回史学会賞受賞

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当授業]

- 基盤教育：日本近代史料講読入門（教養セミナー）
- 専門教育：日本史史料講読（一），日本史演習（一）（前期）（後期），日本史講義（一），文化動態論（日本），人間文化入門総合講義
- 大学院：日本近代史特論Ⅱ

[社会連携等]

- 第53回東北社会科教育研究協議会（中学校）山形大会で発表する，山形市立金井中学校黒坂啓太教諭の社会科学習指導案（歴史的分野）を監修。
- 「山形の稲作文化に学ぶ日台交流超短期研修プログラム」（2016年2月15日～24日）にて，「米と女兒節人偶（日本語訳：米と雛人形）」の授業を担当。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- 「山形の稲作文化に学ぶ日台交流超短期研修プログラム」では，台湾国立師範大学台湾史研究所・台湾語文学系の院生・学部生16人に対して，中国語で日本史の授業を行う機会を得，研究・教育の双方において貴重な経験になった。中国語の校正などでお力添えを頂いた許時嘉先生に厚くお礼申し上げる。

RYAN, Stephen

(1) 研究成果

[論文]

2015 Ryan, S.B. Cultural Diplomacy in International Relations: understanding hidden bias in cultural

knowledge. 山形大学紀要 (人文科学), 第18巻, 2号. pp. 63-86.

2015 Ryan, S.B., Morita, M. and Suzuki, J. A. Basic Approach to the TOEIC Test, Getting the Point of Strategies. Tokyo: Shohakusha Press.

[発表]

2016. 2 Presentation, The Era of President Andrew Jackson (1767-1845). Japan Association of Language Teachers (JALT). Yamagata city, Yamagata Chapter.

2015. 5 Ryan, S.B. Theodore Roosevelt (1856-1919). 国際日本文化研究会 (IAJS), 山形市.

2015. 6 Ryan, S.B. Cultural Schema as a Source of Cross-Cultural Friction, The 5th Asian Conference on Psychology & Behavioral Sciences, International Academic Forum (IAFOR). 大阪府立国際会議場, 大阪市.

(2) 教育・地域連携等の活動

英語コミュニケーション (上級), 英作文 (上級), 英語 C, 英語 R, 異文化間コミュニケーション I, II.

(3) 研究・教育活動に関するコメント

My research interest intersects with Intercultural Communication and Cross-Cultural Psychology.

渡辺 文生

(1) 研究成果

《学会, 研究会などの口頭発表》

渡辺文生「講義の談話におけるトピック・センテンスの聴解について」2015 CAJLE Annual Conference, Simon Fraser University, Vancouver, 2015. 8.20

渡辺文生「物語談話において言語化しにくい指示対象にどう言及するか?」2016 AATJ Annual Spring Conference, Seattle, 2016. 3.31

《出版物》

渡辺文生 (2015) 「論説的な文章・談話における文末表現の使われ方について」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三 (編) 『文章・談話研究と日本語教育の接点』 pp.179-199. くろしお出版

渡辺文生 (2015) 「講義の談話におけるトピック・センテンスの聴解について」『2015 CAJLE Annual Conference Proceedings』 pp. 358-367. カナダ日本語教育振興会

(2) 教育・地域連携等の活動

担当授業は, 言語学総合講義・日本語学文法講義・日本語学特殊講義・日本語学講読・日本語学演習・日本語 (二)《以上学部専門科目》, 国語の教材分析 A・教職実践演習 (中学校・高等学校) 国語《以上教職科目》, 日本語意味論特論・特別研究《以上大学院科目》, ことばの意味 (言語学)・日本語上級 2《以上基盤教育科目》。地域貢献等の活動としては, 教員免許状更新講習 (2015. 8. 3), 福島県立会津学鳳高等学校での出張講義 (2015.10.16), 山形東高等学校「山東探求塾」の研究室訪問への対応 (2015.11.9) などを行った。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究活動については、研究代表者として関わる基盤Cの科学研究費プロジェクトの研究を中心に学会発表等を行った。そのほか、2件の科学研究費プロジェクトに研究分担者として従事した。教育活動については、日本語学の卒業論文（2名）、および修士論文（1名）の指導を行った。

渡辺 将尚

(1) 研究成果

なし

(2) 教育・地域連携等の活動

平成27年10月16日 山形県立新庄北高等学校にて模擬講義（タイトル：「なぜ文化は多様でなければならないのか——グローバルという視点から見る多文化共生」）

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究面では、論文化には至らなかったが、同時代の他国との関係や比較から、ナチズムに新たな光を当てる試みを継続して進めている。次年度は、それらの成果を積極的に公表する年としたい。

【法経政策学科】

赤倉 泉

(1) 研究成果

特に無し

(2) 教育・地域連携等の活動

【教育】

教養教育科目：中国語

専門教育科目：政治学入門，アジア政治論，アジア政治論演習

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究面では成果が出せなかったので次年度に向けて努力したい。教育面では、学生に興味をもたせるために時事問題などを広く取り入れ、視聴覚教材を利用するなど工夫した。

阿部 未央

(1) 研究成果

- (論文)「非正規労働とジェンダー—賃金制度を手がかりに」浅倉むつ子編『ジェンダー法研究』第2号55-68頁，信山社，2015年12月

(2) 教育・地域連携等の活動

[教育] 労働法, 社会保障法, 労働法演習, 少子化を考える, スタートアップセミナー, 公務員講座

非常勤: 東北学院法科大学院にて社会保障法, 東北学院法学部にて社会保障法

[地域連携]

- 山形県医療審議会委員
- 山形県労働委員会公益委員
- 外部講師 山形県労働委員会主催 第14回判例研究会 (2016年2月)

(3) 研究・教育活動に関するコメント

来年度の学会報告に向け、「正規・非正規間の合理性の解釈指針—イギリス法を手がかりに」の研究を進めた。労働法ゼミでは、秋に5大学参加の合同ゼミ合宿に参加し、「ブラックバイト」に関する報告を行ったところ、最優秀賞をとることができ、ゼミ生たちの自信と学習意欲向上につながっている。

池田 弘乃

(1) 研究成果

[論文] 「フェミニズム」, 瀧川裕英・大屋雄裕・谷口功一編『逞しきリベラリストとその批判者たち』(ナカニシヤ出版, 2015年), 157-166頁。

[翻訳] ドゥルシラ・コーネル (吉良貴之・仲正昌樹監訳) 『自由の道徳的イメージ』(御茶の水書房, 2015年), 第3章「他者としてのシンボル形式」123-170頁。『スクリプナー思想史大事典』(丸善出版, 2016年), 「正義・概観」「急進派・急進主義」の項目を担当。

[研究報告] 「判例評釈: 静岡地方裁判所浜松支部平成26年9月8日判決」(東北大学公法判例研究会, 2015年9月12日), 「性の平等をめぐる法と政治」(日本政治学会・分科会, 2015年10月11日, 於千葉大学)。

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当科目] (専門) 私法入門, 法経政策専門基礎演習, 法哲学, 法哲学演習。(基盤) 「ジェンダーと法」入門 (法学)。

[地域連携等]

(講演等) 栃木県連合戸籍住民基本台帳事務協議会合同研修会 (2015年7月22日), 山形大学オープンキャンパス (2015年8月1日), 山形市男女共同参画センター・ファアラ (2015年9月8日), 福島県立橘高等学校 (出張講義, 2015年10月29日)。

(審議会等) 山形県男女共同参画審議会委員 (継続), 白鷹町男女共同参画計画策定委員会委員長 (2015年12月~2016年3月)。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

再婚禁止期間と夫婦同氏制度についての最高裁判決を検討する合同ゼミに加えていただく幸運

を得た。憲法学，民法史，法哲学と様々な観点から問題に迫り，学生にとって貴重な刺激となったことは勿論だが私自身にとっても教育方法を省みる得難い経験となった。

和泉田 保一

(1) 研究成果

・学術論文

「予防法学—都市計画における住民参加についての一考察」都市住宅学第91号79-83頁

・判例・研究報告

名古屋高裁金沢支部判平成27年6月24日（平成26（行コ）8号）判例集未登載（東北大学公法判例研究会，10月）

「国地方係争処理の日英比較」（「国家と法」研究会，2月）

(2) 教育・地域連携等の活動

・担当授業

行政法Ⅰ，行政法Ⅱ，行政法演習，総合講座Ⅰ（「条例による地域政策」）・Ⅱ（「行政法」），情報処理，人文学部公務員対策講座（集団討論2コマを担当）

・地域連携活動

[審議会等委員]

山形県情報公開・個人情報保護審査会委員（継続）

山形県議会情報公開・個人情報保護審査会委員（継続）

山形広域環境事務組合エネルギー回収施設建設及び運営事業技術審査委員会委員（～11月）

山形大学医学部倫理審査会委員（継続）

山形大学 COI 社会システム研究委員会委員（継続）

[外部研修講師]

国土交通省北陸地方整備局職員研修「法律」（7月）

山形市役所職員研修「行政法」（9月）

山形市役所職員研修「政策法務」（2月）

(3) 研究・教育活動に関するコメント

新たな試みとして，公共政策ゼミと合同でゼミ合宿を実施した。今後とも，学生の様々な要望に耳を傾けてゆこうと思う。

論文執筆が少なかったようにみえるが，11月に脱稿した論文（共著）の刊行も控えている。また，公益財団法人都市住宅学会より依頼されて小論を執筆したことは，分野違いの読者を意識せざるを得なかった等これまでになかった経験となった。

岩田 浩太郎

(1) 研究成果

[編著書]

- ・『柏倉家ものがたり』(編集及び単著, NPO 法人柏倉家文化村発行, B 5 版全50頁, 2016年 3 月[平成27年度やまがた社会貢献基金(山形県 NPO 活動促進補助事業)による刊行])

[講演・講座]

- ・町民歴史講座「史料が語る 村田紅花商人のあゆみ」(山形大学人文学部岩田研究室と宮城県柴田郡村田町歴史みらい館の共催) 講師を担当。全 9 回・定員30名, 於村田町中央公民館会議室・村田町歴史みらい館研修室。2015年 6 月27日第 1 回「村田商人の歴史像」/ 7 月11日第 2 回「京都—紅花の販売と交渉の努力—」/ 8 月22日第 3 回「輸送—村田から上方への交通システム—」/ 9 月26日第 4 回「藩の規制—仙台藩の政治と村々の抵抗—」/ 10月24日第 5 回「集荷・注文・出荷—商業実務と広がる取引関係—」/ 11月28日第 6 回「経営—帳簿管理と商業金融—」/ 12 月19日第 7 回「情報—紅花商人の書状の世界—」/ 2016年 1 月23日第 8 回「地域社会—飢饉救済と紅花生産者—」/ 2 月20日第 9 回「雛人形—紅花交易と文化—/まとめ」。各回とも土曜日午後 1 時30分~ 3 時30分。

- ・「柏倉九左衛門家と紅花」(寒河江市民講座「寒河江さくらんぼ大学 もっと学ぶ歴史学部」の移動講座「紅花と最上川舟運」における講演, 2015年10月10日, 於柏倉九左衛門家主屋座敷)

- ・「地域史を学ぶ—山形を事例に—」(山形県高等学校社会科教育研究会村山支部日本史部会研修会における講演, 2015年11月12日, 於山形大学人文学部208教室)

- ・「『柏倉家ものがたり』の刊行と内容」(平成27年度やまがた社会貢献基金(山形県 NPO 活動促進補助事業)「柏倉家ものがたり」発表会, 2016年 3 月27日, 於柏倉九左衛門家北蔵)

[外部資金]

- ・科学研究費補助金・基盤研究 C 「近世近代地方商人の経営と地域経済構造—宮城県村田町を事例に—」(研究代表者), 研究期間2015年 4 月~2019年 3 月。

- ・三菱財団人文科学研究助成「被災蔵古文書資料の保存整理と調査研究—宮城県柴田郡村田町の旧家文書を対象に—」(研究代表者), 研究期間2013年10月~2016年 3 月(半年間の研究期間延長を許可される)

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当授業科目]

- ・基盤教育科目: 基幹科目「歴史にみる共生」(共生を考える)
- ・専門教育科目: 日本経済史, 地域経済史, 日本経済史演習, 法経政策専門基礎演習
- ・大学院教育科目: 日本近世史特論 II, 日本近世史特別演習, 歴史文化特別研究 I

[委員会活動, その他]

- ・全学: 入学試験実施会議委員, 大学入試センター試験小白川地区試験場会議委員, 研究活動の不正行為に関する告発受付窓口の責任者
- ・学部: 学部入学試験委員会議長(副委員長), 経済経営系人事調整委員会委員, 高校訪問重点校(仙台第三高等学校) 担当, やまがた地域社会研究所所員

[非常勤講師]

- ・放送大学卒業研究指導非常勤講師(2015年 4 月~2016年 3 月)

[出張講義・展示協力・地域での報告会など]

- 山形県立鶴岡南高等学校への出張講義（2015年9月18日、講義「山形の地域史」）。
- 山形大学附属博物館プレオープン展のパネル「歴史文化を活かした地域活性化事業」作成に協力
- NPO 法人柏倉家文化村主催：山形大学人文学部日本経済史ゼミナール共同研究発表会「江戸前期の柏倉家の経営」「柏倉家一族の相互救済講」（2016年3月13日、於柏倉九左衛門家長屋門上座敷）

〔社会活動〕

- 山形市社会教育委員（副代表。2012年～）
- NPO 法人「柏倉家文化村」顧問（2006年～）
- 奥羽史料調査会世話人（2002年～。宮城県柴田郡村田町大沼正七家文書整理・目録作成・調査研究など）
- 財団法人三浦新七博士記念会・三浦記念賞選考審査会審査員（2012年4月～）
- 村田町伝統的建造物群保存地区保存審議会委員（2013年12月～）
- 山形県事業・やまがた社会貢献基金「『柏倉家ものがたり』の編集発行」調査研究員（2015年6月～2016年3月）
- 柏倉九左衛門家・柏倉惣右衛門家・柏倉九郎兵衛家・柏倉政右衛門家所蔵古文書資料の整理保存及び目録作成・調査依頼への対応
- 山形市の旧家による歴史資料の相談への対応
- 宮城県村田町の旧家からの古文書調査依頼への対応
- 新潟県新潟市の旧家からの古文書調査依頼への対応
- 日本科学者会議山形支部事務局長（2013年5月～2015年5月）
- 『大人の休日倶楽部』（JR 東日本会員誌）2015年6月号（通巻86号）「特集山形県 時代を彩る紅の道を辿る」監修。
- 『河北新報』2015年7月12日付宮城版紙面及び On-line News「紅花交易の歴史学ぶ 村田で連続講座」への取材協力・校正
- 『朝日新聞』2015年7月15日付全国紙面別刷「be」特集「みちのものがたり 万世大路 見棄てられた峠道を愛す」への取材協力・校正
- 『河北新報』2016年2月24日付宮城版紙面「ひな人形の変遷 紅花交易が影響 村田で連続講座」への取材協力
- 『河北新報』2016年3月20日付宮城版紙面及び On-line News「〈紅花商人と雛 村田蔵の古文書から下〉 商人気質 リスク考え広域化」への取材協力
- 『朝日新聞』2016年3月29日付山形版紙面「かやぶき母屋、冊子に 江戸期の大庄屋・中山町の柏倉家 歴史・地域での役割つづり」への取材協力
- 『山形新聞』2016年3月29日付山形広域版紙面「中山町の大地主 柏倉家の物語 読み解く NPO 法人 屋敷の保存・活用へ冊子」への取材協力

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究及び地域連携活動では、まず今年度も採択された三菱財団法人人文科学研究助成により、宮城

県柴田郡村田町の古文書資料の保存整理活動を継続した。また、文化庁の村田町文化遺産活用地域活性化事業調査研究員として昨年度に刊行した史料集『村田紅花商人文書－翻刻と解説－』を活用して村田町民（一部の他市町民も参加）向けに町民歴史講座（全9回）を開催し、講師を務めた。宮城県では初めて国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された村田町の「蔵の町並み」をつくった村田商人の歴史に関する町民の理解を深め文化財への関心を高める試みであり、また歴史文化を活かした町づくりについて受講生と議論をおこなった。関連して『河北新報』による取材に協力した。

一方、10数年調査を継続している山形県東村山郡中山町岡の柏倉家（本家・分家）に関わり、NPO法人柏倉家文化村の諸活動への協力をおこなった。今年度も同法人が「やまがた社会貢献基金」の採択を受け、柏倉家の歴史と保存活用の現状についてまとめたテキスト『柏倉家ものがたり』の編集執筆を依頼され、同書を刊行した。その報告会も開催した。また、柏倉家の分家の調査を広げることができた。

また、山形県高等学校社会科教育研究会の研修会や寒河江さくらんぼ大学、放送大学の講師を務め、高校教諭の研修と生涯教育にあたった。

教育活動では、4名の大学院生の指導教員（副）として、大学院授業を担当した。

委員会活動では、全学及び学部の入試委員として大学入試センターや学部の前期・後期日程試験の準備をおこない、監督者・整理員への説明会を含め諸実務を統括した。

社会活動では、今年度も山形市社会教育委員や三浦記念賞選考審査会審査員を務め、山形市の生涯教育振興や産業界の懸賞に関わった。

小笠原 奈菜

(1) 研究成果

[口頭報告]

「情報提供義務による契約当事者の信頼の保護—損害としての「高値取得」」2015年6月 国際取引法研究会（於 専修大学）

「情報提供義務による契約当事者の信頼の保護—損害としての「高値取得」」2015年7月 東北大民法研究会（於 東北大学）

「情報提供義務による契約当事者の信頼の保護—損害としての「高値取得」」2015年10月 日本私法学会（於 立命館大学）

「NHK 受信契約に関する諸問題」2015年12月 ネットとうほく消費者被害事例ラボ（於 仙台弁護士会館）

[その他]

「消費者法情報」現代消費者法28号124-126頁（2015年9月）

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当授業科目]

- ・専門教育科目：契約法入門，債権各論，親族法，専門基礎演習，民法演習（オムニバス方式）総合講座Ⅱ（法律），公務員試験対策セミナー

・大学院：副主任

[地域連携]

山形県消費生活審議会委員（副委員長）

山形県個人情報保護運営審議会委員

山形県公益認定等審議会委員

消費者市民ネットとうほく検討委員会委員

山形県税理士会主催研究会講師「民法（債権法）改正の現状 - 債権譲渡を中心として-」2015年9月9日

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究については、日本私法学会で口頭報告をすることができた。その反面、学会報告の準備のために論文執筆ができなかったのが反省すべき点である。学内の委員（教務委員）の仕事にもかなり時間を取られてしまった。

地域連携について、消費者問題、とりわけ、唯一の空白地帯である東北地方に適格消費者団体を設立する活動を続けるとともに、地域の方々への理解を深めるための講演をすることができた。

教育について、卒論執筆学年の演習担当学生6名を含め全体で17名で演習を行なったため、一人一人の発言時間が少なくなってしまった。多様な見解に接することができる面では良いが、発言機会が増えるよう工夫が必要である。

講義については、人員不足のためほぼ専門外の講義（親族法）を担当することとなり大変だった。ただ、平成27年度は親族法分野で注目される最高裁判決が相次いで出され（再婚禁止期間違憲判決、選択制夫婦別姓判決）、学生の関心も高い時期に担当できたことは良かった。

金子 優子

(1) 研究成果

論文

『行政委託型法人等の収入分析—平成16年と平成23年のデータを用いて—』

山形大学紀要（社会科学）46巻 1号, 2015年7月

研究

『公益法人を巡る改革が公益法人の活動に及ぼす影響の定量的分析・評価に関する研究』（平成25-28年度科学研究費補助金 基盤研究C 研究課題番号：25380277）

(2) 教育・地域連携等の活動

担当科目：

行政学，行政学演習，公共政策とはなにか，日本国憲法，スタートアップセミナー

審議会委員：

東根市情報公開・個人情報審査会委員，

村山公立病院情報公開・個人情報審査会委員

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究活動については、「公益法人を巡る改革が公益法人の活動に及ぼす影響の定量的分析・評価に関する研究」(平成25-28年度科学研究費補助金 基盤研究C 研究課題番号:25380277)の第三年次目の研究活動として、①平成24年経済センサス活動調査と平成23年特例民法法人概況調査の完全照合データを用いた集計表の作成、②平成24年経済センサス活動調査から学校法人の個票を抽出した集計表の作成、③平成24年経済センサス活動調査から社会福祉法人の個票を抽出した集計表の作成、④共同研究者が岡山大学を会場に開催された2015年度統計関連学会研究会(9月9日)にて「公益法人改革前後の公益法人の活動分析—行政記録と統計調査の完全照合データを用いて—」(共著者として掲載)を報告、⑤共同研究者が統計数理研究所を会場に開催された共同研究集会「公的統計のマイクロデータ等を用いた研究の新展開」(11月27日)において、「法人の収入金額・年間収入の分析—平成23年特例民法法人概況調査と平成24年経済センサス活動調査の個票を用いて—」(共著者として掲載)と題して報告を行った。

教育活動については、プレゼンテーションソフトや映像ソフトを利用することにより視覚に訴えた分かりやすい講義となるように努めた。また、対話型の講義を行うように努めるとともに、講義とレポート作成を連携させて、学生の能動的学習を推進した。

亀井 慶太

(1) 研究成果

【研究論文】

Kamei, K. and H. Sasaki (forthcoming) "Agricultural Productivity, Infrastructures, and the Optimal Timing of Opening Trade" The Manchester School.

【研究報告】

"Trade Liberalization, Unemployment and Unionized Oligopoly in a General Equilibrium" 国際経済と経済成長・マクロ経済学に関する山形ワークショップ, 山形大学, 2016年3月9日

"Unemployment and Non-tradable Goods in a Unionized Oligopoly" KIER 共同研究プロジェクト研究会, 高知工科大学, 2015年10月11日

"Trade Liberalization, Division of Labor and Imperfect Competition in General Equilibrium." Summer Workshop on Economic Theory (SWET), 小樽商科大学, 2015年8月5日。

【外部資金】

科学研究費補助金 研究活動スタート支援(研究課題番号:15H06059), 単独, 研究代表者, 2015.08-2017.03

【研究会主催】

国際経済と経済成長・マクロ経済学に関する山形ワークショップ(2016年3月9日), 山形大学人文学部

(2) 教育・地域連携等の活動

【担当講義】

国際経済論 a, b

専門基礎演習（前期）

国際経済論演習

国際経済論特論

ミクロ経済学入門（基盤）

【出張・模擬講義】

米沢東高校, 2015/10/20

聖和学園高校 (at 山形大学), 2015/10/7

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究・教育ともに勉強になることが非常に多い年であった。特に今年度は、教員・事務の方々に協力していただき、山形大学で研究ワークショップを開催することができた。少しでも山形大学に貢献できるように引き続き努力していきたい。

川村 一義

(1) 研究成果

- ・「議会研究の意義再考」研究報告（大東文化大学国際比較政治研究所）2015年12月
- ・「多様な国会論の政治学的検討と国会観の転換」科学研究費助成事業（若手研究B），課題番号：26780079

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当科目（全て本学）]

- ・政治過程論（前・後期）
- ・公共政策学
- ・公共政策学演習
- ・専門基礎演習
- ・総合講座Ⅰ（公共政策）（分担）
- ・公務員対策セミナー（分担）

[社会連携等]

- ・尾花沢市総合企画審議会委員，2015年6月～2017年6月
- ・出張講義①（山形県立山形西高等学校），2015年7月
- ・出張講義②（岩手県立千厩高等学校），2015年9月
- ・第43回山形県地方自治研究集会講師，2015年10月
- ・東根市議会議員研修会講師，2016年1月

北川 忠明

(1) 研究成果

〈論文〉

- ・「レオン・ブルジョワにおける連帯・共和国・国際連盟構想（二）」，山形大学法政論叢第62号，

平成27年3月

- 「レオン・ブルジョワにおける連帯・共和国・国際連盟構想 (三)」, 山形大学法政論叢第63・64号, 平成27年12月
- 「社会連帯論の再構築に向けて—S. ポーガムの所説に寄せて」, 『グローバル時代におけるヒトの移動の自由と管理—社会保障制度を中心に—』平成25年度~27年度 科学研究費基盤研究 (B) 研究成果報告書 (研究代表者: 高橋和) (課題番号 25283002) 平成28年3月
〈書評〉
- ドミニク・シュナペール『市民の共同体』(法政大学出版局), 「図書新聞」, 10月5日号

(2) 教育・地域連携等の活動

〈担当授業〉

- 政治理論 (学部)
- 政治理論演習 (学部)
- 政治と人間 (基盤教育)
- 現代政治論特論 (大学院)
- 現代政治論特別演習 (大学院)
- 特別研究 (大学院)

〈社会連携〉

- 山形県明るい選挙推進協議会委員
- 山形市まち・ひと・しごと創生総合戦略推進本部会議懇話会座長
- 長井市振興審議会会長

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- 研究面では, レオン・ブルジョワ研究をひとまず完結させた。今後は社会連帯論の再構築に向けた検討を行う。
- 教育面では, 学生の論理的思考能力が低下しているのではないかと疑念を持ちつつ, もう一工夫を試みている。

國方 敬司

(1) 研究成果

【研究成果】

- 単著「ウォータ・メドウズについて」『山形大学紀要 (社会科学)』第46巻1号, 2015年7月, pp.105-120.
- 単著「ウォータ・メドウズとウェセクス農業革命」『山形大学紀要 (社会科学)』第46巻2号, 2016年2月, pp.19-38.

(2) 教育・地域連携等の活動

【教育】

・山形大学での授業

西洋経済史，環境と経済，西洋経済史・環境と経済演習，経済からみた環境との共生，生活と経済

・東北文教大学での授業

くらしと経済

【講演等】

- ・「東根市まちづくりタウンミーティング」パネリスト，さくらんぼタレントクルセンター 大ホール，2015年4月25日
- ・「山形いきいき子育て応援企業『ダイヤモンド企業』知事対談」対談コーディネーター 庁知事室，2016年2月19日（金）
- ・NHK ハートフォーラム「子どもたちの未来を応援～子どもの貧困を考える～」コーディネーター，山形市東部公民館，平成28年3月19日（土），他

【審議会委員】

「子育てするなら山形県」推進協議会会長

山形県子どもの貧困対策・ひとり親家庭自立促進推進委員会委員長

山形県環境審議会委員

東根市市総合計画策定専門家会議委員

白鷹町まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会委員長

中山町政策推進会議委員長

河北町まち・ひと・しごと創生総合戦略策定有識者会議委員，他

(3) 研究・教育活動に関するコメント

副学部長，やまがた地域社会研究所長としての管理運営業務で手一杯になり，個人としての目標については当初予定していた通りには進捗しなかった。学部の管理運営業務のあり方については，検討を要する時期に来ているのではないかとの感想をもつ。

コーエンズ 久美子

(1) 研究成果

[論文]

「消費者法情報」『現代消費者法』29号（平成27年12月）

[研究報告]

PLEDGE OF BOOK-ENTRY SECURITIES IN JAPAN: SHOULD JAPANESE LAW EMBRACE PERFECTION BY CONTROL AGREEMENT AND SECURITY INTERESTS IN SECURITIES ACCOUNTS?

Kumiko Koens & Charles W. Mooney 共同研究報告

日本銀行金融研究所（平成27年7月21日）

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当授業] 基盤教育基幹科目 (共生を考える), 商法 I, 商法 II, 商法演習 I, 国際取引マネジメント論 (理工学研究科)

[地域連携活動] 山形地方最低賃金審議会公益委員, 山形県指定管理者選定委員会委員, 山形県建築士審査会委員, 寒河江市地域づくり推進委員会委員, 子育てするなら山形県推進協議会委員

(3) 研究・教育活動に関するコメント

証券振替制度における証券および証券口座の担保化について, ペンシルバニア大学 (米国) ムーニー教授と共同研究を開始し, アメリカ統一商法典およびユニドロアが策定したジュネーブ条約において採用されている新しい担保制度の日本法への導入について検討した。共同研究の成果の一端を, 日本銀行金融研究所において報告した。この報告については, 論説 (SECURITY INTERESTS IN BOOK-ENTRY SECURITIES IN JAPAN: SHOULD JAPANESE LAW EMBRACE PERFECTION BY CONTROL AGREEMENT AND SECURITY INTERESTS IN SECURITIES ACCOUNTS?) として University of Pennsylvania Journal of International Law において公表を予定している。

また, 愛知大学, 立命館大学の商法ゼミとの合同ゼミ合宿を愛知大学笹島キャンパスで行った。学生は模擬裁判の原告として, 訴状, 答弁書作成等事前準備に自主的に取り組み, 主体的かつ集中的に学習した。また合同ゼミにおいては初対面の学生たちと議論をし, 交流もでき, 極めて有意義だったと思う。

是川 晴彦

(1) 研究成果

・科研費研究: 持続可能な中心市街地活性化政策の研究 (中心市街地活性化における大学教育の意義の考察) ・寒河江市の協力を得て大学教育と中心市街地活性化に関する調査を実施するとともに研究会を開催した。

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当授業]

ミクロ経済学, 応用ミクロ経済学, 公共経済学, ミクロ経済学演習, スタートアップセミナー, 公共経済学特論, 公共経済学特別演習

[地域貢献活動など]

- ・山形県 (産業構造審議会委員, 入札監視委員会委員長, 指定管理者審査委員会の外部委員)
- ・山形市 (行財政改革推進懇話会座長)
- ・天童市 (天童市まち・ひと・しごと創生総合戦略会議委員)
- ・寒河江市 (さがえ未来創生戦略に係る外部有識者会議座長, 振興審議会会長)
- ・長井市 (行財政改革推進委員会委員長)
- ・東北地方整備局入札監視委員
- ・山形県長寿医療懇談会会長

- 米沢市議会における講演
- 提言の広場（山形テレビ）

(3) 研究・教育活動に関するコメント

科研費研究（中心市街地活性化に関する研究）では、体調面の問題もあり、予定した調査の一部が延期となり、理論面の研究を中心に進めたが、無事、体調が回復したので、次年度以降に調査を実施していきたい。不完全競争市場を対象とした課税理論の分析も昨年度に継続して行った。

教育面では、講義内容や時間配分の見直しを行うとともに、受講生が講義内容を復習しやすい資料の作成を心がけた。大学院教育では、正指導教員として大学院生の修士論文作成の指導を行った。

今野 健一

(1) 研究成果

- 書評：「結城忠著『憲法と私学教育』—憲法原理に基づく私学教育法論と外国法研究の本格展開」, 季刊教育法185号
- 学界回顧：「2015年学界回顧（教育法）」, 法律時報87巻13号

(2) 教育・地域連携等の活動

①担当授業科目

- 学部専門科目：憲法Ⅱ・Ⅲ，憲法演習Ⅱ，総合講座Ⅱ（法律）
- 基盤教育科目：日本国憲法，教養セミナー

②地域連携・高大連携活動

- 山形市情報公開・個人情報保護審査会委員
- 山形県後期高齢者医療広域連合情報公開・個人情報保護審査会委員

③マスコミ対応

- さくらんぼTVのカメラ取材（政治資金規正法の解説）
- 東京新聞のアンケートに応じ記事掲載（安保法案の憲法的評価）

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究に関しては、書評と学界回顧のみという些かさみしい結果となってしまった。教育面では、専門演習でハンセン病療養施設（東北新生園，宮城県）等での見学を行う機会を設けた。東北新生園では、ソーシャルワーカーの方に懇切な説明をしていただいた。事前学習を重ねて訪問したが、実際に現地で専門家の子細な案内を受けることで、文字のうえにとどまらない生の現実に接し、学生のみならず私もたいへん勉強になった。

坂本 直樹

(1) 研究成果

[論文]

1. Tax, spend, and democracy indices in Japan, Sakamoto, N., Takimoto, T., Discussion Paper No.2015-E 1, Research Group of Economics and Management, Faculty of Literature and Social Sciences, Yamagata University, pp. 1-49, 2015.10.

[学会報告]

1. ウツタイン統計データによる統計的生命の価値の計測, 坂本直樹, 阪田和哉, 瀧本太郎, 中寫一憲, 生川雅紀, 第51回土木計画学研究発表会 (九州大学), 2015. 6.

2. Measurement of long-Term flood damage in Japan using spatial computable general equilibrium model, Nakajima, K., Morisugi, H., Morisugi, M., Sakamoto, N., The European Association of Environmental and Resource Economists 21st Annual Conference (Helsinki, Finland), 2015. 6.

3. A simple approach to measuring value of a statistical life by revealed preference data, Morisugi, H., Sakamoto, N., Morisugi, M., Ohno, E., Nakajima, K., Mori, R., 5th Asian Seminar in Regional Science (Harbin, China), 2015. 7.

4. Have intergovernmental transfers stimulated expenditures in Japan's local government?, Takimoto, T., Sakamoto, N., Singapore Economic Review Conference 2015 (Singapore), 2015. 8.

5. Disparity in emergency medical services across Japan, Takimoto, T., Sakata, K., Nakajima, K., Narukawa, M., Sakamoto, N., 55th European Regional Science Association Congress (Lisbon, Portugal), 2015. 8.

6. General equilibrium analysis of regional redistributive effects of investment for reconstruction from the Great East Japan Earthquake, Nakajima, K., Sakamoto, N., 55th European Regional Science Association Congress (Lisbon, Portugal), 2015. 8.

7. 気候変動による熱中症死亡の適応策に関する費用便益分析, 中寫一憲, 坂本直樹, 森杉雅史, 森杉壽芳, 大野栄治, 森龍太, 環境経済・政策学会2015年大会 (京都大学), 2015. 9.

8. ウツタイン統計データによる救急救命活動のアウトカム評価, 坂本直樹, 生川雅紀, 中寫一憲, 阪田和哉, 瀧本太郎, 日本計画行政学会第38回全国大会 (名古屋工業大学), 2015. 9.

9. A simple approach to measuring value of a statistical life by revealed preference data, Morisugi, H., Sakamoto, N., Morisugi, M., Ohno, E., Nakajima, K., Mori, R., 応用地域学会第29回研究発表大会 (慶応義塾大学), 2015.12.

10. Tax, spend, and democracy indices in Japan, Sakamoto, N., Takimoto, T., 日本大学法学部政治経済学科経済研究会 (日本大学), 2016. 2.

11. 救急搬送時間の短縮によるアウトカムと便益の評価, 坂本直樹, 甲南大学経済学部ファカルティセミナー (甲南大学), 2016. 3.

12. 救急搬送時間の短縮によるアウトカムと便益の評価, 坂本直樹, 国際経済と経済成長・マクロ経済学に関する山形ワークショップ (山形大学), 2016. 3.

(2) 教育・地域連携等の活動

[教育]

財政学 (前期), 財政学 (後期), 地方財政論 (前期), 地方財政論 (後期), 財政政策論 (東北学院大学経済学部, 通年)

地域ガバナンス論（東北文化学園大学，前期）

〔地域連携等〕

白鷹町まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会委員

公益財団法人東北自治研修所第197回東北六県中堅職員研修「自治体財政」講師

(3) 研究・教育活動に関するコメント

財政学の研究について，1編の Discussion Paper を執筆し，2件の学会報告を行った。また，費用便益分析について10件の学会報告を行った（共同研究者による報告を含む）。

柴田 聡

(1) 研究成果

菅野・柴田（2015）製品デザインにおける組織内パワーの決定要因 日本経営学会関東部会例会

菅野・柴田（2015）デザイン部門の関与効果に対する組織要因の影響分析 実践経営学会第58回全国大会

(2) 教育・地域連携等の活動

地域デザイン学会 東北・三新潟地域部会の運営委員

(3) 研究・教育活動に関するコメント

特に無し

下平 裕之

(1) 研究成果

【翻訳】

・ゴードン・フレッチャー『デニス・ロバートソン』勁草書房，2015年。

【学会報告等】

・「ケンブリッジ学派の景気変動論：ロバートソンを中心として」ケインズ学会第5回年次大会（2015年11月29日）

・「ジェームズ・ミル『経済学要綱』初版に関するテキストマイニング分析」第51回経済思想研究会（2015年4月19日）

・「英文解析プログラムによるテキスト難易度の推定とその適用について」第53回経済思想研究会（2015年12月13日）

(2) 教育・地域連携等の活動

山形大学における担当授業：

〔学部〕経済思想，経済学史，経済学史演習，地域づくり特別演習，公務員講座（小論文指導）

〔基盤教育〕Jリーグと地域社会，最上川の自然と文化，災害復興学入門

非常勤：羽陽短期大学（経済学），東北文教大学（現代企業論），放送大学（客員教授）

地域連携活動

- ・高校での出張講義等：新庄北高校
- ・山形財務事務所財務モニター
- ・山形大学まちづくり研究所・山形仙台圏交流研究会への参加
- ・山形大学東北創生研究所・社会創生研究部門長
- ・最上地域政策研究所アドバイザー
- ・山形県職員育成センター主査級研修講師
- ・村山総合支庁地域づくり交流会講師
- ・きらやか銀行中央営業部講演会講師
- ・市民向け地域づくり講演会（川西町，山形市大郷地区）
- ・放送大学主催公開講座（全3回）

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究活動については、主研究分野であるデニス・ロバートソンについての体系的著作の翻訳を刊行するとともに、その成果の一部を活かした学会報告を行った。また経済学の一般大衆への普及過程の分析というテーマで科研費基盤研究（B）を再度獲得し、それに基づく研究を継続している。

教育・地域連携活動については学内での活動の他、村山総合支庁・最上総合支庁の地域連携事業に参画し、民間企業（きらやか銀行）からの協力要請にも対応した。

尻無濱 芳崇

(1) 研究成果

【論文】

- ・尻無濱芳崇（2016）「社会福祉法人における原価計算システムの機能性の決定要因：クラスター分析を用いた探索的研究」『会計検査研究』53：29-47
- ・劉美玲・市原勇一・木村太一・尻無濱芳崇（2015）「管理会計研究における形成型尺度の利用の現状—構成概念の測定モデルの選択—」『メルコ管理会計研究』8（1）：77-88
- ・岡田幸彦・尻無濱芳崇（2015）「サービス企業におけるコスト意識と採算性の実証分析」『企業会計』67（9）：1271-1278
- ・洪慈乙・尻無濱芳崇・張濤赫（2015）「韓国大学における会計教育の実態調査および分析（1）」『山形大学紀要 社会科学』46（1）：139-168
- ・洪慈乙・尻無濱芳崇・張濤赫（2016）「韓国大学における会計教育の実態調査および分析（2）」『山形大学紀要 社会科学』46（2）：67-81

【学会報告】

- ・尻無濱芳崇・森光高大（2015）「防衛調達に関する契約時概算原価と実際原価の差異に関する考察：利益調整研究手法の応用」日本管理会計学会2015年度第3回管理会計フォーラム（12月5日報告）
- ・黒木淳・尻無濱芳崇（2015）「社会福祉法人における裁量行動とインセンティブの検討」日本

社会関連会計学会2015年度 東日本部会（7月4日報告）

・尻無濱芳崇「社会福祉法人における経営管理者の特性と原価情報が財務業績へもたらす影響」
第48回 京都管理会計研究会（5月9日報告）

(2) 教育・地域連携等の活動

【教育活動】

管理会計（前期）、管理会計（後期）、公会計、専門基礎演習、情報処理、管理会計演習、管理会計特論Ⅱ、管理会計特別演習

加えて、自主ゼミ（統計解析環境 R の勉強会）を夏休みと後期にかけて数回行った

【地域連携活動】

- ・ YU-COEC「地域価値創成に貢献する University Entrepreneurship 研究拠点」に関連して、県議会議員との意見交換会で講演
- ・ 平成27年度山形大学人文学部公開講座「地域を学び、地域を考える」 第3回「地域包括ケアシステムと会計」
- ・ 山形県福祉人材センター 運営委員（学識経験者）

(3) 研究・教育活動に関するコメント

講義資料の作成もほぼ終わり、地域連携活動や研究活動に力を入れることができるようになった。初めてゼミ生の卒業論文指導をして苦労したが、ゼミ生たちの成長が実感できて嬉しかった。この調子で来年度以降も頑張りたい。

杉野 誠

(1) 研究成果

(2) 教育・地域連携等の活動

担当授業：環境経済学、医療経済学、環境問題を経済学的に考える（基盤教育）、温暖化政策を考える（教養セミナー）

地（知）の拠点事業（COC）『エコショップやまがたを用いた地域活性化の検討』

(3) 研究・教育活動に関するコメント

今年度は、COCに時間を多く割いたため、論文投稿のみとなってしまい、研究成果が出なかったことが悔やまれる。来年度は、今年度行った研究成果を発表していきたい。

鈴木 明宏

(1) 研究成果

【論文等】

- ・ Contagion of self-interested behavior: evidence from group dictator game experiments, German Economic Review, forthcoming, 2015. (伊藤健宏・小川一仁・竹本亨・高橋広雅との共著)

- 後続実験における意思決定に先行実験が与える影響——一方的最後通牒ゲーム実験による分析——, 山形大学紀要 (社会科学) 第46巻第2号, 39-44, 2015. (伊藤健宏・小川一仁・竹本亨・高橋広雅との共著)

【学会等報告】

- 携帯電話を用いた簡易経済実験システムについて, 慶應大学 尾崎裕之一門会, 2015.12. (西平直史・小川一仁・竹本亨・高橋広雅との共著)
- 携帯電話を用いた簡易経済実験システムについて, 東京工業大学 武藤先生退職記念セミナー, 2016. 2. (西平直史・小川一仁・竹本亨・高橋広雅との共著)

(2) 教育・地域連携等の活動

【講義等】

(専門科目) ゲーム理論, 産業組織論, 経済数学, 意思決定論演習
(基盤教育) スタートアップセミナー

【社会連携等】

- 山形大学まちづくり研究所 (山形大学認定研究所) メンバー
- 山形・仙台圏交流研究会メンバー
- COI 社会システム研究委員会委員

(3) 研究・教育活動に関するコメント

今年度は携帯電話用実験プログラムについては, 実施可能な実験種類を増やすべく3月完成に向けて作成中である。また, これまでに行った経済実験の結果をまとめ, 1つは海外誌に掲載が決定した (GERのサイトで閲覧可能である)。

また, 外部との連携に関しては, COIで工学部との連携に協力した。これに関しては, 次年度以降も継続予定である。

砂田 洋志

(1) 研究成果

- 「高知県四万十市の地域公共交通システムの調査報告—中村まちバスの調査報告—」, 山形大学紀要 (社会科学), 第46巻第1号, pp.121-138, 2015年7月。
- 「長野県木曾町の木曾町生活交通システムの調査報告—」, 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, 第12号, pp.27-41, 2015年11月。
- 「山形県川西町のデマンド型交通の調査報告—乗合タクシーの調査報告—」, 山形大学紀要 (社会科学), 第46巻第2号, pp.45-65, 2016年2月。
- 「山形県高島町におけるデマンド型交通の調査報告—デマンドタクシーの調査報告—」, 山形大学人文学部研究年報, 第13号, pp.65-82, 2016年3月。

(2) 教育・地域連携等の活動

担当授業

計量経済学，統計学，専門演習（学部），スタートアップセミナー（前期）

地域連携

- 山形県市町村職員共済組合と同互助会の学識経験監事として監事業務を行った。
- 山形・仙台圏交流研究会へ参加した。
- 山形県統計利用アドバイザーを任命されており，必要に応じて相談に応じている。
- 教員免許状更新講習の講師を担当した（平成27年8月3日）。
- 山形県飯豊町統計調査員協議会主催の研修会の講師として講義した（平成27年8月）。
- 山形県庁統計企画課主催の統計専門研修の講師として講義した（平成27年9月）。
- 山形県経済動向研究会に同会の構成員として参加した（平成27年9月と同28年3月）。
- 学部広報会委員会の委員として山形県内外の高校へ出張して人文学部の説明を行った他，県外の3つの高校で出張講義も行った。さらにオープンキャンパスとホームカミングデーの企画運営に携わった。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- 地域公共交通の研究では，長野県木曾町の公共交通を再び視察した後で調査報告書にまとめた。それに加えて，山口市のコミュニティータクシーを視察した。
- 計量経済学的手法に基づいた金融市場の研究について科学研究費補助金を得られることになったので，研究計画に基づき研究を進めたいと考えている。
- 統計学演習では，4人の4年生が卒業論文を執筆するのを指導した。

高倉 新喜

(1) 研究成果

- 高倉新喜「最新判例演習室—準抗告取下げの効力の発生時期」法学セミナー724号（2015年）122頁
- 高倉新喜「最新判例演習室—付郵便送達の効力」法学セミナー727号（2015年）122頁
- 高倉新喜「最新判例演習室—刑訴法278条の2第3項による過料の制裁」法学セミナー730号（2015年）130頁
- 高倉新喜「評釈—最一小判平26・7・24の検討」季刊刑事弁護84号（2015年）110-114頁
- 高倉新喜「最新判例演習室—第三者の供述の信用性の判断」法学セミナー733号（2016年）98頁

(2) 教育・地域連携等の活動

- 専門科目：刑事訴訟法
刑事法基礎
刑事訴訟法演習
法と裁判
法経政策専門基礎演習
総合講座Ⅱ（刑事訴訟法の部）

自治体経営

• 地域連携

出張講義：山形県立長井高校（テーマ：「法律学って、何やるの？」）

山形県介護保険審査会委員

山形県精神医療審査会委員

山形地方裁判所簡易裁判所判事推薦委員会委員

山形地方裁判所委員会委員

山形県弁護士会綱紀委員会予備委員

教職員の不祥事防止に係る有識者会議座長

取材協力：北海道新聞（常習累犯窃盗事件での一事不再理の効力の範囲について）

共同通信（闇サイト事件について）

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究活動においては、法学セミナーの「最新判例演習室—刑事訴訟法」の執筆を継続した。教育活動においては、刑事訴訟法演習での現地学習として置賜学院の見学を実施し、自治体経営の窓口教員を担当した。

高橋 和

(1) 研究成果

(1) 論文

「EUにおけるヒトの移動と社会保障—「社会保障ツーリズム」という言説—」

『山形大学紀要（社会科学）』第46巻第2号，平成28年2月，1-18頁

(2) シンポジウム

Transnational Migration between the Right to Freedom and the Control of the States, 平成27年9月13日 山形大学人文学部にて開催

- 報告 'Migration in the EU and Discourse on Social Tourism

(2) 教育・地域連携等の活動

(1) 教育

専門科目：国際関係論，国際公共政策，地域の国際化，国際関係論演習

基盤科目：国際関係入門 を担当

(2) 地域連携等の活動

- アカデミックインターンシップ / アカデミックキャンプの実施および授業を担当
- 出張講義 喜多方高校
- 山形労働局 最低賃金審議会公益委員
山形地方労働政策審議会委員（会長）
- 山形県行政改革審議会委員（会長）
- 山形県障がい者施策推進協議会学識委員

・山形県精神医療審査会委員

(3) 研究・教育活動に関するコメント

教育では、クリッカーやロールプレイなどを利用して双方の授業の試みが続いている。

研究では、9月に科研費基盤研究（B）の最終年度にあたるために、人文学部で国際シンポジウムを実施した。科研費に加えて、山形大学国際事業化センターの支援を得て、チェコとフィリピンからゲストを招聘することができ、今後の研究のためのネットワークづくりの基礎ができた。

高橋 良彰

(1) 研究成果

論文など、特に公開したものはなかった。

(2) 教育・地域連携等の活動

金融法入門（前期）、民法総則・物権法（前期ゼメ）、民法演習Ⅲ（通年）、など。出張講義（鶴岡南）。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

学内委員として、基盤教育実施会議委員、山形大学医学部付属病院医薬品等受託研究審査委員会委員としての活動があった。研究教育活動としては、司法書士の方々による韓国視察団報告書用に「法的知識は誰のものか」と題する文章を作成した。また、編集物として出版予定で交渉していた『旧民法典』が出版できないこととなったので、学生用に印刷して配布することとした。

田北 俊昭

(1) 研究成果

○研究発表

「都市・農村計画としての高級米「つや姫」の地域ブランド価値評価－ロジットモデルを使用した地域ブランド評価」田北俊昭・菊池一恵、第27回応用地域学会研究発表会、平成27年12月

○芸術文化作品（他分野実務家教員／著名実務家との地方創生の共同研究）

都市・農村計画分野の実践的な研究「ソフト分野の社会資本」整備のために、特にメッセージ性の高い芸術文化領域の実務教員および音楽家・音楽プロデューサーとの協働事業である。音楽専門家（東京芸術大学での作曲指導）によりピアノ伴奏曲が編曲および演奏録音を行っている。自然・歴史文化・芸術文化による地方創生によって経済効果をもたらす理論的な面を専門家と連動して作品化して、FMやまがたに出演、学術的な面と作品の紹介をしている。片野坂栄子氏（オペラ歌手）はバーンスタイン・小澤征爾等の指揮者、ウイーン国立歌劇場・NHK交響楽団等と共演し、欧州で数多く蝶々夫人を演じ黄金のバラ賞を獲得。高橋千佳子氏は商業音楽の一人者で数多くのCMヒット曲を生み出し東京芸術大学・国立音楽大学講師を務める。

・「羽前おきたま白竜湖」片野坂栄子（大分県立芸術短期大学／ソプラノ）・高橋千佳子（東京芸術大学／ピアノ）：歌曲「羽前おきたま白竜湖恋伝説～ピアノ伴奏曲（作詞作曲：田北俊昭・編曲：高橋千佳子（東京芸術大学）」「田北俊昭（総合プロデュース）・秋田信一郎（音楽音楽ディレ

クター)」(※日本音楽著作権協会 JASRAC 作品コード194-8817-3 田北・高橋は日本音楽著作権協会会員)

○外部資金

平成 27 年度緑と水の森林公募事業 共同研究者 (16名)「イチョウ古木の伝播経路と遺伝特性の解析および遺伝資源保存事業」(代表者:高田 克彦(秋田県立大)のうち、「古木や銘木いちょうの地域ブランドと情報戦略」を担当。

(2) 教育・地域連携等の活動

○担当科目

ミクロ経済学入門(1年), 観光学と地域ブランド(1年), 地域科学(2年), 経済情報科学(2年後期), 経済情報科学(3年前期), 経済情報科学演習(3・4年), 社会経済システム特論・特別演習と特別研究(大学院)

○社会連携について

[作品・放送] FMやまがた, 平成27年8月 地域ブランド経済と歌曲の解説
片野坂栄子(オペラ歌手)・高橋千佳子(ピアノ) 歌曲「羽前おきたま白竜湖恋伝説(ピアノ編曲)」
「田北俊昭(作詞作曲)・高橋千佳子(編曲)」, 音楽ディレクター:秋田信一郎, 総合プロデューサー:田北俊昭, 音響ハウス(原盤録音), 平成27年7月

[講演会]「蔵王と山形全体の世界ブランド戦略について考えるー国際観光リゾートとオリンピック誘致・食の宝庫の山形・畜産とジビエブランド」, 蔵王温泉, 平成28年2月

※農林水産省・山形県及び山形市等の関連市町村および本研究室から田北が講演。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

・地域ブランドに関する研究活動(理論と実証分析)に加えて, 実践的な地域創生プログラムを実施した。

溜川 健一

(1) 研究成果

【学会報告】

Macroeconomic Analysis of Relationship Lending 日本金融学会2015年度春季大会 於:東京経済大学

(2) 教育・地域連携等の活動

【担当授業科目】

(専門科目) マクロ経済学, 応用マクロ経済学, マクロ経済学演習
(基盤教育) 教養として知っておきたい経済学

【地域連携】

特になし

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究・教育，特に地域連携についての貢献が不十分である。今後はさらに努力し，大学への貢献度を高めたい。

戸室 健作

(1) 研究成果

[論文]

- 「日本における雇用政策・労使関係の現状と課題—ヨーロッパにおけるフレキシキュリティ政策を念頭に—」『社会政策』7巻1号，2015年7月25日，65-75頁。
- 「東北各県における貧困率の推移」『山形県の社会経済』28号，2015年12月15日，21-26頁。
- 「都道府県別の貧困率，ワーキングプア率，子どもの貧困率，捕捉率の検討」『山形大学人文学部研究年報』13号，2016年3月1日，33-53頁。

[学会報告等]

- 社会政策学会第131回大会の書評分科会にて，伍賀一道『「非正規大国」日本の雇用と労働』の書評報告を行う（2015年11月1日10：10～10：50。西南学院大学）。

[その他]

- 『拙稿「都道府県別の貧困率，ワーキングプア率，子どもの貧困率，捕捉率の検討」の基礎データ』山形大学人文学部法経政策学科 Discussion Paper Series No. 2015-E02, 2015年12月，1-85頁。
- 「書評 早川征一郎・松尾孝一著『国・地方自治体の非正規職員』」『日本労働社会学会年報』26号，2016年1月20日，160-164頁。
- 「子の貧困率県内30% 福祉と労働政策 拡充を」『琉球新報』2016年2月4日，28面
- 「書評 伍賀一道『「非正規大国」日本の雇用と労働』新日本出版社，2014年」『社会政策』7巻3号，2016年3月31日，156-160頁。
- 戸室健作・山本一輝・栗原康「鼎談 ブラック社会を生きる若者たち」『文芸ラジオ』2号，2016年3月31日，102-112頁。

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当授業科目]

- 専門教育科目：社会政策論，社会保障論，労働と生活，社会政策論演習，卒業論文指導，法経政策総合講座Ⅲ（オムニバス1回担当）
- 基盤教育：スタートアップセミナー

[学会活動]

- 社会政策学会秋季大会企画委員会委員
- 日本労働社会学会幹事（研究活動担当）
- 社会政策学会第131回大会の自由論題「統計分析」のセッションで座長を担当する（2015年11月1日15：00～17：00。西南学院大学）
- 日本労働社会学会第27回大会のシンポジウム「「女性活躍」政策下の女性労働」の司会を担当する（2015年11月8日10：30～16：00。大阪市立大学梅田サテライト）

[地域連携等]

- 社会福祉法人山形県社会福祉協議会評議員
- 山形県独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構運営協議会委員
- 山形県立谷地高校での出張講義。講義内容は「非正社員増大の実態と背景」(2015年7月16日 13:40-14:50)
- 連合山形ユニオンリーダー養成講座で講義をする。講義内容は「非正社員増大の実態と背景」(2015年8月1日13:00-14:20。大手門パルズにて)
- 山形県経済社会研究所主催の年報報告会で報告する。報告内容は、「都道府県別の貧困率、ワーキングプア率、子どもの貧困率、捕捉率について」(2015年12月14日14:30-15:00。大手門パルズにて)
- 記事「子の貧困率 沖縄37% 山形大・戸室准教授調査」『琉球新報』2016年1月5日, 1面, 32面, 33面
- 記事「県貧困率, 全国で最悪 34% 子の貧困も拡大」『沖縄タイムス』2016年1月5日, 1面, 27面
- 記事「社説 子どもの貧困最悪 各施策を矢継ぎ早に」『琉球新報』2016年1月6日, 2面
- 記事「山形大・戸室准教授に聞く 県内, 子育て世代ほど貧困」『琉球新報』2016年1月6日, 24面
- テレビ放送「最貧困県 衝撃の数字が明らかに」琉球朝日放送「ニュースQプラス」2016年1月6日
- テレビ放送「沖縄の「貧困率」は全国最悪」NHK 沖縄放送局ニュース2016年1月21日
- 記事「子どもの貧困 道内も深刻 戸室・山形大准教授が調査」『北海道新聞』2016年2月2日, 13面
- 記事「子育て貧困世帯20年で倍 山形大准教授調査」『毎日新聞』2016年2月18日, 1面
- ラジオ放送「子育て世帯の貧困の実態」J-WAVE「JAM THE WORLD」2016年2月18日
- テレビ放送「「子育て貧困」世帯 20年で倍増」さくらんぼテレビ「みんなのニュース」2016年2月18日
- 記事「子ども貧困率 県20年間で10ポイント上昇」『毎日新聞』(山形版)2016年2月19日, 25面
- 記事「貧困子育て世帯率, 20年で2.5倍」『朝日新聞』朝刊2016年2月19日, 7面
- 記事「沖縄 子ども3割「貧困」」『朝日新聞』(西部版, 朝刊)2016年2月21日, 34面
- 記事「「子どもの貧困」倍増の背景は? 大人の18%超が生活保護以下の世帯収入」ニュースサイト「THE PAGE」2016年2月23日
- テレビ放送「子どもの貧困を考える 深刻「負の連鎖」検証」TBS テレビ「Nスタ」2016年2月23日
- 記事「子育て貧困世帯 20年で倍 山形大調査 収入 生活保護以下13%」『東京新聞』2016年3月2日, 6面
- 記事「子育て貧困世帯率2.5倍に」『日本経済新聞』朝刊2016年3月2日, 42面
- 記事「子育て世帯貧困率9.9%」『秋田魁新報』2016年3月13日, 25面

- 記事「子ども貧困 全国で拡大 山形大准教授が独自調査」『東京新聞』朝刊2016年3月14日、28面
- 記事「子どもの貧困率 20年で6倍」『讀賣新聞』（山形版）2016年3月14日、33面
- 記事「貧困世帯、20年で2.5倍」『しんぶん赤旗』2016年3月15日、2面
- テレビ放送「子どもの貧困とワーキングプア」NHK「視点・論点」2016年3月18日

(3) 研究・教育活動に関するコメント

今年度も、福島大学、埼玉大学、立教大学と合同合宿を行った（2015年12月12～13日、晴海グランドホテルにて）。戸室ゼミでは「都市と地方のホームレス」と題する報告をした。

研究面では、『研究年報』に掲載された子どもの貧困率についての調査結果を、新聞等で取り上げてもらった。

中島 宏

(1) 研究成果

- 分担執筆：宍戸常寿編『18歳から考える人権』（法律文化社、2015年11月）：「教えに反する授業を休んでもいいですか？」38～43頁
- 論文：「フランスにおける Baby Loup 事件とライシテ原則適用拡大の試み」憲法理論研究会編『対話と憲法理論 憲法理論叢書23』（2015年10月）169～181頁
- 学界回顧：中島宏・都筑満雄「2015年学界回顧・フランス法」法律時報87巻13号（2015年12月）299～301頁
- 実践報告：「山形大学における法学教育の意義に関する覚書」山形大学高等教育研究年報10号（2016年3月）20～24頁
- 口頭報告：①「バール、ブルカ、そしてバビ・ルー」シンポジウム「グローバル時代のヒトの移動の自由と管理」（2015年9月13日、山形大学）、②「安全保障関連法案と憲法9条」法律・政治研究会（2015年9月17日、山形大学）、③「団体規制法制の再検討」第71回宗教学会秋季学会（2015年11月7日、創価大学）

(2) 教育・地域連携等の活動

[教育]

- 基盤：日本国憲法
- 専門：法経政策専門基礎演習、憲法I、比較憲法、憲法演習I、公務員対策セミナー
- 表彰：平成27年度基盤教育ベストティーチャー賞（学生推薦）、平成27年度山形大学奨励表彰につき学生2名を推薦

[地域連携]

- 審議会：山形市個人情報保護制度運営審議会副会長、天童市情報公開・個人情報保護審査会委員、山形県後期高齢者医療広域連合個人情報保護制度運営審議会委員
- 講演：①西置賜地区平和センター学習会（2015年6月4日、長井市民文化会館）、②山形市西部九条の会憲法学習会（同年6月20日、山形市男女共同参画センター）、③山形県平和センター

平和セミナー21 (同年7月11日, 大手門パルズ), ④西置賜革新懇話会勉強会 (同年7月12日, 長井市中央地区公民館), ⑤山形県九条連絡会集会 (同年7月25日, 共立社山形本部), ⑥平和安全法制に関する勉強会 (同年7月30日, 山形県庁), ⑦白鷹九条の会講演会 (2016年3月12日, 白鷹町文化交流センターあゆむ)

- 取材協力: テレビユー山形2015年7月14日 Nスタやまがた, 米沢 NCV エリアニュース2016年2月17日「選挙について知識や心構え学ぶ」
- 出張講義: 山形県立高島高校「現代の政治情勢と18歳選挙権」(2016年2月17日)

(3) 研究・教育活動に関するコメント

本年度は比較的時間に余裕が出来るものと思っていたが, 業務の多忙化と依頼原稿の多さに非常に苦しんだ。安保法制改正に伴い, 講演依頼も相次いだ。可能な限り公平な観点から解説をしたつもりである。学生推薦により再度 BT 賞を頂いた。感謝申し上げたい。

西岡 正樹

(1) 研究成果

「累犯加重と常習犯について (2・完)」法政論叢63・64合併号 (2015年) 61-89頁

(2) 教育・地域連携等の活動

〔教育〕

担当授業科目

専門教育: 刑事法基礎 (刑法担当), 総合講座Ⅱ (法律), 刑法Ⅰ, 刑法Ⅱ, 刑法演習Ⅱ

〔地域連携等〕

アカデミックインターンシップ (山形大学アカデミックキャンプ): 講義タイトル「少年犯罪実名報道の是非」

出張講義: 宮城県古川高等学校

(3) 研究・教育活動に関するコメント

前年度同様に諸先生方の協力の下で教育・研究活動に従事することができた。教育活動としては, 刑法演習Ⅱにおいて置賜学院への施設見学を行い, 少年犯罪の現状や施設運営などの実態についての知識を深めた。研究活動としては, 専門とする刑事責任論に関して, 科研費補助金を得て, 累犯加重規定と責任概念に関する研究を継続して行い, その成果を公表した。

西平 直史

(1) 研究成果

1) 鈴木, 高橋, 竹本, 西平, 小川, Easy Economic Experiment System を用いた経済実験の教育効果: 囚人のジレンマと協調ゲーム, 山形大学紀要 (社会科学), 46-1, pp. 1-29 (2015)

(2) 教育・地域連携等の活動

学部 経営システム, 応用情報処理, 経済数学, 情報・システム論演習

基盤 スタートアップセミナー

大学院 経営システム特論

地域連携 山形仙台圏交流研究会, 出張講義など

(3) 研究・教育活動に関するコメント

研究面では, 携帯電話で経済実験を行うシステムの開発に参加し, 教育効果に関する結果を公表した。

教育面では, 学部の講義やゼミに加えて大学院の修士論文の指導を行った。

藤田 稔

(1) 研究成果

「福井県経済農業協同組合連合会に対する排除措置命令（平成27・1・16）の検討」2015。6
NBL1052号71-78頁

(2) 教育・地域連携等の活動

「経済法1」「知的財産法」「経済法演習」「法的なものの考え方と知的財産権（法学）」「競争と協調—独占禁止法と経済規制の80年（人間を考える）」と「総合講座1（公共政策）」の1コマ, 「総合講座2（法律）」の1コマを担当。(その他, 東北学院大学で, 非常勤講師を務めた。)

独占禁止政策協力委員として, 独占禁止政策のあり方について, 公正取引委員会に対して, 意見を述べた。

山形県弁護士会綱紀委員会委員として, 弁護士倫理の維持に協力した。

日本経済法学会理事として, 学会の運営に従事した。

東北経済法研究会で座長として研究を行った。

山形県立保険医療大学の倫理委員会委員を務めた。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

特にない。

洪 慈乙

(1) 研究成果

調査報告

- ・洪 慈乙・尻無濱芳崇・張燾赫共著「韓国大学における会計教育の実態調査 および分析（1）」, 『山形大学紀要（社会科学）』第46巻第1号, 平成27年（2015）7月, pp.139-168。
- ・洪 慈乙・尻無濱芳崇・張燾赫共著「韓国大学における会計教育の実態調査 および分析（2）——大学教員へのインタビューを中心に——」, 『山形大学紀要（社会科学）』第46巻第2号, 平成28年（2016）2月, pp.67-81。

(2) 教育・地域連携等の活動

- 教育：(学部) 基幹科目 (人間を考える), 会計学, 財務会計, 会計学演習 (大学院) 修士論文指導
- 地域連携: 東北創生研究所「次世代経営者育成プログラム」での講義 (「財務諸表の作成と分析」について)

松本 邦彦

(1) 研究成果

「研究ノート／多文化共生に関する地方議会議員の意識調査から」『山形大学法政論叢』第63・64合併号, 091-129頁

(2) 教育・地域連携等の活動

- ひきつづき山本匡毅先生とともに専門教育科目「地域づくり特別演習 (二)」を担当し, 2015年度前期では受講生7人を6団体に受け入れていただいたほか, 市民団体と学生との交流会では4団体の方に来ていただいた。
- ひきつづき, 山形市コミュニティファンド評議委員会の外部委員 (学識経験者) を務めた。
- 高校へ出張講義として, 10月29日に福島県立橋高校「学問分野別講義」にて, 題目は「辺境から世界に挑戦して：近代日本の戦争と平和」。
- 11月14日, 安達峰一郎世界平和弁論大会第5回記念大会の開催に協力。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

- 授業スタイルとして, 学生自身に自らの先入観に気づかせ, それを修正させていくようにしているため, 先生から, あるいは同僚の学生から手っ取り早く知識を得ようと (鵜呑みしよう) している傾向には毎年困っています。2016年度にはその点をもうすこしうまく説明していきたいものです。

丸山 政己

(1) 研究成果

- (論文) 「「混在移動」概念と国際組織による人権基盤アプローチ—いわゆる地中海難民・移民問題を素材として—」『山形大学法政論叢』第65号 (2016年3月), 1-42頁
- (報告書) 「いわゆる「混在移動」における国際組織の役割—予備的考察—」『グローバル時代におけるヒトの移動の自由と管理—社会保障制度を中心に—』平成25年度~27年度科学研究費基盤研究 (B) 研究成果報告書 (課題番号25283002) 平成28年3月 (2016年3月)
- (口頭発表) The Role of International Organizations for 'Mixed Migration': Some Implications of Human Rights Based Approach in the International Symposium; Transnational Migration between the Right to Freedom and the Control of the States (Yamagata University, 13 September 2015)

(2) 教育・地域連携等の活動

- 担当科目：国際法，国際組織法，国際法演習，法経政策専門基礎演習，総合講座Ⅰ（公共政策），総合講座Ⅱ（法律）それぞれ1回分を担当，公務員対策セミナー（基盤教育）国際法からみた現代国際社会における共生（共生を考える）
- 東北学院高校出張講義（2015年8月），岩手県立大船渡高校出張講義（2015年10月）いずれも「国際法って何？—捕鯨問題を通して考えてみよう—」というテーマで講義
- （講演）「国際テロ対策と国際法—国連安全保障理事会の取組みを中心に—」山形県爆発物原材料取扱事業者等ネットワーク総会（2015年10月，山形県警察本部）
- 学内委員：学部目標評価委員会（予算施設整備部会，教育方法検討部会，研究活動推進部会），教育ディレクター，学部将来構想委員会，GS課程WG（?），人事選考委員会（2件）

(3) 研究・教育活動に関するコメント

平成25年度から参加している「人の移動の自由と管理」科研費共同研究について，一応の成果をまとめたが土地勘のない領域に踏み込んで彷徨っている感があり，道半ばである。国際立憲主義に関する研究について新たに科研費を獲得することができたが，十分な研究時間が取れず資料収集・調査に力を注ぐことにした。改組関係等で虚無感を抱くことの多い年であったが，そうした経験はきっと将来何かに活かされるのだと信じている。

村松 怜

(1) 研究成果

「西洋史における財政史研究の展開とその示唆」，日本財政学会第72回大会

(2) 教育・地域連携等の活動

〈担当科目〉

基盤教育：「日本の財政問題について考える」

専門科目：「経済政策論（前期）」，「経済政策論（後期）」，「日本経済論」

(3) 研究・教育活動に関するコメント

学会報告のために執筆した論文は，修正の上，他の研究者との共同研究として刊行される書籍に収録される予定である。

安田 均

(1) 研究成果

〔論文〕「複雑労働の理論的可能性」経済理論学会『季刊経済理論』第52巻第1号（2015.4）。
「生産的労働と生産過程論の再構成」『経済学の座標軸—馬渡尚憲先生追悼論文集—』第3章，社会評論（2016.3予定）。

〔解説記事〕「ピケティとアベノミクス」山形県経済社会研究所『山形県の社会経済・2015年』（2015.11）

「経済指標の解説」連合山形『春季生活闘争方針』(2016.2)。

(2) 教育・地域連携等の活動

[教育] 基盤：市場と人間の生活（人間を考える），教養セミナー「格差を考える」

専門：経済原論，市場と組織，経済原論演習，学部共通科目「地域社会論」，公務員講座（春休み，論作文1コマ），宮城学院女子大学「経済社会特論」。

[地域連携等]

- 連合山形総研・連合総研「山形県内の地域活動に関する共同調査研究プロジェクト」調査研究委員会委員
- 山形県村山総合支庁との共同研究会「山形仙台圏交流研究会」幹事。関連して県より「地域課題解決型実践活動モデル事業」（対象山寺地区）を受託し，現地事前調査会，紅花祭り，高瀬地区学生動員に伴うワークショップ，現地成果報告会に参加。
- 出張講義：山形県立新庄南高校（2015年9月17日）。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

講義では引き続き授業支援システム Webclass を利用しつつも，教室でのレスポンスカードを用いての復習・確認，質問・回答に時間を割くよう務めている。学外団体から要請される経済指標等の解説記事の執筆，あるいは共同調査への参加は研究の間口を広げてくれるので，時間の許す限り引受けたい。

山口 昌樹

(1) 研究成果

受賞

Best paper award at Society of Interdisciplinary Business Research, Osaka Conference, 2-3 July, 2015, Yamaguchi, M., International Syndicated Loans and Japanese Regional Banks: Comparison between the First and Second Internationalization

論文

- Yamaguchi, Masaki, Participation of Japanese regional banks in international syndicated loans: Lending behavior and explanatory factors, Review of Integrative Business & Economics Research, Vol 4 (2), pp. 220-236, 2015
- Yamaguchi, Masaki, International Syndicated Loans and Japanese Regional Banks: Comparison between the First and Second Internationalization, Review of Integrative Business and Economics Research, 4 (4), 121-141, 2015
- Yamaguchi, Masaki, Lending behavior of Japanese megabanks in the Thai project finance market, Review of Integrative Business and Economics Research, 5 (1), 75-93, 2016

学会報告

- 山口昌樹 International syndicated loans and Japanese regional banks: Comparison between the first and second internationalization, 日本金融学会2015年春季大会，東京経済大学，2015年5月16-

17日

- Yamaguchi, Masaki, International syndicated loans and Japanese regional banks: Comparison between the first and second internationalization, SIBR 2015 Osaka Conference on Interdisciplinary Business & Economics Research, July 2-3, 2015
- Yamaguchi, Masaki, Lending behavior of Japanese megabanks in the Thai project finance market, SIBR 2015 Hong Kong Conference on Interdisciplinary Business & Economics Research, October 3-4, 2015

講演

- 山口昌樹「地域金融機関による中小企業の海外進出支援」, 東京大学金融教育センター, CARF セミナー, 2016年2月1日

学会座長

- 日本金融学会2015年秋季大会, 「地域・中小企業金融」セッション, 東北大学, 2015年10月24-25日

国際研究交流

- 英国 シェフィールド大学との研究交流 2016年3月12-14日, シェフィールド大学

研究拠点形成

- YU-COEC「地域価値創成に貢献する University Entrepreneurship 研究拠点」拠点長
- 山口昌樹「地域金融機関による中小企業の海外進出支援」, 第2回研究会, 2016年1月12日, 山形大学

(2) 教育・地域連携等の活動

教育

- 担当授業: スタートアップセミナー, 金融論, 国際金融論, 証券経済論, 国際金融論 演習, 国際金融論特論, 国際金融論特別演習, 国際経済法務特別研究

社会連携

- 山口昌樹「社会科学研究者のCOIプロジェクトへの関わり」科学技術振興機構・研究開発研究センター「研究開発プロジェクトにおける人文・社会科学研究者参画の効用~COIプログラムにおける実践~」ワークショップでの報告, 2015年7月8日
- 「COI シーズ・ニーズ探索」ミニ・ワークショップ, ゼミ生9名も参加, 山形大学人文学部, 2015年8月3日
- 「COI シーズ・ニーズ探索」拠点ワークショップ, ゼミ生4名も参加, 東京工業大学キャンパスイノベーションセンター, 2015年9月17-18日
- 山口昌樹「社会システム研究」センター・オブ・イノベーション (COI) プログラム『フロンティア有機システムイノベーション拠点』シンポジウムでの報告, 伝国の杜, 2015年10月15日
- 社会実装に関する調査, 北九州スマートコミュニティ創造事業, 2015年12月7日, 北九州市八幡東区東田地区
- 山口昌樹「社会システム研究委員会」サイトビジットでの報告, 2016年1月8日, 山形大学工学部

- ・山口昌樹「社会システム研究委員会」COI 全体会議での報告, 2016年2月26日, 大日本印刷, 東京

(3) 研究・教育活動に関するコメント

これまでに進めてきた研究に加えて, 社会連携, 研究拠点形成, 国際研究交流と活動の幅が一気に広がった1年であった。

山本 匡毅

(1) 研究成果

【論文等】

- ・山本匡毅 (2015) 「中部圏における航空宇宙産業クラスターの形成」, 山崎朗編著『地域創生のデザイン』中央経済社, pp.115-133。
- ・山本匡毅 (2015) 「航空機産業の産業構造と九州・山口へのインプリケーション」『九州経済調査月報』第69号, pp.2-7。
- ・山本匡毅 (2015) 「地方圏における医療機器産業の集積形成—山形県の潜在力—」, 『山形県の社会経済2015年』pp.27-37。
- ・山本匡毅 (2016) 「超高齢社会の課題解決に向けた健康機器産業が果たす役割」, 機械振興協会経済研究所『超高齢社会の課題解決に向けた機械情報産業の新展開』(刊行予定)。

【学会発表】

- ・山本匡毅「中部圏における航空機産業の取引変化とクラスター形成」産業学会第53回全国研究会 (2015年6月12日, 中央大学多摩キャンパス)
- ・山本匡毅「日本における航空機産業の立地と集積の再編」日本地理学会2015年秋季学術大会 (2015年9月18日, 愛媛大学城北キャンパス)

(2) 教育・地域連携等の活動

【教育】

(学部) 地域政策論, 地域政策論演習, 地域づくり特別演習 (一), 地域づくり特別演習 (二), 公務員対策セミナー (論作文)

(基盤教育) 基礎から産業・中小企業を考える (経済学), スタートアップセミナー

(大学院) 地域政策学特論Ⅱ。地域政策学特別演習, 地域政策特別研究

【地域連携等】

[委員・研究員等]

- ・一般財団法人機械振興協会経済研究所「高齢社会の課題解決に対応した機械情報産業の新展開に関する調査研究委員会」委員 (2015年6月～2016年3月)
- ・長井市「長井創生会議」委員 (2015年6月～2016年3月)
- ・法政大学比較経済研究所兼任研究員 (2015年4月～2016年3月)
- ・公益財団法人川崎市産業振興財団新産業政策研究所客員研究員 (2015年7月～現在)
- ・山形大学東北創生研究所研究員 (2013年6月～現在)

- 山形大学山形・仙台交流圏研究会への参加（2013年4月～現在）
〔講演〕
- 山形大学都市・地域研究所2015年度「山形の魅力再発見パート13」「航空機産業の成長と地域における産業集積形成」（2015年9月5日 山形大学人文学部）
—山形県を事例として—
- 人文学部公開講座「地方圏の製造業と医療機器産業」（2015年10月29日 山形大学人文学部）
- 山形県航空機産業参入拡大セミナー「航空機産業の現状と参入戦略について」（2015年11月27日、ホテルメトロポリタン山形）
- 山形県新企業懇話会と山形大学との交流懇談会「航空機産業の現状と今後の課題について」（2016年2月2日、ホテルメトロポリタン山形）
- 平成27年度第2回新素材・加工産業研究会，平成27年度第3回いわて医療機器事業化研究会合同研究会「成長産業としての医療機器産業と航空機産業への新規参入の条件」（2016年2月8日、ホテルメトロポリタン盛岡 NEWWING）
- IVY Youth 学習会「地域問題の困難性と解決の糸口」（2016年2月28日、山形テルサ）
- 一般財団法人機械振興協会 平成27年度機械工業補助事業・成果報告セミナー「超高齢社会における健康・福祉機器を軸にした地域活性化」（2016年3月4日 機械振興会館）
〔高大連携〕

山東探求塾「航空機産業の成長と地域における産業集積形成—山形県を事例として—」（2015年11月9日 山形大学人文学部）

〔コーディネート〕

山形県子育て推進部「大学生ライフデザインセミナー」（2015年11月7日 白鷹町）

(3) 研究・教育活動に関するコメント

今年には教育と地域貢献を中心に取り組んだ。教育面では、地域政策論演習で2つの自治体において学生のフィールドワーク学習をさせていただくことができた。地域貢献では、専門を活かして総合戦略の策定のお手伝いをさせていただいた。このような環境を作っていただいた人文学部の皆様に感謝申し上げます。

【附属ナスカ研究所】

山本 睦

(1) 研究成果

〔論文等〕

1. 2015 「インガタンボ遺跡（第四次）およびイェルマ遺跡の発掘調査」『古代アメリカ』 18号 pp. 65-77。マリーナ・ラミーレスと共著
2. 2015 「ペルー北部地域，インガタンボ遺跡の発掘調査：Excavaciones del sitio arqueológico Inгатambo, zona norte del Perú」, 『ペルー古代アンデス文明研究における日本人の貢献：Aporte Japonés a la investigación de las Antigua Civilizaciones de los Andes del Perú』

pp. 104-106, 114-115, 在日本ペルー大使館。

〔学会・シンポジウム等口頭発表〕

1. 2015 Carácter y distribución de la arquitectura pública: Una mirada a las interacciones sociales de frontera desde la arquitectura pública en el extremo norte del Perú. Tradiciones tempranas de arquitectura pública de los Andes Centrales. 55 ICA, 13 de julio, Universidad Francisco Gavidia. San Salvador.
2. 2015 Sociedades del Formativo en el extremo norte y la vertiente occidental de los Andes: Un caso para el estudio de fronteras culturales. Simposio conmemorativo por el centenario del nacimiento de Seiichi Izumi. 4 de agosto, biblioteca nacional del Perú. Lima.
3. 2015 Investigación arqueológica en el extremo norte de los Andes: Una perspectiva desde el valle de Huancabamba-Cajamarca. II Simposio de Arqueología, Avances de las Avances de Las investigaciones arqueológicas de las misiones italiana y japonesa. 5 de septiembre, Museo Antonini. Nasca.
4. 2015 「ペルー南海岸・インヘニオ谷における考古学調査」, 第20回古代アメリカ学会研究大会, 12月5日, 東京大学。松本雄一／坂井正人／ホルヘ・オラーノ (山形大学), ヨシミツ・ホイヨと共同発表

(2) 教育・地域連携等の活動

〔担当授業〕文化人類学演習 (一)

〔地域連携〕

1. 2015 「Interrelación y amistad entre Perú y Japón, A través de investigaciones y estudios realizados : ペルーと日本との交流と友好—これまでの調査と研究を通じて—」, ペルー—日本友好の日における講演, 4月1日, 在日ペルー大使館。
2. 「世界遺産ナスカの地上絵: 学際的アプローチの成果と展開」, 第一回講座「ナスカ研究の現状と今後の展望」, 6月1日, 山形大学。

(3) 研究・教育活動に関するコメント

「アンデス比較文明論」(科学研究費補助金・新学術領域研究)によって, ペルー南部ナスカ台地周辺において, 現地調査を実施した。また, 「神殿をめぐる活動と地域間交流の相関からみたアンデス文明形成期の社会動態」(科学研究費補助金・若手A)によって, ペルー北部カハマルカ県で考古学調査に従事した。

さらに, ナスカ市では, 現地の中中学生・高校生による山形大学のナスカ調査・研究についてのインタビューにも対応した。

「山形大学人文学部研究年報」投稿規程

1 投稿資格

「山形大学人文学部研究年報」に投稿の資格を有するのは、以下の者とする。

- (1) 山形大学人文学部の教員（教授、准教授、講師、助教、外国人教師）
- (2) 山形大学大学院社会文化システム研究科学生（指導教員の推薦ある者）

また、

- (3) 本学部教員以外の者との共同研究についても、応募を認めることがある。
- (4) 山形大学人文学部もしくは山形大学大学院社会文化システム研究科の主催で開催された講演会の原稿も掲載可とするが、原稿依頼および原稿のとりまとめについては当該の講演会を担当した本学教員の責任においておこなう。

2 原稿の種類

- (1) 原稿の種類は「論文」「研究ノート」「資料紹介」「翻訳」「判例評釈」「書評」「講演」その他学術研究に資すると判断されるものとする。
- (2) これら以外に、本学部教員の研究活動に関する報告等を掲載する。

3 原稿枚数

- (1) 原稿は、各号原則として一人一編までとするが、2 に定める分類項目を異にする場合には複数掲載を認める場合がある。
- (2) 「論文」「研究ノート」「資料紹介」「翻訳」「講演」は、原則として400 字詰め原稿用紙に換算して100 枚以内とする。
- (3) 「判例評釈」「書評」については、原則として400 字詰め原稿用紙に換算して30 枚以内とする。

4 書式

刷り上がりの版型はB5版とする。なお、以下に記載のない書式の詳細については、山形大学紀要の書式に準ずるものとする。

- (1) 原稿は、縦書きもしくは横書きとする。縦書きの場合は二段組みとする。
- (2) 横書きの場合は裏表紙から始める。
- (3) 外国語論文原稿の投稿も認める。
- (4) 原稿は原則としてワープロで作成し、使用したワープロ・ソフト名を明記した電子ファイル（フロッピー・ディスクなど）とプリントアウトしたもの2部（1部は所属・氏名を記載しない）を提出する。
- (5) 日本語（外国語）の場合は外国語（日本語）のレジメを付ける。その枚数も上記の原稿枚数に含める。投稿者は、当該言語ネイティブまたは外国語教育担当教員によるチェック

を受けたいうえで、外国語レジюмеを編集委員会に提出するものとする。ただし、当該言語ネイティブまたは外国語担当教員に依頼することが困難な場合には、英語によるレジюмеに限り、編集委員会が仲介するものとする。

5 原稿掲載の可否の決定および査読

原稿掲載の可否（原稿の種類に適否も含む。）は、原則として、当該分野の専門家の査読を経て、編集委員会が決定する。ただし、「論文」と「研究ノート」以外の種類の原稿については、その審査方法を編集委員会において個別に決定できるものとする。

6 校正

- (1) 校正は執筆者の責任でおこなう。
- (2) 校正時における大幅な訂正は認めない。

7 抜刷

- (1) 抜刷を必要とする者は、投稿申し込み時に申告する。
- (2) 抜刷の作成費用は、制限部数を超過した分について執筆者の負担とする。

8 図版等

図版、図表、グラフなど印刷に特別の費用を要するものについては、執筆者の負担とする場合もある。

9 原稿提出期日

原稿提出期限は11月末とする。

10 原稿提出先

原稿は、編集委員に提出する。

11 著作権利用の許諾

論文を投稿する者は、山形大学人文学部に対し、当該論文に関する著作権の利用につき許諾するものとする。

12 論文等の電子化及びコンピュータ・ネットワーク上での公開

- (1) 掲載された論文等は、原則として電子化し、人文学部ホームページ等を通じてコンピュータ・ネットワーク上に公開する。
- (2) ただし、執筆者が前項に規定する電子化・公開を希望しない特別の理由を有する場合は、当該論文の電子化・公開を拒否することができる。その場合は原稿提出時に申し出る。

編集委員

富澤直人 (人間文化学科)

ライアン スティーバン (人間文化学科)

渡辺将尚 (人間文化学科)

吉原元子 (法経政策学科)

編集者 山形大学人文学部
発行 者 〒990-8560
山形市小白川町一丁目4-12
責任者 清塚 邦彦
印刷所 田宮印刷株式会社
発行年月日 平成29年2月28日

Faculty of Literature & Social Sciences, Yamagata University Annual Research Report

Vol. 14

CONTENTS

Articles

A Hogarthian Moment in <i>Oliver Twist</i>	Takashi NAKAMURA.....	1
The Formation of Research Institutions and the Role of University- Industry Collaboration for Innovation: A Case Study of Sheffield University Advanced Manufacturing Research Centre (AMRC), UK Masaki YAMAGUCHI, Shino HIIRAGI, Masaki YAMAMOTO, and Naoko KOMORI.....		19
Fundamental Consideration on the Information Display on a Wide Display: The Relationship Between the Memory Reconstruction and the Display Positions of the Letters Presented	HONDA Kaoru.....	39
“Relatedness of Senses” and Painting in Merleau-Ponty’s Thought: for a reading of “Eye and Mind”	Masahisa OGUMA.....	51
Spurious Resultatives Revisited: Predication Mismatch and Adverbial Modification	Toru SUZUKI.....	69
The Concept of Productive Labor and its Application	YASUDA Hitoshi.....	105
Research Paper		
A Stability Analysis of Inventory Management Models with Varying Lead Times: A Consideration of Switched Systems	Naofumi NISHIHIRA.....	125
2015 Academic Year Report on Research and Education		131
Requirements for Contributors		200

FEBRUARY 2017

Faculty of Literature & Social Sciences
Yamagata University